
強欲な力+ を持っていく

カナリヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

強欲な力+ を持っていく

【Nコード】

N0573T

【作者名】

カナリヤ

【あらすじ】

テンプレどおりに転生した。それによりアーロニーロ・アルルエリの力 開発能力 3振りの斬魄刀を手に入れネギま！の世界へ。

はじめり というより確認(前書き)

はじめまして、カナリヤです。

タグにあるとおり処女作です、あまり期待しないでくださいそれでも見てくれるならなにも言いません。

はじまり というより確認

えー…はい、自分はテンプレのごとく事故死して転生しました。

事実でなければ頭のおかしい又はかわいそうな人ですが…：事実ですのだから！つらいです、なぜつらいかと言うと、これもテンプレですが放り出されました。

まあ能力があるので普通の場所に放り出されたただけなのでまだいいんですが…

ちなみに神様からもらった能力はBLEACHアラソカルの破面の第9十刃ヌベノ・エスパイダのアーロニーク・アルエリの力（ただし陽の光を浴びていても能力は使えるし、虚ホロウ以外の生き物を喰っても力を自分のものにできる）様々な物を開発できる力（BLEACH関連の物ほど早く開発できる）、藍染の斬魄刀の鏡花水月、市丸 ギンの斬魄刀の神鎧、吉良 イズルの斬魄刀の詫助も貰えました。

ただし、神鎧以外は卍解できませんというか卍解知りませんしね神鎧以外…でも解号（斬魄刀解放する時に言うやつのこと）を言わずとも始解できるようになっているのでむしろ良くなっているのでは文句はない。

まあ、神鎧の卍解 かみしにのやり 神殺鎧は初めて卍解の能力を明かしたときの嘘能力で音速の500倍の速さで伸びる斬魄刀ですが…

次に容姿はまんまアーロニークなんですが、能力の関係無しで志波 かいえん 海燕の容姿に変えられるという配慮？が神様によりされています、ほとんど海燕の姿でいることが自分の中では決定しました。

と、まあ自分の中でいろいろ整理整頓して、これからこの世界でどうやって生きて行くのかなども考え1つの疑問が

「ここ、どこだ…」

つらい。どこかもわからない場所に放り出され現実を見直すこと
となった。

はじまり といじりより確認（後書き）

感想をくれるとうれしいです。

問題点 誤字脱字の指摘をしてくれてもうれしいです。

行こう でもどこに？ (前書き)

第2話約2400字1話が6000位だから4倍？
これがずっと続くといいな

行こう でもどっくに？

Side アーローニーク

まず周りの景色を把握する。もっとも木ぐらいしか見えるものはないしすぐ近くに人の気配はない。

木しか目に映らんからここは森、もしくは雑木林か……山の頂上の可能性もあるが。

なんにしてもあまり人が来るような所じゃなさそうだし移動するか。

2時間後

いまだどこなんだろ……帰りたいたい……

はっ！！なにをを考えている！今の自分には帰れる場所など無いのにこれなら斬魂刀の代わりに人がいる場所がわかる能力でも貰えば……

……ってあるじゃんそういう事ができる力が

破面の探査神経ベスクスを使えば少なくとも何か居る場所はわかる、そうと決めればさっそく探す……

どうやったなら使えるかがわからない（泣）斬魂刀の解放と違ってなにか言えば発動するようなものではない

感覚的なものだ、前世では靈感などがあつたならその感覚がつかみやすいだろうが自分にはそんなものはなかった。

とりあえず形から入るとしてグリムジョーがやっていたように目をつぶってみる。

なにこれ怖い……目をつぶって集中するだけで自分以外の霊圧（だと思つもの）を感じる、これが霊圧を感じるといふことか……なんにしてもいくらか集まっている場所に移動を始める。

Side out

物取り、いつの時代にもそれは存在しそのほとんどがその日の食うものに事欠くものが始め、程度の差こそあっても、ほとんどが何度も繰り返すこと…まさによくある事であった。

運が無かった、今現在物取りに襲われている男が頭に浮かんだ言葉であった、この付近は治安は比較的よいほうであり、物取りが出るといふ話は前通った村では聞かなかつただから護衛なども最低限しか雇わず妻と娘のまつ城へと帰っていく途中であった。

物取りはそんな事など気にも留めないであろう、そういう事をしなければ生きれないから…

ザシュツ……

今、馬車の外で雇った護衛の最後の1人が殺されものとりが馬車によってくる

「くつ、くるな！」

逃げ場の無い馬車の中で反対側から逃げようとしてするが、そも反対側にもものとりはいる

逃げ場は無いその事実が嫌でも身体を震えさせる。

おそらく、いや必ず、自分は死ぬだろう置いて逝く妻と娘の顔が脳裏に浮かぶ。

「かつ神よ、置いて逝く妻と娘にご加護を。」

愛妻家である男は自分が信じる神に自分の魂の救済ではなく妻と娘に加護を望む目を瞑り十字架を手に持って…

ザシユ、ギヤー!!

何か切り裂かれる音、それに随伴するように聞こえた叫び声、自分の護衛が殺された時と同じような……

Side out

Side アーローニーロ

なんだこれは、物取りが現在進行形で起きていることを見て思う、少なくとも前世ではテレビ越しに強盗などは見たことがあるが、生で殺し合い同然のものよりは初めて見る。

物取りは10人、狩られそうになっているのが馬車の中に1人、どうでもいいが高そうな馬車だ。

馬車の中の1人を助けるべくものとりを斬りかかる。

ザシユ、ギヤー!!

斬り付けた、しかし叫び声をあげたのは斬り付けた奴ではなくその近くに居たものとのりの仲間である、斬り付けた奴は首から上が無くなり噴水のごとく血を噴き出していた……

「なっなんだおまえ!」

斬り付けた奴の近くいたせいで斬魂刀の先端でかるく肩に傷を負い顔を歪めているやつが気丈にもどなる。

「ただの……旅人だ」

なんと名乗るか少し悩んだがとりあえず旅人ということにする、

1人減り9人になったものとりを見まわし

「逃げるなら追わないが……どうする？」

そうしてくれたらどんだけ楽なことか……

しかし、否やはりと言うべきか……

「へっ変な格好した奴がなにを言うかと思えば」

「こっちは9人いるんだ」

「仲間の仇討だ！殺せ！」

相手が普通なら、相手が人間なら、相手と同じ実力しかないのなら、物取り達の判断は良かったのだろうに仲間が少し減ったとしても当初の目的は達成できたはずなのだから。だが、この時の選択は間違いだっただけ

「そうか、悔むならあの世で悔めよ」

物取りに初めの1人と同じように首を刈る

「え……うっうあああああ」

「何だ……こいつ……」

「ばっ化け物だ！」

「かつ、勝てるわけない……逃げるんだあ」

物取りからすればいきなりまた仲間の頭と胴体がお別れしたのだから、その恐怖は計り知れないだろうなにか起こった理解できないのだから

…まあ反応にどこかで聞いたことがあるのが混じっていた気がするが、そんなことはいいだろ。

残り8人、できるだけ早く無駄のないように動くことを心がける

ちようどいい機会だ…ただの人間とこの体にどれほどの差があるかの確認の。

「動くな！これ（人質）が見えないのか！！」

必死だな、ものとの1人が馬車の中の人間を引きずり出して武器をつきつけている。

「こいつを殺されたく、そんな腕でなにができるんだ？」はあ？腕が、おっ俺の腕が！」

そいつからすればとても悲しいことにそいつの腕は地に伏しているのだから…ただたんに俺が見えない速度で腕を切り落としたただけだが。

それを見てそいつ以外のものとりは逃げますが、腕を切り落とされた奴はまだなにかぶつぶつ言っている

「哀れだな、腕を無くし仲間に見捨てられる」

「ひいっ！くっくるなくなるなくなるな」

錯乱しているのだろう、なにもいない方向にも顔をむけて口から泡をとばしながら「くるな」を繰り返している

「最後までらしい慈悲だ、すぐ楽になる」

慈悲。そんな考えがありもしないのに口から出るが、すぐに楽にはなるだろ……その命を散らせば。

何の感慨も、何の感想もなく人を殺し助けた男を見る。

こいつ……すげえ、正直な感想だ……あのなかですつと目を瞑り手に十字架を持って祈つてのだから、これが本物のキリシタンか。

「おい、物取りは追い払った、もう安全だから神様へのお祈りはやめろ」

「はっ、はい！あつ危ないところを助けてありがとうございます」

目を開けてこちらを見た、それはいいんだがなぜそんな困惑した表情と声音になる。

ああ、そういえばアローロニーロの格好でさらに仮面を付けていたっけな……しまらんなあ

S i d e o u t

行くう でもどことだ？ (後書き)

ネギま！本編まで遠いです。

感想などくれるとうれしいです。

行こう 助けた男と(前書き)

第3話 今日ずっと書いてた……

天気良い日に何やってんだ……自分

行こう 助けた男と

Side 男

助かった。まさに奇跡と言う他無い。偶々人が通りがかり、さらにその人が途方もなく強くこちらを助けてくれる善人だったのだから助けられた男は命の恩人をためらうことなく いや少しほんの少しだけだがその異質な見た目からためらったが 自分の城に招いた

「ほう、ではアローロニーロ殿は旅をしているのですか」

「ああ、忌々しい魔女を探してな」

「はは、まさか教会の人とは思いませんでしたよ」

(別に教会の人間ではないが…まあいいか)

しかしアローロニーロ殿はすごいな、魔女を探して殺す教会の人とは(完全な勘違い)

その勘違いにより城に到着するまでには城に招くことに不安はなくなっていた。

Side out

Side アローロニーロ

騙すことになったが自分は魔女により顔から仮面が外せなくなっ
てしまい、仮面を外せなくした魔女と同じかそれ以上の力を持つ魔

女を殺せば仮面が外せるようになることがわかったから、そういう魔女を探したすために旅に出てすぐにあの現場にでくわした。ということにした、のだが今は魔女狩りがおきている最中か……下手したら俺が魔女として火あぶりの刑にされるな。

それを避けるならやれる事はいくつもある。まず服装を変だ。この格好は明らかに異質である。白くてフリフリが付いた服。これだけ聞くと女物の服。は不審者だし。もっとも今はこれ以外服はないからすぐには変えられない。

「ほんと、アローニー口殿のおかげで私は無事に城に帰れます」

「主（神）の導きのおかげだろう？マグダウエル殿」

「ええそうですね、もっともあの時私は神に置いて逝く妻と娘の加護を祈っていたのですが…」

「主は信心深いマグダウエル殿を助けるべく、俺をあそこに遣わした（放り出した）のかもしれないぞ？残される家族を悲しませないために」

「そうかもしれませんな……なにはともあれ今は神に感謝し、祈りましょうか」

そついい十字架を持ち目を瞑る、マグダウエルと名乗った男を

それと貴族といった を観察する

今のところ俺を魔女と思っていないようだし、話を信じている…疑うということを知らんのか？

だが城に到着したらどうなるかわからないな、いくら命の恩人だからといって実際に助けられたのはこいつ1人

こいつの家族がいかに怪しい俺を魔女と決めてかかり、殺そうと

するかもしれない　　と少し心構えをしておいたほうがいいな

Side out

Side　　帰りをまっていた人達

城の主人の帰りをまっていた人達は主人の帰りに騒然とした。
なにせ主人が乗っている馬車が護衛を連れず、さらに血塗れになっ
て帰ってきたのだから当然と言えば当然であるだが主人は何ともな
いように馬車から出てきたので安堵の息をみながもろすが、次に出
てきた人物には困惑を隠せなかった。

白い服にフリフリが付いたみない変わった服、さらに顔を隠
している　　縦長で8つの小さな穴が開けられた　　仮面をつ
けている人物を、帰りを待っていた人達に思い当らなかった。

「どうですか？アローニー口殿、私の城は？」

「そうだな…城の良し悪しはよくわかわんが、良い城じゃないか」

「そうでしょう、そうでしょう」

主人はそんなことは気にせず…いや気づかずに城の自慢をしてい
る、仮面の方はその話に相槌をうつているが困惑しているこちらを
見ている

「特にすごいん、マグダウエル殿、帰りをまっていた人達が俺につ
いて聞きたいようだ？」　ん、ああ、すまん」

「さて、こちらに居るアローニー口・アルルエリ殿だが、私が物取
りに襲われている時に駆けつけ私を助けてくれた命の恩人だ、くれ

ぐれも粗相のないように……」

最低限の説明だけしてまた城自慢に戻ろうとしたがすぐそばに寄って行った人物に止められる。

「あなた！襲われたってどういうこと！詳しく話なさい！」

「おっおまえ、なにアローニー口殿のおかげで怪我はない。血で服が汚れたが……」

一瞬気圧されるが、問題無いと自分の妻　マグダウエル夫人に言うが夫人はそれをよしとしなかった。

「そもそも、そのアローニー口で男！なんでそんな怪しい男をつけてくるんだい！」

「いや、だから……命の恩人だからお礼をしよう……」

だんだんと言葉が尻すぼみになっていくマグダウエルをフォロ―する者はいない　なにせ連れてきた男が怪しすぎる　夫人がここにいるほとんどの人の代弁をしている。

「フン、俺は邪魔みたいだな出ていったほうがいいな、マグダウエル殿」

そう言いすぐに出て行くこうとするが止めようとするものはいない、いや1人いた、この城の主人のマグダウエルである。

「まっ、待ってくれアローニー口殿、私はあなたになにもお礼をしていない！」

ぴたりと足を止めるが……

「しかし、あまり歓迎されてなからな……」

「おじさん…帰っちゃうの？」

その声に全員がその声の主を見る。

仮面の男以外はその声が誰の声か知っている、マグダウエル家の一人娘 エヴァンジェリン・A・K・マグダウエルである。

Side out

Side アーロニーロ

自分を引きとめた2人目を見る。

歳は10歳位の少女がすこし寂しそうにこちらを見ている。しつかりと手入れされた綺麗な髪に高級たかそうな服を着ているところをみるとあいつの娘か。

「帰っちゃうの？おじさん」

再び同じようなことを言う。それに対して

「おじさん、ではなくおにいさんにしてくれ……」

肉体年齢はどうか知らないが、精神こころはおじさん呼ばわりされたくはない……

「おにいさん、て呼べば帰らない？」

「そういつわけでWa」おにいさん、遊ぼう!」「……」

屈託のない笑顔をこちらにむけてくる少女から視線をはずし、マ
グダウエルの方を無言で見る

「あー、できれば娘の遊び相手になってくれないだろうか…アール
ニール殿」

そこから目だけで語りかけてくる。

(私はみなの説得をする)

(キティがあなたに興味をもっている。それに命の恩人だ)

(此処に居る者は、みんなキティにあまい。キティの遊び相手にな
つてくれ。そうすれば、しぶしぶでも認めるだろう)

「はあ、ではなにで遊ぶ?リトルレディ」

「じゃあ!じゃあ!お花畑に行こう!」

少女に手を引かれ城の近くのお花畑へ行く。

Side out

Side マグダウエル

娘とアールニール殿が城から出るのをみなが黙って見つめている。

無理もないか、キティが初対面の相手にあんないい笑顔をむけたのだから……

「ゴホンッ、私はさっき言ったとおりアールローニー口殿にお礼がしたい、それでしばらくこの城に滞在してもらおう　と思っている」

一気に自分の考えをいい見回す

だれも文句を言わないのを確認できたので次の言葉を言う

「では、今夜はアールローニー口殿の歓迎の意味をこめてパーティーをするからその準備をしてくれ」

パンパン、と手を鳴らし行動を促す。

「では私はキティの様子を見にいくと……」まちなさい、あなた……はい……」

娘（と恩人）の様子を見に行こうしたが、妻につかまり部屋であったこととアールローニー口殿のことであらいざらい話すこととなった。

S i d e o u t

行こう 助けた男と（後書き）

はい、真祖の吸血鬼になる前のエヴァンジェリンが出てきました。

原作の約600年前です、といってもキングダムゾンするんですけどね（笑）

数百年単位でしますよ、キングダムゾン（笑）。

すぐにはしませんが。

行こう 別れを告げて(前書き)

第4話 本日3度目の投稿

いつまでつづくかな…

この勢い

行こう 別れを告げて

Side アーロニーロ

マグダウエル家の城に来てから早1ヶ月が過ぎようとしている。

客人である俺はするべき仕事がなく、毎日ダラダラ過ごしかねなかつたのだが、文字の読み書きを勉強したり、メイドや執事のお手伝いしたり、エヴァの遊び相手をしたり、探査神経の鍛錬したり、斬魄刀の実験をしたり、と割と忙しく過ごしていた。

初めはどれも苦勞した……まあ、おかげでわざわざ目を閉じなくても霊圧を感じ取れるようになったり、料理や紅茶の入れ方を憶えた。まあ、やることは良いよな何も無いよりは。

「もうすぐ出て行く、ですか？」

今のところ此処に留まる意味は無い、それにここでは鬼道の練習ができないし、刀剣解放レクシオンの練習もできない。

「あー、それでしたら1週間後のキティの誕生日パーティーにでてからにしてくださいませんか？」

「別に構わないが、となると必要になるのはプレゼントだな」

「キティはあなたが出てくれればそれでいいと思いますが……」

「いや、プレゼントの1つや2つ用意できなくてなだが、アーロニーロ・アルエリだ！」

「は、はあ……」

マグダウエルはこちらのテンションに「わけがわからない」と言いたげだが、そんなことを気にせずプレゼントの用意のため自分にあてがわれている部屋に戻る。

「とは、言ったものの、どうするか……」

初めはプレゼントに、親父のお守り（BLEACHでグランドフィッシャーの一撃を防いだもの）的な物でも作ろうと思ったが、へたしたらその所為でエヴァが魔女認定されかねない。

と、なるもただの装飾品が無難だろうが、できればBLEACHに出てくる物を作りたいが……

「いいものがないな……」

盾舜六花を思い浮かべたがあこのヘアピンはエヴァに似合わないだろうし、作るのなら能力を可能な限り再現したいし、まだヘアピンという物なんて無いよなこの時代

そもそもBLEACHにそんなに装飾品でてこないし……

しかたがないのでエヴァの髪と同じ色のネックレスを、ありがちなデザインのものを手作りで送るとしよう。

1週間後

今エヴァの部屋の前に居る。エヴァにプレゼントを渡すためにだ。

コンコン 「開いててますから、入ってください」

ふむ、問題ないなら入るか

「あ、おにいさんですか。なんの御用ですか」

「プレゼントを今渡そうと思ってな。これだ」

「ありがとうございます。おにいさん」

「その様子だと問題ないようだな、エヴァ」

「はい。パーティーの時もこの口調でいきます」

少し不満そうな口調でエヴァが言う。まあ仕方がないパーティーには他の家の貴族を招待しているからここ最近はずっと目上に対する口調、敬語やテーブルマナーなどが徹底されたのだから。

「大変だな貴族というものは」

「そう思うなら変わってくださってくれればいいのですが」

「無理だな」

「即答なんですね」

むくれてジト目でこちらを見上げてくるから「あたりまえだ」という言葉は飲み込み頭をなでる。

「ん、」と気持ちよさそうな声を出すがすぐにやめる。

「さて、プレゼントは見ないのか？」

「すぐに見ると、わかって言っているんですか？」

「促したほうが早く見るだろ」

「それもそうですが…」

丁寧な手つきで渡した箱を開ける。

「綺麗…」それがプレゼントを見てのエヴァの第一声だ。

「気に入ったようだな、エヴァ」

「はい、すごく」

うっとりとした目つきでまだ手に取っていない、箱の中のネックレスを見つめているエヴァに

「さっそく付けたらどうだ？」

声をかけたが反応しない、そこまで気に入ったかそれなら作った側も悪い気はしない、それにこの時代にはないはずの技術をつぎ込んだりしたかいたがあったというものだ。

まだエヴァが魅入っているのを邪魔するの悪いと思い、静かに俺は部屋を退出した。

その晩

俺はパーティーには参加しない、なにせこの城の連中は俺の格好に慣れて白くてフリフリの付いた服に慣れたが、今この城にきている貴族やその従者連中はこの格好を見たらなにをするかわからないのと、もともとあのパーティーに参加できる立場でないという理由で城の中の見回りをしている。

「静かなもんだな…」

一人で見回りしているがパーティー自体は騒がしくないと、風がないのが相まってまるでみなが寝静まってかのように静かである。尤も、本気でパーティーの喧騒を聞こうと思えば聞こえるのだが

……

「？」

足音が聞こえた

そんなに離れていない距離からである、メイドや執事はパーティーの対応で忙しいはずだからこっちは俺に用が無い限りこないはずである、それにこの霊圧はメイドや執事のものではない…この霊圧は……

「みつけた！」

エヴァのものだな…目の前のドレスで着飾った答えを見る。

「なんでパーティーに参加してないの！おにいさん」

どうやら俺があパーティーに参加してないのが不服で俺を呼びに、または怒りにきたらしい。

「もとよりあのパーティーに参加できる立場にいないからだ」

「なんで！あのパーティーは私の誕生日を祝うものなんでしょ？」

「貴族のパーティーだからだ」

「ん〜！」と唸っているから理解はしたが納得はできないという状態か、言葉使いが大人びていても、しっかりとした教養があっても、子供は子供ということをおぼろげに思わせる。

と微笑ましい状態をいつまでも見ているわけにはいかない。

「さ、パーティー会場までエスコートしますよ。小さな淑女リトルレディ」

「では、パーティー会場までお願いします。仮面紳士マスクジェントルマン」

互いに少しおどけて受け答えをしパーティー会場へ向かう。

「ねえ、おにいさん」

「なんだ、エヴァ」

「パーティーが終わったら此処を出て行ってく、本当？」

「……本当だが」

「なんで？此処にずっと居られないの？」

「理由な知っているだろう？…此処に居てはできないことをやりたいからだ」

「悪い魔女を倒すこと？」

「ああ……」

嘘。自分がこの仮面を被り続けていられる為の嘘。いつでも移動できるように、旅をできるようにとついた嘘。

大した意味もなく、ただの思いつきで……
それから会場の前に着くまで一言も言葉を交わさなかった

これ以上此処に居るとズルズルと留まってしまつてしまうと、そんな気がしてすぐに此処をでていく決心をし、エヴァに別れを告げる。

「エヴァ、お別れだ」

「ねえ、終わつたら…また此処に来てくれる」

「約束はできないな、目的を達成できないかもしれないからな」

「じゃあ、終わつたらたら此処に来てくれるって約束して！」

「はあ、できないと言ってるだろ。俺が此処を出て行ったら俺のことを忘れる」

「なんで…なんで、そんなこというの…」

目じりに涙をためて、泣きそうな声音で言う。

彼女の本心からの言葉なのだろう、こちらに伸ばしたその手を掴んでほしいのだろう、だが

「エヴァ、我が儘ばかり言うてはいけない。エヴァにはエヴァの、おれにはおれの道がある」

その手に触れもしないで我が儘を言った自分の娘を諭すように、エヴァに語りかける。

「でもおでもお……」

それでも一緒に居たい、行かないでと、縋り付く自分にはわからないなぜこの子が自分にこんなにも執着するのか、初めてあったときから自分の近く居ようとするのか。

「俺の負けだエヴァ、もし目的を達成できたら此処にまた来る」

「ほんと？嘘つかない？また会える？」

「神のみぞ知ることだ」

「じゃあ、毎日神様にいっぱいお祈りする。おにいさんが悪い魔女を倒せるように」

「そうか、ありがとうなエヴァ」

エヴァ達が知っている目的はそもそも嘘だから自分がその目的を達成することはない…だが達成できるようにと、また会えるようにと、祈るのだらうエヴァは。ならもし、もしも成長したエヴァがまだこんな自分のことを忘れずに祈っていたのなら「仮面を外せるようになった」とこの顔を見せにまた此処に来よう。と自分をこの世界に放り出した神様に誓った。

Side out

行こう 別れを告げて（後書き）

思ったより長くなったので前回の後書きの予告どつりにはいきませんでした。

あと今回のエヴァの誕生日パーティーは9歳の誕生日パーティーです。

進む 血に染まりながら(前書き)

第5話 亀ですね進み具合が…

進む 血に染まりながら

Side アーロニーロ

マグダウエル家の城を出て半年。俺は……賞金首になっていた。原因は、いつぞやの物取りを殺したことこの格好だ。服をどうにかしないとなくと、考えはしたがなにもしなかったせいで、あきらかな異質な格好をした俺は魔女認定され賞金首になっていた。そのせいで半年、誰とも会話をしていない。

「いたぞ！仮面の白魔女だ！」

見つかったか……ちなみに仮面の白魔女は賞金首としての名前だ。まんまだよな……

まあ、今回は見つかったのではなく見つけさせたのだが。

「観念しろ！仮面の白魔女！おまえは囲まれている」

まったく……普通の人間がいくら武装してもそれが普通の物であるなら破面の俺には傷一つ付けられないというのに、それを知らずに自分達が優位に立っていると勘違いをしている。

「まったく、しつこい奴らだ……俺がなにをした？」

「あくまでとぼけるか！おまえによって引き起こされたされた災厄の数々、忘れたとは言わせんぞ！」

……「忘れた」とは言わないが、「知らん！」とは言いたい
というかこいつら俺が災厄を引き起こしてると思っているのか？勘

違いも甚だしい。

たしかに山奥で鬼道の破道の三十一 赤火砲の試し撃ちをして山火事を引き起こしたことがあるが、それはすぐに破道の九十 黒棺で燃え盛る木々を木端微塵にして鎮火した。

「話すことはないな！全員かかれ！」

その言葉に俺を囲んでいたやつらが襲いかかってくるが…

「遅い」

どいつもこいつも人間の域を出ることはない、普通の存在である。敵にすらならない、雑魚もいいところだ。

そもそも戦い方がなっていない、自分より格上を数にまかせて潰すのなら持久戦にもちこみ疲れ切ったところを殺せばいいものを…

全員馬鹿の一つ憶えのように、近づいて剣による斬撃をするだけである。

隙間なく囲めるこの数なら全員に槍を持たせて串刺しにすればいいものを… もつともそんなことを俺にしようとしても刃がとおらずに金属音が鳴るだけだろうが。

戦いではなく一方的な虐殺、誰もが剣の間合いに近づくことができるが、だれもが近づいただけでその首が刎ねられる。

「さて、あとはおまえだけだが？騎士殿」

「まっ！魔女が！私を殺しても代わりの者がおまえをたいぞ」それがどうした、黙って死ね」まっまで！」

誰が待つか、人様を殺そうとした奴に相応しいもの…死をくれてやる

確かに首を刎ねようとした、だが横から飛んできたなにかのせいで刎ね損なった

「何様のつもりだ？」

騎士が助かったといわんばかり背をむけ逃げて行くがそんなことはどうでもいい、ただ邪魔をしたやつを睨む。

「いやいや、人が殺されそうになっていたのを助けただけじゃないですか？」

当たり前のことをしたと、言いたげだが……

「だとしたら、随分と助けるのが遅いんじゃないのか？初めから見ているというのに」

そう、こいつはずっとこちらを観察していた、来る日も来る日も同じ霊圧が一定の距離をおいてついてくるのは非常に気持ち悪かった。

「ばれてました？まあこれから死ぬあなたには関係ないでしょう！」

馬鹿が…そう思いすぐ近づくつもりだったが、動けなかった

それを確認したのだろう男の顔がにやりと意地の悪そうな笑みをを浮かべ

「氷の精霊300頭。集い来たりて敵を切り裂け。魔法の射手・連弾・氷の300矢」

存在しないと思っていた魔法としか思えない詠唱を唱え、普通に

はありえない現象を起こした

Side out

Side 魔法を使った男

殺った、確実に。心に言い表せれない達成感が満ちていく。

もともと仮面の白魔女が悪の魔法使いと知ったのは偶然だった。

ある日いきなり起こった山火事。しかしすぐに鎮火した、という普通ではありえない現象だが自分にはわかった。誰かが魔法を使っておこしたのだと。

そこで誰がそれをしたのか直ぐに調べた。起こした人物が同じ『立派な魔法使い』を指すものなら注意を、悪の魔法使いなら『立派な魔法使い』を指す者としたら捨て置けない存在である。

結果は悪であった。自分の調べにより賞金首の仮面の白魔女がおこしたとわかったのだから。

相手が悪とわかればするべきことは決まった。まず相手の戦力がどの程度か調べ自分ができる最善の手を打つ。相手に魔法使いミニステルの従者が居るか。単独で動いているのか集団で動いているのか。どんな戦い方をするのかetc…

それらを調べ上げ悪の魔法使い 仮面の白魔女を打倒したのだ。

「これでまた一步『立派な魔法使い』に近づきましたね」

満足感が引かないうちに近くの町まで行こうとし

「縛道の六十三 鎖条鎖縛」

聞いたことない詠唱による魔法により縛りあげられた。

Side out

Side アーロニーロ

驚いた。普通の世界ではないかもしれないと考えてはいたがまさか魔法が実在する世界だったとは。

「さて、キリキリ知っていることをはいてもらおうか、魔法使い殿」

「なんだこれは！戒めの射手ではないな！」

鎖条鎖縛で縛りあげたが、外そうともがいているが無駄だ。魔法でどここうできるかは知らないが、人間の腕力ではどうしようもない。

「質問だけに答えてくれるとうれしいのだがな」

「誰が悪の魔法使いに屈するか！」

無言で肩に斬魄刀を突き立てる。だが魔法使いは気丈にも歯をくいしばって痛みに耐える。

「口先だけではないようだな」

「あたり…まえ…だ」

ジワジワ動けばあらいだらい知っていることを話すかもしれないが柄じゃない。

だが…殺しにかかってきた奴を特に理由もなく解放するのはもっと柄じゃない、だから殺す。

「なら、安らかに眠れ」

ザシュ、ゴロン

先ほど殺した奴ら同じく首を刎ねる。

「そういえば」

俺には喰った相手の力を自分のものにできる能力があつたな……

「試してみるか」

左手を口に変えて魔法使いの死体を喰う。

変化は劇的だった。知らないはずの知識が頭の中を巡る。

「これは……」

どうやら知識も力に分類されるらしい。

「これはいいな。『魔法世界』『ゲート』『魔法学校』『魔法生物』
どれも普通ではないな」

魔法を極めるそれも夢ではないな、時間じたいはかなりある。

だがこの知識だけでは足りない、研究するにしても使うにしても穴だらけの知識ではだめだ。

「なら、することは1つだな」

魔法使いの霊力いや魔力か？どちらにしても俺の探査神経にひっ

かかる。だから高い奴をしらみつぶしに狩るとしよう、そうすれば魔法世界に行くためのゲートの正確に知っている奴にあえるかもしれんしな。

2年後

とんだ？気にするな

しかし2年でかなり通り名が増えたな『仮面の白魔女』をはじめ『闇の魔法使い』『首刎ね公』『知識狩り』と新たに3こ増えた。

『闇の魔法使い』は冗談で名乗ったら広まった。『首刎ね公』は殺された奴がみな首を刎ねられていたところから。『知識狩り』は魔法使いの中で知識が深いと言われている人物を優先的に狩ったからだ。そのせいで賞金が百二十万\$になり、賞金稼ぎが俺を狙らってよく現れるになった。

「おい、聞いたか？」

「なにがだ？」

「今日、魔女が火あぶりにされるそうぞ」

…また魔女狩りの犠牲者がでるのか…よくあることだが火あぶりにされるのはほとんどがただの人間だ。

本当に魔女もしくは魔法使いなら、ほとんどの奴が逃げられることぐらい簡単なことだからな…

「見に行くか…」

別に如何こうするつもりがないが哀れな犠牲者の顔ぐらいはみてやるかと、広場に向かう。

進む 血に染まりながら（後書き）

よくある展開

火あぶりにされるのが誰かわかりますよね（笑）

進む 今度は複数で(前書き)

第6話 これ以降の更新はたぶん早くて5日後位になると思います。
今回は(いや、いつもか)ごり押し？

進む 今度は複数で

Side アーローニーク

理解できない。いや、理解したくないのだろう。磔にされて魔女と罵られている人物に見覚えがあったからだ。しかし彼女があつた城から離れたこの地になぜいる？いやそんなことはどうでもいい。

「この魔女は！、我等に災厄を振り撒く忌むべき存在だ！」

おそらく協会の神父であろう男が声を張りあげる。

「だが私は皆にこの魔女がどうなるべきか、聞こう！火炙りか解放か！」

そんな言葉がやけに遠くで話をしているように感じる

「火炙りだ！魔女を殺せ！」

珍しいことではない、この時代ではよくあることだ何度も見たことがある。

何人も焼かれるところをみたことがある

だからすぐに助けなければ

焼けてしまう前に

助けなければ

彼女を。

決断し、いや、するべきことは彼女を見たときから決まっていた。

「火炙りがすきか。ならしかつりウエルダンにしてやるう」

響転ソニードでまず彼女が磔にされている上に移動する

「縛道の六十二 百歩欄干」

次に集まっている人間達を縛道で磔にする。
彼女を縛っている縄を切り彼女を助けだしかかえる。

「君臨者よ 血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ 蒼
火の壁に双蓮を刻む 大火の淵を遠天にて待つ 破道の七十三
双蓮蒼火墜！」

完全詠唱による双蓮蒼火墜による巨大な蒼い爆炎により焼き払う。
ほんの少し前まで町の広場だった場所は様変わりした、この時代には無いミサイルによる爆撃をうけたように、地面は抉れ建築物は壊れ荒々しい破壊の爪痕が刻まれた。魔法を知らない人間からすれば、神の裁きがあつたと信じてしまうような光景である。

だがまだ終わりではない。すぐに町外れに移動する。
町はいきなりの爆音により住人たちがみな何事かと大騒ぎをしている。

「卍解 神殺鎗」

最長13?に伸びる最速の斬魄刀を腰のあたりで振る。
いままで何人も殺してきたが一度に町一つ分の殺しはこれが初めてのことだった。それと半ば八つ当たりで虐殺したのも初めてのことだった。

S i d e o u t

S i d e エヴァンジェリン

必死に逃げて逃げて疲れ果て、意識が朦朧としてるときに教会の人に捕まり火炙りにされそうになったけど誰かが助けてくれた。その声を聞いただけでも安心して意識を完全に手放してしまった。

「……ど……」

たしかわたしは……捕まったけれど誰かがわたしが知っている誰かが助けてくれ……

「気がついたかエヴァ」

S i d e o u t

S i d e アーロニーロ

身体のどこにも怪我がないのに目を覚まさない。だが見たところ眠っているだけに見える。もしかしてもう目を覚まさないのではと……そんな考えが頭をよぎったがすぐに振り払った。

結局エヴァが目を覚ましたのは2日後だった。

「……」

「気がついたかエヴァ」

目を覚ましたした瞬間抱きつきそうになったが、ぐっところえる。

「おにい……さん？」

目を見開いて驚いている、俺もエヴァを見たとき驚いたがエヴァはそれ以上に驚いているようだ。

「ああ、アローニーロ・アルルエリだ、エヴァ」

「ほん……とくに？」

「ああ」

返事をするエヴァが泣きだし俺に抱きついてくる。それを受け入れ、やさしく撫でる。

30分後

「落ち着いたか？エヴァ」

「うん……」

「エヴァ、なぜおまえが城から離れた地で魔女として殺されそうになっっていたんだ？」

「…それは…」

「いや…言いにくいのなら、言わなくていい」

エヴァが言いたくなさそうにみえたので 誰にでも言いたくないことの一つや二つはあると考える 止める
しかし

「うん…おにいさんには聞いてほしい」

それからエヴァは、ぼつりぼつりゆっくりと思いだすようになんがあったのかを話していった。

俺が出ていって一年後の10歳の誕生日の次の日に、城のみんなは殺され自分は真祖バケモの吸血鬼にされていたと、それでいまままでなるべく人と関わらないようすごしながら、教会から逃げ隠れていたと。

「わたしが吸血鬼だつてばれて逃げただけど、結局捕まって……」

「俺に助けられたと」

「うん……」

だからか、探査神経で感じるエヴァの魔力が2年半前と比べて変質しているのは。

「ねっねえ、おにいさん」

エヴァが不安そうにこちらを呼び、目で語りかけてくる。
お兄さんはそれでも、わたしが吸血鬼バケモでも拒絶しない？
わたしを受け入れてくれる？

傍にいてくれる？

「エヴァ……」

「な……んっ」

さっき泣いた時と同じように
エヴァを抱きしめ優しく撫でる

今度はこちらからだが

エヴァと再会して数十年……またとんだ？気にするな
前とだいぶ変わった。俺じゃないぞ。エヴァが変わった。
まず俺のことを父様とっぴまと呼ぶようになったこと

話し方が偉そうになったこと

魔法を使えるようになったこと

鬼道を二つだけ使えるようになった（破道、縛道ひとつずつ）こと
響転、虚閃セロ、虚弾ハラ、が使えるようになったこと

チャチャゼロという名前の操り人形を従者にしたこと

賞金首になっていたこと

と、結構変わった。

「ナニ、哀愁ダダヨワシテナダ？旦那」

「なに、随分と昔と変わったと思り返していな」

「昔を思い返すとは、突然だな父様」

しかたあるまい、魔法世界に来ているだから。魔法が隠匿されているのが懐かしく感じるのだ。

「しかし誰も気づかないものだな」

「気づかないのではない、気づけないんだよ」

「ケケケ、流石旦那ノ魔法だな」

会話でわかると思うが今俺達は街にいる。それも人混みのなかを歩いている。

本来ならそんなことをすれば大騒ぎがおきて、街の衛兵あたりがすぐに跳んでくるだろう。

しかし、幻影魔法と認識阻害を最大限に使い、俺はどこにもいそうな平平凡凡な容姿の男に見え、エヴァはそこそこ可愛らしい少女に見え、チャチャゼロはテイベアに見えるようになっていて。

つまり誰一人手配書の情報と被らない状態になっている。

だが魔法が解ければ普段となに一つ変わらない（特に俺は手配書と変わらない）ようになっていて。

「にしてもこころも簡単にいくとはなあ…まあ買い物も堂々とできるからいいが」

「誰もこんな事を考え無いのだろう、賞金首が高度な幻影魔法と認識阻害を使って堂々としているなんてな」

「そつだな父様」

このぶんなら特殊な結界が張られてないかぎり変わらない効果を発揮してくれるだろう。

「しかし本当に剣闘士として生計を立てるつもりなのか？」

「そのほうが戦いの勘を忘れずにいられるだろ？」

「そうだが…」

おそらくエヴァは人間のなかに紛れ込めるのなら、わざわざ危険が伴う職業を選んでほしくないのだろう。

「エヴァ、俺達は人の皮を被っているにすぎない。だからあまり執着をしないようにする必要がある。簡単に切り捨てて逃げられるようにな」

「つまりあまり親しい人を作らないために、ただ戦う職業の剣闘士を選んだのか？」

「ああ、それに剣闘士をするのは五年位の予定だからな」

「長くやっているとはれるから、五年しかやらないのか？」

「ああ、人間はすぐ老いる。いつまでも同じ姿だと疑われやすくなるからな」

「五年たつたら変えるんだな？次はあまり危険な仕事を選ばないでくれ」

「五年たつた時に決める。そんな時に言ってくれ」

そうして俺の剣闘士生活が幕をあげた

S i d e o u t

進む 今度は複数で（後書き）

という訳で、主人公とエヴァとチャチャゼロは魔法世界入り
そして主人公は剣闘士としての少しの間戦います。

戦闘描写の練習のために入れたんですよね…下手だから

番外 こんなことがあった(前書き)

番外編の1

2が出るかは未定

本編に書かなかった話を書いた

本編そっちのけで……

番外 こんなことがあった

これは魔法世界に入る前までのちよつとした小話集
長さはまちまち

Side エヴァンジェリン

いつもだ。いつでもそうだ。

わたしやおにいさんを狙って教会の人間や、自称正義の魔法使いに、賞金稼ぎが来たら、鏡門 縛道に類すると思うもの でわ
ただだけ安全な状態にして、敵を殲滅する。

それを何度も繰り返し返している。守ってくれるのは嬉しい、けど
ただのお荷物になっているのは嫌だ。
だから

「おにいさん！魔法とかを教えて！」

戦術魔法とかをおにいさんに教えてもらう。

もしかしたら「戦わせたくない」という理由から教えてくれないか
もしれないけど…

なにもしないなんて、わたしは嫌だ。

「ふむ、まあいいだろ…」

あっさりと教えてくれると返された。

えっ？教えてくれなかったら、独学でかんばろう、とか考えてたの
に…

「ところで、「魔法とか」のとかって、鬼道のことか？」

「そっ、そうだけど？」

「たぶん使えんぞ？俺以外には」

そうなの？使いたかったのに…

こうしてわたしはとりあえず魔法は、教えてもらえることになった。

S i d e o u t

S i d e 第三者

エヴァは考えていた、自分にとってアーク・ゼロ・アルエルとはどんな存在かと。

まず真祖の吸血鬼である自分を唯一、受け入れてくれた人
自分に（今は）魔法を教えてください
いつも守ってくれる人

まるで父親のようだと。

その考えが出た途端に、稲妻のような考えがエヴァンジェリンの頭
の中を駆けめぐる。

「ねえ！おにいさん！」

「なんだ？エヴァ？」

「これからはおにいさんのことを、父様くおやさまって呼んでいい！」

「別にかまわんが」

こうしてエヴァンジェリンはアローニーロのことを父様と呼ぶよ
うになる。

S i d e o u t

Side アーロニーロ

エヴァが戦えるようになり、自分の身は自分で守れるようになった。
と、言ってもまだまだ詰めがあまりいし、広域殲滅魔法の威力も低い
が、それらはこれから更に鍛えてくとして……

顎に手を当て「うん、うん」と、なにか考えこんでいるエヴァの微笑ましい光景を楽しむとするか。

20分後

ずっと眺めていても飽きないが、なにをそんなに悩んでいるかが
気になってきたので直接聞いてみるか。

「エヴァ、なにをそんなに悩んでいる？」

「父様、実は……相手になめられないようにするにはどうしたらいい
のか、ずっと考えてるんですが……」

「いい案が出ないと……？」

「はい」

なめられないようか……難しい問題だな、すぐできそうなのは強
そうな格好をするという手段があるが……

エヴァの容姿では少々いや、かなり無理がある。

むしろ子供が背伸びをしているようで微笑ましく見える。

いっそのこと幻影魔法で姿を完全に変えたほうがいいか？

それだけだと、エヴァが変身した姿にもよるが、しゃべり方も変え
さしたほうがいいな。

「大抵の人間は、まず相手の姿を見て判断する」

「わかってます」

「まずエヴァは幻影魔法を憶えて姿を変えられるようになれ」

「それなら、はやく教えてください」

反抗期だろうか……エヴァの口調がなんか冷たい。

「それと口調も変えたほうがいいな、エヴァの今の口調では賞金首
とは思えんからな」

「どんな口調が良いと思う？父様」

「偉そうな……いやそれだとなにか違うな、尊大な口調がいいんじゃないか？」

「尊大な口調？よくわからない……」

「勉強あるのみ…だな」

この日からエヴァの口調は徐々に変わっていくのであった。

S i d e o u t

S i d e エヴァンジェリン

父様から「魔法に関してはもう教えることはない」と宣言された。だが私は魔法に関してまだ父様から教えられることがあると考えていた。

なにせ教わったのは基礎だけで応用はなにも、教わっていないそう「なにも」である。

「父様」

「なんだ？エヴァ？」

「なぜ！私にもう魔法を教えてくださいませんか！？」

「教えないではない。教えられない、だ」

悔しそうに、はき捨てるかのように言う。

なぜ？父様は魔法使いとしての知識ならそこら辺の老魔法使いよりもずつとあるはずだ。

「知識しかないからだ。あまり使わない魔法の実践などしないからな。知識だけに偏った魔法などは習わないほうがいい。おもいもしない間違いを教えられてしまうかもしれないからだ。だからもう教えられない」

「わかりました……父様……」

私はいたたまれなくなつた、そもそも父様は生粋の魔法使いではないというのに、できて当然、教えてもらつて当然、のような考えで居たのだ。

父様でもできないことはある。そう認識させられたのだった。

そして、いつも傍にいる自分が父様にできないことを、少しでもできるよになつて支えようと。決心した。

S i d e o u t

Side アーロニーロ

どうも最近エヴァがよそよそしいというか、こちらを気遣っている？

なぜだ？（上の話があったすぐあとだからです）

親孝行のつもりか？

なんにしてもなにかエヴァにしてやらないとな。

そういえば、いつだか「鬼道はエヴァには使えないかもしれない」と、言ったら残念そうにしてたな。

いい機会だから使えるかどうかはわからんが…教えてみるか。

Side out

Side 第三者

こうしてエヴァンジェリンは鬼道を習ったのだが。いくら頑張っても黒棺と断空以外は使えず。使えた二つは手のひらサイズの大きさにしか展開できなかった。

この結果に頭を抱えたのはエヴァンジェリンではなく、アーロニーロだった。

なにせどちらも高位の鬼道 片や三分の一の威力で隊長格を倒し。片や八十九番台以下の破道を完全防御する障壁を張るもの

だというのにそれら以外の鬼道は、うんともすんとも言わずに失敗する気配さえ無かったのだ。

使えたとしても、鬼道に多少の相性はあるだろうと考えてはいたが、ここまで顕著にできるものだろうか……と。

当のエヴァンジェリンは、アローニーロが思考の海に考えを投じているのを余所に、一つ使えたのだから時間さえかければ（彼女には時間はたっぷりとあるのだから）きつと全部使えるようになるだろうと喜んでいた。

Side out

Side 第三者

エヴァンジェリンは、目の前に広がる森の不自然な道を見ながら喜びに身を震わせていた。

その道は人や他の動物が踏みしめてできたわけではなくたった今、エヴァンジェリンが切り開いた。語弊がないようにいつなら撃ち開いたのだ。

「エヴァ」

「見たか父様！！！！ついに私は虚閃^{セロ}を撃てるようになったぞ！！！！」

喜びでエヴァンジェリンはアローニーロの様子を見落としていた。普段の彼女ならその様子を見れば、謝るなりなんなりしたのだろうが……まったくいいほどに気づいてなかった

怒りでオーラを纏っているアローニーロの姿を

「なにをやっているか……!!!!」

そう怒鳴りながら浮かれているエヴァンジェリンに、鉄拳制裁を下す。

「なぜ殴る!!! 完全に成功ではないのか!!! 父様!」

自分に非はないと声を張りあげ抗議するが

「ああ、さっきのは間違いなく虚閃だ!」

「ならなにがいけなかったというのだ!」

「場所だ! 場所が問題だ! 試し撃ちは何も無い空に撃てと教えていただろうが!」

「た、確かにそうだが……」

「いいか! 虚閃は力量で範囲と威力が変えられる、そしてその威力は地形も変えるほどになることもある。

下手したら今の虚閃で森に道を作るではなく、山を消し飛ばしてたのかもしれないぞ!!!」

実際に試し撃ちで、アローニーロは山を
そのときは『^{グラン}王虚
の閃光』だが 実際に消し飛ばしたのだ。

ゆえに、練習や試し撃ちの際には空にむかって撃つように徹底していたのだ。

そんなことは知らないエヴァンジェリン「納得できない!」と思っていた。

ちなみに後日エヴァンジェリンは響^{ソニーデ}転、虚^{バラ}弾も習得した。

Side out

Side ????

何カガ流レ込ンデ来ル。生マレテ初メテノ感覚デ、目ヲ開ケルト
目ノ前ニ、顔ガアル。

「見る！成功みたいだぞ！」

ウルセエナ、ナニハシャイデヤガンダ

「あんな術式で自我が刻まれるのか…本当に魔法とは不思議だな」

五月蠅イ餓鬼ノ次ハ、仮面ノ変人カヨ

「私からすればあの義魂丸の方が不思議なのだが」

「オイオイ、早速俺ヲ無視力ヨ」

「しゃべった!?!」

オイ餓鬼、オマエハ俺ヲナンドト思ッテルンダ？

「そういう風に作ったんだろうが……」

仮面二呆レラレテイルゾ餓鬼

「いっいや、こんな風にしゃべるとは思わなくてだな」

「ソレヨリ、オ前等ハナンナンド？」

「なっ！作り主にしてお前の主人である、この私がわからんのか！」

ワカンネエカラ、聞イタンジャネカ……。アー……デモ主人カ、ナンカソシナ気ガシナクモ無イナ

「マツ、ヨロシクタノムゼ、ゴ主人」

「なんだ、わかるではないか」

「デッ、ソツチノ仮面ハナンナンド？」

「俺は、a「私の父様の、ア—ロ—ニ—ロ—アルエリだ！」………」

オイオイ、落ち込ミデルゾ、ソノ父様が

「ヨロシクナ、旦那」

「ああ、こちらこそな、チャチャゼロ」

s
i
d
e

o
u
t

番外 こんなことがあった（後書き）

これらの話はいれようとすれば入れられた
でも無くても問題ないなということでも削った
しかしなんかもったいないなということでも番外として投稿しました

戦う 剣闘士としての戦い（前書き）

第7話 予想より早く書きあげました。
ではごっしょ。

戦う 剣闘士としての戦い

Side アーロニーロ

どうせ戦うのならためになるようにするか…

という訳で、素手による戦闘訓練として攻撃は白打に限定、さらに限定霊印とBLEACH The 3rd Phantomにてできた霊力を抑える 名前ができてないから底霊薬と命名した

薬を使い能力を大幅に下げる。

これでせいぜい強さは一般人（魔法世界基準）よりは強い程度にする。

「さあ！果敢にも当闘技場の特別種目、倍加試合に挑む新人ルキの剣闘士の入場です」

剣闘士になるのは簡単で登録してすぐに試合という流れになって試合をするところだ。

「新人のためにために大まかなルール説明をします。

倍加試合は勝つたびに相手の数と賞金が倍になっていきます。

試合は全5試合で、決められた相手と戦ってもらいます。

それと試合の終了直後に棄権することできますが、棄権した場合は選手が手にする賞金は半額になってしまいます。

リングには私物ならなんでも持ち込みはできます。

魔法の使用もできます。でもリングを破壊しかねない威力の魔法はできればご遠慮ください。

勝つには相手を倒して10カウントをとるか、相手をリング外にだすだけです。

それとたとえ試合中に死んでしまっても当闘技場はいつさい責任

を負いませんのであしからず。

では、試合開始！」

対戦相手は筋肉が無駄についでる大男、開始の合図とともに距離を詰めてくる。

こちらも相手と同じように距離を詰め、相手が殴りかかってくるのにタイミングを合わせて懐に潜り込み

「双骨！」

脇腹に強力な打撃を打ち込む。

双骨は護廷十三隊 一番隊隊長 山本元柳斎 重國（やまもと）げんりゆうさい しげくに）の技である。

双骨は原作では解放状態のワンダーワイスをまさに破壊した。しかし、今当てられた大男は肉体に目に見える欠落はない。

（今の状態ではこの程度か……）

自分に掛けた制限により本来よりも格段に威力が低くなっていた双骨では、あばら骨を砕くことが限界であった。

「カウントを」

あばら骨を砕かれた痛みでうめき声をあげつづくまっくまっくといふのに、審判がカウントを始めないので促す。

「あつ、はい！」

「10！」

「9！」

「8！」

「7！」

「6！」

「5！」

「4！」

「3！」

「2！」

「1！」

「0！」

「デモウラ・アイスリンガー選手！初戦突破しました！」

審判による判決がでた途端にそれまで静けさが支配していた闘技場に爆音かと思つほどの騒ぎがおきる。

「おい！？みたか！あの巨漢を一撃で倒したぞ！」

「冴えない見た目のくせに！」

「これは期待の新星だな」

「うほっ！見た目以上のいい男！！」

「初戦でとばしすぎじゃないのか？」

寒気がする声が聞こえた気が……

「では、次の試合に移りたいと思いますが。次の試合は先ほどの倍の2人と戦いますが、どうしますか？」

「無論、挑戦させていただきます」

「では、双子のラリとルレ選手の入場です」

選手の入場と同時に客席から黄色い声援が飛び交う。

「きゃ〜！？ラリ様こっちむいて〜！」

「ルレ様はこっちむいて〜！」

…なんか腹立つな、あのイケメン双子。

「デリイ（大男の名前）の奴は不甲斐ない」

「しかたがないよ兄さん、やられ役だもの」

話しながら入場とは、随分と余裕だな。

「だとしても一撃でやられるのは弱すぎるだろ」

「そうだね。でも、頭を切り替えようよ兄さん」

「それでは！倍加試合2回戦目開始！？」

「先手は打たせてもらおう！風の精霊23頭。

「させま「邪魔はさせない！」「くっ！」「

「デモウラ選手。兄のラリ選手の詠唱を阻止しようとするが、弟のルレ選手により足止めをくらってしまおう！」「

集い来たりて敵を切り

裂け！『魔法の射手・風の23矢』」

詠唱が完成し風の矢がこちらに襲いかかってくる。数は全部で23この数なら…

「影布3重対物障壁！」

自分の前面に影の障壁を3枚張り、さらに

「戦いの旋律・二倍速！」

自分に強化魔法をかけ、障壁を確認する。障壁が1枚破られているか…

「デモウラ選手使い手のすくない、影の魔法を使い魔法の射手を防ぎ取りました！」

「ふむ、先ほどの試合はマグレではないようだな」

「そうみたいだね兄さん」

「「なら、アデアット！ 共振する神経！」」

それぞれ掲げたカードからペアの腕輪がでてきて、それを一つは自分にもう片方は兄（弟）に付ける

アーティファクトか、こいつは厄介そうだな

「「このアーティファクトは俺（兄さん）の腕輪は付けている相手と常時念話をしてる状態にし、ルレ（僕）の腕輪は付けている相手と魔力の受け渡しをできるようにするものだ」

「説明感謝します。ですが勝たせてもらいます！」

「「それは無理というものだ（よ）！！」」

「ラリ選手とルレ選手のコンビネーションが炸裂します！この二人が敗れたことはまだ一度もありません！デモウラ選手はこのまま負けてしまうのでしょうか！」

速さは『戦いの旋律・二倍速』のおかげでこちらの方が上だが、常時念話による互いが互いを完全にカバーする戦法により、こちらの早さのアドバンテージは無いものも同然。

『戦いの旋律・二倍速』の効果が切れる前に、どちらか片方だけでも倒さない限りこちらに勝機は無い。

今の状態では圧倒することは不可能…なら

Side out

S i d e ラリ&ルレ

「おっと、デモウラ選手動きを止めました諦めたのでしょうか？」

（どっ見る兄さん？）

（おそらくカウンター狙いだろう）

（でもそれだと僕達どちらかの追撃をくらうけど…）

（そんなのは承知の上だろう。そうでもしなければ勝てないとの考えだろう）

（ならのったフリをして）

（一気にきめるぞ！）

まずラリが正面から仕掛ける。体をほんの少しずらすだけでデモウラはこれを回避する。だがこれで終わりではない、立ち位置を変えないまま連続でしかける。そこにルレがデモウラが動いた直後に
 体の硬直すであるうタイミングで 仕掛けるがデモウラはその一撃を手で、受け止め体全体の動きを一瞬止める。そのチャンスを見逃さずに渾身の一撃を決める

はずだったが、二人が気がついた時には試合は決まっていた。

Side out

Side アーローニーク

ルレの一撃を手で受け止めると同時に、操影術でラリも捕まえ。響転によりリングのすぐ縁ふちに移動し、その勢いで捕まえていた二人をリング外に放り出したのだ。

「まさか、二人も抱えたような状態で瞬動を使えたとは…驚きだよ」

「ほんと意外だったよ。そんな方法で僕ら兄弟に勝つなんて」

「闘技場のルールに「リング外に押し出しても勝ち」が、無ければ負けていましたよ」

「それは謙遜というものだデモウラ。貴様は操影術を防御にしか使わなかった」

「攻撃にも使われてたら、僕等でも結構危なかったんと思うよ？」

「それなら貴方達も初めの一回しか攻撃魔法を使わなかったじゃありませんか」

「相手が肉弾戦で来ているというのに、こちらだけ攻撃魔法を使うのを我等兄弟はよしとしなかったただけだ」

「まっ、その所為でリング外への押し出しで負けたんだけど」

「だが、後悔はない…心残りはあるがな」

「心残り？なにがですか？」

「武人として、相手の本気と戦えなかったことだ」

「まあ。僕等じゃ足元にも及ばなさそうだけど…」

「どうして…わかつたんですか？」

「手合わせすれば、解るものだよ。生粋の武人ならな…」

まさかそんなことで実力を看破されるとは…力を貰っただけで自ら身に付けたわけではないからか
そんな真似は今の俺にはできない。技術をものにする必要があるか
……

なら、これからの五年はそのことだけに集中するとするか。
思いを新たにし、闘技場をあとに

「あの…、次の試合はどうするんですか？」

せずつに残っていた試合を全身全霊で勝ちにいった。

S i d e o u t

戦う 剣闘士としての戦い（後書き）

いままで瞬殺ばかりでやっとなともな戦闘…でも文にすると短い気が。

戦闘シーンでこんな感じでいいんでしょうか？

あと変装中の主人公はデモウラ・アイスリンガーと名乗り、猫被っています。

まあもう使う予定はないんですが……

感想待っています。

平和 ただし期限付き（前書き）

第8話

微妙……

やはり私にはこの程度の力しかないのか……

後書きにアンケートがあるので、よければ答えてください

平和 ただし期限付き

Side エヴァンジェリン

一人で備え付けのイスに座り、テーブルにひじをつけ、手は自分の顔を左右からはさむようにしている。

そして時折「はあ」と何度目かのため息をつく。

なにをしている？と問われれば。待っていると答え。だれを待っている？と問われれば。父様を待っていると答えただろう。

だが、自分自身まだ帰って来ないことはわかっている。だということに、どういう訳か自分はここ最近ずっと同じことを繰り返していた。

「どうしたいんだろうな…私は」

口に出した問いに対して明確な答えは持ち合わしている。しかしそれはできないことである。

「ナンダ？寂シガツテンノカ？ゴ主人」

声のしたほうを見ればテイベイア 魔法によって姿を変えているチャチャゼロ がその足で立っている。

「寂しい…か。その通りかもしれんな」

自分の従者に言われずともわかっているが、言われると余計にその感情を意識させられる。

前まではこんな事はなかった、それはこうして年単位で留まっていること、街中を自由気ままに散策できること、普通に買い物ができること、あげていけばきりが無いが、その中で一番自分に影響を及

ぼしているのが、父様とずっと一緒に居られないことだ。

前なら賞金稼ぎなどを警戒して長い時間そばを離れることは無かった。しかし今はほとんど一緒にいないといえる。

試合のある日は闘技場に入り浸り、無い日は新しい技の鍛錬に明け暮れる。

そうして父様が自分と居る時間が極端に減った。

自分にやることことが無いわけではない、父様との力の差を少しでも縮めるための新魔法の研究開発、鬼道と魔法の詠唱破棄のための練習、武術の鍛錬、ただ手に付かないだけである。

前までと同じ状態であつたなら、どれも喜々として取り組んでいたであろうが、今はどうだ？時間があるというのに意味もなかった浪費しているだけである。

自分は、ずっとそばに居るために強くなってきた、自分の目の前の従者も戦いに明け暮れる日々であつたから、少しでも父様の負担を減らすべく作った殺人人形^{キリングドール}。

だというのに、平和な今は殺人趣向のおしゃべり人形になっている。真祖の吸血鬼である自分を受け入れてくれた父様に依存している。それでいいと思っっているし、誰がなんと言おうと考えを変えるつもりはない。

今の状態を変えるために必要なのはただ一つ、父様と一緒に居る時間を増やす。これに限るだろう。どうすれば一緒に居る時間を増やせるだろうか？

よし！今日から父様と同じベッドで寝るか！

この夜にエヴァンジェリンは本当に決行し、しばらくアローニーロの部屋に入れなくなった。

Side out

side アローニーロ

剣闘士として戦っていたのが懐かしく感じるな……ちなみにとんだぞ、何百年も。

それと今は一人だ、エヴァは武者修行として旧世界に放り出した。けっして！夜這いをかけられたからではない。あとエヴァに必要なのは、実践経験ぐらいしかない。俺と一緒にいてはエヴァのためにならないとの考えで、放り出した。

何百年も前にな……

一人身になりエヴァの前ではできない研究をしたりして時間を潰した。

魔法理論の本を何冊も執筆したり

ホロウ虚を魔法生物として生み出したり

クインシ滅却師の力を使えるようにする道具を作ったり

崩玉を作ったり

義骸を量産したり

補肉剤や超人薬のような劇薬を作ったり

斬魄刀の贋作も作ったな

他にも色々作ったが、それらは置いておこう（影の倉庫内に）。

どうも魔法世界内での戦争になりそうな空気になってきている。

別に参戦する必要がある訳ではないが、魔法世界全域に戦火が及ぶ歴史に残る大戦になりそうである。

こんなにでかい祭りはそうそうない……

一度大規模な戦争をすれば年単位で戦争は起きない、もちろん損害によって次に起きるまでの休息期間にかなりのばらつきがでる。

しかし、今回起きようとしている戦争はちょうど魔法世界を二分し、ほぼ対等の状態に持ち込まれると確信している。

それなら、自分がどちらかに付き、そちらを勝たせるというのもおもしろいではないかと。

普通であれば個人で戦況を覆すのは不可能だ、しかし自分がたらず技術は間違いなく戦況に影響を与える。

ならばどちら側 北の連合か南の帝国か にくくかが問題になるが

「人間にはさんざん世話になったから、怨返しおんがえをするのも悪くはないか……」

戦争に一石を投じるべく、南の帝国 ヘラス帝国を目指すのだった

side out

side ヘラス帝国 国王

こちらにとって悪い話ではない、だがしかし信用ができない。

相手は懸賞金1800万の賞金首、自分が会うことの無い存在だと思っていたが、目の前にいる。

「で？どうするんだ？国王殿？」

こちらにただ問いかけているだけというのに、まるで「首を刎ねるぞ」と脅されてるかのように感じる。

「いくらなんでも、私の一存で君のような者と取引はできない」

なるべく王としての威厳を失わないように、なおかつ相手を怒らせないように静かに言う。

「そんな事はわかっている、今は俺と取引のできる見込みがあるかを言えばいい」

「提示した物を全部提供できるなら、見込みならある。だがこの取引は破格すぎる」

「なんだ？交渉材料がたりないのか？」

「いや、その逆だ。君が得る物が少なすぎる。これでは裏があると考えてしまうのだよ」

「考えてしまう」そう言ったが、裏があると警戒するのは当然だ、誰が賞金首の言葉を鵜呑みにするだろうか。

そうでなくとも、取引に隠された意図があるのはよくわかっているつもりだ。

「得る物が……ならヘラス帝国への永住権でも追加するというのはどうだ？」

できれば寿命不明の輩に永住権など与えたくはない

「単純に、金品の方が無難なんだが……」

「金品？必要な物が無いから、こちらが出した条件でいいとしていいんだがなあ」

あくまで譲る気はないか……

「本当にこの条件でいいんだな？」

「永住権を追加したのでな」

男の出した条件を書かれた紙に目を落とす

アーロニーク・アルルエリ（以下契約者に略称する）はヘラス帝国と以下のような契約をする

- ・契約者はヘラス帝国の兵士として戦争に参加する
- ・ただしヘラス帝国側は契約者の参加する戦場を強制することはできない

- ・契約者は兵器運用可能な魔法生物 メノスグランテ 大虚を提供する

- ・ただし提供する魔法生物の解剖や解析は禁ずる

- ・安価で量産可能な転移符と魔法薬（傷薬）の生産に必要な技術提供をする

ヘラス帝国側は以下のことを契約者にしなければならない

- ・ヘラス帝国内での賞金首 契約者と、その娘 エヴァンジェリン・A・K・M・アルルエリの賞金の取り下げ
- ・契約者とその娘の出入国の黙認
- ・契約者とその娘のヘラス帝国への永住権

(注)これらのことが、一つでも欠けた場合は契約破棄とみなす

「わかった、この件は明日の会議でみなと相談の上で決定をする」

できれば通らないことを祈る。なにせこんな輩が帝国内を大手をふって歩けるようになるのだから……

しかしその祈りは叶えられることが無かった。会議に乱入してきたと思えば、提供する物品の効果が予想をはるかに超えるものであることを、実演することにより認めさせ、ほとんどの者を賛成に変えていったのだから。

side out

平和 ただし期限付き（後書き）

やっと戦争に入れます

あとアンケートなんですが、本編の中で「斬魄刀の贗作を作ったな」といったんですが、本編でそれを原作キャラに持たせていいでしょうか？

贗作なのでいくら制限がありますが、あと斬魄刀は破面のも含まれます。

もし持たせていいなら、できればいいので「なにを誰に」持たせたいかを書いてください。

例 氷輪丸をエヴァンジェリンに
補足として

破面の斬魄刀を持たせた場合はそれ自体を主武装に変化させた上で進んでいきます。

あと姿が変わりすぎるもの、例えばヤミー（憤獣）のようなものは省きます。

期限は戦争編が終わるまでとさせていただきます。

戦争 そのまえに設定再確認(前書き)

確認用です

読まなくていいかも

戦争 そのまえに設定再確認

戦争開始前の設定確認

主人公

アローニード・アルルエリの力と開発能力と鏡花水月（未使用）、神鎗（嘘刃解可能）、詫助（未使用）を持っている。
BLEACHに出てくる技は全部習得済み、ただし斬魄刀や特定キヤラの固有能力が必要な技は使えない。（見た目だけの再現なら可能）

いつもアローニードとほぼ同じ格好をしている。（ほぼ理由は右手にも手袋をしているから）

魔法も習得しているが、影の魔法、幻影魔法、認識阻害くらいしか使わない。

開発能力をいかして虚を魔法生物として作りだしたり、斬魄刀の贋作と色々作っている

賞金首情報

懸賞金1800万

通り名

「仮面の白魔女」、「闇の魔法使い」、「首刎ね公」、「知識狩り」、「禍々しき白」、「仮面の使徒」、「影の君臨者」

エヴァンジェリン

アローニードに助けられたことによりアローニードにべったりしかし一緒に寝ようとしたのを夜這いと感違いされたことにより、原作のようにしばらく旧世界を（従者のチャチャゼロと）彷徨う羽目になった。

響転、虚閃、虚弾、黒棺（破道）、断空（縛道）を習得している。
賞金首情報

懸賞金 900万

通り名

「闇の福音」、「守られし月」、「人形使い」、「不死の魔法使い」
、「仮面の娘」、「悪しき音信」、「禍音の使徒」、「童姿の闇の
魔王」

戦争 そのまえに設定再確認（後書き）

必要なかったか？

アンケートお願いします

戦争 無駄（前書き）

第9話 前半と後半の温度差がまた激しい

それとモブ同然になる予定のオリキヤラを投入してしまった……

ユウト様、んんん（・ ・）様、イースト様、摩耶大橋様、闇の賜物様、まつきー様、アンケート協力ありがとうございます！
それとアトリ様、すごく重要な誤字報告ありがとうございます。

戦争 無駄

S i d e 第三者

連合と帝国の戦争はアールローニークの予想通りと言っても問題ないような、魔法世界全域を巻き込む、そう何度もないような大戦となっていた。

そして彼が提供した品々は、何の問題もなく戦争に使用され。彼自身の戦果と相まってまさに『戦時の英雄』と帝国の人々に認められると同時に連合には恐れられていった。

帝国には「仮面の英雄」連合には「血染めの白」と呼ばれていった。だが、名が広まると早々に彼が意図しない存在が彼に目を付け、近づいてきた。

S i d e o u t

S i d e アールローニーク

今、逃げている。追いかけてくる敵は強大でもなんでもない、むしろ弱い部類に入るだろう。

しかしこれまでで出会った中で一番と言えるモノを持っていた。それは不屈の心である。

いくら逃げられても決してあきらめない、そんな相手は今まで巡り会ったことはない。

もっとも追いかけてきた敵に次の機会を今まで与えたことはなかったのだが。

いくら命令でもここまで執拗に追いかけてこないだろう、そう思っただけで立ち止まればすぐも接近を許すことになる。

別に避ける必要性は皆無なのだが近くに居られると非常にうるさい。

少し立ち止まる。それだけというのに敵はこちらとの距離を一気に詰め寄り

「捕まえましたよ！アローニー口様！！おとなしく私にお世話されなさい！」

凜とした声でそう言うやいなや逃がさないように俺をガッチリと抱き締める。

「世話は要らんと言ったはずだが？それと離せ、胸が当たっている」
言ってもおとなしく離さないだろうと解かっているが、言わねばそうすることを許可してるも同然になってしまう。

「当てるから問題ありません！あと、アローニー口様の世話係を任^{まか}されているので必要、不必要に関わらずあなた様のお傍にいます！」

どうして「当てる」とハッキリ言う？

「嫁入り前の大事な体をそう扱っていいのか？」

帰ってくる答えはわかっているが、それでも言わねばならない。

「この体はアローニー口様に捧げますから大丈夫です！！それとしっかり肌を磨いています！！」

捧げなくていい……むしろほつといてくれ……

ここまで一途に思ってくれるのだから悪い気はしない、しかしいつ

でも迫ってくるのは勘弁願いたい。
なぜ彼女 ユリア・ヘネパスがこうなったのかを思い出すのだった。

戦争開始前

提供する魔法薬、ぶっちゃけると補肉剤の量産品なんだが、その効力を会議中の皆様に知ってもらうには実際に見てもらおうのが一番ということ、見世物になってもらう人を病院からばれないように誘拐してきたのだ。

その時に見世物になってもらったのが、ユリア・ヘネパスだったのだ。

右腕と左足を失い病院のベットに横たわっているのを見つけて「ちようどいいか？」と思い使ったのだ。

そして皆様の目の前で魔法薬で腕と足を生やした際には「信じられない…」と困惑した顔を始終していた。

見世物が終わった後は病院に返したのだから……

その後ヘラス帝国側から世話係（という名の監視員）をつけるという知らせがありそれを受け入れたら、彼女が待っていたのだった。

おそらく彼女には、俺がまさに「白馬に乗った王子様」に見えたのだろう。

その日からというものは彼女は俺の世話をしようとするのだが……必要が無い、自分のことは自分でやる。

というかなぜ、彼女の両親から「娘を頼みます」と言われなくてはならない。

なぜ、お前は俺の家の合鍵を持っている。

なぜ、戦場の前線にまで付いてくる。

帝国としては彼女に俺を射止めてほしいのだろう。そうすれば少なくとも彼女が死ぬまでは帝国に留まる可能性が高くなる。

そんなお偉いさんの思惑を知ってか知らずか、俺に猛烈にアタックしてきている

それらは置いていて

「前線に出る、付いてくるなら準備をしろ」

「!?!?!はい!」

返事をする。「俺の家に」荷物を取りに……

なぜ俺の家に行く!、私物を人様の家に置いてるのか!おまえは!

そのことはまた今度にしよう……

そうして逃げ回っている途中で受け取ったお願いを書かれたものを見る

前線に出撃されたし

この地域には大虚をメノスクランデ何体も倒している紅き翼が確認されている
可能であれば紅き翼を撃破されたし

紅き翼か、たしか一人一人が強い戦闘集団だった筈だ。そいつらが大虚を、本来艦隊で倒すのを喰われるだけの人間が倒しているのだ。十分に驚きだ。

「さて、おまえらは楽しませてくれるか?紅き翼」

まだ見ぬ猛者の姿を考え、仮面の下で笑うのであった……

「準備できました！行きましょう！アーローニー口様……！」

……できればもうちょっと空気をよんでほしかった……

Side out

Side ナギ

おっ！？出番か！

俺はナギ・スプリングフィールド 紅き翼のリーダーにして千の呪文の男だ！

「よく、倒しましたねえ、これで十体目じゃないんですか？」

今しゃべったやつはアルビレオ・イマ、重力魔法を使う変わったやつだ、

「まったくだ……こいつは本来艦隊が相手にするやつだぞ」

んで今のは青山 詠春、神鳴流の剣士でカタナというのを使うやつ

「なぐに、このラカン様に掛ければこんなデカブツ、あっ！というまに細切してやんよ」

これはジャック・ラカン、いつだか殴りあってきがついたら仲間になつてたやつだ

「こいつ……食べるかのぉ？」

最後にフィリウス・ゼクト、俺の師匠だ。

「喰えるには、喰えるぞ。ただし、とんでもないことになるかもしれないかな」

聞いたことのない声に全員が身構える。

そいつはたった今倒した帝国の兵器の上に胡坐をかいて座っていた。

「…穴が開いただけの縦長の仮面に、白い服。まさか！血染めの白ですか！？」

「なんだそりゃ？有名人か？」

「ナギ！あなた知らないのですか！戦争初期から帝国側で戦っている賞金首ですよ！」

知らねえもんはしかたねえだろ！

「とりあえず敵ってことで、いいんだよな！」

「水天逆巻け、掬花。紅き翼、貴様らは退場してもらおう」

「んだと！馬鹿にすんな！お」「馬鹿弟子！」「なんだよ！師匠！」

こんなやつ一人で十分だっていうのに

「全員でかかる、それ以外じゃ全滅してしまうかもしれぬ」

そんなに強いのか？こいつどう見ても不審者にしか見えねえけど

……

「じゃっ！一番槍はこのラカン様がいただくぜ！」

「なっ！？俺がやるに決まってるだろ！」

ラカンに出遅れないように仮面野郎に挑む

Side out

Side 第三者

戦いは5対1だというのに紅き翼は攻めきれずにいた
別に相手が見えないほど速いわけではない
別に相手が一撃でこちらを戦闘不能するほど力が強いわけでもない
ただただ立ちはだかっているのは、経験による回避の能力

「くそ！なんであたらねえ！」

ナギがそう愚痴を漏らすが見てもそれを咎めない、否、咎める余裕が誰にもないのだ。

そもそも紅き翼は多対一の経験が無い。自分達が一騎当千の兵であるから自分達より弱く多い相手を倒すことはあっても、逆に自分達より少なくなおかつ強い相手との戦闘経験はなかった。

個々の戦闘能力は高いが、それを完全に生かした戦い方できていない。これまでの経験により自分がどの位置で戦えばいいのかわかっている。しかしそれだけである、連携としては共にいるのだからできて当然のことである。

それに慣れない連携の崩壊が見え始めていた。

対して、アールローニーは普段と変わらない。

ただ相手が、いままで戦ったことのある相手の中でも少数精鋭であることぐらいしか違いはない。

つまらん。それが感想だった

この程度なら何百年も前に戦った双子の方がいい連携をできていた。生まれた時から一緒にアールティーフアクトでさらに連携を強化していた双子と錬度を比べるのは酷なものかもしれないが。アールローニーの目からしたら連携はお粗末なものだった。

「下らん……」

ぼつりとこぼした一言

「ハアハア……なんだと？」

肩で息をしながらナギが聞きかえす

「弱い、と言っているだ、この「雷鳴剣！」…不意打ち上等か、だが傷をつけるまでいたらんな」

「なっ!?!」

話の途中で詠春が神鳴流奥義 雷鳴剣を放ったが、左手で受け止められる。

だが、左手の手袋がだめになっただけで、それ以外は何ら変わりがない。

詠春は相手が平然としているのに絶句する。

自分が放てる最強の一撃ではなかったが、人間亜人関係なく電気エネルギーをもった雷鳴剣は相手の動きを阻害したり何らかのダメージを与える。あわよくば電気ショックによるショック死を期待したのだが。

無傷

そんな現実が精神に更なる負荷を掛ける。

「……わしが足止めを務める。他の者は逃げる……」

ゼクトが意を決したように重々しく言う

このままでは全滅は確実。それを回避するには誰かが足止めをし、他の者を逃がさなければならぬ。

「誰が、逃げつかよ！ましては師匠を置いてよ……！」

「そうですね、ゼクト。この中に仲間を置いて行くような人は居ませんよ？」

「はっ！置いて行ったら寝醒めが悪くなっちまうしな！」

「みな、戦場で死ぬ覚悟はできています」

できれば、こんな老骨を犠牲にしてもいいから逃げてほしかった。だが、同時にうれしく思う。

「まったく、馬鹿弟子が。リーダーなら皆が生き残るを考えたらどうじゃ？」

「満場一致で決まってるだ！何も問題ない！」

当たり前だと、胸をはってナギが答える。
だがそんな覚悟に、水を差す者が現れた。

「どけ、人間ども。私と父様の戦いの邪魔になる」

S i d e o u t

戦争 無駄（後書き）

ゼクトは犠牲になったのだ。

下手打てばそうなってしまつてしまいました……

んんん（・・） 様のコメント」と言つか戦争中にエヴァ参戦希望したいです」
により、エヴァは原作同様に登校地獄を掛けられる予定でしたが、別に必要がないと考え直し。参戦決定。貴重なアイデアありがとうございます！

戦争 のなかで親子の戦い（前書き）

第10話 最初から最後まで戦闘！

これがやりたかったただけだろ、とコメントがされそう気がしなくもない

戦争 のなかで親子の戦い

Side アーロニーロ

エヴァがこちらを鬼のような形相でこちらを睨んでいる

「ついに見つけたぞ、父様。放り出されて何百年…どれほどこの日を待ちわびたことか…父様にはわかるまい」

ゆっくりとだが、はっきりと恨みを込めた言葉をエヴァが言う

「私は…私は…怒っている」

いきなり放り出されたのだ、怒って当然だ

「私が、一人で生きて行けるように思ってやったことだとわかって
いる」

少しだけ声音がやさしくなる

「だが…！私は…！一人で生きて行けなくても父様と一緒にいたか
った…！！」

だが、すぐに叫ぶように

「寂しかった！辛かった！悲しかった！」

己の心を吐き出すように。さらけ出すように。悲痛な声を出す

「だけど、成長できた。だから私はその成長した姿を戦うことで父様にしめす」

決意を露わにした目で、はっきりと告げる。

「いい目になったな…エヴァ……。なら、言葉で飾ることに意味は無い。」

全力でかかってこい！」

父と娘の最初で最後の本気の殺し合いが始まった。

Side out

Side 第三者

「まずは！これだ！」

エヴァンジェリンがそう言うやいなや、エヴァンジェリンの影が瞬く間にアークニーロを囲むまで広がり。

その影から無数の人形が出てくる。

姿は人型を逸脱した物はなく、それぞれがなにか禍々しいオーラを纏っている武器を持っている。

アークニーロの探查神経が、魔力　それも一つ一つが魔剣などと呼ばれるのに十分すぎる量の　をもっていると判断する。

「私が用意した魔剣や曰く憑きの武器を持つ、人形兵達だ。」

人間だったらこれだけで逃げ出す理由には十分と言える戦力である。だが、アークニーロと戦うには荷が重すぎた。

手の持っている掬花を振り、囲んでいる人形を次々と解体outしていく

ある人形は掬花に直接ねじ伏せられ、またある人形は掬花が生み出す波濤により粉々に粉碎された。

独特の高い構え、方手首を軸に掬花を回転させ、槍撃と波濤で敵を攻撃する舞いのような槍術。

たとえ槍の一撃目をしのいだとしても、槍に追従するかたちで追撃をする波濤により圧碎、両断される。

ただ武器を振うことに特化しただけの人形相手に傷を負うことなく終わらせる。

「やはりただの人形では、この程度か……」

エヴァンジェリンとてわかっていた。自分が敬愛する父様があの程度の人形に後れをとるはずがないと……

しかし、小手調べとしては十分である。

次に打つ手はすでに決まっている。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！ 氷の精霊1200頭。

集い来たりて敵を切り裂け！ 『魔法の射手・連弾・氷の1200矢』
！」

全力の魔法の射手。数こそアールローロにとってはおたかが1200になるだろうが数より質である。

「縛道の八十一 断空」

氷の矢がアールローロに殺到するのを縛道で張られた防御壁が防ぐが、徐々にヒビが入り始め。

最後の1矢で断空をついに破る。

さらに詠唱を紡ぐ

「リック・ラク・ラ・ラック・ライラック！契約に従い、我に従え氷の女王、来れ！」とこしえのやみ』！ 『えいえんのひょうが』全ての命ある者に等しき死を、其は安らぎなり・・・！」

障壁を破られ無防備なアローニー口を氷漬けにし、さらに最後の一手になるかもしれない詠唱の終わりを

「『おわるせか バツキーーーーン！！！！』

紡げずに、氷が砕けた

「薄皮一枚凍らせたぐらいで、勝てるとは思ってはいまい。なあ、エヴァ？」

S i d e o u t

S i d e エヴァンジェリン

大抵の相手なら、受けた時点で死しかない魔法を、受けてなお且つ自らの力だけで氷を砕く。

自分にできないようなこと平然とやってのける。いつもそうであった。その背中を後ろからずっと見ていた。

そして、あの隣に立ちたいと思った。だから、だからこそ父様があり使わない魔法を重点に置いた特訓を何百年もした。それしか認められない気がして。

だが、あさつりと破られた。中たりこそしたものの、父様を倒すには十分な威力を發揮できずに終わった。

「まだ終わりではあるまい」

そついい父様は左手を此方に掲げるように突き出す。
あの構えは、……まずい！

「虚閃」

やや遅れたが自分も虚閃を放つ

自分が放った紅い虚閃と父様が放った灰色の虚閃は一時は拮抗したが……自分が押し負けた。

強い。やはり強い。超えたい壁が遙か上空にまで伸びているような気分だ。

だとしても、最後まであきらめるつもりは毛頭ない。
まだ切り札は残っている……

「どうした？動きが止まっているぞ？」

一瞬で距離を詰められる。響転か……。生存本能が狂ったように警告を出しているというのに、酷く落ち着いて父様がなにをしたか考え、すぐに答えを導き出す。

胸の近くに左手がある。それを確認すると同時に吹き飛ばされる。
今度は虚弾か……

父様は脇差みたいな刀を変な構えで持ち、刃先を此方に向けている。

「卍解 神殺鎗 『舞踏』」

ひと刺し。人間だったらここで死ぬのだろうが私は吸血鬼だ。刺されたところから蝙蝠化をする。

「『舞踏連刃』」

だが蝙蝠になった私に対して容赦のない追撃が雨のように襲いかかる。

少し離れたところで再び人型になる。

「終わりか？」

息も荒く、膝をつき許しを請うみたいなたまげな姿勢になっているが……まだ終わりにするつもりはない。

立ち上がる。それだけというに辛い。刺されまくったダメージがデカイ。

『闇の魔法』自分で作り出した禁呪。攻撃魔法を取り込み自分を強化する技法。

始まりは父様の能力再現だった。父様は死んだ相手を喰う事で相手の能力と魔力を自分の中に取り込む。

それを魔法により限定的でもいいから再現しようとして、できた未完成的の技法。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！ 滲み出す混濁の紋章 不遜なる狂気の器 湧きあがり・否定し 痺れ・瞬き 眠りを妨げる 爬行する鉄の王女 絶えず自壊する泥の人形 結合せよ 反発せよ 地に満ち己の無力を知れ！ 破道の九十 黒棺！ 固定、掌握、魔力充填、術式兵装『瞬閃』！」

さらに魔法だけでなく、破道も取り込めるがわかり、自分が唯一使える『破道の九十 黒棺』を取り込み、術式兵装には、一度だけ見たことのある鬼道を使った術の一つの到着点である『瞬閃』をイメージする。

肩と背中中の布が吹き飛ぶが気にしない。

「まさか…『瞬間』を再現してなおかつ黒棺の特性を取り入れるとは……………」

父様から驚愕の声がもれる。

黒い渦を肩と背中に纏っている姿ではなく、鬼道が二つしか使えない私が瞬間もどきを使い、さらにはそれが黒棺の特性であることに驚いている。

「いくら父様でも、これに当たれば無事ではすまない」

一矢報いることは可能だろう……

「だが、私はあと一撃が限界だ……………だからこの一撃を真正面から撃ち破ってほしい」

殺す気で挑んだ。それでも完全には自分の技は父様の命には届かなかった。

正直悔しい、打倒 父様を掲げて、チャチャゼロに呆れられながらもした特訓が無駄であるかのように、撃ち破られた。あとこの一撃しか手は残ってない。これが破られれば完敗である。

しかし、それを喜んでいる自分も居る。自分の父様はこんなにすごいと、胸をはって言える。

そう、喜んでいる。

「わかった。そちらのタイミングで来い……」

上半身の服を脱ぎ、瞬間状態になった父様が、こちらが来るのを

いまかいまかと待ち構えている。

響転で加速をつけ全力で殴りつけようとする。

父様はそれにあわせ、拳と拳がちょうどぶつかりあうようにする。

拮抗は虚閃の時より短く、一瞬で方がついた。

無様にも攻撃の余波で飛ばされた私は最後の力を振り絞り、ぶつかった所で佇んでいる父様を見た。

「流石の威力だ……鋼皮イェロを切り裂き内側もボロボロ。普通だったらもう腕は使い物にならん……」

右手を中心にして広がるヒビのように見える斬り傷が肩にまで達している。

ただくつついているだけなのだろう。腕はダランと力なくぶら下がっている。

思わず歓喜の叫びを上げたくなった。

あの父様に自分はあれほどのダメージを与えた！

自分がした特訓が無駄ではなく、あの結果を打ち出した！

いままでで父様と戦った誰よりも、父様に対する戦果をあげた！

しかし意識は少しずつ遠ざかって行き、最後に感じたのは父様のぬくもりだった。

Side out

戦争 のなかで親子の戦い（後書き）

ここでちょっと補足

近くにいた紅き翼の面々は、エヴァとアローニーロが戦いだすとすぐに逃げました。だから、巻き添えでだれか死んだとかはありません。

アローニーロは補肉剤で腕をすぐに直すので、腕の怪我など問題ありません。

それとアンケートまだまだ受付中です。

感想ついでに、どうぞお願いします。

戦争 第三者（前書き）

第1話

今回…特に酷いな。

駄文臭、とかあったらブンブンするな……

サブタイあまりというか、どこが？と思われそうだし…

駆け足魔術師様、睡眠様アンケート協力ありがとうございます。

戦争 第三者

Side アーロニーク

魔力と体力を使い果たして静かに眠っているエヴァを背負い、転移符を使い近くの拠点に移動する。

そこで用意させたベットにエヴァを寝かせ、先ほどの戦闘を振り返る。

もし、エヴァが最後に使った魔法と鬼道を合わせたあの技を常に全力で使える時間が長くなったら刃解レクシオンか帰刃レクシオンを使わなければ対処ができなくなる。

黒棺の特性を持った瞬間みたいなもの、もともとの黒棺であれば反鬼相殺んきさうさいで打ち消すこともできたかもしれないが、魔法を入れたことで変質し鬼道ではなくなっていた。

真正面からぶつかり合った結果。右腕が使い物にならないほどのダメージを受けた。

あれは痛かった……

いままであれほどの怪我をしたことはなかったから、新しい経験だった。

それにしても努力したのだろう。

あれほどの技だ。幾度も失敗し試行錯誤を繰り返して完成させたのだろう。

失敗した際には反動が半端なさそうな気がするし、瞬間を参考にしたのなら爆弾を背中と肩にくくり付けるようなものだ。

それに基礎はあくまでも魔法である、そこに鬼道を混ぜたのだから、思いっきりがいいというか。無謀というか……

「ンッ」

寝返りをうつエヴァの髪を撫でながら、時間をつぶす。

他の者から見たら娘を愛しむ父親そのものであった。

Side out

Side 紅き翼

どういふ訳か知らないが助かった。

あの乱入がなければ全員ここには居なかっただろう。

助かった喜びより絶望感のほうが勝り、まるで親近者の葬式のような空気が流れていた。

「なんだったんだ、あいつは……」

それは全員が思ったことだった。

「まさか、ナギヤジャック以上のバグでチートな奴がおるとはのお」

紅き翼が当てることができたのは詠春の雷鳴剣一発だけであった。当てた一発もほとんど効果なしときたのだから力の差がそこまであったのだ。

「完敗、だったよな……」

全員がそれにつなずく

「師匠……」

「なんじゃ…？馬鹿弟子」

「オレ、アンチヨコ使うのやめるわ…」

決意の表れである、そんなものに頼って一生涯かかっても勝てない。と感じたからである。

「それと詠春…」

「なんだ…」

「あいつの名前教えてくれ」

「アローニーロ・アルエリだ」

越えるべき敵の名前をその胸に深く刻む。

この日、紅き翼は苦い敗北を経験した。それぞれがその経験を糧にし成長を促した。

Side out

Side アローニーロ

紅き翼を逃したことを怒られた。

怒られたと言っても、俺に強く言えるやつは皆無なので、できれば次は仕留めてほしいと言われたぐらいだが…

だがこれでも責任というものを感じている。いくら俺にとっては倒せる強さでも一兵士にとっては死神のごとき存在だ。

まあ、即死しなければ俺のおかげで標準装備とされた転移符で逃げられ、補肉剤で治療を受けられまた戦場に立てるようになるのだが。

死亡率が戦争だというのに低いのは、転移符と補肉剤のおかげである、しかし補肉剤はすこぶる評判が悪い。

なんせ不気味なぐらい早く、欠落した体の部位が「生えてくる」のだ、気持ちはわからなくもない。

俺には超速再生がないから酷い怪我の際にはお世話になる（というかさつき初めてお世話になった）

なにかわからないが気持ち悪い。直ぐ治ったのだが、変な感じが治る際にするのだ。

「できれば、そろそろ話を聞いてほしいのだけど……」

無表情な白髪が困ったようにいうが、その言葉には感情が感じられ無い。

「で？なんの話だ」

「できればこれ以上戦争に介入しないでほしい」

素早く切り返す

「それはできない相談だ」

「なぜできないんだい？」

「帝国を勝たせると決めているからだ」

「それだと困るんだよ」

おまえが困ろうが知ったことか

「だが……………」

「だが？」

白髪が俺の言葉を促す

「納得できる理由を提示するなら、考えなくもない」

その言葉に、思索しているのだろうか？少し俯いて……………」

「世界を救うために必要なんだよ」

はっきり言って信じられんことを言い出す

「信じてないみたいだけど、まずこの世界は「魔法で出来ている…」
だろ」……………気づいているとは。驚きだよ

無表情で「驚きだよ」と言っても全然、説得力がない

「なら、魔法で出来ているこの世界の魔力が枯渇しかかっている」
とは？」

「減っていることは、感じていたが……………。そこまで深刻なのか？」

年単位でなければ気付かないほどだが、確実に減ってきている

「ああ、このままでは三十年くらいで崩壊する」

そこまで崩壊は間近なのか……

「なら、余所から魔力を持つてくるのは？」

「それだと時間稼ぎにしかならない。根本的解決には至らない」

「なら、どうする？」

「この世界を『完全なる世界』にする」

馬鹿馬鹿しい、不完全であるというのが普通だというのに完全に
するだと？

「不可能だな」

「なぜそう思うだい？」

「不完全な存在に、完全な物が作れるはずがない」

「それは屁理屈みたいなものじゃないか……」

「だが事実だ。これまで完全な物を作れたやつはいない」

白髪は口ごもり、黙ってしまう。

「協力はしない。ってことかい？」

「できないことに腐心するほど、暇ではないのでな」

「しかたない……君さえ協力してくれば。簡単に紅き翼とかをど
うにかできたんだけど」

白髪は身構え……

たと思ったら普通に出ていった。

なんだっただ？戦闘パートじゃなかったのか？

幻聴か「僕じゃ勝てそうに無さそうだしね」と聞こえた気がした。

戦争 第三者（後書き）

一応でてきた「完全なる世界」

主人公は組織名すら、まだ知らないが：

次は「夜の迷宮」でしたっけ？あたりに行きます。

戦争 動くは影（前書き）

第12話

前よりはましかな？

どうぞ

戦争 動くは影

Side アーロニーロ

どうしたものか……

戦いを止めようとしても白熱しているこの戦いは本人達が止める気にならなければ、いつまでも続くのだろう。

第三者が言い聞かせれば止まるかもしれないが。損害がない今の段階では俺が止めようとしても無駄だろう。

不毛な争い。一歩下がればそれが解るといつのに。下がるどころか一歩前に出ている状況では周りが見えてない。

「何時マデアノママニ、シトクンダ？旦那」

「どちらかが、折れてくれればそこまでなんだが……」

「折レネエナ」

「だろうな……」

俺とチャチャゼロに呆れられた目で見られてるのにそれに気付かず
に言い争っている二人。

「あなたのような子供に、アーロニーロ様の相手は務まりません！」

「ハッ！！たまたま助けられて、そのまま一目惚れした貴様よりは
相手になるわ！！」

「なっ！？、あなたはアーロニーロ様の子供でしょう！！親の恋愛

に口出しは禁物です！！！」

「子供にも新しい親の決定権ぐらいあるわ！！！！」

「ですが、恋愛は別でしょう！アーローニーロ様が、誰と付き合おうとそれはアーローニーロ様の勝手でしょう！！！！」

「恋愛、恋愛言ってるが！貴様はそもそも相手にされてないだろうが！！！！」

「子供が親に恋をしても絶対に！！！！成就しないでしようが！！！！」

「別に私は、父様のパートナーになりたいわけではないわ！！ただの親子で満足している！！！！」

まだまだ続きそうなので、チャチャゼロを頭に寄せ夜の拠点内を散策しに行く。

迷惑にならないように防音結界を敷いていくか……

「なあ、チャチャゼロ」

「何ダ？旦那」

今は二人（？）きりだ、聞いておける時に聞いておかないとな……

「俺に放りだされてからのエヴァはどうだった？」

「アゝ、始めハ泣イタナ」

「そうか」

適当な相槌を打つ。

「ンデ、泣クノヲ止メタト思エバスグニ、旦那ヲ探シ始メタナ」

「旧世界でか？」

「ソナ事スラ氣付ケズニナ」

「氣付きたくなかったのかもな……」

「ソンデモツテ、10年位シタラ、打倒 父様ヲ掲ゲダシタ」

「嫌われたか？」

「ムシ口逆ダナ、アンダケ旦那ニ依存シテタンダ。本氣デ殺ソウナ
ンテ、考エモシテモナカツタヨウニ見エタゼ？」

「そいつはよかった。これから殺す気で修行されたら。ホントに殺
されかねんからな……」

「ホントカ？旦那ナラ隠シ玉ヲマダ持ッテルト。踏ンデンダガナア
？」

実際には隠し玉はある。鏡花水月と詫助と帰刃。この三つはまだ、誰にも能力を見しても教えてもない。

弉解（神殺鎗）を出しといて始解（鏡花水月と詫助）をいまだに温存している……本当は使う機会がなかっただけなのだが。

「失礼します！アローロニーロ様！本国からすぐに戻られよ。との伝言をお持ちしました」

「ごくろう。すぐに戻るとする」

ここで緊急招集か。なにかあったのだらう。すぐに戻らねば……急ぎ足で自分の天幕に戻るが。いまだに言い争いを続けていた二人にお仕置きをしてから戻ることになった。

「で？なぜ緊急招集をかけたのですかな？国王殿」

会議室に入ると同時に座っている国王に問いかける

「重要な案件があるからだ。それと君には頼みたい仕事がある」

仕事ねえ。あまりよろしくない仕事でなければ良いが……

「まず！もう知っている者も居るだろうが、転移符と補肉剤を生産している工場が何者かに襲撃され、壊滅的な被害を受けた。これにより前線への供給が滞ることになってしまった」

会議場全体で騒ぎ出す。なにせこれまで順調に進んでこれたのは、転移符と補肉剤のおかげで死亡率を格段に下げたことが大きい。その2品の供給が滞るなら軍全体の士気に関わり、戦線に与える影響は計り知れない。

「そこで、アールローニーク殿には、追加の大虚をたのみたいのだが……」

「それなら、しかたがあるまい。どれほど追加でほしいんだ？」

「それは追って連絡する。それまでにできるだけ用意しといてくれ」
まだ騒いでいる奴らがいるが、大虚がさらに戦線に投入されるならまずは安心だと安堵の息を出しているものが大半だ。だが、大虚の追加投入を快く思わない連中もいる。

「しかし王よ！あんな物に頼りつきりでは対策を取られでもしたら、すぐに我が軍は総崩れになってしまいますぞ！」

「それをさせないのが、貴官の仕事だろう？軍人殿」

「そっ！？それはそうだが！あんな愚鈍なデカ人形の対策を何時とられるかわかったものではないのだぞ！」

「それはなにか？俺が作った大虚は使えないと言っているのか？」

「そういうわけではないが……………」

「二人とも、そういう話は会議が終わった後にしてくれ」

そう言われれば仕方がない此処は止めるか…………尤も、終わった後で話すつもりはないがな。

「会議はこれにて終わりだ」

国王が解散と言うとぞろぞろと会議室を出ていき俺と国王だけが会議室に残る。

「仕事とは、大虚の事とは別にあるのですかな？国王殿」

大虚が追加でほしただけならわざわざ会議に呼び出す必要がない。

「ああ…………私にとってはこちらが本命だ。君も会ったことのある人物の搜索を頼みたい」

なぜ、俺に？重要な人物なら国を上げて探せばいいだろうに…………

「君に探してほしい人物は、テオドラ第三皇女 私の娘だ。」

実は、先日から行方不明でな…………なんでも戦争の調停役になってくれそうな人物に会いに出かけたきり、戻ってこないのだ…………

早急に探し出してほしい。その分の報酬は、もちろん用意する」

テオドラ第三皇女をか。てかあのじゃじゃ馬娘なにやってんだ…………

断る理由も意味もないので、最後に行ったと思われる「夜の迷宮」
に来たのだが……

「戦闘痕が到る所にあるな。父様」

「そうだな。エヴァ」

夜の迷宮には、真新しい争った形跡があり、ここで戦いがあったと
思わせる。

奥にあった部屋には、紅き翼と書かれた布切れが隠されるように残
っていた。

残留霊子（いや魔力か？）を確認したところ、テオドラが此処にい
たのは間違いない。

それと知らない奴の確認できた。

これらの情報から考えるに、テオドラと一緒に捕まっていた誰かを、

紅き翼が助けに来た。その際について、テオドラもいたので置いて行く訳にもいかずに連れていった。

……紅き翼め、余計な事をしてくれる。

幸いにも、なんとかテオドラを追いかけるには十分な残留霊子があるから、これを辿ればテオドラの元に行けるはずだ。

たとえ途中で切れても、探査神経の範囲内に捉えることさえできればいい。

地下室に監禁されていようとも見つけること自体は簡単にできる。

「で、あのボロ小屋からテオドラの魔力を感じるのか？」

「ああ、よほどのそっくりさんでなければな……」

「魔力のそっくりさんなんて居るのか？」

「探せば質の近い奴なら居るはずだ」

「……」

エヴァが心底どうでもいいと目で言ってる気がする。

辿って行った先に在ったのはボロ小屋。その中からテオドラの霊力を感じ、さらに別の霊力も感じる。

「しかしホントに、アレが紅き翼の隠れ家か？ただのボロ小屋にか見えないが……」

「隠れ家としては十分だ。追われる身で城を構える奴などいないだろ?。」

「……。そうだな……」

「?中に居る奴は、大した事の無い奴しかいない。これは好機だ。すぐにテオドラを助ける」

「そうだな……」

?なぜ反応が鈍いだ?

「奇襲だけで事足りる。エヴァ俺は直接テオドラを助ける。おまえは好きにしろ」

「わかった」

さて、囚われの第三皇女様を助けるとしますか

S i d e o u t

戦争 動くは影（後書き）

あのシーンは無しです。

うまく割り込めない気がしましたし……

感想、誤字脱字指摘、アンケートまっけてます!!

戦争 災難に合う翼の羽（前書き）

第13話

アンケート協力 開け！ごまドレ様

感想 伏犠様、イースト様、リヨウタ様

誤字脱字指摘 駆け足魔術師様

以上の皆様ありがとうございます。

特に、駆け足魔術師様は多くの指摘ありがとうございます！！

戦争 災難に合う翼の羽

Side タカミチ

まずい！まずい！まずい！まずい！

よりもよって、今居るのが僕とクルトとアリカ姫とテオドラ皇女だけの時に敵襲！

もしかして「完全なる世界」の手先！？

師匠に連絡したから、もうすぐ帰ってくるはずだけど……たぶん間に合わない。

まずは逃げないと……

「何ダ…タダノ餓鬼力……」

え？人形？これが敵？

「取り合エズ寝テナ」

僕が最後に見たのは、人形が持っていた鈍く光る刃物だった。

Side out

Side エヴァンジェリン

ホントに普通のボロ小屋だな……

別に隠し部屋がある訳でも、見た目以上に広いわけでもない。普通のボロ小屋。

中に居るのは4人。1人はテオドラ、他は敵。とりあえず1人のにチャチャゼ口を向かわせ、自分は直ぐ近くに一緒に居るといふ2人

を無力化するべく動いていたが……

「子供と女か……」

怯えているが後ろの女を守ろうとしている子供に、こちらを気丈にも睨みつけている気の強そうな二股眉女。

殺す意味も必要も無い。今はただ釘付けにしてさえしてればいい。

「おぬし、闇の福音か？」

「そうだが？なにか問題か？」

「なにをしに来た？」

「大した事ではない。ただお姫様を助けに来ただけだ。おまえらが夜の迷宮から一緒に連れてきたな」

ホントに大した事じゃない。父様が出るほどの事ですら無い。

「マツ、シケタ所ダガ死体ヲ埋メトクニハ、十分ナ所ダヨナ？ココ」

「なんだ、チャチャゼロ。無力化は済んだのか？」

「餓鬼ダツタゼ。話ニモナラネエナ」

「運が良かった。否、3人しか居ないから今仕掛けたのだから」

父様が子供を担いでいる。アレがテオドラか……

「後は帰るだけなのか？」

「否、1人近づいて来ているのが居る。おそらく紅き翼のメンバーだろう。俺の知らない奴だな……」

「無視して行けるだろう？」

「できるが……なるべくテオドラに負担を掛けたくは無い。それに知らない奴だから挨拶の1つくらいして行くのが礼儀というものだ」

挨拶か……父様の決めた事だ。この件は私がとやかく言う事ではないな。

「では、挨拶しに行くか……」

どこのどいつか知らんが不幸な奴だ。帰ってくるタイミングが遅ければ父様に会わずに済んだというのに。

Side out

Side ガトウ

クソッ！

弟子のタカミチから敵襲の連絡を受けて、急いで隠れ家に向かっているが。恐らく間に合わない……

今、隠れ家に居るのは戦闘能力の低い者（紅き翼基準で）しかないない。

最悪、皆殺しにされているだろう。そうなれば、「完全なる世界」にとってはうれしい事になるだろう。

戦争終結を望むヘラス帝国第三皇女 テオドラ。同じく戦争終結を望むウエスペルタイア王国の姫 アリカ・アナルキア・エンテオ

フュシア。

両者が居れば連合、帝国双方に味方を作り「完全なる世界」の野望と戦争を止める事は可能だ。

逆に言えば。今現在の紅き翼の状況ではどちらか片方が欠ければ

テオドラなら帝国。アリカなら連合との 繋がりが消え、唯でさえ難しい事が不可能にかなり近づく。

元捜査官として繋がりがどれほど重要かはわかっている。

だからこそ、安全なはずの隠れ家に 準備のために皆が忙しく動いているというのに 居てもらったのが逆に仇となった。

これなら、ナギカラカンに留守番を無理やりにもさせるべきであった。

「初めましてだな？紅き翼の誰かは知らんが」

縦長の仮面に8つの穴。白いフリフリの付いた服。

最悪だ……

「完全なる世界」の刺客以上に、警戒しなければならぬ程の化物。ナギなどから話は聞いている。どれほど理不尽と思える強さかは、紅き翼のメンバー5人を相手取り無傷で勝った存在。乱入が無ければ全員が死んでいたであろうという事も。

「血染めの白殿か……なぜこのような所に？」

「テオドラを助けにな」

それだけなら問題は無い。しかし、こいつが紅き翼をついでに壊滅させようと考えないとは言いきれない。

「さて、では名乗ろうか。アローニーロ・アルルエリ 今は『仮面

の英雄』と帝国では呼ばれている」

「私はガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグ。紅き翼で元捜査官だ……」

「お相手願おうか？」

「ご遠慮願いたいな……」

今戦つても勝てるわけがない。それに、「完全なる世界」の野望を知れば協力してくれるかもしれない。そんな淡い期待をあざ笑うこの如く攻撃を仕掛けてくる。

「戦う意味が何処にある！」

叫ぶ。そうでもしなければ殺されかねない

「敵が居る。それだけで十分だろう！」

聞く耳持たずか……

なら……咸卦法を使い居合い拳を放つ

「無駄だ……」

放たれた居合い拳をすべて余裕で斬り消した。化物め……

「さして強くは無いか……エヴァ帰るぞ！」

「なんだ？殺しも、怪我也させないのか」

「こいつ1人は問題無い。それに此処で殺しても意味がないからな。あくまで目的はテオドラの保護だったからな」

血染めの白と闇の福音は何事もなかったように歩いて行く
助かったのか？

幸いにも隠れ家にもタカミチ達にも被害はなかった。しかし、テオドラとの直接の連絡方法が無いまま別れたのは致命的であった。

Side out

Side テオドラ

「なにをする！離せ！アローニーロ・アルルエリ！」

いきなり現れたと思ったら。今度は紅き翼のガトウに圧倒的な力の差を見せつけて帰るだと！紅き翼をおちよくっているのか！？

「なにとは、心外だな。こうしてテオドラを運んでいるでだろうが」

「担いでか！？運ぶにしても他に方法があるじゃろう！」

そう妾は、重い物を運ぶように担がれておる！なぜじゃ！？妾が何をした！

「あきらめろ。父様は決めたら最後までやる質タチだぞ」

金髪の子供（妾もそうじゃが）がおもしろそうに此方を見ている

「おぬしは誰じゃ？」

「なんだ？わからないのか？私はエヴァンジェリン・A・K・M・アルルエリ。アールロー・アルルエリの一人娘だ」

「なんじゃと！闇の福音ではないか！こんな子供が！？」

「姿で実力は測れんぞ？テオドラ第三皇女」

「たったしかにそうじゃ。ラカンなど馬鹿であつたではないか……
そいえば……」

「いったい何処に向かつておるのじゃ？」

「国王殿の寝室だが？」

「なぜじゃ！なぜ！父上の寝室に妾を連れて行く！」

「いったいぜんたい何を、あの仮面の下の頭で考えておるのじゃ！」

「なに、怒られるだけだ。おまえがな」

しかしアールロー口考え通りにはいかずにテオドラが国王と会つて
されたのは暖かい抱擁であつた。
その後で怒られたが……

Side out

Side 紅き翼

今日起こった、アルルエリ親子襲撃事件（ラカン命名）での話し合いをしていた。

「なぜ此処が、わかったのでしょうか？」

謎。紅き翼の誰もが思った疑問である。

「もしかして……あの第三皇女に探知魔法の類が付いてたのでは？」

「いや。一応、夜の迷宮から出た際に隅から隅まで調べたが、そんな魔法も魔法具も持っておらんかった」

「ではなぜ？」

疑問しかない。少なくとも自分達が知る方法では、此処に辿り着くことは出来ないはずなのに、あの親子は此処に辿り着いてみせたのだ。

「しかし、実質的な被害が無かったのは不幸中の幸いだ」

ガトウがありのままの事実を噛み締めるように言う

「師匠……僕、人形に負けました……」

「わたしは、何もできませんでした……」

「ふ、二人とも落ち込むでない。今回は相手が悪すぎたのだ」

アリカが落ち込む年少二人を、その落ち込みぷりに若干引きながらもフォローする

「んでもよお、あのじゃじゃ馬姫はヘラスに帰っただけなんだからなんも問題無いんじゃないのか？」

「いや、問題ある。できれば『完全なる世界』の対策をもつと話しておいて連携を取りたかつたんだが……」

「今や相手は王宮の中でしょうかねえ。彼女なりに動くとは思いますが」

「一応連絡を取れるようにするつもりだが……何時になるかはわからんからな」

「それと、できれば戦場に出るのは避けたほうがいいですね。追われている身ということもありますけど『血染めの白』と『闇の福音』に出会ったら、今度は殺されてしまいでしょうし。今は味方作りに専念した方がいいでしょう」

アルの言葉につなずくと紅き翼はそれぞれの役割を果たすべく動くのであった。

side out

戦争 災難に合う翼の羽（後書き）

元気だせ！タカミチ！クルト！

なんて思っている人はどの位いるのだろうか……

どうでもいいか。

次、最終決戦までとばすかな……

戦争 決戦（前書き）

第14話

薄い、薄っぺら最後が特に…

感想 妖様 開け！ごまドレ様

ありがとうございます…！！

戦争 決戦

Side アーロニーロ

呼び出しを受けた。国王じゃなくてテオドラにな。

「いったい何のようだろうな？父様だけでなく私も呼び出すとは」

「ふむ……戦力がほしいのだろう。……クーデター？」

「そんなものか？」

「そんなもんだろ？」

「そんなわけ無からう！」

目の前に居るテオドラがその考えを否定する。本気で考えたわけではないがな。

「で？いつ決行するんだ？お望みとあらば今すぐにも可能だが？」

「今はまだ決行する時期では……、って違うのじゃ！クーデターなんか妾はしないのじゃ！」

ナイスなノリツツコミだ。GJテオドラ。

「で？実際はなんの話だ？それでも忙しい身でな、手短かに頼む」

「うむ。実は『完全なる世界』の野望を潰すために協力してほしい

のじゃ」

「『完全なる世界』？」

何時^{いつ}ぞやの白髪^{いづ}の組織か？

「この戦争を引き起こし、魔法世界を滅ぼそうとしている秘密結社。それが『完全なる世界』」

「報酬次第、と言わせて貰おう」

「なぜじゃ！？もし奴らが目的を達成したら、この魔法世界が滅びるのじゃぞー！」

「はつきりと言わせて貰おう。こんな作り物^{せかい}どうなるうと知った事で無いと」

「世界が滅べば、世界に住む者全てが死ぬことになるのじゃぞ！おぬしとて例外ではないはずじゃ！」

「その時には、エヴァと一緒に逃げさせてもらうだけだ。俺はいつでもどこでもすきな時に、お前等が旧世界と呼んでいる世界に逃げ込める」

ホントに出来る。^{ガルガンタ}黒腔^{ガク}で繋げて移動ができるだ。おかげでゲートを使わずに行き来ができる。

「！……なにが欲しいんじゃ……」

「なに、些細なモノだ。貸しにしといてくれればいい」

今は欲しい物は無い。貸しにしとけば世界が滅びたり、テオドラが死ななければ何らかの形で回収ができるかもしれない。

「わかったのじゃ……これで協力してくれるのであるう」

テオドラに協力するにあたり、いくらかすることが増えた。まっ、そんなことは些細な事だったかな。

『完全なる世界』の拠点を塵1つ残さずに消し去ったり
紅き翼と連絡を取り合ったり

帝国の膿（完全なる世界）出しをしたり

そんなこんなで最終決戦になったりした。

S i d e o u t

S i d e 紅き翼

「不気味なくらい静かだな、奴ら」

「舐めてんだろ。悪の組織なんてそんなもんだ」

『墓守りの宮殿』最終決戦の地となった場所でナギとラカンが受け答えをする。

そこに頭に角が生えた女性が報告に来る。

「ナギ殿！ 帝国・連合、アリアドネ 混成部隊、準備完了しました。何時でも行けます！」

「おう」

ナギが返事をし。さらに言葉を紡ぐ

「あんたらが外の自動人形や召喚魔を抑えてくれりゃ、俺達が本丸に突入できる。頼んだぜ」

「ハッ！ それで、あの、ナギ殿。ササ、サインをお願いしても、よろしいでしょうか？」

「んお？ おう、いいぜ、そんなくらい」

「ありがとうございます！ 尊敬していました！」

こんな時にサインをねだるとは……崩壊か存続かの瀬戸際にいる事を、わかっているのかがはなはだ疑問である

「連合の正規軍の説得は間に合わん。帝国の皇女とタカミチ君も同じだろう。決戦を遅らせることはできないのか？」

ガトウからの連絡を受けるが、もう時間がない。

此処にいるメンバーだけで、決行するしかないのであるということを知っている

「ガトウ、それは最早不可能です」

「既に、タイムリミットだ」

「ああ、だからわざわざ正規軍などを待っているなどという愚策を講じるわけがない」

「尤も、私と父様が居て。アレがあれば正規軍以上の戦果を挙げられるだろうがな」

居ないはずの2人の声を聞き、一斉に聞こえた方を見る

「なんで此処に居るんだよ!？」

「正規軍と一緒にでは無かったですか？」

「なんにしても心強いのお」

「なんだあ？貴様の反応は？居ないほうがうれしいのか、赤毛のガキが!！」

「痛^いつてえ!？殴るこたねえだろ!！」

「皆さん、はじめませんか？コントをしていたせいで世界崩壊とは笑えませんよ？」

アルの言葉に頷き。決戦の火蓋が切って落とされた。

「そういえば……貴方達は動くんですか？一緒に突撃するんですか？」

「外の掃除をするつもりだ。でなければアレが使えん」

「アレ……?」

Side out

Side アーロ二一〇

まずは紅き翼のための道を作ってやるとするか

「出てこい！！大虚ども」
メノス・グランデ

その呼び声に呼応し、大虚の軍勢が空間を裂いて姿を現す。

「道を作ってやれ」

その命令に従い、大虚達は虚閃セロを放つ

赤黒い閃光が次々に敵陣を襲い、虚閃の範囲内の敵を次々に消し去って逝く。

そうしてできた一筋の道を、紅き翼の面々が駆け抜けて行く。

「さて、勝利の女神はどちらに微笑むか……」

俺の見立てでは、紅き翼が止められるかどうかだ。

五分五分の勝率と敗率。どっちに転んでもおかしくは無い。

ここまでどちらに傾くかわからないのは、そうそうないであろう。

「さて人間。おまえらはどちらを手練り寄せる？」

やばくなるまでは、つきやってみようと考え。悪魔どもに突っ込む。

Side out

Side 第三者

戦場はアローニーロとエヴァンジェリンと大虚達の御蔭で、混成部隊側が優勢である。

アローニーロは右手に鏡花水月、左手に神鎗を持ち、鏡花水月の解放を繰り返す。

一度その解放を見てしまえば、もう二度と鏡花水月による完全催眠から逃れられずに現実を誤認し続ける。

悪魔の誰一人としてアローニーロの位置を正しく認識できないまま首を落としていく。

基本、動かずの姿勢を崩さずに、ギロチン台の如く首を切り落とされていた。

この光景を見た者は「首刎ね公」と呼ばれた由縁を再確認させられた。

エヴァンジェリンはチャチャゼロと共に アローニーロとは

逆に 動きまわりながら、得意の魔法で悪魔どもを氷漬けにしたり、氷の矢で射抜いている。

チャチャゼロは自分の主に近づく不遜な悪魔を、開戦前に与えられた対悪魔用の新しい刃物で切り殺している。

大虚達は、単純に敵がかたまっている所に虚閃を撃つを繰り返しているだけであった。

しかたないよね獣程度の知能しかないんだから……

しかし、その戦場に陰りが見え始めた。

敵の数が減らないのだ……戦いの基本は数による蹂躪である。

どれほど優れた戦士でも圧倒的な数の前では、ただ飲み込まれるだけである。

Side out

Side エヴァンジェリン

おかしい……

先ほどからかなりの数の悪魔を倒しているのに一向に数が減らない。むしろ増えているように感じる。

「エヴァ。気付いているか？」

「悪魔の数が減らないことか？」

「そうだ」

「どう見る？」

「恐らく、門が開いたままで放置されているのだろう」

「面倒なことをしてくれたもんだな……完全なる世界の奴らも」

本当に面倒だ。父様の予想どおり魔界と此処を繋ぐもんが開いたままなら、閉じない限り悪魔が好きのように此方に来れるということだ。

「父様は門を閉じれるのか？私は閉じれないが……」

「問題無い。見つけ次第、二度と開けられないくらいにきつく閉じてやるぞ」

仮面の下で笑っているのだろう。すこし軽薄とも取れる声音だ、この状況を楽しんでいると思える。

「では、門は父様に頼むとしよう。私は父様が抜ける穴を少しでも埋めるべく、がんばるとする」

「たのんだぞ。頼れるのはお前しか、居ないからな……」

「お前しか、居ない」か……嬉しい事を言ってくれるな。では、その期待に応えるべく影から真新しい人形、否、異形を取り出す。

父様がくれた最悪の異形、アヨン。姿は大型の人型であるが、鹿のような角や蛇となっている尻尾がある。

知能はチャチャゼロと違いまったく言っていないほどなく、ただ強烈な殺戮本能が存在するだけである。

まさに化物と呼ぶに相応しい力と見た目を持っている。

「悪魔だけを殺せ」

命令をしたものの、その通り動くとは限らない。しかし

「おおおおおオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！」

それを補ってありあまる単純な戦闘能力を持っている。操ることは不可能でも、その動きを誘導するくらいできる。

「さあ、好きなだけ暴れるといい。おまえが味方を襲わない限り、誰も邪魔立てしないからな」

さて、アヨンの取りこぼしを潰すか……

Side out

Side アーローニーロ

エヴァがアヨンを出したか……

半分冗談で作ったんだよなアレ……

戦闘能力はかなりある、肉弾戦ならエヴァでも負けるかもしれない強さだ。

「デ？急ガナクテ良イノカ？」

さっきエヴァと話をした際に、ついてきたチャチャゼロが問いかける。

「大体の見当はつけている。問題無い」

「旦那、モシカシテ初メカラ門ガ開イタママツテ、ワカツテタンジヤネエノカ？」

「さて？どうだろうな？」

可能性としては、初めから気付いていた。自分なら戦力が欲しいのなら　ただ暴れるだけでいいのなら　そうする。

門を開けたままにして、本拠地には悪魔の侵入を阻む結界さえ張っておけば、近づく敵を悪魔が勝手に殺してくれる。

戦力としては、下級悪魔でも数さえ揃えればかなりのものになる。後は、門に護衛として強力な悪魔を配備すればいい。それだけで溢

れ出る悪魔と護衛の悪魔で門は守られるだろうから。

「できれば、下がってくださらないでしようか？」

護衛の悪魔か。

「伯爵級か？なんにしても門を守っているなら、どいて貰おうか……」

「話し合いをなさるつもりはないと？」

「礼儀正しい悪魔だが、そんなことは無意味だ」

「戦場で話し合う事など無いだろう？」

「それもそうですが……殺すだけではなにも生み出しませんよ？先ほどからずっとあなたを見てましたが、あなたはなぜ普通に私達魔族を殺せるのですか？」

おそらくは斬魄刀で斬っているからだろ。斬るのは魂魄だからな

「そんなことはどうでもいいだろう？……どかないのなら」

「殺シテ通ルダケダ！！」

チャチャゼロが悪魔に斬りかかる。悪魔は簡単に受け止める。

「この刃物……悪魔対策は万全ですか……」

「ダッタラドウシタ！」

こいつはチャチャゼロに任せるか……

空間が口を開けている。

そう評するに相応しい光景だ……
その口が門なのだが……

「随分と溢れているな……」

湯水の如く悪魔が溢れ出てきているのだ……

これでは普通に閉じることができない。
閉じようとすれば出て来ている悪魔に邪魔されるだろうし……
これならチャチャゼロを置いて来ないで、あの悪魔と一緒に潰して
から来るべきだったな……
あまり時間を掛けるのはよろしくない……しかたない。

「グラン・レイ・ゼロ王虚の閃光！！」

空間を歪めかねない、最強の虚閃。

それで無理やり門を破壊する。

まるでそれに呼応するように、紅き翼が突入した墓守の迷宮に宮殿
そのものを割りかねないヒビが入っていく。

「失敗したのか？……」

Side out

S i d e 第三者

宮殿を中心にした反魔力力場の展開が始まったが。まだ誰も諦めてはいなかった。

帝国、連合をとわずに戦場についた正規軍の戦艦が協力し、力場の展開を抑え込み、その間にアリカが指揮をとり反転魔法封印術式を完成させにより力場を封印を施した。

S o d e o u t

戦争 決戦（後書き）

決戦終了

反省はしているが後悔はしていない、アヨンを出した事です……

たぶん、もう出ません

割とノリと勢いで書いているので、もしかしたらまた変なの出すか
もしれません…ワカメ大使とか……

終戦 墜落 救出（前書き）

第15話

感想 妖様

ありがとうございます！

それと今回でアンケートは締め切らせてもらいます。

これまでにアンケートに答えてくれた

ユウト様、 んんん（・ ・）様、 イースト様、 摩耶大橋様、 闇
の賜物様、 まつきー様、 睡眠様、 駆け足魔術師様、 開け！ごま
ドレ様、 ありがとうございます！！

全員の要望を取り入れませんが、いづらか参考にさせていただきま
す。

終戦 墜落 救出

Sode アーロニーロ

「終わったな……」

決戦が終わり、すぐにパレードをする。

嬉しいのは解かるが……いくらなんでも早すぎないか？

まさか決戦が始まる前から準備してたとかじゃないだろうな……

「ここに居たのか。父様」

エヴァが家の屋根に座って居る俺の隣に来る

「パレードには参加しないのか？」

「アレは『救世の英雄』のパレードだ。俺は精々『帝国の英雄』止まりだな」

「だとしても、決戦の場に居た奴らしたら、紅き翼も私達も大して変わらないと考えると思うが……」

事実、決戦であれほど被害が少なかったのは、私達の御蔭と考えている奴しかいない。

紅き翼の連中は儀式を止めるために、墓守の宮殿に早々と入ったからな」

決戦の被害自体は大虚が結構殺^やられたが、人的被害はかなり少なかった

「それに結果的に止めたのは、アリカが指揮して使われた魔法だ。紅き翼は時間稼ぎしか、してないとも取れる」

「なんにしても、あのパレードに参加するつもりは無い。英雄と言っ見世物になるつもりは無い」

「終わったんだよな……」

唐突にエヴァが言う

「これからどうするつもりなんだ？帝国に留まるのか？」

「永住権があるから可能ではあるな」

「だが、私達親子は英雄だからな、ゆっくり出来そうには無いな」

「だろうな、客寄せにされたりされるかもな……」

「だったら、旧世界に行って二人きりっで、しばらく過ごすのが良いと思わないか？」

「いいかもな」

そう返事したところで、エヴァが抱きついてきた。

「その間、私は放り出されてた間に甘えられ無かった分だけ、父様に甘える」

「この甘えんぼめ！」

「それでいいさ、一緒に居られるなら」

現在進行系で、甘えてくるエヴァの頭を撫でながら、何処に行こうかを考える

「見つけましたよ！！アーク二号様！！！」

邪魔が入った……

エヴァは視線で人を殺せるのなら、殺しかねないくらいキツイ視線をユリア・ヘネパスに向けている

「なんだおまえは……なにしに現れた……
返事によっては生きては返さんぞ……」

さながら亡者の声のような、恨みや憎しみといった負の感情を凝縮したような声を出す
そんな怖い声を出すと恐怖で答えられなくなりかねんが……

「え……えつと……」

答えられなくなっているな……

涙目で此方に必死に助けを求めてくる。しかたない
エヴァの頭を撫でて、斜めになっているご機嫌を元に戻す。

「で？何の用だったんだ？」

エヴァがご機嫌になっている内に聞く。重要な話だと「聞けませんでした」では済まされないからな……

「その、アリカ様が探していましたので……」

アリカが？なぜ？

「では、私はこれで……」

再びエヴァに睨まれない内に、そそくさとユリアは逃げ去る。なんにしても、無視するわけにはいかないから会いに行く必要があるか……

エヴァが少々行くのを嫌がったが（絶対に面倒事になるからと言いつつ）アリカに会いに来た

「来たか。アールローとエヴァンジェリン」

「来てやったぞ。オスティアの女王」

エヴァがかなり、刺々しい言葉で返事をする。

「女王か……フツ。これから起きることが判れば、誰もそう呼ばなくなるかもな……」

自傷気味に笑いながら言葉を紡ぐ

「オスティアは広域魔力消失現象により墜落する」

「あの魔法の代償でか？」

「そうじゃ、でもこうしなければ世界は崩壊していた」

「賢明な判断だな、1を捨て9を手元に残す。捨てられた奴は文句を言うだろうがな、なぜ捨てたと」

「おぬしらには、救助の協力を頼みたい。魔法が無くても戦えるであろう？紅き翼の面々とは違い」

「まあ、一応は戦えるな」

「なら、k y」だが、タダ働きはしないぞ「……」

怖い顔で此方を睨んでくるが、そんな顔をしても無駄だ

「なに、王家の魔力に興味がある。だから研究に協力してくれるなら、こちらも協力する。フェアだろ？」

「わかった。しかし墜落した後で最低2年ほどは、オスティアの民を助けてもらうぞ？」

「いいだろう」

交渉成立だ

Side out

Side 第三者

多くの者にとって突然ソレは起きた。

浮遊都市であるオスティアでは起きないはずの地震を皮きりに、魔法世界の存続の代償とされたオスティアの崩落が始まったのであった。

オスティアは混乱を極めた、市民は知るよしもなかったオスティアが地に落ちるといふ事実。

魔法が使えない現実

これまで生きてきた街が崩れていく現実

死という人が最も避けたがるものが、目の前に迫っている現実だが1つだけだが希望はあった

国の王と英雄が皆を救うために動いているという希望。

「卍解 神殺鎗 舞踏 舞踏連刃」

「降ってくる岩を砕け！アヨン！！」

「誰1人救い漏らすな！命令だ！！」

結果としてオスティアの民のほとんどは墜落によって死ぬことは無かった

しかしそのほとんどは自分の国を無くした難民になり、周りの国々に流失する事となった。

S i d e o u t

S i d e アーロニーロ

早いものだな……もう2年になる。

アリカはオスティア墜落の後2カ月で逮捕された。

なんでも父王殺しと完全なる世界と関与していた罪で逮捕され、死刑にされる。

実際には嘘も良い所だが、罪に問われたアリカがまったく反論しなかったらしい。

どうやら世界のための生け贄になるつもりらしい。

「で？どうするだ？紅き翼の諸君」

「この状況で聞くかよ！」

まっ。愚問とわかっていたがな

「しかし、なぜあなたが協力してくれるのですか？」

「なに、約束はしっかり守る質たちでな」

王であっても国の民であることは変わらないだろう？

S i d e o u t

S i d e 第三者

ケルベラス渓谷。谷底には魔獣が我が物顔で暮らしており、空気

中に漂う魔素の影響により魔法が使えず、さらに気も使えないという、あらゆる武人や魔法使いにとっては、死の渓谷と言えるのがケルベラス渓谷である。

そこで今回行われるのが、オスティアの最後の女王の処刑である。処刑の方法はいたって簡単である。ただ谷底に突き落とすだけである。

だが、この処刑法がもっとも残酷と呼ばれるのは落とされた後にある。

生きたまま食われるのである、谷底に魔獣どもに。

運が良ければ最初に頭を食われてそこで死ぬが、運が悪ければ徐々に食われていくこととなる。

それにより複数の魔獣に食われることになるから、真祖の吸血鬼であっても復活は不可能であると言われている。

刑の執行まで後僅か……

Side out

Side アーローニーロ

あっ……アリカが谷底にむけて落ちて逝った

逝ったと言っても死んでないからな……

今頃ナギが、助けているはずである。

……大丈夫だよな？気も魔力も使えないからって、谷底で死んでいるってことはないよな……

紅き翼の襲撃を予想していたのだろう、処刑に付き添う護衛として

は少々多い数を、アリカを逮捕した元老院どもは用意していたが……

正直、俺が居る必要性を感じないな……

というか……ジャックが居ればそれだけでよかったのでは……あい
つのアーティーファクトは1対多でかなり使えるし、なにより敵の
戦力が少なすぎる。

「気を抜きすぎではないですか？アルルエリ」

「敵は弱いし、少ない。どうしてこれで気ばれというのだ？」

「あなたが素で強すぎるからですよ……私は結構きついんですよ？」

笑いながらなにを言うか……

「アルビレオ……おまえ、結構余裕あるだろ……」

「フフフ、どうでしょう？」

余裕にしか見えんが……

「おい、撤収すんぞ」

随分と軽いな……いいのかこれで？

S i d e o u t

終戦 墜落 救出（後書き）

……うん、軽いつか、薄い。
この程度ってことだな、実力……
文才がほしい……

ここで本編の補足

本編でエヴァが「私達親子は英雄」と言ってますが、紅き翼のおまけ的な扱いです、連合の国では。帝国だと逆になります。それと英雄になるにあたって、2人とも賞金首では無くなりました。

さらに二年の間オスティア難民などを助けたりしていたので、元老院により『立派な魔法使い』認定されています。エヴァは真祖の吸血鬼という理由で『立派な魔法使い』には認定されていません。

あとゼクトは原作通りに消えました

感想など待っています！

京都 紅き翼と俺等（前書き）

第16話

感想 妖様

ありがとうございます！

アヨンに対して反応が無いけれど出して良かったのか？
最悪、あの部分削るつかと考えていたんだけど……

京都 紅き翼と俺等

Side アーロニーロ

平和だ。

アリカ救出後に、今度はアスナ（黄昏の姫御子）救出もする事になったが、それには参加しなかった。というか必要なかった。

完全魔法無効化能力を持っているらしいが、それなら魔法使い殺しもいいこと思ったが、完全と言っていないながら効く魔法もある。実際に試したから本当だ。誰だよ、完全をつけた奴……
鬼道や能力を無効化できるかも試したが無効化は出来なかった、やはり根本的に違うようだな。

それは兎も角。

紅き翼は旧世界に行くと言っていたので、黒腔を使って一緒に旧世界に来た訳だが……。

その際にズルイとか言われた。どうやってゲートの検問を誤魔化そうか考えていたらしいが、俺によってそもそも使わない、という設問に対して失礼な回答をした気がするそうだ。

本来なら、ゲートを使わなければ行き来できないからな。そうして詠春の実家に、紅き翼＋俺等が遊びに来ている。

今は、ナギ、アリカ、ジャック、詠春を除いた全員で、お茶を飲んでいる。

「なんであなた達は人の家で、そんなにくつろいでいるんですか？」

ちなみにナギとアリカは2人で街を回っている

「ストレスで禿げるって、知っているか？今のまま怒っていると、20年もしない内にツルツルになると思うが？」

ジャック？知らん、山の中にでも居るんだろ？

「そう思うなら自重してください！あとなんで貴方達も、此処にいるんですか！？」

「堅い事を言うな詠春。父様の御蔭で予定より早く帰ってこれたのだから？」

そつだ、そつだ。エヴァもつと言ってやれ。

ちなみにエヴァは俺が、胡坐をかいて座っている上に座っている。さらに、その上にチャチャゼロが座っている。

「自重シテ無イノハ、ジャック位ダト思ウケドナ」

「チャチャゼロの言う通りだと思うが……物壊したり、酒を浴びるように飲んでるはジャックだろ？そついえば、酒はチャチャゼロもか……」

「チャチャゼロ、自重」

「だとさ、アスナに言われてるぞ」

「ダツタラ、ジャックヲ止メナ。アイツガ何時^{イツ}モ、勝負ヲ仕掛ケテクルノガ悪イ」

そう、ジャック・ラカンが人形であるチャチャゼロに、酒飲み勝負を毎晩仕掛けているのだ。

「あの馬鹿が言っただけなら苦労しませんよ!!」

だよな……

「それに貴方なら、力でねじ伏せられるでしょう!!」

詠春では良い勝負になってしまっからな……

「なに、別に殺してしまっても構わんのだろう?」

「止めてください!殺す必要性なんて無いでしょう!」

「ただ言ってみただけの台詞だ。ホントに殺そうとは思っていない」

「ほんとでしょうね……」

なぜそんなに疑り深い目で見る!嘘は言ったことは無いはずだか

……

「ジャックを如何にかすればいいんだろ?なら直ぐにでもできる」

「なにをするつもりですか……」

だからなんで、そんなに疑り深い目で見る。

「魔法世界に強制送還するだけだ」

黒腔を使えばいいだけの話だしな

「なぜそれを、今までしてくれ無かったんですか……………」

そんなに落ち込むな。そこまで追い詰められていたのか…………詠春よ…………

落ち込んで動かなくなった詠春は、嫁さんに「あらあら」とか言われながら連れていかれた。

「やはり此処に來ない方が良かったか？」

「そんな事ないでしょう？」

「そうですよ、師匠」

「あんなんで、京都神鳴流は大丈夫なのか？……………」

上から、ガトウ、アルビレオ、タカミチ、クルトだ。

初めは來ないつもりだった奴もいたが、すぐに行き來できると知って休暇気分で來ている。

「さて、殺^やつてくるか……………」

「おや？なにを殺^やるつもりで？」

「詠春が倒れる前にジャックをな……………」

「まで！まで！まで！どうしてやるが、殺^やるになっている！…」

「気のせいじゃないのか？俺は魔法世界に強制送還するだけだが？」

「本当だろうな……………」

ガトウ、おまえもか…………

なぜ疑り深い目で見る。

ジャックを強制送還してすぐに戻ってくる
ヘラス領に放り出したが問題ないよな？

「そうだ、ガトウに見て欲しいモノがあったな……………」

「なんだ？藪から棒に……………」

「エヴァ、アスナ、アレをやるぞ」

「「わかった」」

「いくぞ？」「咸卦法！」「」

「ブツ！……！！？」

「「……………（啞然）」」

良い反応だ…………ガトウ

お茶を噴き出すほど驚いたか…………

「おい！おまえやエヴァンジェリンが咸卦法を使えるのは、まだいいとして。なぜ！アスナまで使える！？」

まあ、究極技法と言われるだけあって、習得は至難の技。だがアスナは結構すぐに習得した。

「ガンバッタ」

「才能の塊と言っのだろう。すぐに憶えたぞ？」

「いや！いや！いや！そんな簡単なものではないはずだ！どの位時間を掛けた！」

「勉強部屋で1年位」

ちなみに勉強部屋はダイオラマ魔法球。エヴァが持っていたのを参考に作った。

内装はもちろんBLEACH風で。勉強部屋は、浦原商店とその地下を完全再現した物だ。

他にも、秘密基地（一護が卍解習得のために使った場所）。隠れ家

（仮面ヴァイザードの軍勢の拠点）。

メノスの森（アニメで出てきた場所）。アローニーク宮ラス・ノーチェス（虚夜宮内にあるアローニークの宮）。と無駄に作ってしまった。流石に隠れ家是要らなかつたかなと考えている。

「勉強部屋がなんなのか置いておく！しかし1年で習得したというのは信じられんわ！！！」

「ホント」

「現実を受け入れる。この世界は、不都合な事がこのごとく事実である世界だ」

「ただ理不尽なだけではないのか……………」

膝を着いて絶望するとは不甲斐ないな、ガトウよ。

タカミチがそんな自分の師匠を「大丈夫ですか！」とか言いながら何所かに連れて行く。

……………さっき似たような光景を見たな……………

「あの……………」

「なんだ、クルト」

少し迷う素振りを見せたが、意を決したように

「わたしを鍛えてください！」

なんて言いやがった

「なぜ？」

「アーロニーロさん以上に強い人を知りません！」

まあ、そうだろうな。俺以上に強い奴がゴロゴロ居たら怖いしな。いや、BLEACHだったらいるか？一護とか藍染とか山本元柳斎、辺りは俺より強いかもしれんな。

「だめだな」

「なぜですー！」

「はっきりに言っと、めんどくさい」

人間のお前を鍛えてもおもしろく無さそうだしな

「めんどくさい!？」

「そう、めんどくさい。それに、お前は詠春の弟子だろ?」

「そうですが……」

「だが、お前が此方側バケモノに成ってもいいと言つのなら、考えなくもない」

「父様、それはよしとけ……それとクルト、例えどんな理由であっても、望んでなるもんではない。

人間に拒絶され、追われ、追い詰められ、殺される。

父様が簡単に殺されるような、バケモノにおまえをするとは思えないが……」

だが、それはそれで厄介な事になる。人間はしつこいぞ、そいつを悪と決め付ければ執拗に殺そうとする。

1で殺せなければ、2で殺そうとするだろう。そうしてどんどん殺すための数を、殺しきるまで増やすだろう。

それにバケモノは、闇の眷属だ。そのままの自分を光の下もとに曝さらけ出すだけで、光に焼き殺されるようになってしまいかもしれない。

例え成った時は良くても、後で絶対に後悔する。世界いや、ほとんどの人間に拒絶されて殺されるのが最後になるだろう。」

クルトが何か言う前に、エヴァが釘を刺すように言う。

実験も混じっているその言葉に、軽々しく否定できない重さがある。

「だから、絶対にバケモノになるな。もしバケモノになった時はその瞬間、人間　クルト・ゲーデルは死ぬ。
そしてバケモノ　クルト・ゲーデルが生まれるだろう。人間らしさなんて、すべて無くしてな……」

おまえが、そうなるとは限らないが……。だが、私はそうだった。

人間　エヴァンジェリン・アタナシア・キティ・マクダウエルはとつくの昔に死んでいて

此処に居るのは　真祖バケモノの吸血鬼　エヴァンジェリン・アタナシア・キティ・マクダウエル・アルルエリだ

良くも悪くも人間だった頃には、想像できない生活だよ。

尤も、私は歓迎すべきかもな、同類が新しくこの世界に生まれ落ちるかもしれないのなら……」

これは最初で最後の警告だ。人間からバケモノに成れても、バケモノから人間に成ることはできないからな」

エヴァの言葉に、俯き暗い顔をクルトがしている。

エヴァの言葉は事実で。真実で。現実で。起きうる事を言っている。たとえ全てでは無くとも、自らバケモノに成ろうとするなら。最低限、知っておかなければならない事だ。

さて、この言葉を聞いてお前はどうか答える？クルト・ゲーデル

S i d e o u t

京都 紅き翼と俺等（後書き）

別に、クルトをどうこうする予定はありません。

あいつが破面化は、誰得だよ（笑）

流石に、鷹作の斬魄刀を渡すことはあっても（クルトに渡すつもりはありませんが）、破面にすることはありませんから。

それとなんで紅き翼と一緒に居るかというと

アール ニーロ的には、どうせだから、です

別に関係が、元々そこまで険悪で無かったことと、最終決戦までに多少は、話す機会があって完全な悪では無いと紅き翼の面々は判断しています。

でも、家に泊めるほどは仲良くなっていないので、本編で詠春にツッコミを受けています。

あとアスナとの関係は良好です。

完全魔法無力化能力の研究のために、アメをたくさんあげています。感想や指摘など待っています

京都 両面宿儺（前書き）

第17話

感想 カイジ様、まつきー様

ありがとうございます！

京都 両面宿儺

Side 第三者

関西呪術協会は、陰陽師の流れを汲む者達と京都神鳴流でそのほとんどもを構成している。

構成員の中に魔法を使う者は居なく。魔法を使う者を「西洋魔法使い」と呼ぶ者がほとんどである。

関西呪術協会は、あくまでも日本古来の術や武道を使う者達の集団である。

そしてその本拠地 京都は遙か昔、人が此処に都を置いてから、多くの妖怪達に狙われてきたが、それを退けてきたのが関西呪術協会である。

当時の陰陽師達では滅する事が出来ずに、封印という手を使わざるおえない妖怪もいた。

その中の1体が、飛騨の大鬼神 リョウメン、スケチノカミ 両面宿儺

なぜ飛騨の大鬼神が京都に？と思う者が居るかもしれないが、飛騨から攻め入って来たのか、それとも別の理由があるのか、不確かだが現実に居るものはしかたがない。その封印が解けたのだから。

Side out

Side アーロニーロ

顔が2つに腕が4つか、顔が1つだったらノイトラ・ジルガを思い出すんだがな……

むしろしてしまうか、崩玉は有るから破面に出来なくもないと思うんだが。

しかし、腕の数だけでしてしまうのは酷か？

「なにをしているんですか！」

詠春が、焦っているのが見ているだけでわかる。

あんなデカイモノが京都の街中に入ったら、それだけで大きな被害が出るのだろうからな。

それに魔法と同じように、妖怪なども隠匿すべきことだから、あれを見られるだけでも大問題になる。

知らん他人がどうなるうが、知った事ではないがな。

「なにを焦っている？知らん他人が死ぬだけではないのか？戦争で沢山殺してきただろうに」

「な！？あなたは何をこの非常事態に、言っているんですか！！あれを再封印しなければならぬんですよ！」

今、動ける奴は俺と詠春しかいないからな……

エヴァ、チャチャゼロ、アスナ、ガトウ、タカミチ、クルトはメノスの森に入っている。

なぜ入っているかというと、この近くに修行に使える場所が無いために、ガトウが貸してほしいと言ってきたから、俺かエヴァが同伴してれば良いとしたからである。

そこで早速ガトウは、エヴァ同伴でタカミチとクルトを連れてメノスの森に入ってしまった。

チャチャゼロとアスナは面白そうだからと、一緒に入った。
ナギとアリカは諸事情で参加不可。

アルビレオ？あいつなら何所かに行ったよ。

それが10分前。いくらなんでも、あと50分も待っている余裕

などない。

「封印のために陰陽術師達が、準備してます！そこまで弱らせて、誘導しなければいけないですよ！」

私達二人ですよ！！わかってるんですか！！？」

「わかって無いのはお前だ、詠春」

「なにがです！」

「俺が何時、協力すると言った？」

「なっ！非常事態なんですよ！？」

「だからこそだ。今決めなければ、後でうやむやにされかねんからな……」

「なにが望みですか！！！」

怖い顔だ。怒りで身を震わせ、今にも夕凧を抜きそうだ。

「なに、あいつを俺に任せればいいだけだ。簡単だろ？」

両面宿儺を指さしながら言う

「本当にそれだけでですか……」

「あと、文句を言わなければいい」

「では、任せます。しかし！私が危ないと感じたら、入らせてもら

います」

「好きにしる」

さて、作った斬魄刀の実験をしますか……

Side out

Sode 第三者

全長60メートルの怪物。両面宿儺は手に弓矢、剣を持っている。現代兵器なら戦車や戦闘機などがこつそりと居る相手である。

だがそれは表での話である、裏になれば人数こそ多くなるが、生身の人間で対抗自体は可能である。

そして裏の中でより深い位置に居る、アローニーク・アルルエリにとっては1人で対抗可能であった。

しかし、見ている者からしたら60mの相手に、たった2mちよつとしかない人物が向かって行くのは自殺行為にしか見えない。

例え実力を知っていたとしても、相手との絶望的なまでの体格差で、向かって行った人物の死を覚悟したであろう。

必然と思える、両面宿儺の剣による一撃。

見ている者からすれば終わりを感じさせたのだらう、だがそれが始まりだった。

「見かけ倒しでは、無いようだな」

その巨体から繰り出される凶悪な一撃を両面宿儺の剣と比べれば、つまようじに等しいであろう大きさの刀で受けきったのである。

しかし、足元の地面を見ればどれほどの衝撃かを、物語るクレーターを作っていた。

だが傷は、精々10? いくか、いかないかであろう。

傷を付けられた両面宿儺に、怒りの炎が瞳に灯る。手に持った弓矢を、アロー二一〇に向け放つ。

それに対してアロー二一〇は新たに出した刀を解放する

「起きろ、紅姫」

刀は、鏢の無い短めの直刀に変容する。そして刀から血に似たナニかを流し

「啼け、紅姫、紅極破!」

それを斬撃として飛ばし、放たれた矢と相殺させる。

「これ以上時間を掛けるは、まずそうなのでな。こいつを使わせて貰おう」

出した刀を影にしまい。新しい刀を出す。

「卍解! 黒縄天譴明王!!」

卍解と共に、巨大な鎧武者がアロー二一〇の後ろに現れる。見る者全てに威圧感を感じさせる、堂々とした姿であった。

しかし、両面宿儺にはそんな姿も、無意味な物でしか無かった。精々、新しい何かが現れたぐらいであろう。

「恐れないか、流石は大鬼神と言ったところか……いや、ただ理性が無いからか？」

だとしても、敬意を表して全力で叩き潰そう!!」

言葉どおりに、アローニーロの動きに連動した黒縄天譴明王で、最高の一撃を両面宿儺に叩きこんだ。

しかし、両面宿儺は左上半身を切り落とされながらも、まだ立っていた。

「そうか!そうか!そこまで素晴らしいのか!

両面宿儺!!

流星は伝承にも残っている程の大鬼神!」

笑いながら、いまだに立っている両面宿儺に惜しめない贅辞を並べ上げる。

「だが……お別れだ。もし、運が良ければ未来で会えるだろう。その時まで力を回復しておけ。

次は、全力のお前と戦いたいな……」

陰陽術師達による封印が完成し、両面宿儺が再び京都の地で眠るのであった。

S i d e o u t

京都 両面宿儺（後書き）

両面宿儺……強くしすぎたか？

鷹作の斬魄刀を使ったとはいえ、黒縄天譴明王の一撃を受け立っているのはやり過ぎたか？

他の小説だと酔っ払いに倒されたり、数行で出番終了……

京都に行ったついでに潰される……

扱いが悪い事が多い気がしてたから……後悔はしていない。

それと重要なお知らせ。

次は、カレーパン様の裏切りの聖騎士の力とコラボを書かせて貰いますので、本編は少し待ってください。

コラボ 仮面 騎士（前書き）

これは、カレーパン様の裏切りの聖騎士の力とのコラボです。
本編とは関係は無いので、見なくても問題ありません。
コラボが嫌いな人はバックしてかまいません。

コラボ 仮面 騎士

Side アーロニーロ

ついにっ！ついにっ！完成した！いや、確立した。と言った方が正しいかー！

「父様……正直言つて、今の父様は気色悪いぞ……」

エヴァがかなり冷たい目で見てくるが、そんな事はどうでもいい
！！

「これは、とても素晴らしいものだぞ！！エヴァ！！」

地面から3メートル位の高さを開いている空間の口を指さしながら
言う

「黒腔が？……いや、ちょっと違うか？」

「そう！違うのだよ！これは魔法世界以外の、別世界に繋がっているー！！」

(……それはただたんに、旧世界のどっかに繋がっているのではないのか？)

「それで今から、てきとくに誰かを引きずり込む訳だ」

「安全なのか？」

「虚を何体も送ったが、生きて帰ってこれた。引きずり込んだ奴も帰れるだろう」

「生きてということは……傷を負ったのか？」

「多少な……引きずり込んだ奴が暴れても問題無い。蹴散らせばいいだけだ」

(それでいいのか？父様……)

「私は出掛けるからな。変なのを引きずり込むなよ、父様」

「なに、問題無い」

S i d e o u t

S o d e スザク

どうも最近、変な妖怪みたいのが学園内をうろついている。そいつらは仮面を付けていて、体のどこかに穴が開いている。

頭の片隅にそいつらの姿が、どうにもひっかかる。こう、知っているのに思い出せない感じである。

学園内をてきとうに歩いたら暗闇で消える、を何度も繰り返しているらしい。

今のところ実害があった訳ではないが、どうにも不気味な奴等だ。

エヴァンジェリンの話によると、そいつらは結界にひっかからずに学園に侵入しているらしい。

まるで結界内から、発生しているみたいだとも言ってた。

ただ、そいつらの所為で夜の警備が厳重になり、私の警備のする時間も増えた。

もしかしたそいつらが、アスナに害ある存在かもしれないために、断ることも出来ずにこうして夜の警備に精を出している。

「まったく……なんなんだろうな。あいつらは……」

遭遇した魔法先生の話によると、見つかったら一目散に逃げらしい。

逃げる事に徹する事から、敵の偵察ではないかというのが、ほとんどの魔法関係者の見解だ。

例に漏れずに、私もそう考えているのだが……

もしかしたら、私を狙う世界の修正力と考えたが、知っているサーヴァントにそんな物を使う奴は居なかつたし、わざわざ偵察なんてせずにぶつかってくるだろう。

アサシンとキャスター以外は……

もしかしたら、設定だけ存在する奴かもしれないので、気は抜けないが……

そんな考えが頭の中を駆け巡っていると、すぐ目の前の空間が口を開けた。

「は？」

自分の事ながら随分と間抜けな声を上げたものだが、更に変な事が起きた。

喰われたのだ。口を開けた空間に……

パリンツと何かが砕けたような音が聞こえ、一瞬ナニかが目にはい

る……

当然、衝撃を背中に受ける
おそらく地面に叩き着けられたのだろう。

立ちあがると、変な奴が目に入る

仮面を付けていて、白いフリフリの付いた服を着ている。

手袋もしている為に、肌の露出はゼロである。

肌の露出については、全身鎧を身に付けている私も同じだが……
しかしなぜだろうか…その姿をどこかで見た気がするの……

「はじめましてだな」

「なんだ、お前は……」

すぐに斬り付けられるように『アロンドイト無毀なる湖光』に手を掛けながら、
相手の動きを注視する。

「なに、暇つぶしでお前をたまたま誘拐した奴だ。それと俺の名前はアローニーロ・アルルエリだ」

その名前でどこで見たのかを思い出した。

それと同時に最近学園内に現れているあいつらが、ナニかも思い出
す。

S i d e o u t

S i d e アローニーロ

驚いたものだ。

なにもわからない。気も魔力も探查神経で探ってもわからない。だが目の前相手が、ただ者ではないことはしか解かる。血の臭いというのか、そいつが血濡れの道を歩いてきたのが雰囲気です。察する事が出来る。

「私を此処に連れてきたのは、あんたの仕業か？」

「ん？ああ、そうだが……」

「だったら直ぐに、元居た場所に返してくれ。仕事なんだ」

「そうだな……俺に勝てたら、返してやる」

さて、お前はいつたいなんなんだ？

Side 第三者

アローニーロの言葉に仕方なく従い、朱雀は戦う事になった。そもそも単身で帰る術を持っていない朱雀にとっては、非常に腹立たしい事にアローニーロに従うしかない。

それに、もし殺してしまえばわざわざ戦った意味も無くなってしまふ。

殺さずに勝つ。それは非常に難しい、相手はサーヴァントに匹敵すると朱雀は感じ取っていた。

だが、やり遂げなければならぬ。

それが、今のところ最善の道なのだから……
自然と体に力が入る。

対してアローニーロは、未だに何もわからない相手の観察をして

いた。
見れば見るほどハッキリとしない輪郭。全身鎧でまるで騎士のよう
姿。

声からしておそらくは男。近接戦闘を得意としそうである。

先に仕掛けたのは朱雀であった。

影からガトリングを取り出し弾丸の雨をアローニーロに浴びせ掛
ける。

「なっ!?!」

アローニーロにとっては、不意打ちもいいところであった。

騎士の姿で近代兵器であるガトリングを扱うなどと、誰が考えよう
か……

アローニーロの知らぬところであるが、宝具化した弾丸の雨は当たれ
ば、銅皮イエロを通り抜けアローニーロの体内に侵入を果たすであろう威
力を持っていた。

だが、届かない。弾丸が放たれると同時に響転ですぐに射線上から
移動していた。

今度はアローニーロが攻撃をする。

右手に詫助、左手に神鎗を持って斬りかかる。

もちろん、それをただ朱雀が受けるわけも無く。

新たに影から取り出した『絶世デュランダルの名剣』と『偽カラドボルグ?・螺旋剣』で、火花
を上げながらも受け止める。

「面を上げる、詫助」

解号により変容した詫助で、絶世の名剣を絡め取るうとするが、

上に打ち上げるような動きで直ぐに離される。
2度、絶世の名剣は2度も詫助に触れてしまった。朱雀は前世の知識で、詫助の能力がどのようなモノか知っている。だから直ぐに影にしまい新しい剣を取り出す。

「知っているな？この詫助の能力を……」

「だとしたら？」

「いや、どうもしない。ただ……」

「ただ？」

「対策できなければ、頭カビを垂れるだけだぞ？」

「そのくらい、わかっている」

再び斬り合う。しかし、状況はアローニードに傾いている。

朱雀は影の倉庫内に、英雄王ギルガメッシュから奪った数多い宝具があるが、数は有限である。

しかし、次々と重さを斬り合うたびに倍にされて、重くて高速戦闘に使いなくなっていく。

だから切り札を1つ切る 狂化

「！！！！」

「何………だと!？」

狂化した朱雀は、切り付けようとした詫助を掴み取ったのだ。掴まれた所から黒い魔力が詫助を浸食する。

危険と判断したアローニーロは、直ぐに詫助から手を離し距離を取る。
すぐに、狂化した朱雀は詫助を影にしまう。さっきまでの状況を簡単に変えてみせた。

「近づくのは危険か……なら。卍解！雀蜂雷公鞭じゃくほうらいこうべん！！」

影から出した斬魄刀で卍解し、単発式の卍解を朱雀に向ける。

「生きていれば、治してやるからな」

本物では無い贋作ではあるが、威力は十分にある。

未だに両者は傷を負ってないが、これはこの状況を変える一手になると信じて放つ。

ミサイルのような弾が朱雀に向かって撃たれた。

これで終わるだろうとアローニーロは思ったが、間違いだった。

狂化した朱雀がまた掴み取ったのだ。今度は卍解である雀蜂雷公鞭の弾を。

だが、今度はそれを影にしまわずに、本来の持ち主であるアローニーロに投げ返した。

啞然としていたアローニーロに、宝具化して更に凶悪になった雀蜂雷公鞭が直撃した。

見た目通りの爆発で巨大なクレーターを作り、一切合財を吹き飛ばした。

「喰い尽くせ！！喰虚！！！」
グロトネリア

雀蜂雷公鞭の直撃により着けていた仮面は碎け、服も原型がわからない程にボロボロになってしまい、その怒りを晴らすべく、帰刃レクシオンして本来の姿と力を曝け出したアローニーロが、本気で殺すため朱雀に襲いかかる。

「ゼロ・オスキュラス
黒虚閃！！！」

解放状態の十刃が放つ黒い虚閃。それが朱雀を飲み込もうしたが

……

「『アロンダイト無壊なる勝利の剣』」

朱雀、いや、ランスロットの真の宝具から、放たれた翡翠の魔力に逆に飲み込まれた。

本来は防御用だが、剣が纏っていた翡翠の魔力の勢いは衰えずに、アローニーロを飲み込む。

アローニーロは耐えきった。だが、そのままでは戦闘続行は不可能なほどに傷ついていた。

悪態をつきながらも喰虚を再刀剣化し元の姿に戻り、最後の一手を打つ

「砕ける、鏡花水月」

1回目は引きずり込むと同時に見せている。もともと解号は無くても解放はできる、いままでわざわざ解号を言っていたのは、景気づけの意味合いが強い。

完全催眠で五感全部を感じ取れなくされた朱雀は立つ事も出来ずに倒れる。

アールローロにとっては完敗であった。

帰刃に鏡花水月を使わせられた。神殺鎗を使っていれば、また結果は違ったかもしれないが、前の2つは特に温存していた、桁違いの切り札である。

「父様！？無事か！」

雀蜂雷公鞭の爆発音に始まり、続いて聞こえてきた尋常ではない音と、ありえない魔力の濁流を感じとりエヴァンジェリンが戻ってきたのだ。

「一応な……」

その言葉にエヴァンジェリンは安堵の息をはくと、倒れている男を睨みつける。

「こいつは殺すところか？」

自分の父をここまで傷つけた男を殺すべく、身構える。

「殺すな。こいつは生きて、元居た場所に帰す」

「なぜだ！？ここまで手酷くやられたのか！敵は殺すべきだ！！」

「敵ならな……こいつは敵では無い」

その一言にエヴァンジェリンは黙ってしまふ。

アローニークは影から出した補肉剤で怪我を治し。さらに代えの仮面と服を取り出しそれを身に着ける。

鏡花水月の完全催眠を解き、勝者に告げる。

「おまえの勝ちだ」

結構無理な動きをしていた為に、ボロボロになっていた朱雀を治療して互いの話をする事になった。

尤も、アローニークがあのかをんなのかを知りたいがために、無理矢理引きとめたのだが……

そのおかげで実は平行世界が存在する事がわかったり、互いが転生者だとか、いくらか驚くことになった。

平行世界については、朱雀の方は平行世界があると考えてはいたが、まさか自分がその平行世界に行くとはいまままで考えた事もなかった。一方、アローニークはまさか別世界に繋がったはずの黒腔が、平行世界に繋がってしまったとは予想外すぎた。

「しかし……こんな事があるもんなんだな」

「あんたのやった事は、限定的だが第二魔法だぞ……」

「平行世界をどうこうするってやつだろ？」

「運用だったはずだ」

一応、同じ境遇なので多少は仲良くなった2人であった。

「そついえば……あんたもサーヴァントに襲われるのか？」

「は？……なんで襲われるんだ？世界の守護者に？」

「え……」

こうして朱雀は、自分だけがあんな理不尽な存在に襲われているを知ったのだった。

S i d e o u t

コラボ 仮面 騎士（後書き）

アローニーロが負けた理由はまず、能力を知らなかった事です。知ってたら、雀蜂雷ミサイル公鞭なんて使いませんでした。

他にも、神殺鎗を使わなかった事もあります。

それと最後まで鏡花水月を使わなかったのは、真剣勝負に使うものではないとの考えがあったからです。（殺して喰う、が目的だったら五感奪って、直ぐに殺していました）

やはり、『騎士は徒手にて死せず』をしっかりと見極められなかったのが一番の敗因です。

それでは、最後にここで感謝の言葉を……

カレーパン様 ありがとうございました！！！！

逃走 次に行く(前書き)

第18話

感想 ニッコリ様、天月王貴様、わがみち様、カレーパン様、yy
0124様

ありがとうございました!!

今回短め。

逃走 次に行く

Side アーロニーロ

両面宿儺を倒す、まではよかった。

あのまま、めでたしめでたし。で、終われば良かったのだが、そうは問屋が卸さない、になってしまった。

ちよつと考えれば、判る事だというのに失念していた。

あんなデカイ物（黒縄天譴明王）を使えば裏の人間でも、あれがなんなのか気になり調べるといふ事を……

それに黒縄天譴明王を使わずとも、両面宿儺の一撃を簡単に受け止めたのだ、誰がやったか気になるだろう。

その所為で俺の見た目で調べられ、俺が帝国の英雄だということに関西呪術協会にはれた。

なんでも魔法世界の戦争に、関西呪術協会の人間を送ってそのほとんが帰らぬ人になったそうさ。

そんな訳で帝国の英雄の俺とエヴァは恨みの対象だそうさ。いくら俺が両面宿儺封印の立役者でも、恨みの方が強いわけで……

追われることになった。

「逃げねえで！戦え！アーロニーロ！！」

「逃げずに、神妙にお縄につくつもりは無いのですか？」

「大人しく殴られる！！」

非力な関西呪術協会の人間だけなら、問題は無かったのだが……

紅き翼の面々が祀り上げられて、アーロニーロ、エヴァンジェリン討伐隊に加わっている。

ガトウそこまで俺が憎いか……修行の場（メノスの森）を使わせしてやったというのに！！

注：メノスの森でガトウは大変な苦勞を強いられた為に、怒っています。

メノスの森には大虚を筆頭に虚がたくさん生息していて、ガトウはタカミチやクルトがその餌食にならないようにするのに苦勞しました。

まったく！折角、修行に使える隠れ家を、タカミチ経由でおまえに渡すというのに。今から回収に行くかな……

「父様、なんで逃げるんだ？あれくらい簡単に殺せるだろ？」

「そんな事すればまた賞金首に逆戻りだ。殺るなら誰が殺ったかわからない状況か、合法的に殺せる状況がいい」

「たしかにそうだが……あんなのから逃げるのは、なんか腹が立つな……」

確かに……紅き翼の3人は比較的まとま（？）な格好だが、それに追従している関西呪術協会の陰陽術師の中には、着ぐるみを着ている奴らもいる。

なんなんだろうか……あれは……

「すごくシニールだと思うぞ？逃げる方も、追いかける方も一般人からしたら、普通の格好ではないからな。

しかし何時までこんな追いかけてこを続けるんだ？」

響転を使えばおそらく撒けると思うが……

京都神鳴流の奴らが、どれほど瞬動を使いこなせているかだな。

「どつせだから普通に撒くぞ」

「普通に？どうやってだ？」

「こつするんだよ」

すぐに幻影魔法で何時だか使った、平平凡凡な男の姿に自分を変
える。

ついでにエヴァの姿も変える。

「懐かしい姿だな……」

これで俺等は普通の格好になった。

逃げる方向を街のある方角に変え走り続ける。

「奴ら街に逃げ込むつもりだ！！街に入る前に捕まえろ！！」

関西呪術協会のリーダーと思われる奴が声を張りあげるが、それ
で捕まえられれば此処まで逃げられなかっただろうに……

「待て！！俺と勝負しろ！！」

……しつこいな

「はいなわ
この縄」

本来なら腕に這うように纏わり付くが、今放った低級の縛道の這
縄は足に纏わり付き、ナギを派手に転倒させる。それを助けるべく、
ガトウと詠春は脱落。後は関西呪術協会の連中だけだ。

問題無く街に入るが……自分達がどんな姿か忘れていいのか、その姿が当たり前になっていくせいだ。
そのままの姿で、追いかけてくる**猛者**達がたくさん居た。
わざと、交番の前を通る。

「は？」

国家権力の犬が**警察**の間抜け面でお似合いの声を出して、啞然とした。

「まつ、待ちなさい！？そこの集団！！」

流石に、謎のコスプレ集団を見なかった事にはしないらしい。
しかし、よく追いかける気になったな……こんな連中を……

狭い道に逃げ込み、影のゲートで逃げる。

ちなみに翌日の地元の新聞に「謎の集団現る！？」という見出しが出た。

Side out

Side エヴァンジェリン

何を考えているんだろうな……父様は……

考えがわからない。さっきもそうだ。影のゲートを初めから使えば、もっと早くに撒けただろうに……

大まかな行動原理はわかるが。暇つぶしに近いものになると、突拍子の無いことをすることだってある。

自分さえよければ、それでいい。この考えが原理の根源で、そこに

ちよつとの別要素が入り込むだけである。
一番近い位置に居る私でも、予測が難しい。
そもそも目的が無いのだ。長い時間を生きてる人間に近い思考を持つていると、暇つぶしがかなり必要になる。
私は暇つぶしでは無いが、父様に追いつくこととして鍛錬をするが。父様は違う。平和を享受する事もあれば、戦争に自ら進んで参加する。
行動に一貫性が見られない。

「父様」

「なんだ、エヴァ？」

「父様は何を、目指しているんだ？」

遠回しに聞いても、単刀直入に聞いても答えてくれるだろう。

「目指す？考えたことが無いな……」

別に目指すが無い、それだから方向性がハッキリしないだろう。

「意気込みは？」

「楽しめればよし！」

……………父様にとって生きる事は、楽しむ事なのか？

「そんなことよりエヴァ。どの辺で、静かに暮らす？」

「そつだな……できれば日本国内がいいな」

「暖かい所と涼しい所、どっちが良い？」

「暖かい所だな」

別に父様と一緒になら、どこでも構わないが、此方の希望を聞いて
いるんだ。

答えない訳が無い。

「よし、沖縄で適当な無人島を探すぞ。エヴァ」

無人島か。変な邪魔が入らなくて済みそうだな。

「で？どうやって行くんだ？」

「一般人の移動方法で構わないだろ？沖縄までは」

「そうだな。では、急ぐ理由も無いしゆっくりと行くか？父様」

「では、行こうか。エヴァ」

手を繋いで歩き始める。

できればもう離したくないな。子供として親と一緒に暮らせる、当
たり前だけどささやかな幸せだ。

ただ依存しているだけなのだろうが……それでいいと思っている。
わたし真祖の吸血鬼と同じ時間を生きて行けて、受け入れてくれるのは父
様だけなのだ。父様……私の我が儘だろうが、できれば私だけの父
様でいてくれよ？

Side out

逃走 次に行く(後書き)

短い、と言っても第2話と同じくらいの長さ。

次回は、ほのほのできる話に挑戦しようかと考えています。

書く途中で諦めて、エヴァに斬魄刀を持たせての特訓になるかもし
れませんが…

ほのほのだと特に必要の無い小話集になるかも……

平穩 2人だけの島（前書き）

第19話

感想 零崎煌識様

ありがとうございますー!!

ほのぼの……うん、無理でした。
なんか求めていたのと違うんで……

平穩 2人だけの島

Side 第三者

アローニーロとエヴァンジェリンは静かに暮らす為に、沖縄にある無人島を目指している。

もちろんアローニーロは、いつもの仮面にフリフリの付いた白い服では無く、魔法でエヴァンジェリンの親と言えなくもない男の姿に、白い服を着た状態になっていた。

髪も目も肌の色も同じで、歳は多く見積もっても30代前半で、どこか優しそうな印象を思わせる顔立ちである。

親と言うのには些か若い気がする姿であるが。

見た目は良いので、途中で何度か声を掛けられたりしたが、声を掛けた奴はすべてエヴァンジェリンが追い払った。

「しかし、行くと決めたから行くが……都合のいい無人島なんてあるのか？」

「無いなら、用意するだけだよ。エヴァ」

(それは大丈夫なのか……?)

他人を騙す為に、口調と声まで変えている。エヴァンジェリンは少しだけ違和感を感じるが、おそらく少しの辛抱だろうと我慢することにした。

無人島で。人が住んでいる島から直ぐに来れる距離じゃなくて。景観もそこそこいい。

そんな都合のいい島が、簡単に見つかった。

「これで、こんな格好をしなくてもいいな」

自分達以外、誰もいないのを確認するとすぐにいつもの姿に戻る。

「まずは家造りか？父様」

「ああ、そうだ。沖縄は台風シーズンのときいくつも台風がくるから、頑丈に造らないと屋根とかが飛ぶからな……」

アールローニーの影の倉庫にはかなりの物がしまっている。（メインはダイララ魔法球を作るまで虚だった）

その中には家の建築材料に使える、木材や石材といった普通なら入れないような物もしまっている。

それらを取り出して並べる。

「これで適当に家を建ててくれ」

「私だけでか？」

「人形を使えばいいだろ？」

「その間は父様はどうするんだ……」

「結界とかを張る」

エヴァンジェリンは不満だったが、島に人が入るといろいろ面倒が起きる事もあるのでしかたなく、人形を出して建築を始める。

Side out

Side アーロニーロ

島は思ったより、環境がいいのが見つかって一安心といった所か……
この島に居るにあたって、やる事が幾つかある。

まず、さつきエヴァに任せた家だ。いつまで此処に居るかは未定だが、最低でも1ヶ月は居るだろうから必要だ。

次に、この島に結界を張る。別に悪さをする訳では無いが、一般人は近づけなくするためだ。

他にも、飲み水の確保などがあるが、それらは大した問題では無い。

「丁度いい魔力溜まりがあるな……」

これなら人払いの結界位なら余裕で維持できる。場所も島の中心部だしな。

Side out

Side 第三者

アーロニーロが家の建築予定地の場所に戻ると、少し異様な光景

が広がっていた。

人形が家を建てているのはエヴァに任せただから、当然なのだが……
チャチャゼロが自分の妹(?)達を統率しているのはいい、だがア
ヨンが人形達に混じって一緒に家を建てている。

アレ?あいつそんな知的な事できたっけ?

それがアローニーロが少し異様と感じた理由だ。

そもそもアヨンはアローニーロが冗談半分で作り、原作通りの見
た目と強さと殺戮本能しかないはずである。

アヨンになにかを求めるなら、殺戮しか求めれないはずである。
しかし、目の前でアヨンが知的な行動をしている。

なぜ……………

アローニーロは疑問を解消するべく、エヴァンジェリン問う。

「エヴァ、アヨンがなぜ家を建てている?」

「ん?あれか。単純な命令ならアイツでもきくぞ?父様は知らな
かったのか?」

正直に言って、アローニーロは知らなかった。

「流石に戦闘中は、命令はきかないだろうがな……………」

一系乱れぬ動きの、エヴァンジェリンの人形とアヨンの御蔭で、
家は2週間で建った。

Side out

Side エヴァンジェリン

ククク、父様は気付いて無いようだな。私が人形達に建てさせた家に、ベットルームが一部屋しかない事に。

これなら同じベットで寝れなくても、同じ部屋で寝れる。ベットルーム以外だと影の倉庫にあるベットは入らないか、入ってもギリギリだ。

父様はなるべくあるもので済まそうとするから、おそらくわざわざ新しいベットは用意しないだろう。

それに父様は私に甘い節がある。これで勝つ！！

そこに家の中を見尽くした父様が、このベットルームに来る。

「ふむ。エヴァ、ベットルームが一部屋しかないが……」

「親子だから同じ部屋でも、構わんだろ？」

可能な限り冷静に、そして当たり前だと言わんばかりの口調で言う。

「……エヴァがそれで良いなら、別に構わんが……」

勝った！勝負すらして無い気がするが、勝った！！

これで第一目標クリアだ。次は夜だな！

夜の闇も深まって来たところで、特にすることも無いので寝る事

になった。

すでに家の中には家具類を設置済みだし、なんの問題も無い。さて、ホントには寝るだけである。第二の目標である父様と同じベットで寝る。

達成する為には同意が無ければ不可能だ。やるうと思えば、父様は完全に干渉できない状態にできる。

それをやられたら、即アウト。

だから、まずは会話をしながら近づく。

「父様……」

「なんだ？」

寝巻になっても、仮面は付けている父様に近づく

「実は、お願いがあつてだな……」

「なにをしてほしんだ？」

距離は十分に詰められた、後はタイミングだ。

「思いつきり甘えさせてほしい……！」

言うと同時に跳び付く。おそらく避ける事のできるだろうが、避けないだろう。

しっかりと父様が受けて止めてくれたので、思わず頬が緩む。

「ん〜」

遅い胸板に顔を、服越しだけどしつかりと密着させる。

そうやって暖かさを堪能する。他の奴は触れるのも嫌だが、父様だけは別だ。

そうやっている、父様が頭を撫でてくれる。これも好きだ。

他の誰かに抱きしめられる。

こんな普通の事でも、真祖バケモの吸血鬼になった時はまた出来るとは思えなかった。

自分以外は全員が敵で、容赦の無い人間の悪意なひに晒さらされ続けて、ただ1人だけが自分を助けてくれた。

初めは、気になる人

別れるときは、傍に居て欲しい人

再開したときは、受け入れてくれた人

旅の途中から、父同然の人

また別れたときは、すぐにでも傍に戻りたい人

また再開したときは、自分の成長を見せる人

今は、私のただひとつの拠り所になっている人

父様となら、いつまでも、どこまでも、一緒に行ける気がする。

「随分と甘えるな？」

「いいじゃないか。親子のスキンシップだろ？」

そう。親子だから、たまにこんなこととして困らせてもいいだろう？

「今日と一緒に寝てもいいか？父様」

「たまには、いいだろう」

「大好き！」

明日は、幸せな気分できれそうだな。

S i d e o u t

平穩 2人だけの島（後書き）

次は特訓予定。

エヴァに贖作持たせます。

感想、指摘待ってます。

本編の補足

妹（？）達の？理由はエヴァが性別を特に決めてないからです。

チャチャゼロの出番が少ない、と感じている読者が居そうなのでここで補足

基本的にチャチャゼロは、エヴァの影の倉庫内に収納されています。

理由は

- 1、エヴァが父様となるべく2人だけで居たいから
- 2、戦闘用なので今は必要ない
- 3、父様の頭の上に居座るからです

平穩 考える(前書き)

第20話

感想 妖怪

ありがとうございます！

平穩 考える

Side アーロニーク

朝。起きるとエヴァが上に乗っている。もちろんまだ眠っている。しかし、昨日の夜から随分甘えてくるな。別に面倒という訳ではないが、できる限り一人だけでも生きて行けるようになって欲しいのだが……

破面の俺は寿命は不明だから、いつ寿命が尽きるかわからない。死神の老いがあるように、破面の俺にも老いはあるだろう。今はそんな兆候は無いが、いつ老いが始まるかはわからない。

しかし、エヴァは真祖の吸血鬼で不老不死らしい。本当かはこのわからないが、仮に本当だとすれば何時かは一人になる。俺が死んだ後は知りようがないが、エヴァは絶望するだろう。

放り出したのも、依存度を少しでも減らすつもりだったが、逆効果に終わった。

このままでは俺が死ねば、不死殺しを使っても後追い自殺をしかねない。

俺以外の支えが居れば、話は変わってくるのだろうか……
今のままではそれを得るのは無理だろう。

真祖の吸血鬼を理解しても、エヴァ本人を理解することは無い。真祖の吸血鬼と言っただけで、悪と決定付けるのが多くの人間だ。

誰が初めに決めた線引きか知らんが、本質を見ずに薄っぺらい外側だけで決め付ける。

実に忌々しい。自分達と違う存在を受け入れられ無いのだろう。

触れれば温もりを持っていて、意思も感情もある。

人間と違うのは能力だけなのに、それを受け入れずに排除する。中には危険な奴も居る。そいつを排除するのはまだいい。だが、エヴァのように危険では無い奴も、同じ種族という理由で排除する。

「んっ………」

エヴァが目を開けるが、まだ意識がハッキリしないのであろう。トロンとした目でこちらを見てくる。

「んっ、とっさまっ」

笑みを浮べて首の後ろの手を回してしっかりと抱きついてくる。頭を撫でながら、こちらもしっかり抱きしめてやる。

「えへへっ」

「ご満悦のようだな。しかし、いつまでもこうして居たいのだろうか、そうはいかない。

「エヴァ、おはよう」

「とっさまっそ、おはようっ」

まだ、寝ぼけてるようだな。

「しっかり起きろ（ムニユムニユ）」

「えっ」

頬を弄くりまわすが、効果はいまいちか……

「こづつてようよ〜」

今度は足も使って抱きついてくる。

「破道の一衝」

破道をエヴァの額に中てる。もちろん威力は低い。

「パアッン）……………」

目が覚めたな。

「酷いんじゃないか？起こすの破道を使うのは……………」

「威力は低い。せいぜいデコピン程度だろ？」

「いや、デコピンの方が弱い」

「試してみるか？」

破面の基礎身体能力は非常に高い。

さらに俺は破面の中でもとりわけ強い十刃のアーロニーロの力に、いままで喰ってきた奴の力が加算されている。

たかがデコピンと考えるはいけない。流星に一撃で地形を変える程の力は無いだろうが、かなり痛いだろう。

「いや……………」

すこし顔をひきつらせながらも、名残惜しそうに俺から離れる。

Side out

Sode エヴァンジェリン

父様に甘える夢を見ていた。途中から現実だったが、実によかった。

父様は優しくしてくれたし。別にいつもは優しくない訳ではないが、甘えさせてくれる時とは別の優しさだ。

包み込むような優しさ。それをもっと満喫させてほしかったが、夢心地の私にあるうことが破道を撃ち込んだ。

そのせいでしっかりと目を覚ましてしまった。

ちくしょう……………

「ああ、そうだ。エヴァ渡したい物があるから、食い終わったすぐに來い」

渡したい物?…なんだ?

Side out

Side アーロニーロ

ついに贗作の斬魄刀をエヴァに渡すのだが……

必要無いかもな……自分の戦い方を確立しているから邪魔になるかもしれない。

だが、できればこれを使ってほしい。

魔法媒体としても使えるから、最悪予備の発動媒体だな。

「来たか」

「で？渡したい物とはなんなんだ父様」

「これだ」

「日本刀？」

エヴァが受け取りすぐに鞘から抜き、刀身などを確認している。

「名を氷輪丸。斬魄刀の贋作だ」

氷雪系最強。エヴァに相応しいだろう。

「解号は、霜天に坐せ『氷輪丸』だ。それと卍解は『大紅蓮氷輪丸』だ」

「贋作ということは、本物が存在するのか？」

「存在はする。だが、本物は本来の持ち主以外には使えない」

例外は常に存在するがな。

「なにが出来るんだ？」

「説明書を用意してある。これを読んでおけ」

（説明が面倒なのか……）

「あと、書いてある事はできる事だが。それがすべてではない」

Side out

Side エヴァンジェリン

斬魄刀。父様が持つてる刀は、拵花、神鎗、詫助、鏡花水月の4振り。拵花、神鎗の能力は知っている。それらと同じように、こいつにも能力があるのだろう。ただし、こいつは贗作だ。それがどう作用するかは解らないが。

隠れて日本刀の使い方を練習していて損はなかった！

説明書によると、氷輪丸は氷雪系最強の斬魄刀の贗作……基本は再現しているが、操作性の再現率は不明（本人以外使えないから）

魔力や気を消費して能力使うか……

余裕がなければただの日本刀と変わらないか。応用性は魔法よりあるみたいだな、氷限定で。

使いにくいなら、使わなければいいだけだしな。

しかし……もうちょっと短いほうが使いやすかったのにな……

Side out

Side 第三者

アローニーロは鬼道系の斬魄刀の助言をあまりできない。

掬花も鬼道系の斬魄刀に類するが、氷輪丸と違い特定のものを、手足のように操れるものではない。特定の状態で生み出すが正しい表現になるであろう。

しかし、氷輪丸は氷限定だが、卍解状態であればほぼ完全に使用者が望む形にできる。

だが、どのような形にするかは全て使用者が決めるので、明確な形に出来るかは完全に使用者しだいになる。

感覚的なモノで操作するので、使い手しだいで形は変わる。どの程度統べる事ができるか、その一点に掛かっている

贗作故に、本体は存在しない。

本体が居れば補助を受ける事もできたろうが、全部自力で操作しなければならぬ。

本体も義魂技術を転用すれば、贗者を付ける事もできた。より本物に近づくことができたであろう。

だが、アローニーロは付けなかった。たしかに本物そっくりにはなるが、そもそも似せた贗作に過ぎない。

本物の斬魄刀は自分の延長である。だから人格が有っても問題が無いだろうが、贗作は違う。

贗作に求めたのはあくまで、道具としての力である。

道具に感情が有れば揉め事にもなる。

やれ、もっと丁重に扱え。

やれ、変なものを斬るのに使うな。

やれ、影の倉庫にしまいな。

なぜ使う道具の機嫌をとつても、使わなければならない。そういう事になりかねない。だから、人格を付けなかった。

エヴァンジェリンは始解で氷の竜を出しているが。思ったように操ることが出来ていないようである。何度も何度も遠くの的に当てようとしているが、かすりはしてもど真ん中には中たらない。

確実に中てたければ近づけばいい。

そんな答えを知っていても、あえてしない。

実戦では無い特訓なのだから、今の自分の限界を知る為の意味合いが強い。

扱い難い。正直なところエヴァンジェリンからしたら、これなら同じ形の竜の人形を使った方が巧く扱える。

魔法ではない独特の感覚で操るために、どうも違うのだ。

人形の球体関節を動かす感覚ではない。

後付けの腕のよう。と言うのだろうか？本来なら無いはずの感覚である。

そんなモヤモヤした感覚をずっと感じているのだった

S i d e o u t

平穩 考える（後書き）

エヴァの反応が無いのはどうかと思えるか？
でも、実際謎の日本刀を渡されてもな……

Wikiだと日番谷冬獅郎の方が？身長が高い。つまりエヴァとほとんど同じ背丈。

9歳男子と10歳女子だから近くて当たり前だろうけど。

この小説もなんですけど、基本自己満なんですよね。

変な電波を拾って、『闇の帝王もどきな俺』なんてやってっけで、書いたんですけど。

以外なことに感想が来て、「続きが読みたい」て書かれたんですよ。こんな事聞くべきじゃないんだろっけど、書いた方が良くいんでしょうか？

結構乗せられやすいんですね……自分。

暇つぶし程度に楽しみにしてる人達に聞きたいですよ。

こっちを優先するのは当然ですけど、更新が遅くなるでしょうけど書いても良いでしょうか？もう一作。

ノリと勢いで書いてるんで、行き詰まって未完のままかソードマスターヤマト的なノリで強制終了するかもしれませんが（笑）

強制終了するのは、もどきのほうですけど。

感想ついでにでもいいですから、意見を聞かせてください。

気軽にお願ひします。

模擬戦 まさかのアイツ(前書き)

第21話

結局『闇の帝王もどきな俺』は連載せずに、これに集中することになりました。

意見来なかった(笑)……………

今回はちょっと、どうかと思う人が沢山居るかもしれませんが、出すキャラが……………ね。

模擬戦 まさかのアイツ

Side 第三者

約1年の特訓により、ある程度は氷輪丸を統べる事がエヴァンジェリンはできるようになった。

尤も、格下相手に使える程度だが……

そこで、アローニーロは模擬戦に移ることにした。

仮想的を使うことで、実践にどれ程耐えられるかを見るための模擬戦である。

制限付きでの模擬戦をさせるのである。魔法、虚閃、虚弾の禁止を課す。

あくまでも斬魄刀をどれ程使えるかを見るので、当たり前である。

問題は仮想的である。初めはアローニーロが『皇鮫后』タイプロンを使って、日番谷VSハリベルを再現しようかと考えたが。エヴァンジェリンが卍解を御しきれてない為に断念した。

場所も被害出無いようにするために、勉強部屋に移した。

そこでエヴァンジェリンは自分が戦う相手を見たのだが……

「なんだそいつは!?!」

驚愕の声を漏らす。だが、仕方が無いのであろう。こんなのが相手では……

「なんだとは失礼だろエヴァ。ワカメ大使に対して」

わかめに簡単な顔と、子供の書いた絵のような手足が生えており、なぜかねじり鉢巻きのようなものを頭(?)に着けている。手に刀を持っているのが、ミスマッチである。

「こいつは、とある高貴な御方がデザインしたキャラクターだぞ」

エヴァンジェリンにとっては、そんな事はどうでもいい。

「そいつ……戦えるのか……？」

「愚問だな。私は貴様よりは強い」

「ビキツ！）ワカメ風情が、生意気だな！」

こめかみに浮き出た青筋がピクピクと動き、エヴァンジェリンの怒りを表している。

「父様！開始の合図を！」

そうしてエヴァンジェリンVSワカメ大使の戦いが始まった。

しかし、エヴァンジェリンに勝てる要素はまったく無かった。

エヴァンジェリンが知るよしの無い事だったが、ワカメ大使の戦闘能力は、朽木白哉の戦闘能力を再現したかなりのハイスペックを誇る。さらに、贗作の千本桜も使う。

流石に共に本物には負ける強さでも、一番得意な魔法を禁じられてるエヴァンジェリンに負ける強さではない。

刃と刃が、火花を散らしながらぶつかり合う。

普通の日本刀であれば、それをするだけでも刃が欠け、本来の切れ

味を無くすであろう。

しかし両者の刀はたかが刃と刃がぶつかり合っただけで欠けるなんてしない。

贗作と言えど、純粹にありえない切れ味と強度を誇る。

よほど無理をさせないかぎり、刃が欠けるどころか折れさえしないであろう。

エヴァンジェリンがワカメ大使から距離を取り、斬魄刀を解放する。

「霜天に坐せ！氷輪丸！！」

解放と共に氷の竜がワカメ大使に向かって牙を剥く。

「散れ、千本桜」

だが、解放した千本桜の前にあっけなく切り刻まれる。

「いくら竜を模そつと所詮は氷。この千本桜に斬れぬ道理など無い」

「こいつにも、そう言えるか！！」

再び氷の竜がワカメ大使に襲いかかるが、今度は計8匹の氷の竜である。

「ただ数が増えたとして、同じことだ」

先ほどの繰り返し。舞散る桜の花を思わせる刃が、氷の竜を再び斬り刻む。

だが、千本桜の斬撃をくぐり抜け、1匹がワカメ大使に肉薄する。

「破道の三十三 蒼火墜」

蒼い爆炎に飲み込まれ蒸発してしまう。水蒸気により靄がかかったようになる。

視界不良は戦闘において致命的である。ほとんどの情報を視覚から得る人間にとって、目くらましはほとんどの場合有効である。

エヴァンジェリンにとって氷の竜が蒸発させられる事態は想定外だが、この状況は好機と取れた。

気合いを入れるために声をあげる事無く、エヴァンジェリンは水蒸気に紛れてワカメ大使に肉薄した。

躊躇い。容赦。迷い。そのような感情はまったく無く。氷輪丸はワカメ大使の体を貫いた

「隠密歩法“四楓”の参『空蝉』」

はずだった……

まるで初めからそこに居なかったように姿が消え、後ろをワカメ大使に取られていた。

すぐに振り向き、来るであろう攻撃を防ごうとしたが、エヴァンジェリンは何もできずに気を失った。

「やはり負けたか……」

エヴァンジェリンが倒れる前にアローニーロが抱きかかえる。

「見事だな、ワカメ大使」

「斬魄刀を持って、10年も経って無い小娘に負けるほど弱くは無い」

「卍解を使えないなら、尚更か」

結果自体はアローロニーロの予想通り。予想外と言えば氷の竜を8匹出したことぐらいだ。

ワカメ大使はアローロニーロの最高傑作である。2つの意味で……それだからエヴァンジェリンが負けたには当然であった。苦い経験だが、為になるだろう。

Side out

Side アローロニーロ

あー、困ってる。なんで困ってるかと言つと。

「ワカメに負けた…ワカメに負けた…ワカメに負けた…ワカメに負けた…ワカメに負けた…ワカメに負けた…ワカメに負けた…ワカメに負けた…ワカメに負けた…ワカメに負けた…」

部屋の隅で自己暗示みたいにならずと繰り返してる。流石にワカメ大使は止めといた方がよかつたか……まさかここまで思い詰めるとは……

結構な時間を生きているが、基本的に他人とあまり関わらなかつた所為で、相手を元氣付ける方法がわからん。

これだから、円滑な人間関係をエヴァ以外と築けないんだ。今、崩

れそうになっているが……

どうするか……

誰かに相談するか？却下。相談できる奴がないならどうする？ほつとくか？

それもだめだ。1人だけの娘だろうが。

だが、何ができる？ボケるか？

ボケたところでなにも変わらない気がするから却下。

ダメな父親だな……娘1人元氣付けることが出来るのか……

如何すればいいんだ……俺

結局、在り来たりな言葉で元氣付けようとする。

「エヴァ、気にするな。アレは結構強く作った、だから斬魄刀だけでは勝てる相手ではない」

「でも……父様は勝てるんだろ。私と違って……」

勝てる。鏡花水月の完全催眠はほぼ完璧だ。攻撃を攻撃と認識できなければ大抵の奴は気付かぬまま殺される。だが、そんな事は口が裂けても言わない、もっとエヴァを傷つけそうな気がするから。というかエヴァ。おまえ、結構打たれ弱かったんだな……

「何度も言うが、気にするな」

「フ……フフフフ……」

やばい……

エヴァが壊れてきてる。

なにも出来ない俺は、頭を抱えることしかできなかった。

Side out

Side エヴァンジェリン

ワカメに負けた……………屈辱だ……………

不意打ちは失敗して、簡単に意識を刈り取られた。

間違い無くあのワカメの方が格上だ。悔しい……………

昔とは違い、父様以外に負ける事なんて無いと思っていた。何百年も生き、実戦を経験してきた。

その中で斬魄刀の経験はたった1年位だが、大抵の奴を打倒せる自信があった。

だがどうだ？あんな変なワカメに負けた。卍解を使えば結果はもう少し違ったかもしれないが……………

もしもの話をして、今の結果が変わるわけでは無い。

まだ扱いきれてない卍解を、扱いきれるようにならなければ勝てない気がする。あのワカメに。

卍解の鍛錬をしなければ……………

だが、まだ未熟な卍解は使うだけで周りに影響を及ぼしてしまう。

……………別荘（ダイオラ魔法球）を使えばいいだけか。勉強部屋も私がつけていた別荘を元に父様が作った物だしな。

使う機会が無いから持つてる事も忘れてたが……………

よし！そうと決まれば別荘に籠って卍解の習得だ。

「父様！」

「もう……………いいのか……………」

？なにがだ？

「私は別荘に籠って卍解の習得をするから、邪魔をしないために入らないでくれ」

「邪魔……」

真祖の吸血鬼の回復力をフルに使って、まさに血反吐吐くような無茶をするつもりだ。
父様が居たら、止めるに決まってる。だから1人でやる。

S i d e o u t

模擬戦 まさかのアイツ（後書き）

出したかった。その一言ですね……

戦闘シーンを想像すると、ワカメ大使がすごくシユール（笑）

番外でもいいから、再戦を書こうとか思っています。

いつになるか解らないが……

感想、ご意見、指摘待ってます。

お気軽にどうぞ。

鍛錬 凍る周辺（前書き）

第22話

感想 開け！ごまドレ様

指摘 フンババ様

ありがとうございます！

3分の1が技説明……まあ、いいか……

鍛錬 凍る周辺

Side 第三者

別荘内はまるで氷河期に入ったように凍り付き、南の島の面影は凍りついた海岸と海位しか残っていない。

中心から離れれば、そんな光景が嘘のように真逆と思える程の気温と光景である。

だが徐々に冷気は減ってきて、元の南の島の気温に近づいていくのだが………

「卍解！大紅蓮氷輪丸！！」

一度は収まってきた氷河期を思わせる冷気が再び戻ってくる。常識に照らし合わせればありえない現象である。

気温の低下という現象を、1人の少女が起こしているのだから……エヴァンジェリンはその未だに溢れ出る冷気を抑えることも出来無
ずに、無駄の多い卍解を維持することに全力をそそいでいた。

だが、いくら気張ろうと背中に浮かぶカウントダウンの氷の華はすぐに砕けていき、30分もしない内に卍解が強制的に解除される。

「グッ！？」

大紅蓮氷輪丸から無差別に撒き散らされていた溢れ出る冷気は、使用者の体も蝕み、人間なら凍死してもおかしくない状況であった。まだ生きているのは、真祖の吸血鬼であるがゆえと言ったところか

……

「オイオイ、ゴ主人。ヤツパリ無理シスギジャーネーノカ？コノ方法ハ」

冷気の濁流が収まる頃合いを見計らって、近づいてきた体温の低下などを気にしない彼女の従者、チャチャゼロが主人に対し止めるように言う。

「まだ……ハアハア……スタートラインにすら……ハア……立って無いんだぞ……」

肩で息をしながらも、気丈にもハッキリと言う。

エヴァンジェリンとて無茶は承知の上だ。碌に維持も出来ず、自分が使うはずの力に食い殺される。真祖の吸血鬼といえども、凍傷は無視できるものではない。

今のままでは戦闘など夢のまた夢と解かっているから、こんな無茶をしているのだ。

「デモ、立ッ前ニブツ倒レンジャーネエノカ？」

「だが、だんだん収まってきているだろ？」

事実、徐々にだが凍りつく範囲はエヴァンジェリンの中心に狭くなっている。

このまま続ければ、周りに影響を及ぼさずに正解の展開も可能になる。そこが、エヴァンジェリンにとってのスタートラインになる。

「なに、スタートラインに立ったら1度ゆっくり休むつもりだ。心配は無用だ、チャチャゼロ」

尤も、今も休息が必要だがな。と、苦笑しながらエヴァンジェリ

ンは人形達に、ベットに運ばれていった。

Side out

Side エヴァンジェリン

「卍解！大紅蓮氷輪丸！！」

いつもと同じように卍解をする。だがしかし、いつもとは決定的な違いに思わず笑みがこぼれる。

右手に纏わり付いた竜を模した氷に、それに連なる翼に尻尾。形自体は変わらないが、かなりの変化をした。

そう、冷気を抑えこんでいるのだ。いままでは卍解をすれば、氷に閉ざされた世界を作り出していたが、今は卍解しても冷気を垂れ流しになっていないから、別荘内は普段と変わらぬ景色である。

スタートラインにようやく立った。これでやっと次に進める状態になった。

次は、技の練習である。説明書に幾つか技が載っているから

オリジナル技はおいおい考えるところ　　それらの練習をするのだ。

説明書 技一覧

「竜霰架」
りゅうせんか

刀で貫いた相手を十字架型の氷塊に閉じこめ、砕く。敵を内側から凍らせた上で砕くので、確実に敵を殺したい際に有効。模擬戦などでの使用は厳禁。　　近距離技

「千年氷牢」
せんねんひょうろう

氷柱を大量に発生させて敵を囲み、敵を閉じ込める巨大な氷塊を生

成する。敵によっては閉じ込める際に抵抗されたり、閉じ込めても中で存命の可能性があるので、殺す際には次の一手を考えとく必要有り。氷柱の形を変えれば、牢屋としても使用可能。中〜遠距離技

「群鳥氷柱」
むぐりこりつじょう

敵に向けて大量の氷柱を放つ。魔法の射手の強化版と考えて使うと無難。雑魚でない限り決め技にはならないので様子見や、近づきたくない場合に有効。中距離技

「氷竜旋尾」
ひょうりゅうせんび

氷で形成された斬撃を敵に向けて放つ。相手が初撃を上空に避けた場合は、下記の氷竜旋尾・絶空のコンボに繋げることがオススメ。

近〜中距離技

「氷竜旋尾・絶空」
ひょうりゅうせんび ぜっくう

氷の斬撃を上空にいる相手に放つ。対空技なので使う機会があまり無いかもしれませんが。対空技

「氷天百華葬」
ひょうてんひゃっかそう

冷気を操り天候を曇りに、そこから雪（触れたら瞬時に華のように凍りつくのを）を大量に降らす。ただ凍りつかせるだけなので、内側が凍って無い事も。場合によっては千年氷牢と同じで中で存命の可能性有り。本当に大量に雪を降らせる場合は、周りに気を使いましょう。巻き添えで味方を凍らせる危険有るので、1対1か、1対多以外では使用は控えましょう。

……わざわざ父様はこれ考えたのだろうか……

対空技……要るのか？こいつを抜かすと載ってる技は5つか……

どれも炎を使われたら簡単に破られそうだな、氷を使う上では当然だが。

氷の強度や温度は調整可能だから、「燃える天空」でも使われん限り大丈夫か？

なんにしてもこれらは、使えたほうがいいだろ。

まずは群鳥氷柱だな、イメージし易いし簡単そうだしな。

こうして私の技練習が始まった。

Side out

Side アーローニーロ

心配だ。エヴァが、別荘内でどんな事をしているかがわからない。鍛錬をしている事は確かだが、どのような鍛錬をしているかが気になる。

無茶や無謀な事をしているのではないだろうか……

やはり卍解の鍛錬には、俺が同行するべきだったか？流石に雀蜂雷公鞭とは違い、間違っって自分を吹き飛ばしました。なんては、なっって無いだろうが大紅蓮氷輪丸だ、氷漬けになってしまいました……有りうる。

冷気を自在に操れなければ、それ位なってもおかしくない。

不老不死だから死なないだろうが、精神的に良くない。

別荘に入るべきか。入らざるべきか。迷う……

贗作と言っても、馬鹿にできない力がある。卍解が使えるのなら、なおさらだ。

信じて待つか…… 入る前に邪魔と言われたしな……

なにかやってないと気が紛れないな…… 霊子変換機の研究でもするか……

S
i
d
e

o
u
t

鍛錬 凍る周辺（後書き）

短い部類ですね。約2400文字。

感想、誤字脱字の指摘。お気軽にどうぞ

模擬戦 皇鮫后相手に（前書き）

第23話

感想 ヴラド＝ツエプシュ様、blame様

ありがとうございますー！ー！

模擬戦 皇鮫后相手に

Side 第三者

エヴァンジェリンが別荘から出てくると、アローニーロが別荘に入ろうとしたのは、ほぼ同時であった。

アローニーロは気を紛らわす為の研究を終了してしまい、やはりエヴァンジェリンが心配のあまり様子を見に行こうとしたところで。

エヴァンジェリンは技を一通り使えるようになったので、
チヤチャゼロやアヨンでは模擬戦の相手にならないので
アローニーロに模擬戦の相手を頼もうとして出てきたところである。

「……………」

両者の間に微妙に気まずい雰囲気流れる。

アローニーロは「エヴァが怒っているのでは………」と、考え。

エヴァンジェリンは「父様はやっぱり、心配してくれてたのか」と、嬉しく思っていた。

しかし、両者は相手に考えを読まれないようにしている為に、相手の考えを完全に読み切れないため。

どちらも相手の出方を見ていた。が、先に動いたのはアローニーロであった。

「エヴァ、もう正解を習得したのか？」

「戦闘に使える状態にはなった」

アローニーロの質問にエヴァンジェリンは胸をはって答える。

「そこで、父様に模擬戦の相手をして欲しんだが……いいか？」

アローニークが娘のその程度のお断りを断るわけもなく、別荘に模擬戦をするために、今度は親子で入るのだった。

2人は、海岸ぞいで向かいあっていた。

アローニークは手に皇鮫后を、エヴァンジェリンは手に氷輪丸を握っている。

エヴァンジェリンは自分の父様が、見慣れない変わった剣真中に空洞がある　　を握っているのを疑問に思うが、考える前に邪魔が入る。

ガキッッン！！！！

真正面からの正々堂々の一撃。

無論、エヴァンジェリンは反応し、氷輪丸で受け止める。

「始め！の合図は無いのか？父様」

「必要か？準備が出来ているというのに」

そうだな。と、エヴァンジェリンが頷くと同時に、斬魄刀を解放する。

「霜天に座せ！氷輪丸！」

解放と同時に、アークニーロに至近距離から氷の竜が襲いかかる。が、すぐに距離を取る。だが、追従するように氷の竜がアークニーロとの距離をゼロにしようとする。

オーラ・アスール
「波蒼砲」

皇鮫後の空洞に溜められた魔力が、氷の竜めがけて放たれる。拮抗などせずに、波蒼砲により氷の竜があっさり碎かれる。

その光景をエヴァンジェリンが、ただ見ているだけなどせずに新たに出した氷の竜　総勢13匹　をアークニーロに襲いかからせる。

13匹の氷の竜が殺到しようとも、アークニーロにとっては恐るに足らなかつた……

1匹、1匹、確実に打ち碎いていく。堅実な方法だが、囲まれている状況でそれをするのは至難の業である。

尤も、氷の竜全部をエヴァンジェリン1人だけで操っている為に、エヴァンジェリンの死角になるとこへの攻撃が疎かになっていたりする場所を、瞬時に見極めて、行動をしているのだが。

「やはり、始解ではこの程度か……」

全ての氷の竜が碎かれはしたが、並の魔法使いならそれだけで片が付いている程の力を持っていた。

「氷の竜など、鮫の一撃で沈む。討て、皇鮫后」

アークニーロが斬魄刀の解号を口にすると、水が二枚貝のような形でアークニーロを包み込んだと思ったら、水が回転しだし、今度

は巻貝のようになる。

内側から水を切り裂いて現れたアローニーロに変化は無いが、持っていた皇鮫后は鮫の頭部のような大剣に変容していた。

「卍解！大紅蓮氷輪丸！！」

アローニーロの解放合わせ、エヴァンジェリンは卍解をして迎撃の用意をする。

自分の知っている斬魄刀と違う。エヴァンジェリンは解放のしかたの明らかな違いを見て警戒を強める。

カスケード
「断瀑」

大量の水がエヴァンジェリンめがけて、押し潰さん勢いで襲いかかってくる。

だが、水である限り、大紅蓮氷輪丸の前では攻撃の材料でしかない。

「群鳥氷柱！」

断瀑の水を利用して、無数の氷柱を飛ばす。

イルビエンド
「灼海流」

エヴァンジェリンが凍らした水を、アローニーロが氷を溶かして再び水にする。

「なっ！？」

エヴァンジェリンが驚き、動きを止める。その隙を見逃す訳もなく一気に距離を狭め、近距離から攻撃をする。

「虚閃」

剣先から放たれた灰色の閃光が、エヴァンジェリンを飲み込む

「エヴァ、相手の武器が自分の武器になる。そう考えたら、逆も考えろ」

氷の塊に向けて、アールローロが言い放つ。

「だが、虚閃を撃たれる瞬間に、自分を氷で包む。いい判断だ」

無駄な部分を落とした氷の中から、エヴァンジェリンが無傷で出てくる。

「冷気を自在に操れる。そんな能力がなかったら、間違い無く手傷を負っていたさ」

「そのくらい出来て当然だ。むしろ出来なかったら落胆していた」

「父様の期待に応えれそうか？」

「もう少し戦わなければ、わからんな……」

「十分！」

最初のように、真正面から両者が衝突する。

ただし、それぞれ自分の武器となるモノを追従させて、だが。両者が打ち合うたびに氷と水が入り乱れ、光を反射している。

固体と液体の戦い。そう呼ぶに相応しい光景である。

氷柱が水の障壁を貫こうとすれば、水は水温を上昇させて氷を溶かして、自分の総量を増加させる。

逆に、水が氷の障壁を溶かそうとすれば、触れた水を逆に氷結していき、自分の総量を増加させる。

だが、限界が近い。

「ハハ……父様は、まだまだ余裕そうだな」

「なに、親が子より前を歩く。よくあることだろ？」

「父様は、一生私の前を歩いてそうだな」

エヴァンジェリンの背中に浮いている氷の華は、ほとんど砕け散ってしまった。

限界が目と鼻の先までできている。だから、次の一撃で最後にする。

「さて、父様。見ての通り、私はもうすぐ限界だ。そこで、いつだかのように最後の―撃をだす。」

「異論は無い。全力で来い！」

互いに笑うと、アローニーロは仮面をしているから表情は見えないが…… 勢いよく突撃する。

「竜霰架！！！」

「ラ・ゴータ戦栗！！！」

大紅蓮氷輪丸と皇鮫後の剣先が衝突する。

皇鮫後は刀身から水をほとばしらせながら、大紅蓮氷輪丸は冷氣により水を凍りつかせながら、どちらも一歩も退かずにぶつかり合う。

徐々に、エヴァンジェリンが押され始めた。

均衡が崩れていき、アローニーロの勢いを止められないエヴァンジェリンは、打ち飛ばされた。

それと同時に、最後の華が砕け散り正解が解ける。

地面に満足な受け身を取れぬまま、打ちすえられそうになるが、アローニーロが受け止める。

エヴァンジェリンは父様に受け止められたと解ると、満足そうに笑い、すぐに眠りにつくのであった。

「まったく……終わると同時に眠る。いい御身分だな……」

そのようなことを言いながらも、エヴァンジェリンをぞんざいに扱うわず、むしろ壊れ物を扱うように丁重に扱い、背負う。

飛ばされた際に、持ち主の手からはなれた氷輪丸を回収して、エヴァンジェリンをベットに寝かせるべく、移動をする。

起きたエヴァンジェリンは、アローニーロに怒られることになった。

模擬戦で竜霰架の使用は厳禁と、説明書に書かれていたのにもかかわらずに使ったからである。

模擬戦 皇鮫后相手に（後書き）

まず補足を

本編で使った技の戦害は、本当は刀身から水を放つ技なんですけど、今回は放たずに刀身に纏ったまま、使いました。

一護が月牙天衝を纏わせたまま斬りかかったをイメージしてください。（ただし刀身からでているのが水のため、あまり迫力が無かったりする）

それと、破面の斬魄刀の贗作を出しましたが、攻撃などに必要な部分しか出ません。だから皇鮫后は剣だけで、衣装は再現されませんでした。

そうした方が、都合が良いので……

それに衣装まで再現だと、今回の話でアローロニーロにあの露出度の服を着て貰う必要があったので、完全再現は無しにしました。

再会 感動なんてないが（前書き）

第24話

感想 開け！ごまドレ様

ありがとうございます

今回、やっと麻帆良に行きます。
原作はもうちょい先ですが……

再会 感動なんてないが

Side アーロニーロ

いいかもしれんな、これ。

島の外に出かけた際に、偶然にもタカミチに会って手紙を渡されたのだ。「もしよければ、来てください」という言葉と共に渡されたのだが。手紙には住所が書かれており、そこは学園都市だというのだ。

さらに、認識阻害の結界などが張っており、魔法使いにとって都合のいい場所らしい。

そこなら、エヴァを学校に通わせることも出来るだろう。エヴァは（俺の方が酷いかもしれないが）協調性が無い。集団で過ごす機会が、今迄ほとんど無かったから、しかたが無いと言えそうなのだが……

学校なら、嫌でも集団の中で過ごさなくてはならない。それに、魔法関係者居ようと、学校生活に関わってくる奴は、そこまで多くはないだろう。

魔法世界の学校に通わせて協調性を上げよう。と、一時期考えもしたが、エヴァが英雄の1人なので謙遜されたり、変に人が集まったりしかなないので、中止した。

問題は、エヴァが承諾するかどうかである。無理矢理通わせることは可能だが、あまりしたくは無い。

……とりあえず聞いてみるか

「エヴァ、話がある」

「ん？なんだ？」

エヴァが、自分の新しい服を作っている途中だが、手を一旦止めてこちらを見る。

「学校に通ってみる気は無いか？」

「唐突だな。しかし今更、学校なんて行く必要ないだろ？必要なことは、父様から教わればいい事だし」

「そうかもしれないが、友達と言える奴はいるか？俺は居ないが……」
自分で言っというてなんだが。正直悲しいな……

「……居ない……な」

……だよな

「友達が出来る。いい経験になると思うが？」

「そいつらが、確実に先に逝くとしてもか……」

エヴァは失う事を極端に恐れる。一度、全てを失ったが故にだろ
う……

「思い出は残る」

とてもクサイ言葉だが、事実でもある。

「……たしかに……そうだな」

「では、行くか？」

「ああ、そうだな」

そうして、エヴァと共に麻帆良に向かうのであった。

Side out

Side タカミチ

驚いた。まさかアーク二ーロさんが本当に麻帆良に来るとは……あの人（？）は基本自由奔放というか、完全自己中心の考えで動いているみたいだから、来たとしてもこっちが忘れた頃にでも来るのではないかと考えていたが……割とすぐに来る事になった。

思えば会話をしたことも、あまり無いな……

いつも仮面をしていたから、小さかった頃は怖がって、あまり近づこうともしなかった。

それを察してか、アーク二ーロさんは、あまり踏み込んでこようとはしなかった。

反対に、エヴァンジェリンとは結構、話をしたっけな。

でも、思い返すと8割位アーク二ーロさんの事を一方的に言っていたような気が……もしかして、洗脳しようとしてたのか？そういえば……あまり怖がらなくなってたような……

うん。忘れようか。そうしようか。

予定ではそろそろ着くはずだけど……

「後ろを取られているが、大丈夫か？」

突然後ろから話しかけられたので、少し驚いたが振り向き相手を確認する。

……誰？歳は30代位で、金髪を短めに切り揃えており、顔はどこか優しそうな感じがする男性が、娘と思われる子供と右手で手を繋いで、反対側の手では旅行鞆を持っている。

……娘？よくよく見ると、エヴァンジェリンじゃないか……
……ってことは……

「アーロニーロさん？」

「随分意外そうだな。タカミチ」

そりゃそうだ、てっきり認識阻害でも使っていつもの服装で来ると、考えていた。

だが、実際には常識の範囲内の、普通の服装で仮面を付けずに来たのだ。

仮面の下はあんな顔だったのか……

「おい、タカミチ。言っておくが、父様の素顔はコレではないぞ」

「魔法で変えてあるからな」

……どうやらまだ仮面を被っているらしい……

「とりあえず、ようこそ麻帆良学園へ」

握手をしようとアローニーロさんに手を伸ばすが

「悪い、両手がふさがっている」

……どちらかの手を離せばいいだろ！と、思ったのは当然だろう。

Side out

Side アローニーロ

タカミチと合流して、学園長室に向かっているのだが……

「なぜ、女子中学校に学園長室があるんだ？」

「さあ……」

普通は大学に在るんじゃないのか？タカミチは教員だから目立たないが、俺は目立っている。

「父様。やっぱり、もう少し顔を悪くした方が良かったんじゃないか？かっこいいせいで、余計に目立ってるぞ」

たしかにそうかもしれないが……

「このくらいのレベルじゃないと、エヴァの父親と納得できんだろ？」

エヴァの容姿はレベルが高い。だから親も、レベルの高い容姿の方が納得できるだろう。

悪いより良い方がな……アローニーロ・アルルエリの素顔を考える

と……

「中で学園長がお待ちです。できれば、粗相のないようにしてください。あと、人間ですから」

扉をくぐると、そこにはぬらりひよんが居た……

これが、にんげん？

「フオツフオツフオツ、初めましてじゃの。アローニー口殿とエヴァンジェリン殿で、あつてるかの？」

ぬらりひよんが口で俺に、目線でタカミチに問いかける。

「信じられないか？」

「大戦では、『仮面の英雄』で知られておるし、素顔の情報はまったくくないからのう」

素顔（海燕の顔）をエヴァ以外に見せた事はないから当然だな。

「素性が全て不明で、大戦後の2年後は消息不明だったからな。本物という確証が取れんのは不安か？」

「名を語る偽物が何人も捕まったからのう。アローニー口殿の場合、英雄の中で一番変装が簡単じゃからのう」

それは知っている。どいつもこいつも下らん事で捕まっていた。

「とりあえず、本物かどうかの確認は今夜戦つてもろうとして。今は本物と仮定して、話を進めようかのう」

「それで構わん。で？なにをして欲しんだ？」

「まずは教師w「馬鹿かお前は」……あんまりじゃないかの」

いや、普通だと思っぞ。いきなり教師だというのは。

「俺に教師は無理だろ。というか、教員免許を持っていない」

戸籍が必要という理由で、ほかの免許なども持ってないが……

「そんなものどうにでもなるんじゃが……では、夜の警備と広域指導員は頼みたいのじゃが」

「内容によるな」

「夜の警備は、夜にこの麻帆良に侵入してくる敵の拘束じゃな。一口テーシヨンを組むから、毎日ではないぞ。

広域指導員は昼間に騒ぎが起こったら、それを鎮圧するのが仕事じゃ。適当にしてくれて構わんがな」

別に構わんだろ。どちらも問題のある仕事では無い。あとは

「金次第だな」

「こんなものでどうかの？」

結構な額だな……

「これで月給か？」

「場合によっては、夜の警備で緊急要請があるから、その際に追加されるぞ」

悪くはないな……

「あと、エヴァの入学手続きをしたいんだが」

「フオ！？娘を学校に通わせるのか？」

そんなに意外か？

「まあ、良いじゃろう。学年はどうするんじゃ？」

見た目を考えると……

「中学1年だな」

「時期が時期じゃから、来年になるが構わんかの？」

エヴァを方を見て、良いかどうか確認すると頷いてくれた。

「問題無い」

「では、今夜0時に世界樹前の広場での。タカミチ君、2人の案内を頼む」

タカミチの案内で場所を移すのであった

「ここが、僕の部屋です」

「わざわざ、ここまで連れてきて聞いて欲しい事とはなんだ？」

なにが悲しくて、タカミチ独身男の部屋に行かなくてはならない。

「実は、アスナの事でお話が」

黙って次を促す

「今彼女は、神楽坂 明日菜として、普通の女の子として暮らしています。実は、ガトウさんが死んだあとに記憶を封印しているので、お2人の事を憶えていません」

「あいつが普通に？だとしても、そのうちまた此方側に戻ってくるな」

「……なぜです」

「こんな場所では、いつ魔法の存在を知るかわかったもんでは無い。それに、あいつの能力を忘れたか」

「重々承知しています」

「なら、言うことは無い。で？話はそれだけか？」

「あと、今日は何所に泊まるんですか？僕が迎えに行くので、知らないで困るので」

「ああ、この紙に書いてある場所だ」

あらかじめ書いておいた紙を渡す。

「……高級ホテルじゃないですか……」

「なにか問題でも？」

「いえ、なにも……」

もう話す事も無いだろうとホテルに行くこととするが、

「そういえば、麻帆良に居る間の家はどうするんですか？」

そんな質問で引き留められる。

「なに、適当な場所に建てるつもりだ」

S i d e o u t

再会 感動なんてないが（後書き）

実は、年単位でとんでるんですよ。

気ニシ無イヨナ……

次の本編はよくある展開のV S タカミチです。

…どう料理させようか……

番外 記念というボツ案曝し(前書き)

注意 前回の番外とは全然趣旨が違います。

見る必要もありません。ネタバレもちよっただけあり。

それでもいいなら見てください。

25話を期待してた人には、ごめんなさい……

つい、書いてしまいました……

番外 記念というボツ案曝し

今回はお気に入り500突破記念と総合 PV・ユニークアクセス
累計293 / 601アクセス・43 / 158人 突破記念（書き
始めたときは）です。

本編にまったく影響無し。テンションがおかしい事もあり。台本形
式。になります。

見なくても良いのか？

大丈夫だ、問題無い

アローニートロ（以下ア表示）「随分とまあ。 が酷いな、ア表示と
は」

エヴァンジェリン（以下エヴァ表示）「仕方が無いんじゃないか？
正直父様の名前って、略称が付けにくいだから」

カナリヤ（以下カナ表示）「だよな。 ロニという選択肢があつた
けど頭文字を使った方がいいから、そうなんだし……」

ア「……………」

エヴァ「……………」

カナ「…なに。なんで黙るの？」

ア&エヴァ「いや、作者が出てくるとは思わなかったから」

カナ「良いじゃないか……出てきたって……」

ア「今まで、出てこなかったくせに」

エヴァ「要るのか？おまえ」

カナ「……冷てえ……キャラが作者に冷てえ……」

ア「お前の設定通りだろ？」

カナ「確かにそうだが、作者は優遇しろよ！神だぞ！！」

エヴァ「その幻想を凍り尽くす！卍解！大紅蓮氷輪丸！！」

カナ「死んだ（笑）」

ア「邪神は封印されたか……」

カナ「トラップ発動！！俺が犠牲（笑）になった時、タカミチ、学園長、千雨、さよを強制召喚する……！！」

ア&エヴァ「……」

タカミチ（以下タカ）&学園長（以下学）&千雨（以下ちづ）&さよ「……」

ア「本編に出てきて無い奴まで出しやがった……」

エヴァ「修正が必要だな……」

ちづ（なんだよ……この空気は）

さよ（……どうしたらいいんでしょうか）

タカ（……帰っていいのかな）

学（なぜ僕だけ名前じゃないんじゃ……）

ア「というか、これはなんなんだ？」

エヴァ「てきとうに語ったりすればいいと、作者が言ってたが」

ア「あいつら必要か？」

ちづ&さよ&タカ&学「ひどっ……」

エヴァ「作者が出したかったから、出したんだろ。アヨンやワカメ大使のように」

ア「ありうるな、これだって必要も無いのに書いてるからな」

学「それより、なんで僕だけ学園長なんじゃ？名前じゃなくて役職名なんじゃ」

ア「お前は本編で自己紹介して無いだろ？」

学「作者が「こいつの台詞少なくていいか……」とか考えて、削った

んじゃろつが……!!」

エヴァ「本編ではもう知ってる事になってるしな」

ちづ「そんな事より、なんで本編にでてない私まで召喚されたんだよ……!」

さよ「私も、まだ出てませんけど……」

ア「お前等はこっち側になる予定だぞ」

ちづ「それ、どういう事だ?」

ア「あくまでも予定だがな。贗作の斬魄刀を持たせる予定だ、持たせるのも決まっている。少し微妙な奴だがな。お前は」

さよ「あの、私は?」

ア「滅却師化予定。クインシー宿る体義骸にいろいろして滅却師にする」

エヴァ「テンプレで神がチートボディをやるようにな」

ちづ&さよ「……………」

タカ「帰っていいかい?」

ア「ダメだ」

エヴァ「本編じゃ言う機会がなかった事をいうぞ。タカミチ、随分成長いや、老けたな」

タカ「余計な御世話です！！あと別に言わなくてもいいでしょう！！」

ア「隠れ家（京都 紅き翼と俺等と逃走 次に行くを参照）を使って修行してた設定だから、原作よりもちよつと老け気味という悲しい事実」

エヴァ「ボツ案では、あまり老けさせない案があったのにな……」

タカ「なんですかソレ！僕は知りませんよ！」

ア「俺が修行用に、老化防止の薬をタカミチにあげるという案か……そこまで仲良くなりそうになかったからボツになったやつだったな」

タカ「なんてご都合主義な薬だ……でも、欲しかったorz」

エヴァ「そういえば、なんで隠れ家をガトウにくれてやったんだ？たいして仲良くもなかったのに」

ア「捨てるのも勿体無いのと、メノスの森に入れたお詫びの意味を込めてな」

タカ「ガトウさんは、結局一度も使いませんでしたよ。警戒して」

エヴァ「メノスの森の二の舞になる事を警戒してか。当然だな」

タカ「僕もクルトも、喰われかけましたからね……」

エヴァ「アスナとチャチャゼロは、楽しんでたがな」

タカ「1日無駄にした感が、半端無かったですよ。まともに修行出来ませんでしたし」

ア「たいへんだったな〜（棒読み）」

タカ「……………今なら殴れそうな気がします」

エヴァ「気がするだけだから止せよ。中つても、中らずとも大変な事になるからな」

タカ「居合い拳でやれば……………」

エヴァ「……………（黙祷）」

ア「サクサクサクサクサクサク（ 詫助でタカミチにダメージを与える音）64倍か……………」

エヴァ「止せと言ったのに……………」

ア「タカミチの体重を70キロと仮定すると……………4480キロか。普通に自壊する重さだな」

エヴァ「ボツ案にいくか。完全なる世界に組するという案があった。私が正解の修行中にな」

ア「ああ、あれか。活動報告に載せた奴だな」

エヴァ「じゃあ、次！模擬戦 皇鮫后相手にで、最後は氷天百華葬

を使う」

ア「これは、場面を想像したら迫力が無いという理由でボツになったやつか」

エヴァ「そうか？ 決め技だろ？」

ア「俺が、防ぐ際に断瀑を使って迎撃すると、届く前に全部凍ってしまう。と、想像するとな……」

エヴァ「吹雪みたいにすればいいんじゃないか？」

ア「考えたけど、熱くないんだとよ。作者が」

エヴァ「そんなもんか？ では次。コラボ 仮面 騎士でアーロニーロが勝つ」

ア「勝つには、キャラじゃない行動をする必要があつてボツになったのか。ちなみにサブタイのは、と、が入る。コラボ先のサブタイ風に考えた結果だな」

エヴァ「キャラじゃない行動？」

ア「例えば、初っ端から卍解使用。とか、鏡花水月を真剣勝負で使う。などだな」

エヴァ「途中からでも、巻き返せたんじゃないのか？」

ア「帰刃を使った時点で、負けたようなものだ」

エヴァ「なんでだ？」

ア「あの時は、回復の意味合いが強かったからな。そうしなければならぬほどの、ダメージを与えられたんだ」

エヴァ「宝具化した雀蜂雷公鞭は、そこまで強力なのか」

ア「では、次に行こうか。京都 両面宿儺で、両面宿儺をノイトラ化」

エヴァ「必要も無いのに戦力増強か？」

ア「ただ単に、作者の気の迷いから来た案だな。ここでもスクナを戦力にしよう。つてな」

エヴァ「余所では少ないが、戦力にしているところもあるからな」

ア「だが、修学旅行で出す為にボツ。それと批判が凄そうだからな」

エヴァ「修学旅行ではしないのか？ノイトラに」

ア「しない予定だな」

エヴァ「次は、クルト破面化」

ア「最初からする気は無いんだが……」

エヴァ「つつこまれたな、クルト仮面化でネギ勝てねえWWWって」

ア「あと、修学旅行での敵を強化する案もあったが。接点を作ろう」

と考えた時点で、帝国の英雄である俺等は絶対に受け入れられない
と思いついた訳だ」

エヴァ「帝国の英雄にした時点で、ダメになっていたわけか……」

ア「無理があるが、変装して強化する。が、頭をよぎったが、本当
に無理がある。そこまでする必要が無いしな」

エヴァ「次は、戦争 決戦で創造主ライフメーカーと戦う」

ア「負傷の霊圧を察知して、助けに行ったらそうなるが。そこまで
親しくないし、危なくなったら即逃げる算段だったしな」

エヴァ「私だったら？」

ア「即助けに行く」

エヴァ「逆の立場でも、私も助けにいくぞ」

ア&エヴァ「がっっ（抱き合う音）」

カナリヤ「今回はこれで終了です。次があるかはわかりませんが…
…」

番外 記念というボツ案曝し(後書き)

ア「なんだ？終わったのか？」

エヴァ「そうみたいだな。ここ後書きだぞ」

ア「しかし、ボツ案よかったのか？曝して」

カナ「いいよ、この話には感想は来ないだろうし」

エヴァ「来たらどうするんだ？」

カナ「5件以上来たら、ここのアールローロを第四次聖杯戦争にキヤスターのクラスでの参戦の短編を書く」

ア「一度にそんな来た事ないだろ」

カナ「だからだよ。正直思い付きだから」

エヴァ「闇の帝王もどきな俺も、似たようなノリで書いてたな……」

見世物 VS タカミチ (前書き)

第25話

感想 竜華零様 妖様

アノ番外分 蒼月璃煌瑠*様 オイラム様

二つ驚きましたね。

感想に竜華零様が書きこみしてくれた事と、前回の番外に感想が来た事です。

一つ目は見てくれてたのかと言う驚き、二つ目は前回の後書きであるように来ないものと考えていたけど、来たよ……って感じですね。

ただし、ボツ案にツッコミ入れずにアローニーロの参戦を見たい様子で……

見世物 VS タカミチ

S i d e このえ 近衛 このえもん 近右衛門

学園長じゃぞ。前回（番外）と前々回（24話）でみなわかっておるじゃろうがな。

しかし、今回の招集に随分と集まっておるな。流石は、英雄のネームバリューと言ったところかの。

誰もがアルルエリ親子が現れるのを、そわそわして待っておるな。中には直立不動で精神統一して待っておる者もおるが。

フォツフォツフォツ。紅き翼程では無いだろうが、目標にしておる者もおるし。強さは両方の意味で知れ渡っているから、受け入れに多少の反発があるかもしれないんが問題無いじゃろう。

……おそらく、いや、絶対に、関西呪術協会が2人の存在を知ったら、攻勢を強めてくるだろうじゃろう。その分はアールロニー口殿にがんばってもらおうかの。

しかし、遅いのう。ん？なぜみなこっちを凝視しとるんじゃ？

「後ろを取られているが、大丈夫か？」

「フォツ！？」

後ろをバックじゃと！？

「アールロニー口殿。老人を驚かすのは止めてくれんかの……」

「もう少し後ろに気を配るんだな」

「まったく気付かなかったなじじい。前線に出れないんじゃないのか？」

おぬしら2人は、老人にもっと気を使った方が良いと儂は思うがの今は、よく知られている格好か…

「来ているなら来ていると、教えてくれても良いじゃろうに……」

「ついさつき来たからな。しかしタカミチといいお前といい、平和ボケしてるのか？」

「このじじいは、純粋なボケだと私は思うぞ」

容赦が無いの……おぬしら

「ところでタカミチ君はどこじゃ？」

「此処に居ます」

……なんでタカミチ君も一緒になって、儂の後ろに回り込んでおるんじゃ……

仕切り直しが必要かもしれんのか。

「さて、必要な者が来たから紹介しようかのう。先の大戦で英雄になった、アローニーロ・アルエル殿と、その娘、エヴァンジェリン・A・K・M・アルエル殿じゃ。このたびは、みなと一緒に夜の警備をしてくれることとなった。聞きたい事がある者は居るのか？」

「彼は本物なんですか！」

やはりきたか。予想の範囲内だかの。

「実力を確認する為と、本物かの確認の為にタカミチ君と戦ってもらう。本物なら、タカミチ君に勝てるじゃろう」

「それなら……」

タカミチ君は儂を除くと学園内最強だからの。実力は確証できるから、みなが納得できる。

エヴァンジェリンの相手はどうしようかのう。結界で弱体化しておくはずじゃが……

「では、始めようかのう。2人とも前に出てくれ」

Side out

Side 第三者

静かな夜だというのに不釣り合いな、ギリギリまで張り詰めた緊張が充満している。

それを発しているのは、例外を除いた世界樹前の広場に集まっている人たちである。

誰もが、これから戦う2人の一挙手一投足を見逃さないために、集中している。

滅多に見れるものではない。それが、集まった人たちの共通認識であった。

彼、彼女らが知る限り、タカミチ・T・高畑は戦士としては最高の

部類に入る。

対するアローニーロ・アルルエリは、誰もが知っている英雄の1人である。

この場に、実力を直接見た事があるのは2人しかいないが、英雄と知られてるように、その実力は伝説のようになっていく。

曰く山を消し飛ばす程の、威力の魔法を使える

曰くドラゴンを刀一つで斬り殺した。

曰く古代上位魔法を無詠唱で使える。

曰く、首を刎ねた相手の数は数え切れない。

曰く、悪魔を殺すことができる。

やや間違いもあるものの確かにどれもできる事である。

「アローニーロさん、先に謝っておきます。すいません」

タカミチの突然の謝罪に場は騒然となる。誰もが、なぜ？と、疑問を隠さない。

「これは、あなたの技だというのに」

タカミチが上着を脱ぎ、上半身を露出させる。

「瞬間！！」

タカミチの背中と肩にナニかを纏う。2人以外はソレが何なのかは分からずに混乱するが、

「まだ上があるだろ？」

アローニーロの一言でタカミチの表情がさらに鋭くなる。

「……怒らないのですか？技を盗まれたのに」

「使えば誰かが模倣する。よくあることだ、それに一々怒るようではな……だが、お前に見せた事は無いはずだが？」

「エヴァンジェリンさんから、コレがあると、話だけは聞いた事があるだけです。そこから、独学で編み出しました」

「なるほど。だから少し歪こじなのか」

「実物を見たことが無いもので」

「だとしても、大したものだ。エヴァは実物を見て魔法での再現がやっとだったのに、お前は話を聞いただけでそこまでいった、ソレは本物だ」

「ありがとうございます」

感極まったのか、涙を流しながらタカミチが感謝の言葉を言う。

「泣くのは、俺に勝ってからにしろ。尤も、勝てんだろうがな。それと、上をだせ」

「わかりました。咸卦法！」

究極技法 咸卦法

気と魔力を融合させたものを纏い、自分を強化する。だが、気と魔力は反発し合うために、普通であれば融合させるなんてことをすれば爆発しかねない。

咸卦法と瞬間が混ざり合いより素早く、よい鋭く、より強力にな

っている。

「やはり使えるようになっていたか……では、ノクトウルナ・ニグーレーディニス『**黒衣の夜想曲**』
verギリアン』」

それに対抗するべくアローニーロが選んだのは同じ選択肢ではな
く。

黒衣の夜想曲 操影術の近接戦闘最強奥義である。

使い魔を背後に負って操るそれは、近接戦闘であれば非常に強力な
魔法である。

アローニーロが今回背負っているのはverギリアン。大戦で兵器
として運用した、大虚と同じ見た目である。

「さて」

「正々堂々」

「勝負！！！」

ほぼ同時に駆け出し、2人は立っていた所のほぼ中間でぶつかり
合う。

速さならタカミチ、手数ならアローニーロが勝っている。

アローニーロが使い魔と共に攻撃すれば、タカミチは2倍の速度で
両方の攻撃を迎撃する。

逆にタカミチが攻撃すれば、アローニーロは2倍の手数で封殺する。

見ている者たちからすれば驚愕でしかない。両者共に譲らずに、同
じ位置で真正面から殴り合っているのだ。

全員がどちらの相手をして、同じ状態にはならない。

タカミチを相手にすれば、あまりの速さに反応できずに殴られ。

アローニー口を相手をすれば、その手数に押されて殴られるだろう。だが、そんな硬直状態は長く続かずに、タカミチが後ろに下がって距離を取る。

「貫殺 居合い拳!!」

それは、貫通力を重視した居合い拳である。相手の防御を貫き内側に侵入する一撃を何発を打ち出す。

豪殺 居合い拳を大砲に例えるなら、これはスナイパーライフルである。

影の障壁を何枚も貫き、アローニー口に肉薄するが、届かない。受け切れないなら、避ければいい。幼稚な答えに思えるが、確かな答えである。

アローニー口は向かってくる居合い拳を全て紙一重でかわしながら、タカミチに近づいたところで、背中を使い魔がアローニー口から離れてタカミチに纏わり付く。

「なっ!?!この!!」

肩と背中には既に瞬間により纏わり付けられないが、他の場所は……動けないタカミチをアローニー口が殴りかかる

「降参か?」

が、寸止めしてタカミチに聞く。

「まいりました」

負けたというのに、晴れやかな顔をしてタカミチが宣言する。

S i d e
o u t

見世物 VS タカミチ（後書き）

タカミチは善戦したよ。

ただしアールローニー口は身体強化系を未使用だな！！

黒衣の夜想曲は、追加兵装みたいな解釈で合ってるんですよね？

まさか術者の動きを真似るだけ、じゃありませんよね……

ちなみにverギリアンは使い魔の見た目が、個の無いギリアンです。

本編で使いませんでしたけど、虚閃を撃てます。

次は、エヴァと誰かを戦わせようかと思ったんですが、エヴァは弱体化パッチを当てられています。ソレを理由に戦闘回避か、詳しく描写せずにそんな事があった。

の、どちらかにしようかと考えているんですけど……少しご意見をください。

6月5日、つまり明日までですが……

それまでに設定でもまとめるので……

麻帆良入り時の設定（前書き）

前回書いたのよりは、詳しくなっている？

麻帆良入り時の設定

アローニーク・アルルエリ

本作の主人公

アローニーク・アルルエリの力（転生時にかなり、改善されているもの）と開発能力と詫助（本編では未使用）、鏡花水月（ちよつとしか出てない）、神鎗（嘘吐解が可能。つまり音の500倍の速度で伸び、13?が最長）を、もって転生した。

特に明確な目的や目標は無いので、周りからしたら自由奔放に見える。

身内以外、どうなるうが知った事ではないと考えている。

優先順位は、自分>エヴァ>他の身内>暇つぶし>その他である。仕事は忠実にこなす。

魔法は大抵のものは使えるが、影の魔法、幻影魔法、認識阻害くらいしか使わない。

アレンジ魔法

黒衣の夜想曲 verギリアン

使い魔を意図的に、個の無いギリアンと同じ見た目にしたもの。

形が変わるだけで特に変更点は無いが、使い魔と自分でそれぞれで虚閃を撃てる。

通常版だと使い魔の仮面はアローニークが付けているのと同じになる。

好きな物・事

知らないものを見る

変わらないモノ

嫌いな物・事
話を聞かない奴
人を巻き込む奴
勘違いが酷い奴

大切なもの
家族

心得

約束は守る、守らせる

持ち物

贗作の斬魄刀

ダイオラマ魔法球（勉強部屋、秘密基地、メノスの森、アールロニー

口宮の計四つ）

崩玉

補肉剤などの劇薬

転移符

義骸

ワカメ大使

容姿

昼間は歳は30代位で、金髪を短めに切り揃えており、顔はどこか
優しそうな感じがする男性に魔法でなっている。

見た目は良いので結構目立つ。

夜の警備中はこれまでと変わらずに、アールロニーの格好。

エヴァンジェリン・A・K・M・アールエリ

基本アローニーロにべったり。タカミチの手紙により、普通に学校に通えるようになった。

密かに学校に通う事を楽しみにしている。

アローニーロに依存している自覚はあるが、特に気にしていない。

時折、アローニーロと同じベットで寝れるので、不満は無い。

響転、虚閃、虚弾、黒棺（破道）、断空（縛道）を習得しているが、ほとんど使う機会が無い。

学園結界のせいで弱体化している。

好きな物・事

父様

父様と2人だけの時間

お茶などの、和を感じられるもの

嫌いな物・事

父様と2人だけの時間を邪魔する奴

家族を傷つける奴

においのキツイもの

大切なもの

家族

父様からもらったネックレス

氷輪丸（贗作）

心得

父様の敵は、私の敵

持ち物

父様からもらったネックレス

氷輪丸（贗作）

ダイオラマ魔法球（別荘）
アヨン

タカミチ・T・高畑

ダイオラマ魔法球（隠れ家）を自由に使えたために、原作より強くなってる代償に、ちよい老け気味。

瞬間を独自に習得した。しかし、アローニーロ曰く、少し歪こまじ学園長の近衛近右衛門より実際は強いが、大人の事情で近右衛門の方が強い事になっている。

麻帆良入り時の設定（後書き）

タカミチ？ああオマケだよ

番外 仮面の英雄の聖杯探求記？（前書き）

前の番外の後書きで、感想5件来たら書く。

とか書きましたけど、なぜか興が乗ってしまいダイジェストっぽい感じで、第四次聖杯戦争に逝ってもらいました。アローニアロにね。詳しい描写は無い、Fate/Zeroを知って無いと把握不可能、解り辛い、これ第五次のプロローグじゃないの？って感じです。流れは途中までは、ほぼ同じなんですけど……

番外 仮面の英雄の聖杯探求記？

ソレの始まりは、魔術師の悲願である根源への到達のための神聖なる儀式。

「サーヴァント、キャスター。召喚に応じ、今此処に現界した」

だが、本来なら召喚されないはずの英霊が召喚されてしまう。

違う歯車。しかも、とりわけ歪いびつで異常な歯車が入り、徐々にだが確実に全体を歪めていく

「COOL！最高だ！そんな戦争あそびがあつたのか！」

快樂殺人者は仮面の英雄と手を組み聖杯戦争に喜び勇んで参戦する。

霊脈のある寺を拠点にし、人々から魔力を吸い上げ力を貯める。

倉庫街でセイバーとランサーの一騎討ちにより、集結した英霊が名乗りをあげる。

「我が名はイスカンダル。此度の聖杯戦争においてはライダーのクラスを得て現界した」

「我オレを差し置いて“王”を称する不埒者が、一夜内に二匹も涌くとはな」

「キャスターのサーヴァントで現界した、アローニール・アルルエリだ」

「……………」

2人の英霊は惜しげもなく真名をさらし、場を驚愕させる。狂気の英霊バーサーカーはアーチャーを後退させ、セイバーに襲いかかる。

“特殊能力”として発揮される宝具により、疑似宝具化した鉄柱で押されるセイバー

その窮地を助けたのは、セイバーと一騎打ちをしたランサーだった。

「悪ふざけはその程度にしておうか。バーサーカー」

騎士道に忠実なランサーはセイバーに加勢するが……

「ランサー、バーサーカーを掩護してセイバーを殺せ。令呪をもつて命ずる」

非情なるマスターによる絶対命令により、その矛先をセイバーに向ける

だが、それはセイバーに届くことは無かった

「なぜだ！キャスターの貴様がランサーとともに剣を交えられる！」

「なに、たまたまキャスターで現界したにすぎないからだ」

最弱と言われる英霊が、最速の英霊と剣を交える。

歪な歯車は回る。周りを巻き込み回る

あまり間を置かずに、ライダーによりマスター3人とサーヴァント

5体の、前代未聞の酒盛りが始まったのだった。

「杯を交えるか、受けて立つー!!」

「ハツハツハー!!こりゃ壮観ではないか!!殆どのサーヴァントが参加するとは!」

「なんで笑っていられるんだよ!?ライダー!!」

「あつ、おねえさん、この酒どうぞ」

「あ、ありがとう」

「これが『王の酒』というものだ」

「カシャカシャ（王の酒の分析中の音）」

「……………」

その中でサーヴァントはそれぞれの聖杯に託す願いを語ることに

「アレは俺の所有物だ。託す願いなど無いが、貴様らにくれてやる道理もない」

「余は1個の生命となる為に、受肉だ」

「呼ばれたから、来ただけだ。願いなどない」

「私は生前、尽くせなかった主への忠義を尽くせばいい。ゆえに、聖杯に託す願いなど無い」

「私は、我が故郷の救済を願う」

聖杯問答になっていた酒盛りを、最初に脱落したと考えられていたアサシンが、それも軍勢で現れて邪魔をした。

「王は孤高なるや否や？」

だが、そんな寄せ集めに等しい軍勢は

「イスカンドルたる余が誇る最強宝具

『アイオニオン・ヘタイロイ王の軍勢』なり！！」

本物の軍勢に蹂躪された。

「ん？旦那、それ誰だ？」

「なに、面白い実験材料だ」

仮面の英雄はバーサーカーのマスターを手籠にし

「生まれ変わった気分はどうだ？」

「……これなら、桜ちゃんを助けられる！」

力を与え、協力を得る

「カッカッカ、何のつもりじゃ？雁夜」

「お前を殺して桜ちゃんを助ける！」

「まったく、しぶとい蟲だな。逃げ足は速いようだな」

間桐邸より、望むものを持ち出して、聖杯戦争に取り組む。

セイバーとランサーが再び剣を交えるところに現れ、両者を襲う。

「ランサー、この前の続きと行こうか！」

「今度は邪魔をするか！キャスター！！！」

「！！！」

「くっ！！」

だが、これを良しとしない者がいた

「まったく、まさか無粋な奴だったか……セイバーとランサーに代わり、余が、否、余達が相手になるう！！キャスターにバーサーカーよ！！『王の軍勢』！！」

「喰い尽くせ！！」グロトネリア『喰虚』！！」

仮面の英雄は軍勢だろうと喰い尽くす

「まったく。醜くぶくぶく肥え太ったようだな、キャスター。それに狂犬を引き連れて我になんの用だ？」

「お前を喰らってこの遊びに、チェックメイトを掛けるつもりだ」

「ほざけ！中にいろいろ貯め込んでいるようだが……貴様程度に負ける我ではないは……！」

英雄王と対面し、後一步まで追い詰めるが逃げられる。

危機感をもった三者はキャスターとバーサーカーを倒すべく、手を結ぶ。

「バーサーカーよ、貴様とはここで決着をつける……！」

「キャスター、貴様と語るなど無い」

「雑種風情が……！今日が貴様の命日だ……！」

「……………」

「敵対するなら殺すだけだ……！」

「エヌマ・エリッシュ 天地乖離す開闢の星……！」

「エクスカリバー 約束されし勝利の剣……！」

「グラン・レイ・ゼロ 王虚の閃光……！」

世界を割つたとされる一撃、星が鍛えし聖剣による魔力を交換し絶大な出力の“光”の斬撃として放たれる一撃、空間を歪める程の一撃。どれも規格外と言え、最強に近い一撃である。

「貴様の負けだ、キャスター」

「悪いが、死ななければどうにでもなる」

バーサーカー、ランサー、アーチャーが退場し、いよいよ大詰めるになる。

「いいのか？俺を逃がして」

「サーヴァントを失ったマスターは役に立たん。それと、娘として育てるならしっかり育てるよ」

「……ありがとう。桜ちゃんは幸せにして見せる」

「せいぜいダメな父親になるなよ」

「努力は怠らないつもりだよ」

軽口を言いあうその様は、まるで十年來の友人のように感じさせた。

最後の一手。それをなすべく仮面の英雄は動き始める。

「聖杯に託す願いは無いと言ったが、1つ気になる事が出来たのである。聖杯は万能の願望機というが、実際はどうなのかが気になって仕方が無い」

「貴様！？アイリスフィールドをどうするつもりだ！！」

「喜べ！聖杯が現界するぞ！！」

しかしソレは不完全な偽物であった。

「令呪を持って命ずる！聖杯を破壊しろ！！セイバー」

「なっ！？なぜです！切嗣！！」

セイバーの悲痛な声は虚しく響くだけであった。

「偽物。しかも不完全とは、納得できる物ではなかったな……………」

「では、次で完成した物を見るのはどうだ？キャスターよ」

「それはそれで面白そうだな……………」

「では、再契約をするか」

仮面の英雄は次にも参加すべく、歪んだ男と再契約する。

能力表

クラス キャスター 真名 アーロニーロ・アルルエリ

属性 混沌・中庸

召喚時

筋力D + 魔力A

耐久C + 俊敏C +

幸運E 宝具EX

クラススキル

陣地作成：B - 魔術ではなく、魔法で構築した防御に特化した陣地を形成可能

道具作成：EX 元々もっていた開発能力と合わせ、大抵の物を作れる。ただし、宝具に匹敵する道具は作れない

保有スキル

魔法：EX 魔法先生ネギマ！に出てくる魔法のほとんどを使いこなせる

鬼道：EX BLEACHに出てくる鬼道のほとんどを使いこなせる

心眼（真）：A 長年の鍛錬により磨き上げた洞察力。経験の豊富な相手の動きほどよく読める

首刎ね 対生物技。刃物を握っているなら、相手の首を刎ねる動きを瞬時にできる。反応さえできれば防御は可能

宝具

喰虚（グロトネリア）

刀剣解放レクシオンをすることにより、本来の姿になる。

ランクD 種別 対人宝具 レンジ0 最大補足 1人

王虚の閃光（グラン・レイ・ゼロ）

空間を歪める程の霊圧の塊を放つ

ランクA++ 種別 対城宝具 レンジ1〜99 最大補足1000人

喰らう事による略奪（グロトネリア）

相手の全身を喰らう事によって、相手の幸運を除くステータスを自分足すことができる。自分の持つステータスより低いまたは同じステータスの上昇はごく微量になる。

喰らうのがサーヴァントであれば、保有スキルとクラススキルでも自分のモノにできる。ただし、小指ほどでも欠落があれば効果を発揮出来ない。

ランクEX 種別 対人宝具 レンジ1 最大補足 1人

ライダー捕食後

筋力B+ 魔力A

耐久B 俊敏C+

幸運E 宝具EX

クラススキル

陣地作成：B- 魔術ではなく、魔法で構築した防御に特化した陣地を形成可能

道具作成：EX 元々もっていた開発能力と合わさり、大抵の物を作れる。ただし、宝具に匹敵する道具は作れない

保有スキル

魔法：E X 魔法先生ネギマ！に出てくる魔法のほとんどを使いこなせる

鬼道：E X BLEACHに出てくる鬼道のほとんどを使いこなせる

心眼（真）：A 長年の鍛錬により磨き上げた洞察力。経験の豊富な相手の動きほどよく読める

首刎ね 対生物技。刃物を握っているなら、相手の首を刎ねる動きを瞬時にできる。反応さえできれば防御は可能

対魔力：D シングルアクション 一工程による魔術行使を無効化する。魔力避けのアーミュレット程度の対魔力。ライダーを喰って手に入れた。

騎乗：A + 騎乗の才能。獣であるのならば幻獣・神獣のものまで乗りこなせる。ただし、竜種は該当しない。ライダーを喰って手に入れた。

カリスマ：E 数人を指揮できる程度。ライダーを喰って手に入れたが、彼の人柄による割合が大きかったために、かなり劣化している。

軍略：E 数人による戦略が出来る程度。ライダーを喰って手に入れた。アーロニーロに軍を率いた経験がないため劣化

神性：E - 神霊適性を持つライダーを喰って手に入れたが、様々なモノが混じっているアーロニーロゆえに劣化し、僅かにある程度。

番外 仮面の英雄の聖杯探求記？（後書き）

なんとなくで此処まで書きました。

正直、雁夜と桜を蟲から助けたかっただけです。

2人とも新しい体を用意して、それに魂を移し替えました。桜はさらに記憶を弄ってある設定。

これだと、ワカメが蟲の苗床になってそうだよな……

妖怪 蟲爺は生きてるし、間桐邸はしっかり残ってるし。

次（第五次）は、気がむけば同じようなので良ければ書くかもしれ
ません。

見世物？ 力の差（前書き）

第26話

感想 松鳴様、蒼月璃煌瑠*様、コクイ様
ありがとうございます！！

短い、駄文……なんだ、ただ相変わらずなだけか

見世物？ 力の差

Side 近右衛門

やはりと言うべきかの、タカミチ君が負けたのは。

しかし、操影術の近接戦闘最強奥義だけを使って、あの状態のタカミチ君に勝つとはやはり規格外じゃの。

これでアローニーロ殿は問題は無いはずじゃが、次のエヴァンジェリンが問題じゃの。

学園結界により弱体化しておるはずじゃから、アローニーロ殿程の戦力には成りえない。

「さて、次はエヴァンジェリン殿だが……戦ってみたい者はおるか？」

おそらくは、立候補はおらんの。

臆病風に吹かれた、とかではなく。エヴァンジェリンの存在が問題じゃな。

魔法先生なら、幼女に見えるエヴァンジェリンを相手にするのに躊躇う。

魔法生徒なら、実力差を考えて相手にするのを躊躇う。

ナギのような向つ見ずなら、躊躇い無く挑むかもしれないがの……

「誰も立候補しないのなら、この高音・D・グッドマンが戦いますわ……」

……向つ見ずでは無いことを祈るつかの……

Side out

先ほどの戦いは、素晴らしかった。同じ操影術を使う者としては、憧れずに居られなかった。

できることなら、弟子入りしたいと思った。だけどそれは、此処に居るほとんどの人が思ったことでもあるだろう。弟子を取るかどうかはわからないが、ただ見てるだけでは弟子になれないだろう。だから、学園長の言葉は天恵に思えた。

「さて、次はエヴァンジェリン殿下だが……戦ってみたい者はおるか？」

弟子にしてもらうためには、まず知ってもらわなければならない。私と言う存在を。

「誰も立候補しないのなら、この高音・D・グッドマンが戦いますわ！ー！」

声を高らかに宣言し、前に進み出る。

「ふんっ。おまえが相手か……いいだろう。先ほどから父様を見る目線が気に入らんから、たたきのめしてやる」

相手のエヴァンジェリンの機嫌が悪いのがガンガン伝わってくる。

………選択を間違えたかもしれませぬ、私………
だけど、踏み出したからには進まなければならぬ。

「ハンデだ。魔法を1つ使うまで待つてやる」

「随分と余裕なんですのね」

「いくら結界で弱体化していても、おまえ程度には負けん」

本当だとしても腹が立つが、それを抑えて魔法を使う。

「黒衣の夜想曲」

先ほどの戦いでも使われた、操影術の近接戦闘最強奥義である。自分は使い魔に完全に独立したような動きは出来ないが、近接戦闘ではかなりのアドバンテージを得られる。

「なんだ、おまえは魔法剣士だったのか。てっきり、よくいる後衛型だと思っていたんだが」

驚いたと言ってるように感じるが、違う。

その目は面白い物を見つけたと、言っているようだ。

「まだ完璧には遠いですが、十分戦えます！」

言つと同時に駆け出し距離を詰めるが、相手は動かずにただ黙って見ているだけである。

カウンター狙いか、ただ余裕であることを見せつけているのか。どちらにしても、自分のやることは変わらない。

渾身のストレートを腹に叩き込もうとし

「くだらん」

あっさり避けられ、カウンターを使い魔に中てられる。

「え？」

なんで？自分に中てにくるならわかる。しかし、中てられたのは使い魔の方である。

だが、そんな疑問はすぐにとけた。使い魔が、原型を保てずに崩れて逝ったのだ。

再び疑問が頭を支配する。なぜ自分の使い魔が殴られただけで崩壊した？

使い魔は操影術で作られた人形。術者が気を失えば勝手に消える事はある。だが、殴られただけで崩壊するとは聞いた事が無い。いたい、なにをされた？

「なにをぼさつとしている？おまえの戦闘の要を失ったというのに」

その声が聞こえたと思ったら、すぐに意識を刈り取られた。

Side out

Side エヴァンジェリン

くだらん。手に展開した影の鎧ローリーカー・ウンブラエを解除しながら思う。

立候補したくらいだからそれなりの実力を持つていたのだろうが、予想外の事態に対応できずに、あっさり意識を刈り取られた相手を見る。

「経験がもつとあれば、もう少しましだったんだろうな」

才能も能力も無かったわけではない。

深刻な経験不足。私の眼にはそう映った。一人で戦った経験、自己より格上と戦った経験。

どちらも不足していた。

影の使い魔を破壊されることなど、聞いたことが無かったのだろう。……というかそんな事する奴は、私と父様以外知らない。

黒衣の夜想曲に対する定石は中々遠距離からチマチマ攻撃して倒すだからな。

「見事。いや、当然か？影の鎧で堅さを上げ、魔力で身体能力の底上げで強化した一撃で影の使い魔の破壊」

私がした事を簡単に言い当てながら父様が近づてくる。

「この方法を教えたのは父様だろ。尤も、人間の腕力では出来ないだろう方法だが」

弱体化してるが、この方法は問題無く使えた。

使えなかったら氷の檻に閉じ込める、なんて方法を使おうかと考えていた。

S i d e o u t

S i d e アーロニーロ

さて、問題無く顔合わせは終了した。次に移れるようになった。

「どこかに、家を建てれる丁度いい土地はないか？」

「いきなりじゃの……別に、寮で良いんじゃないのの？」

「それではダメだ。荷物が多いから入りきらないし、防犯が完璧じゃないだろ」

あくまで、建前だがな

「……こちらで候補を用意するから、今日のところは帰ってくれんかの？」

「では、1週間待とう。それと、仕事のスケジュールも早く渡せよ。ソレに都合を合わせるから」

「ソレは明日にでも渡すから、そっじゃな……午後6時にまた、学園長室に来てくれ」

「わかった」

ホテルに帰るとするか。

見世物？ 力の差（後書き）

次回は家を建てた後まで、キングクリムゾンします。

感想、指摘、ご要望をお気軽にどうぞ。

日常？ 幽霊登場（前書き）

第27話

日常？ 幽霊登場

Side アーロニーロ

家はすぐに建った。水道、ガス、電気、電話、インターネット全部通っている。島に建てたのは引けなかったからな……インターネット以外は魔法で代用していた。不自由は無かったがな。

昼の広域指導員の仕事は簡単だ。

基本的に、不良とかヤンキーと呼ばれてる奴らが指導対象になる。中には喧嘩慣れした連中がいるが、仲間を盾にされるとなにも出来なくなる。

「卑怯だぞ！！」「鬼かあんたは！！」「鬼？あいつは悪魔だあ！！」「よっちやーん（盾にされた奴）！！」「それが！広域指導員のする事かよ！！」

仲間意識が強いのはいいが、ガラの悪い集団でねり歩くなんてするな、俺の仕事が増える。

ヤンキー共が、クリスマスイブに馬鹿みたいに集結して、地域抗争なんてやらかしやがったのは良い思い出だ。その事件は、『血濡れのイブ』なんて呼ばれると同時に、鎮庄に出た広域指導員としての俺の名を広めた。

『金白の男』『笑う槍使い』『無情な槍』……どれもちよつとな他にも、喧嘩の仲裁もしたりする。指導ではないが、ときおり暴走するロボットを捕まえることもある。

夜の警備の方も、問題無い。敵と言っても弱い部類の奴ばっかだからな。

関西呪術協会の人間と相対すると、必ず俺に攻撃が集中する……

そこまで怨まれてるのか……対呪術防御の物を作っておくか、流石に呪いはよく知らないから、素で無効化できる自信は無い。エヴァにも、持たせなければならんな。

面白いモノを捕まえた。珍しい蝶とかそんなのではないからな。幽霊を捕まえた。たまたま立ち寄ったコンビニに居たので、頭を引っ掴んで家まで連行する。

俺には視えるが、エヴァにも視えるのだろうか？疑問だな……

「あの…離してくれませんか……というか、私が見えるんですか！？それに触れるんですか！？」

「そうだが、それがどうした？」

「私、いままで私が見える人に会った事が無いんです！」

「随分と元気な幽霊だな……生き活きしてるぞ、こいつ。」

「ところで……私をどこに連れていくんですか？」

「俺の家だ」

「え？なんですか？」

「エヴァに視えるかどうかを知りたいからだ」

「ご家族ですか？」

「娘だ」

てきとつに会話しながら家に行く。

「ん？父様何だソレ？」

エヴァに視えるのか

「コンビニに居た幽霊だ。拾ってきた」

「犬猫じゃないんだから、拾ってくるのはどうかと思っぞ……………で？飼うのか？」

「本人次第だな」

「あの……………飼うとか言つのは失礼と思わないんですか……………」

「そつえば、名前を聞いてなかったな」

「……………無視ですか。名前は相坂さよです」

「喜べ、相坂さよ。お前が協力さえすれば、新たな肉体を与えよう」

「「は？」

エヴァとさよの声が重なる

「本当ですか!？」

「待て！父様、本当に飼うのか！？」

「本当だ。あとエヴァ、飼うとか言うな」

本当の事だ。他にも滅却師クインシーを作ってみよう、という下心もあるがな。

「すぐには出来んが、協力するなら体の1つや2つはくれてやる」

「協力つて、なにをすればいいんですか？」

もっともな質問だな

「実験を手伝えばいい。その他は……暇つぶしに付き合ってもらおう事があるかもな」

「それだけ、ですか？」

「ちよつと父様。こつちに来てくれ」

（なんだ？）

（なんだでは無い！どういつつもりだ！幽霊に体をくれてやるとは）

（いや、エヴァの友達にいいかと思ってな……）

（子供の友達を用意するな！）

（いいじゃないか。相手は人間として生きられる、俺は滅却師を作

れる、エヴァには新しい友達が出る。良い事しかないだろ？)

(戸籍とかはどうするんだ！)

(学園長に言えば、如何にかできるだろ。教員免許を偽装しようとしたくらいだからな)

(……出来そうだな)

「あの……お願いします！」

普通だったら、手を伸ばさなかもしれない。だが、彼女は手を伸ばし掴んでしまった。

別に悪魔との契約ではないから、そんな深刻なモノではないが………ただ、彼女が夢見たモノは、そのまま形になりそうでならなかったりするだけ

Side out

Side さよ

今日からアルルエリ家にお世話になることになった、さよです。ここに来るまで、驚きの連続でした。いきなり頭を掴まれたと思ったら(今思えば随分と、久しぶりな感覚でした)、金髪を短めに切り揃えた白い服の男性に連れてかれたのですから。さらに、協力さえすれば体を用意してくれる。思わず飛び付いてしまいました。

軽率だったかもしれませんが……結局、なんの実験の協力をすればいいか聞いてませんし……

……前向きに行きましょう。調整が必要だとかで、体ができてもすぐには動かせないそうです。

今は臨時の体で、黄色いひよこのようなぬいぐるみに入っています。視線が低いので、なにかもが大きくみえます……

2人とも寝てしまったので、正直暇です。

ジグソーパズルやゲームといった1人遊びのできる物を用意してくれましたが、今はやる気がおきませんし、大きいのでやりにくいです。

できれば、もっとお話しをしたかったです。幽霊になってから初めて会話をしました、もう少しすれば新しい体で、できなかつた事ができるようになるので少しの辛抱です。

ですから、もし夢だったのなら、覚めないでください。

朝になりました。アーロニーロさんが朝食を作っています。……

なんででしょうね、何人もいる上に輪郭がブレている気がします。

あれも魔法なんでしょうか？（注：実際は双児響転^{ヘメロス・ソニード}です）

私が見た事あるのは、なんか飛ばしたりするのが主でしたが。

「体の調子はどうだ？」

もう作り終わったようです。

「小さいこと以外は、問題ありません」

軽いおかげでダンスからダイブしても、痛くもかゆくもありませんでした。

「ふむ、そうか。今しか楽しめない、ぬいぐるみの世界だ。十分楽しんどけよ」

確かにそうかもしれませんが、私は新しい体が待ち遠しいです。

「早く、新しい体が欲しいんですが……」

「その前に準備が必要でな、まずはお前を知ってもらう必要があるから、今日は学園長に会いに行くぞ」

「学園長ですか？」

たしか、結構な歳をお召しになった老人でしたが……

やって来ました、学園長室。今は、バックのなかで耐えています。結構揺れるんですね、バックの中って。

「出てきていいぞ」

やっと出れますか……バックの中は狭いし、暗いし、揺れるので最悪の環境でした。

「初めまして、今はぬいぐるみに取り憑いてる、相坂さよです」

一礼して、相手を見ます。

「本物かの？」

「読心術を使えば一発だろ」

かなり酷いんじゃないんですか？いきなり読心術をするとか……

「……よろしいかの？」

「いいですよ」

「ふむ………本物じゃの」

「では、問題無いな」

「元から、そのつもりじゃったしの」

なんか私は、置いてけぼりで話は進んでいます。

「なんの話をしてたんですか？」

部屋を出てすぐに聞きます、重要な事の気がしますし。

「ああ、お前が学校に通えるように手はずを整える話だ」

「え？」

重要でしたね……

勝手に話は進むモノ。そんな事を思わさせられますね……

S o d e o u t

日常？ 幽霊登場（後書き）

さよが登場しました。無論、義骸を滅却師仕様にして与えます。なにが無論だよ！と、思われるかもしれませんが、スルーの方向でお願いします。

そいえば、一昨日で連載開始一カ月でしたね。別になにもしませんが。感想、指摘、ご要望は軽い気持ちでどうぞ。

日常？ ガイノイド登場（前書き）

第28話

感想 mukade様、開け！ごまドレ様、まっきー様
ありがとうございます！

日常？ ガイノイド登場

Side 第三者

アルルエリ親子が麻帆良に入ってから、様々なことがあった。問題を起こすような事はもちろん無かったが、幽霊 相坂さよに、滅却師仕様の義骸を与えてから、エヴァンジェリンがこそそと父親の目から隠れるように行動するようになった。

アールローロが、ソレの理由を調べるようなプライバシーの侵害になるような事はしなかった。

尤も、なにか問題を起こしたりしてないか心配で、監視用の菌を作りにかけたのだが……

このところ、親バカが順調に進行しているアールローロだった。

アールローロが知るよしは無かったが、もちろんエヴァンジェリンは問題になる事はして無かった。

ただ、超と名乗る人間の、科学と魔法を融合させた人形を作るのに協力しているのだった。

科学と魔法が融合した人形に興味もあつたのだが、自分が普段連れて歩く人形の従者が、欲しかったというのが本音であつた。他にも、父親にいきなり見せて驚かせてやるうという魂胆もあつた。

Side out

Side エヴァンジェリン

ついに来たか、この日が。超と葉加瀬に協力して作りあげたガイノイド、絡繰茶々丸。

つい先日完成したばかりで、まだまだ改良を加えていくらしいが、根本はもう変えないらしい。
さて、私の新しい従者のお披露目と行こうか。

「あつ、おかえりなさい。……後ろの方は、誰ですか？」

「さよ、か……何度も説明するのは面倒だから、父様が一緒の時に説明する」

「わかりました。今日の晩御飯は和風ハンバーグですけど、その人の分がないんですけど……」

「……よく見てみる」

「え？……人間じゃないんですか……」

人間に近いが、よく見ないと判らんレベルか？そいえば、学園には認識障害の結界があつたな……

「よくできた人形。いや、ロボットか？だが、魔力を感じるな」

奥の方から出てきた父様が言い当てる。そんなに魔力は無いはずだが……やはり父様はすごい感覚だな。

「凄いですね〜よくわかりますね？」

「……さよ、魔力感知は、その体ならかなりできるはずだが？」

「……近くに大きい魔力が二つ有ったで、判りませんでした……」

目をそらしながら言う。ソレはどう考えても悪手だぞ。

「さよ、私が勉強部屋以外では、弱体化しているのを忘れてないか？」

あつさりと嘘を看破する。と、いつかそれで誤魔化せると本気で思っていたのか？

「それより紹介をしたいんだが……」

なんかグダグダな雰囲気になっていたが、それを振り払うべく話を進める。

「つまり、茶々丸は新しい従者という訳か」

「へー科学と魔法を融合させたんですか」

「はい。私はそつだと記録しています」

普通に受け入れたな……できればもう少し驚いてほしかったのだが……

「言えば、普通では手に入らない材料を用意してやったんだが……」

「珍しい材料ですと、安全性などが損なわれるために、採用されま

せん」

「そういうものか？」

「そういうものです」

……悔しくない、悔しくないぞ……私が初めて会った時より自然に会話している事など……そういえば、さよの奴も結構自然に会話していたな……フフフフフ

「エヴァさん、怖いです……」

怖い？ナンノコトダ？

「エヴァ」

抱きしめられる。

「んっ」

抵抗なんてする筈も無く、頬擦りをしながら父様の温もりを堪能する。

いつでも温かくて、いつも受け入れてくれる。包み込む優しさが、とても心地良い。

「記録中、記録中」

「親子って、思えませんよね。なんか恋人みたいですよね（ボソッ）」

外野がなんか言っているが、気にしない。父様の仕事のせいで、

触れ合う機会が少ないのだ。

Side out

Side アーローニーク

エヴァが黒くなっていたので、至急にハグと撫でるを決行。効果は上々、甘える状態になっている。かわいいな……これで、元賞金900万だったとは到底信じられないだろう、俺は倍の1800万だったが。

「エヴァ、お風呂に入ってきたらどうだ？」

「んっ、わかった」

この状態だとかなり聞きわけが良い。……別に普段聞きわけが悪いという事ではないが。

「ああそつだ、父様、今日は一緒に寝ていいか？」

「いいぞ」

満面の笑みを浮かべて、エヴァが風呂場に向かう。ファザコンって言うんだっただか？俺も親バカだろうが。

「また、家族が増えましたね」

「私はガイノイドですので、道具が増えたの方が適切だと思いますが」

「道具でいいなら、自我なんて持たせ無い。それに、エヴァとドール契約をしたんだろ？」

「はい、確かにしました。ですが、ドールでも道具に変わりはありません」

「とんだ堅物のようだな。まっ、おいおい解ってくるだろ」

機械だから、堅物なのは当然か？なに、魔法が混じっているなら、魂が宿ったりしても不思議では無いだろ。
どんな形に成るのか、楽しみだな

S i d e o u t

S i d e 超

全ては歴史、いや、この手記通りに進んでいるネ。アーロニーロ、エヴァンジェリン、さよ、茶々丸が揃った。あと1人足りないが、問題は無い。それも手記通りヨ。

茶々丸の事は、ハカセ任せて、私は準備を始めるヨ。
全ては変える為に……

S i d e o u t

日常？ ガイノイド登場（後書き）

茶々丸登場！！

さて、一応出番のあった超ですが、彼女の出番は結構先になる予定です。

問題無いよね！！

次でエヴァ達に麻帆良女子中学校に入学してもらいます。

追記 7月15日修正 文字数が400字程度減少………
いつその事Side超を削った方が良かったかな………？

日常？ 入学と夜の裏（前書き）

第29話

感想 藤様

ありがとうございます！

日常？ 入学と夜の裏

Side 第三者

4月。それは、始まりの季節である。
学校なら、新しく入学か進学をする。
彼女達も、入学式に参加していた。

Sode out

Side エヴァンジェリン

父様……それはどうかと思うぞ……
そんな事を思いながら、父様を見る。

一人で保護者席の3人分のスペースを使い、私、さよ、茶々丸を
ビデオカメラで記録している。
しかも、使われている物は、最新式の物を一式揃えている。おそろ
く今日の為だけに、買ってきたのだろう。
周りから特異な目で見られているが、一切気にした様子は無い。ら
しいと言えば、らしいが……

Side out

Side さよ

たぶん二度目の入学式ですが、緊張してしまいます。
……アローニーロさん。自重してください……
保護者なのに目立ってますよ……

そんな、私の心の声が聞こえるはずも無く、最初から最後まで、我が道を貫いていました。

S o d e o u t

S o d e 茶々丸

今は入学式の途中です。

マスターとさよさんは、しきりにアローニー口様の方を気にしてま
す。

どうやら、カメラが気になって仕方が無いようです。後で、アロー
ニー口様にマスターの分のデータは貰わねばなりませんね。
一切ブレが無いと言うか、自由奔放ですね。

S i d e o u t

S i d e アローニー口

入学式ということで、それなりの準備をして来た。わざわざ最新
式のビデオカメラとかを用意したのだ、全部しっかりと撮らないと
な。他にも服も新調したりとした所為で、結構金を使ったな……問
題無いか。

3人ともしつかり撮れているな。

学園都市と言うだけあって、新入生の数も馬鹿にならない位に多
い。たしか700人を越すらしい。

しかし……人間じゃない奴が混じっているな。濁りぐあいから判断
して、ハーフが2人に純正が1人。

他にも普通じゃ無いのが混じっているな………注意が必要か？
なんにしても、面白い事が起きそうだな。

S i d e o u t

S i d e 第三者

そんなこんなで入学式は終了して、明日から本格的に学校が始まるのであった。

その前に、アローニー口達がクラス編成を見て、多少疑問を持ったが特に気にしないのであった。

S i d e o u t

S i d e 長谷川 千雨

笑えねえ、まったく笑えねえ。入学式でも変な奴はいるは、カメラを三つも使っている保護者がいたりして、此処は変なとこだと再確認させられたと思ったら、今度はコレかよ……

今は白い不審者に追いかけている。さつきは、いかにも鬼みたいな奴らに追いかけてたけれど、どこからともなく現れた白い不審者によつて、そいつらは見かけ倒しと思えるくらいあっさりと倒された。

……訳が解らない。いや、解りたくも無い。

「私がつ！なにしたらってんだよ！！」

つい、不審者に向かって言ってしまう。普通は悪手だけど、本当にそう思っているし、冷静に考えれない。

「大体！なんで此処は変なんだよ！」

ずっと思っていた事。デカイロボットが暴れたのに、警察沙汰にならない！下手をしたら誰かが死んでいても可笑しく無い事件だつてのに、誰も変に思わない。どいつもこいつも私とズレて、いや、私がズレているのかもしれないが、おかしいのだ。

「知りたいのか？」

さっきまで後ろに居たはずの、白い不審者が目の前に居る。なん
で……？

追いつかれたのなら解る。でも、この道は一本道で、かなり迂回しないと前に回り込めないはずである。

だが、この不審者はこうして前に居る。
在り得ない有り得ない在りえないあり得ない有りえないありえない
アリエナイ……

「なん……なん、だよー！」

本当になんなんだよ……此処も、さっきの鬼みたのも、こいつも。
普通からかけ離れたモノは全部嫌いだ！

「騒ぐな。感づかれてしまっぞ？」

感づかれる？ いったいなにに？

「話は、もう少し後でな」

「は？」

憶えていられたのは、そこまでだった。

「起きたか」

知らない顔がまず目に入る。知らないはずだが…どっかで見たよ
うな……

「あっ！？入学式でカメラを3個使ってた保護者！」

思い出した。

こいつは入学式でカメラを3個使ってた保護者。奇しくも、私が
此処は変だと再認識させた要因の1人だ。

でも、なんでこいつがここに？私はたしか、白い不審者になにかさ
れて……白い？

男の服も白い。偶然？いや、違っだろう。必然？そうだろう。つま
りこいつが、あの白い不審者？

「さて、なにが聞きたい？」

「え？」

いきなり「なにが聞きたい？」…ふざけているのか、こいつは……

「なにがって！？なにもかも、聞きたいに決まっているだろー！」

「落ち着け。では、なにから聞きく」

落ち着け。そう言えわれて、落ち着く奴はごく少数だろう。けど、こいつが言った言葉には、逆らってはいけない、そう感じさせるモノがあった。威圧された、とでも言うのだろうか……

「そ、それじゃ、此処がおかしい理由」

ずっと抱えてた想い

「まず魔法が実在して、その中に認識阻害と言う魔法があつてだな、その効果は正しく認識できなくする。基本的にこれがあると、そういうものだと認識してしまう。その結界が、学園都市には張つてある」

正直信じられないが、ここは本当だとしよう。

「つまり、ソレの所為で誰も異常に気付けない？」

「半分正解。誰も気付けない訳では無い、お前のような例外と、魔法使いなら気付ける」

「なんで、教えてくれるんだ？」

そういうモノは秘匿される。アニメや漫画の見過ぎかもしれないが、実際にあるならそうだとしてみてもおかしくない。

男は笑って告げる

「それはお前に、選択させるためだ。こんな事を忘れて、歪まされている日常に戻るか、この手をとって世界の裏側に回るか。どちら

を選んでも構わない。だが、コレはお前の人生を、大きく変える選択だ。しかし、選ぶのは今すぐにだ」

心底、可笑しそうに笑っている。人が満足に情報を得られないので悩んでいるのに、殴ってやるのか……

「さあ、この手を取るか、振り払うか」

私は、その手を……

S i d e o u t

日常？ 入学と夜の裏（後書き）

視点変更が多かったな……

次で10万字突破しまうな……原作に入っていないのに……
うん…我が道を貫くか。本編のアーロニーロみたいに。

本編補足

千雨に白い不審者呼ばわりされたのは、当然です。

仮面に、フリフリがついた白い服、しかも追っかけてくる。

不審者要素しか有りません。

普通な人からしたら、当然の反応ですよ。

日常？ ようこそ！裏側に！（前書き）

第30話

10万字突破（笑）

まだ原作に入らずに、だ……

原作に入ってからが、本編と考えている人からしたら、どんだけ長いプロローグだろうな……

日常？ ようこそ！裏側に！

Side 千雨

選択、間違えたかも……………

たしかに、人生変わった。魔法とか秘匿されてるモノを知ったおかげで、私が普通だったという事は解った。そう、普通だった。ネットアイドルだったりするけど、普通だった。もう過去の事になってしまった……………

手を取る選択は、魔法使いになる選択でもあった。別に、魔法使いになる必要は無いけど魔法を知ったら、防御と逃げる手段が無いと不味いと解った。なにせ、基本の魔法の射手だけでも簡単に人を殺せる。

知ってるだけじゃ、間違い無く死ぬる。そこで、魔法を教えて貰おうと思ったが、

「お前に、魔法の才能ないぞ」

なんて言いやがった。つまりなにか？戦う力無しで、こんな世界を生きて逝けと？

軽く憂鬱になった。幸いにも、才能が無くても使えるから問題無いとすぐに言われたが……………

「馬鹿正直に修行するより、改造を受けたら簡単に能力は上昇するが？」

絶対に！お断りだ！

他にも問題がある。私じゃなくて、師匠（そう呼べと言われた）にだ。

大戦の英雄、元懸賞金1800万の賞金首、そもそも人間じゃ無い。裏ではかなりの有名人で、憧れの人物らしい。そんな人物に鍛えて貰えるのは、かなり名誉な事らしい。

てか、バケモノ度が半端無い。1人で軍勢相手に完勝できるとか、腕を生やす薬を作ったとか、通常は殺せない悪魔を普通に殺せるとか、他にも信じられない事を普通にこなすらしい。いろいろと先輩（学校での）にあたる魔法生徒から聞けた。ヤバイ、自分の師匠が一番やばい人物だ。

周りからのやつかみもある。簡単に言うと、才能の無い私が鍛えて貰えるのに嫉妬している、との事だ。

私以外にも弟子？はもう一人居るが、魔法では無いが十分な実力を持っているので、そいつはあまり周りからやつかみを受けなかったらしい。

ホントに、選択間違えたかも……………

Side out

Side アーロニーロ

珍しい体質の人間を確保できた。別に必要があつた訳では無いが、とりあえず確保。

認識障害が効きづらい体質は案外少ないのだ、別にそこまで重宝するものでも無いが、認識障害で隠されたモノを探す分には使える。尤も、俺は必要ないが、義骸の更なるスペック上昇の為に使わせてもらう。

他にも、一応理由はあるが、弟子みたいなモノにしておいて縛っておけば、問題ないだろう。

さて、どんな奴からも逃げられるくらいには鍛えてやるか。

Side out

長谷川 千雨は形式上はアローネーロ・アルルエリに弟子入りした。

千雨にとっては、長年の疑問がとける事になったが、更なる苦勞の始まりでもあった。

まず、エヴァンジェリンだ。エヴァンジェリンにとって自分の父様がまた、弟子みたいなのを取ったのだ。

おもしろくない。それが、エヴァンジェリンの思いだ。

数か月前までは自分と父様の2人だけだったが、さらに余計な奴等が自分と父様の間に入ってきたようなものだ。

例えるなら、妹か弟を親がずっと面倒を見ていて、自分に構ってくれ無い。

実際はそんな事は無いのだが、そんな気がするのだ。

それで、つい千雨とさよに冷たく当たってしまう。無意識に、自分と父様の領域から押し出そうとしていたのだ。

次は、魔法関係者達である。

流石に直接なにかしらする奴は居ないが、雰囲気が悪いのだ。

中には変な期待をかけてくる奴も居るが、どちらでも迷惑以外のなものでも無かった。

最後に、アローネーロ・アルルエリである。

限界ギリギリまでの修行をさせるのだ。前の二つが何ともなく感じる程に、精神的にも、肉体的にもキツイ。いや、そんな言葉が陳腐に思える。千雨からすれば、麻帆良学園での生活が普通じゃなからうが、修行から解放されれば天国に感じた。凄まじい心境の変化である。

勉強部屋で行われる修行は次の様なモノがある。

- ・ 対多数戦、虚と戦おう*後ろにも気をつけないと、あっさりやられます
- ・ 対多数戦、虚と戦おう耐久版。*時間経過で終了する事を考えたペース配分をしましょう

- ・ 守りを固める、チャチャゼロと舞踏。*チャチャゼロに傷物にされる危険有り

- ・ 2時間耐久、アヨン（拘束具装備）から逃げ続ける。*逃げ切れなければ、体のどこかを失う危険有り

勿論、最初からこんな修行はしなかった。最初の方は、適合した盾舜六花や魔法の練習をさせていたが、盾舜六花の詠唱を省略できるようにしてから、受ける千雨にとっては、地獄に思える修行を開始したのだ。

ちなみに盾舜六花は、アローニーロが可能な限り再現した最初の贗作である。

再現の結果、アローニーロに使われる事を「僕等は君なんかに使われる気は無いよ」と、言って拒否した為に、アローニーロに『完璧すぎた失敗作』の烙印を押された。

その所為で、その後作られた贗作の斬魄刀の本体は再現できたが、再現しなかった。

その盾舜六花を仕舞う前に握り潰しそうになったが、非常に貴重な材料と長い時間を使ったので、壊したりしたらかなりもったいない事になる上に、修復しようとするればまた長い時間が必要になるので、なんとか思い留まりずっと、影の倉庫の奥底に眠らせていた。そんな代物が千雨の手に在るのは、盾舜六花が使われる事を了承したからである。

千雨を誘拐した際に、適正などを調べてる途中で、盾舜六花が「

この子なら、僕達は仕えるよ」と言ったので、後日に千雨に譲渡したのだ。その際アーロニーロはつい、盾舜六花にヒビを入れてしまったが、事象の拒絶を発動させればそんなモノは無かったも同然であった。

地獄の特訓により、千雨は別人かと思う位に、逞しく成長をした。成長のために、心の傷を幾つか持つ事になったが……

尤も、生来の性格と、盾舜六花という攻撃に不向きな
正確
には、攻撃は成功すれば、必ず相手を両断する現象を起こす
武器である事も相まって、戦士としては2流止まりであった。

そこに至ったのは、2003年1月末頃。

S i d e o u t

日常？ ようこそ！裏側に！（後書き）

次で、やっと原作に入ります。

長かった……

ネギ……どう扱おう……

ネギ 来日（前書き）

第31話

ついに原作突入します。

あとサブタイでネギ 来日ってなってますけど、ネギ視点は31話
にありませんよ

ネギ 来日

Side アーロニーロ

学園長室に呼び出された。別に問題でもなんでも無いが、緊急事態でも無いのに呼び出すのは止めて欲しい。

「で？、ネギ・スプリングフィールドが、今日来るのか？」

「フオッフオッフオッフ、そうじゃ。そこでおぬしに「断る」……最後まで言わせてくれんのか……」

どうせ、補佐をしる。とか言うのだろう。なぜ、餓鬼の面倒を見なければならぬ。

「今おる弟子はもう一人前になったんじゃろ？なら、ネギ君の面倒を見てくれないじゃろうに……」

どういう基準で一人前か判断するか解らないが、あいつが望むモノは与えたはずだ。

防御と逃走の手段。積極的に攻めないなら、強敵と戦っても生き残れるだろう。

「はつきり言おう。知り合いの餓鬼だからといって、俺は贖身するつもりも、面倒を見てやるつもりも無い。俺から何かを学びたいのなら、タカミチのように技を盗むしかない。俺が気に入れば話は別だがな」

「ネギ君は優秀じゃよ？メルディアを飛び級の上に首席で卒業して

おる。教えるのならこれ程の存在はおらんとおもつがの？」

「俺が優劣で相手を選ばんと知っているだろう。それと魔法学校では碌に魔力の制御ができなくても、英雄の息子というだけで首席が取れるのか？だとしたら、ただ持ち上げられている餓鬼ではないのか？」

ネギ・スプリングフィールドが、どういう存在か気になったので自分なりに調べあげた。結果は悲惨である。

たしかに、親の血を受け継いでいるとは思う魔力を持っているし、知識もそれなりのモノらしい。だが、それだけである。くしゃみで武装解除を発動させるのは明らかに問題なのに、誰もそれを改善させようとしない。

内面は、流石に調べあげるには情報が足りなかった、親しい人間がほとんど居無いのだ。

正直これは驚かされた、数えて10歳だというのに友人と言えるのは、ただ1人しか居なかった。どれだけ灰色の学校生活をしていったのか疑問である。エヴァでもクラスの連中とは仲良くやっているのに……………

餓鬼の場合は、環境が悪かったというのもあるだろうが……………

「……………もうすぐネギ君がくるはずじゃな」

目をそらしてまるで何も聞いてないかのような素振りをする。

都合の悪い事から目をそらす。問題の先送りでしかないのにやりやがるか、このぬらりひょんが！

「おい、無視か？反論するなりした」タカミチです。学園長、入ってもよろしいですか「……………」

どうやら来てしまったようだ……邪魔になるので、部屋の隅に移動して静観する。

学園長と餓鬼が馬鹿と思える会話し、餓鬼は途中から入って来たしずな先生と一緒に副担任をするクラス　エヴァ達が所属する2-Aに　に向かっていった。

なぜかアスナがジャージになっていたので、おそらく早速やらかしたのだろう。くしゃみで武装解除を……

他にも、アスナと詠春の娘の　学園長の孫でもある　木乃香の前で修行とか言った。あまり問題は無いだろうが、ただでさえ餓鬼が教師をやるのだから、もっと細心の注意を払うべきだろうにしかも、話の途中で俺を紹介しやがった。もちろん、大戦での英雄ということを見せてだが。
尤も、フルネームで言われても餓鬼は気付かなかったようだ……

「問題しかないな」

「いきなりなんじゃ？」

解っているのだろうか……

「餓鬼の扱いだ。一人にしないのは解るが、あの2人の部屋に居候させるのは問題では無いのか？」

「フオツフオツフオツ。なら、アークニー口殿が預かってくれんか

の？そうすれば皆も安心するしの」

やはりどいつもこいつも英雄が、英雄の息子を鍛えて欲しいようだな。

さながら餓鬼は英雄と言う名の贅と言ったところか……誰もがサウザントマスターの子供と言う事でしか餓鬼を見ていない。一番親しいと思われるネカネ・スプリングフィールドでさえ、そういう目で見ていた。

「お断りだ。ナギに直接頼まれいたら別だったかもしれないがな」

尤も、俺に育てられていたら正義の魔法使いにはならんかもしれないがな。

Side out

Side エヴァンジェリン

馬鹿だな、こいつは。なぜ、普段から魔力障壁を展開してる？魔法使いの村や、魔法学校では普通かもしれないが此処では違う。誰も教えなかったのか？いや、常識すぎて全員が教えるまでも無いと考えたのだろう。

わざわざ罫のフルコースを受けて、その後にクラスの連中にもみくちゃにされている。

「エヴァ、あいつがかな？」

「ああ。あいつが、父様の言っていた問題だろうな」

「かわいい魔法使いですね」

「ですが、意識が低いと見受けられます」

千雨が問いかけに答える。父様がアレが学園に来ると解った時点ですぐに調査をしにメルディア魔法学校に急行した。結果は、問題しか起こしそうにないであった。帰ってきてすぐにお守り 武装解除を無効化できるかなりの物を 全員に渡され、それなく警戒するようにも言われた。

警戒する価値もなさそうだが……

暴発武装解除は、お守りがあるからさして問題無いし、攻撃される謂われも無い。

精々が、変な騒ぎに巻き込まれるくらいだろ。はつきり言って日常茶飯事だしな…… 万年お祭りクラスみたいなものだしな。

授業もダメだな。教師が生徒を貶めるような発言をするとは、新田が知ったら怒り爆発だな。

どうやら魔法使いとしても、教師としても意識が低く半人前もいところだな。

「ん？」

回し手紙か、どれどれ……

今日、放課後にネギ先生の歓迎会をするよ！！だから帰らないでね！役割分担を決めるから、やりたいのがあったら決めといてね！

ああ、やっぱりやるのか……

ただいま歓迎中だ。尤も、私等　私、千雨、さよ、茶々丸
の中ではさよ以外は歓迎してないが……

「おい、あれ……」

なんだ？くしゃみをしたのか？

………違う、もっと悪かった。読心術タカミチに使っている……
なぜタカミチに読心術を使っているのか知らんが馬鹿か？いや、馬
鹿だったな。

タカミチは魔法使いでは無いが、読心術をレジストすることぐらい
は造作も無いだろう。

おっ、明日菜に駆け寄ってなにか話をしているな。どうやら、明日
菜がタカミチにどう思われているか知りたくてぼーやに読心術を頼
んだようだな。………いつバレた………まだ1日も経って無い
というのに、明日菜に魔法使いとバレたのか………在りえん速さだな。

「茶々丸、記録してあるか？」

「もちろんです、マスター」

「会話も拾ったか？」

「私の集音能力でしっかりと」

後で確認した後で、こいつを餌に父様の休みを学園長に出させる
か。

出さなければ、オコジョ妖精と黄昏の姫御子が出来上がるな。なに、
重さを考えれば量るまでもないな。

さて、今から休みを父様とどう過ごすか計画を練るか。

S i d e
o u t

ネギ 来日（後書き）

本編補足

ネギがアールロニーロに気付けなかったのは、父親以外の英雄にさほど興味が無いからです。たしか原作でも、そうでしたよね？

それと、エヴァは学園長が休みを出さなければ普通に映像と音声を元老院に送り突けるつもりです。アスナとは割と仲が良いですけど、父様との休日>アスナ なので、エヴァはアスナを結構簡単に切り捨てたりもします。

平穩 2人(前書き)

第32話

感想 たぬき様

ありがとうございます！

平穩 2人

Side エヴァンジェリン

あつさりど、父様の休日を学園長に出させる事ができた。当然の結果だがな、元老院はぼーやを都合の良い次世代の英雄にしたいだろうから、私が手元に置くのにちょうど良い情報を渡せばソレを理由に本国に連行出来るだろうからな。更に、黄昏の姫御子の情報も喜ぶだろうしな。

アスナと明日菜。どちらとも仲は良い方だろうが、所詮はその程度だ。例えば道具にされようが、処刑されようが自発的に助けられない部類の存在だ。流石に、目の前で死に掛ければ助けるかもしれないが……基本その程度の存在だ。

父様、チャチャゼロ、茶々丸、さよと千雨も入れてやるか、私が自分から、助けてやろうとするのはこのくらいだろ。尤も、父様は私の助けは必要無いかもしれんが。

……なんか随分考えが逸れたな。まあ、いいか。

そうだ、身嗜みをしっかりと整えなければならぬ。父様とのデートなのだから。

もしかしたら邪魔が入るかもしれないが、計画に抜かりは無い。邪魔者になりそうな奴は先に諸事情で縛りつけた。

知り合いで問題を起こしそうな奴らも、同様になるべく街に出れないようにしといた。

街に居るであろう不良共は排除するように、龍宮に依頼をしといたから普段よりは少ないはずだ。

折角の父様とのデートだ、父様には私だけを見て欲しい。

その為にも、しっかりと着飾らないとな！

S i d e o u t

S i d e アーロ二ーロ

なんか知らんが土曜、日曜の仕事が昼夜共に休みになった。なぜ？
夜は兎も角、昼は休日の方が騒ぎが起きやすいから、基本的に土日
の昼は仕事なんだが……

まあ、いいか。たかが一人の広域指導員ができる事など高が知れ
てるし、ぬらりひよんの頭の中などわからんからな。アイツが死ん
だら、死体を入れ替えて中身を見てもまた一興か？

人から外れた骨格が存在するのか、ナニかが詰まっているのか……
…あまり気分の良い想像じゃないな。
そんなモノは置いて行くか

「父様！行くぞー！！」

エヴァが呼んでいる、急ぐのには十分な理由だ。

S i d e o u t

S i d e 龍宮 真名

随分と厄介な仕事を受けてしまったもんだね……まあ、嘆いたっ
てしかたがないか。

「街に居る不良を可能な限り排除しろ」なんでこんなのを依頼する
か訳が解らなかつたけど、まさか父親とのデートの邪魔になりそう
という理由だったとは……

理由はなんであれ、受けた仕事は完遂するさ。尤も、この仕事は
明確な終わりは決まって無いのだけれど。
出された大金に目が眩んで時間指定をしてなかったのは痛いね。

にしても……随分と幸せそうな顔をしているね、学校では笑顔を見せてもあんな表情は見せた事は無いのに。
とてもじゃないが英雄には見えないね、歳相応の子供にしゅ……そういうえば、彼女等は何百年も生きているから歳相応じゃなくて、見た目相応のほうに語弊がないか。

2人とも見た目が良いから目立っているね。仕事は護衛じゃ無いから別に追いかける必要は無いけど、偶々難を逃れた不良が2人に接近したら問題になるから目を離せないね。

しかし、本当に親子か？仲良く手を繋いでいるのは許容範囲としよう、くつつき方とかがまるで恋人同士か、新婚さんみたいに見えるんだが……

そう思うと、なんかロリコンとその被害者に見えてくるから驚きだ。顔とか似てる点があるから親子で通るだろうけれど、微塵も似て無かった警察に職務質問か、連行間違いないだね。

ん？エヴァンジェリンが1人になったね、父親は……クレープを買って行ってね。

おっ、チャライ男達がエヴァンジェリンをナンパしてるね。若く見積もっても高校生……このロリコンが！

まったく、命知らずだね。アローロニーロの名を知らないのか？いや、知っていても、エヴァンジェリンの存在を知らないのかもしれないね。

エヴァンジェリンの顔がどんどん険しくなってる。おそらくチャラ男が断ってるのに、諦めずにナンパを続けてるんだらう。度し難い馬鹿だ、呆れるしか無いね……

あ、死んだね……

Side out アーロニーロ

クレープを買いに行つてたらエヴァがナンパされてた。エヴァは綺麗だから仕方が無いだろう。

だが、しつこくナンパしてるチャライ男共、通称チャラ男共を笑つて許す理由にはならない。

「ね〜良いじゃん？俺等と遊ぼうよ」

「相手を待っているときから言ってるだろ。さつさと消えろ」

そんな言葉など意に介した様子も無く、エヴァに手で

「死にたいか？餓鬼共」

触れようとしたから、その腕を掴んで止める。

「ああん？んだよ、あんた」

「親だ」

それを聞いた途端、チャラ男共が笑いだす。

「おいおい、いい歳こいて娘にべつたりかよ！」

「もしかして娘に恋してんのか、オッサン」

「ありえね〜」

潰すか。よし、潰そう。

「ちよつとツラ貸せ。餓鬼共」

殺気を思い切り込めて、恐怖で動けなくする。一般人ならこれだけで簡単に動かせる。本当なら激痛を伴う方法で操りたいが、後で問題になると拙いのでこれだけにする。

「「「は、はい」「」」

「よろしい。エヴァ、ちよつとお話してくるから、もう少しだけ待っていてくれ」

「すぐ戻って来てくれよ。こういう類いの連中は、害虫のように湧いてくるからな」

無論だ。Gのように隠れて沢山潜んでる事などよくある。なら、見つけたら徹底的に駆除なり、再発防止しなければならない。

エヴァに買って来たクレープを渡して、チャラ男共とちよつと裏路地に向かう。

後日、チャラ男が誠実になったので、親が泣いて喜んだそうだ。

ただし、3人共超年上好きになって明らかに周りからズレるようになったが……………

「遅かったじゃないか」

「ただお話をしただけだからな」

魔法を使えば簡単にできるが、問題になるので普通に、恐怖によ

る刷り込みで人格を改変した。
魔法じゃないから魔法使いとしては問題あるまい。自称の正義を付けている連中は五月蠅いかもしれないが。

「じゃあ再開しよう、父様」

俺の手を取り先導する。その姿が、初めて会った時と重なる。ふとした事で昔を思い出す、とても爺クサイ気がするが、

「悪くはないな……」

「？」

足を止め、不意の発言にエヴァが首を傾げて顔を覗きこんでくる。頭を撫でて、俺が先導する。

「時間は有限だ。少し急ぐぞ」

そう、時間は有限だ。どれ程残っているか解らないしな。願わくば、幸せが続くことを……

Side out

平穩 2人（後書き）

エヴァとアールローニーロのデート……

経験無いから、あんまり思いつきませんね……

まあ、知ってほしいのはアールローニーロが幸せを感じている事ですし
問題ないよね？

あ、ありますか？

次は、惚れ薬事件、図書館島に侵入をとばして、桜通りの吸血鬼事件に行きます。

二つは此方側の誰も関わら無いので………事件自体は発生しますよ

桜通りの吸血鬼 吸血鬼として初めまして（前書き）

第33話

桜通りの吸血鬼 吸血鬼として初めまして

Side アーロニーロ

事件があつたらしい。なんでも餓鬼が法律に反するレベルの惚れ薬を作った上に、自分で使ったとか、朝のHRで野球拳のクイズ版をしたとか、テスト前に噂に踊らされて2-Aの何人かが図書館島に行つてテストに遅刻したとか、餓鬼が3-Aの正式な担任に決まっているとか。

………勝手に人をオコジヨ妖精にするのを禁止する法律はあつたらうか？

チツ！あつたな。

まあいい。どうせ俺が文句を言つても大して意味が無いだらうからな。

「で？エヴァ、それは本気か？」

餓鬼については今は保留だ、先に片づける問題がある。

「なに、ぼーやと遊ぶようなものだ。父様が心配するようなモノでは無い」

だとしても、心配だ。

「エヴァがやる必要は無いと思うが？」

「ぼーやを攻撃できて、なおかつ完全に手玉にとれる奴が居ないか

ら、私が選ばれたんだろう」

「確かに、此処の連中にネギ・スプリングフィールドを攻撃できないな。だが、俺でも問題無いと思うが？」

「父様を使うと問題がある。じじいがそう考えたんじゃないのか？
というか、父様は受けないだろ」

「……………」

確かにそうだな、餓鬼の相手をする気なんて出ないからな。下手打てば、餓鬼が再起不能の重体にうっかりしてしまいかもしれないな。

俺があまり協力的じゃないしな、英雄の育成に。

「いいだろう、好きにやるといい。だが、心配な事があればすぐに言え、協力は惜しまない」

「わかっているさ、自分のできる限度はわかっている」

「なら、言う事は無い」

さて、学園長を少しシメてくるか。

Side out

Side エヴァンジェリン

じじいの協力の元で、桜通りの吸血鬼の噂が流れている。後は、
ときとうにばーずに気付けかせて戦うだけだ。

気付かれる為には、誰かが被害に遭えばいい。

「なんで私なんだよ！」

「うるさいぞ、ちうたん」

「ネット以外でそう呼ぶな——！！」

騒々しいな、そう呼ばれるのが嫌なら辞めれば良いのにな、ネットアイドル。

「落ち着け。公欠扱いになるし、ぼーやが調べるからさよだと何かに気付かれてしまいかもしれないから」

「確かに……………」

「それに、クラスの誰かにしないとぼーやが気付かないだろ」

「それで、私に仮病をやれと？」

「仮病じゃない、桜通りで倒れてればいい。安心しろ、例え風邪をひいても、別荘なり勉強部屋で休ましてやるから」

「大丈夫なんだろうな……………」

「私が怪我をすることも？」

「エヴァじゃなくて、子供先生のほうだよ」

「最悪の場合は、お前が治せばいいだろ？」

「なんで私任せなんだよ……」

「補肉剤だと気持ち悪いが、お前なら何も問題無く元に戻せるだろう？それでも信賴してるんだぞ？私も父様もさよもな」

回復をまともな方法で、できるのは私等の中で千雨だけだからな。

「ん、たしかにそうだな。てか、私以外は必要無さそうだしな……」

同感だな、私等の中で一番弱い千雨だしな。

「明日決行するからな。今日は私の家に泊れ、そして朝に桜通りで倒れて貰うからな」

「わかった」

問題無く事は進んでいる。千雨に残した魔力に気付いたようだし、おそらく今日にでも桜通りの見回りを始めるだろう。あとは適当にぼーやに見つかるように誰かを襲うふりをすればいい。

「少し、血を吸わせてもどうぞ」

「え？」

偶然にも桜通りを来た宮崎のどかに襲うふりをする。近くにぼーやが来ているのは茶々丸からの報告でわかっている。あとは、ぼーやを急がせる要因を作り出せばいい、さあ悲鳴を上げる。

こちらの姿を凝視して……………倒れた？

……………ちよつと待て、気絶するなんて予想外だぞ！

姿を怖くしすぎたのか？とりあえず私と判らないように、血塗れの姿に仮面をしていたんだが……………

そこまで刺激が強かったかの？とりあえず着替えておくか

今度は普通のマントに仮面にした　　ぼーやまで気絶したら話にならんしな……………

「僕の生徒から離れてください！」

僕の生徒か……………じじい共の御膳立てが無ければ教師に成れない、いや、なるうともしない奴の言う言葉ではないな。ましてや、課題として教師をやっている奴だからな。

「分が悪いな」

わざわざ聞こえるように言って走り出す。遠目に明日菜と木乃香が見えたが問題は無いだろう。

もういいか。戦うには十分な広さがある場所に來れたし、先ほどの場所が十分離れられた。

「あなたは魔法使いなんですよね！なんで悪い事をするんですか！」

「世の中には、正義とは逆の悪の魔法使いも居る。魔法学校で習わなかったか？ネギ先生」

仮面を外して素顔をさらす。それだけでぼーやの表情は驚愕のモノに変わっていく。

「さて、素顔をさらしたとここで改めて自己紹介をしよう。3年A組出席番号5番のエヴァンジェリン・A・K・M・アルルエリだ。今は敵としてよろしく」

「な、なんで……」

「わざわざ敵と教えたのに、なに呆然と立ち尽くしている？魔法の射手 連弾・氷の11矢」

「ッ！魔法の射手 連弾・光の11矢！」

反応のは出来たか、だが後出しなら相殺ではなく相手より多く撃つくらいの気構え位は欲しいな。

戦いを知らん奴に高望みしすぎか、それでも与えられた役割は果たすか。

「茶々丸、抑えつけろ」

「え？」

「了解しました、マスター」

ぼーやは死角から出てきた茶々丸にあっさりと地面に押さえつけられる。なんとも張り合いが無いことだな。

相手が1人だと思っていたのだろうが、魔法使いならまずそんな事は無い。

「茶々丸、自己紹介してやれ」

「改めて、はじめまして。エヴァンジェリン様の魔法使いの従者をしている、3年A組出席番号11番の絡繰 茶々丸です」

「ぼーや、魔法使いは詠唱中は無防備だ。それを守るのが魔法使いの従者、これくらいは学校で習っただろ？ 実践においては居る居ないでかなりの差が出る。今体感しているだろ、ぼーやに従者が居れば、こんな事にはならなかったのにな」

従者が居れば、のどこを強調している。じじいからの依頼の中に、ぼーやに従者の重要性を教えるようにと、あつたからな。今のままなら明日菜が最有力候補だが、タカミチは動かないのか？ このままでは明日菜は英雄（予定）の従者になるというのに。

「それでは、血を貰おうか」

腕に傷を付けてそこから血を啜る。結構旨いな。

「こらー！ 子供相手に何やってんの！ この不審者ー！！」

どうやら追いかけて来た明日菜が跳び蹴りをしてくる。明日菜でなければ魔力障壁で防ぐが、魔法完全無効果能力の前では無いのと同じだから避けるか、受け止めるしか無い。そのままの身体能力では、簡単に避けられるがな。

それにしても騒々しいな、しかも私に対して頭に跳び蹴りとは…
…下手すれば死ぬぞ？ わかっているのかはなはだ疑問だな。

「え、エヴァ？あんだ、なにやってんの……………」

当然の反応か……………クラスメイトが担任を襲ってるのだから。

「なに、吸血鬼らしく血を吸ってる訳だが？おかしい事か？」

「な、なんで？あんだ普通に日の光に浴びてたし、鏡にも写ってたじゃん」

「例外とは、常に存在する。尤も、私は自分以外の吸血鬼がどうなのか知らんがな」

「マスター、これ以上は（アローニー口様が心配して動き出しかねません）」

「そうだな……………では、また明日」

「ちょっと待ち」

明日菜が何かを言っているが、それを無視して家の玄関まで転移する。

S i d e o u t

桜通りの吸血鬼 吸血鬼として初めまして（後書き）

ネギに勝ち目が無い。勝てる要素が無い。

そんな事を考えながら書いてる今日この頃。

本編でも書いてあるけど、出席番号が微妙に変わってます。

エヴァの姓がアルルエリに変わってるから、5番に変化、それに伴って元の5番から26番までの人の番号も変化する。と、書いてる途中で気付きました。

微妙な変化だけど別に変に影響はありません。

誰かコラボしてくれませんか……

もし、してくれるなら好きにやっちゃって構いません。ただ、やるとメッセーজくれさえすれば。

桜通りの吸血鬼 従者（前書き）

第34話

やっちまった感が否めない……

最後らへんは想像力豊かな人は考えないでください。

表現が曖昧だから、人によっては物凄く不快なモノを想像してしまうかもしれない

桜通りの吸血鬼 従者

Side エヴァンジェリン

つまらん。ぼーやは勝つ為に修行するわけでも、従者になつてくれる奴を探す訳でも無く、ただただ私と言う脅威に怯えているだけだ。まるで狩られるだけの草食動物みたいだな。いや、草食動物なら逃げようとするだろうが、ぼーやは逃げないだけですか？実戦では悪手だが、今回は茶番だから問題無いだろう。

夕焼けによつて茜色に染まった校舎の屋上で物思いに耽っているのだが……

「少しは期待してたんだがな……」

ぼつりと溢した一言。誰にも聞かれて無いと思つたが、聞いているのが居た。

「なににですか？エヴァさん」

「さよか……」

「私も居るぞ」

声の聞こえた先にさよと千雨が居た。こんなとこになんの用だ？

「ぼーやの父親を知っていてな……あいつの子供だから、もう少し雄々しいのを期待していたんだ」

「……確かに、今の子供先生は雄々しいから程遠いけどよ、エヴァ

に吸血されただら？普通の反応だと思うけど……」

「あいつの父親、ナギは吸血されたぐらいで恐れるような人間じゃなかった。むしろ、やられたらやり返すなんてのがザラだったからな」

わかりやすい奴だったな。

「ネギ先生にソレを期待するのは酷だと思えますけど……」

「確かに、子供相手に何を期待してたんだろっな……私は」

しかし、このままでは埒があかないから、発破を掛ける必要があるな。

ナギの手掛かりになりそうなものを勝てたら教えてやると言ってるか……ナギを探してるらしいから、少しはマシになるだろう。

「そっいや、茶々丸はどうしたんだ？いつも一緒に居るのに？」

「ああ、茶々丸なら夕食の準備があるから先に帰らせた」

今頃は、野良猫にエサでもやってる頃合いだろうっか？

Side out

Side 茶々丸

四面楚歌という訳ではありませんが、危険という意味では非常に問題です。

ネギ先生が、明日菜さんとオコジヨ妖精を連れて来ました。

私にマスターを止めるか、説得するのを協力して欲しいと言われてますが、マスターの今回の行動は善悪の基準で判断しても問題ありません。

たとえ悪だとしても、私はマスターへの協力に全力を尽くします。私はマスターの従者なのでから。

「残念ですが、それに協力はできません」

「では、茶々丸さんだけでも、悪い事をするのをやめてくれませんか？」

「それもできません。私はマスターの意思に従って行動します」

「そう……ですか」

ネギ先生と明日菜さんは、凄く残念そうな表情をしてこちらを見ます。

「用事が済んだのなら、退いてくれないでしょうか？夕食の準備がありますので」

「兄貴！此処でやつつけとかないと、もうチャンスは無いかもしれねえぜ！」

こちらにも聞こえる声でオコジョ妖精オコジョ妖精がネギ先生に言っています。しかし、ネギ先生はあまり乗り気では無いようですが

……

「ごめんなさい、茶々丸さん」

謝り、魔法を行使して明日菜さんの身体能力を強化して突っ込ませます。

定石なら明日菜さんが時間を稼いでいる間に詠唱して、私を倒せる魔法をぶつける。と、いった戦法でしょう。

「いろいろ聞かしてもらおうよ！エヴァの事も、あんたの事も！」

「残念ですが、今は話すつもりはありません」

全てを話すのはおそらくは、終わった後でしょう。少なくとも話す機会は今ではありません。それに、私が遅くなるとその分夕食が遅くなるので、手早く片づけて帰らなければなりません。

速いですね。強化された明日菜さんの身体能力はガイノイドある私に匹敵しています。それなりに戦い慣れもしているようですが、ずっと攻防を続ければ明日菜さんには勝てます。しかし、それでは勝ち拾えません。

明日菜さんの後ろにはネギ先生が控えています。どのような魔法を使うか解りませんが、状況によっては回避不可能な状態に使われてしまいます。

……とこでなんでデコピンで戦っているんでしょうか？

つい、応戦するために私もデコピンを決めようとしているんですが

……

「姐さん！」

その声と同時に明日菜さんが後ろに退きます。その後ろに魔法の矢が見えます。

回避 不可
成功しても損傷は甚大
防御

「マスター、アローニー口様、すいません。それと、ありがとうございます」
「ございました」

できればもつと言いたいことはありませんが、時間がありません。だから、伝えたい事だけ記録に残るように言います。運がよければ、記録媒体は残って元に戻るでしょうが、逆もあります。視界が黒く染まり……

また、鮮明に景色を写しだしました。

なぜ？先ほどとは別の場所にいます。誰かに抱えられています。要領をえませんが、助かったようです。

「ありがとうございます。アローニー口様」

私を抱えているアローニー口様にお礼を言います。

どうやら、影のゲートで私を移動させたようです。一瞬で対象を移動させる、その早業で助けてくれたのでしょう。

……？反応がありません。いつもなら「当然だろ」のようなことを言いますが、なにも言いません。

ツ！今まで見た事の無い憤怒の表情　　さながら悪鬼の如き表情で、今にも誰かを殺しかねない雰囲気を発しています　　で、あの場所を見ています。その視線の先にはネギ先生達が呆然と立ち尽くしています。

3人ともアカイモノを浴びてしまった様です。彼らの少し前を中心にしてアカイモノが飛散して、ナニカに似たモノがまさにごみのように転がっています。それらを視線だけを動かして見ています。いえ、見てしまったと言う方が正しい気がします。

「え？……………」

そう口から溢したのを皮切りに、ネギ先生は言葉にならない叫びをひびかせました。

S i d e o u t

桜通りの吸血鬼 従者（後書き）

本編補足

原作と違って、学園長に咎められていません。

まだ、甘いやり方ですし、実際のネギをある程度やる気にさせる為には仕方が無いと判断されました。

ちなみに魔法関係者全員グルです、知らないのはネギだけです。

桜通りの吸血鬼事件は、英雄がエヴァンジェリンネギの実力と覚悟を測る為の事件とされています。

しかし、最後のはアールローの独断で行われました。

目の前で家族が襲われたら怒るよね？その際に落し物をうつかりしてしまいましたけど。

次回はネギサイドの予定

桜通りの吸血鬼 ネギ側1（前書き）

第35話

酷いな……他のやつより長いし、会話ばっかだし、結局心理描写はダメダメな気がする。

桜通りの吸血鬼 ネギ側 1

Side ネギ

桜通りの吸血鬼。ただの噂と思っていたけど、僕の生徒に被害が出た。出席番号27番 長谷川 千雨さん。

彼女が僕の知る限りにおいては最初の犠牲者で、魔力を感じたから十中八九魔法使いに襲われた。

なんで立派な魔法使いを目指す筈なのに、人を襲うのかわからないけど、そのままにはできない。

それに、もしかしたら、気付かないだけで他にも犠牲者が居るのかもしれない。

そう思うと、いつてもたつても居られずに夕方から桜通りを見回る事にした。

桜通りには見事な桜が咲き誇っている。こつこつのを風情ある景色と言っただけでいい？

杖を持って見回りしていますが、今のところ誰にも会いません。噂の影響でしょうか？

なんにしても、これで僕も相手も魔法を使えます。

人影が2つ、片方は地面にうずくまっていて、もう片方はうずくまっている方に今まさに覆い被さるうとして見えています。それに、うずくまっている方はのどかさん、僕の担当しているクラスの子のように見えます。

「僕の生徒から離れてください！」

大声で此方を気を引く。もし、本当に吸血鬼ならのどかさんが吸血されれば吸血鬼になってしまいかもしれません。

「分が悪いな」

そう言うと、マントと仮面を付けた吸血鬼はあさつりと走って逃げていきました。追いかけないと！でも、のどかさんをこのままにしておく訳にもいきません。どうしたら……

「ちよつとネギ！さっきの声なに！？」

「ちよつとまつてな〜明日菜」

そこに、明日菜さんと木乃香さんが来ます。

「ちょうど良かった！明日菜さん、木乃香さん、のどかさんを頼みます！僕は吸血鬼を追いかけます！」

「え？ちよつ、ちよつと待ちなさいよネギ！」

明日菜さんと木乃香さんにのどかさんを頼んで、走り去った吸血鬼を追いかけるべく走ります。

「あなたは魔法使いなんですよね！なんで悪い事をするんですか！」

立ち止まっていた吸血鬼に問いかけました。でも、待っていた答

えは返つてきず

「世の中には、正義とは逆の悪の魔法使いも居る。魔法学校で習わなかったか？ネギ先生」

え？仮面の下から聞き覚えのある声が聞こえました。吸血鬼は仮面に手を伸ばすと、躊躇い無くそれを外し

「さて、素顔をさらしたとこで改めて自己紹介をしよう。3年A組、出席番号5番のエヴァンジェリン・A・K・M・アルエリだ。今は敵としてよろしく」

僕のクラスの生徒がそこにいました。

「な、なんで……」

エヴァンジェリンさん。クラスでさよさん、千雨さん、茶々丸さんとよく一緒に居る人。

クラス内では暴走しがちなクラスメートをよく止めてくれる歯止め役で、勉強も運動もできる文武両道な生徒。

僕の知る限りでは、こんな事をするような生徒じゃ無いはず……

「わざわざ敵と教えたのに、なに呆然と立ち尽くしている？魔法の射手 連弾・氷の11矢」

「ッ！魔法の射手 連弾・光の11矢！」

「茶々丸、抑えつける」

「え？」

「了解しました、マスター」

一瞬でした。応戦したら、背中に衝撃がはしってすぐにお腹にも地面に衝撃がはりました。どうやら地面に抑えつけられたようです……

「茶々丸、自己紹介してやれ」

エヴァンジェリンさんの一言で、上から声が下りてきます。

「改めて、はじめまして。エヴァンジェリン様の魔法使いの従者をしている、3年A組出席番号11番の絡繰 茶々丸です」

「ぼーや、魔法使いは詠唱中は無防備だ。それを守るのが魔法使いの従者、これくらいは学校で習っただろ？ 実戦においては居る居ないでかなりの差が出る。今体感しているだろ、ぼーやに従者が居れば、こんな事にはならなかったのにな」

知っています。でも、今は戦う事なんてほとんど無いから、今は人生のパートナー探しの理由になっているとも。

エヴァンジェリンさんが近づき、僕の腕に口を近づけて耳を疑う言葉を言いました。

「それでは、血を貰おうか」

鋭い痛みと共に、ピチャ、ピチャという音が聞こえて……

「こらー！ー！子供相手に何やってんの！この不審者！ー！」

聞きなれた声と共に、エヴァンジェリンさんが身を退きます。

「え、エヴァ？あんだ、なにやってんの……………」

明日菜さんがさつきまで居た場所に立っています。その姿が、頼もしく見えます。

「なに、吸血鬼らしく血を吸ってる訳だが？おかしい事か？」

「な、なんで？あんだ普通に日の光に浴びてたし、鏡にも写ってたじゃん」

「例外とは、常に存在する。尤も、私は自分以外の吸血鬼がどうなのか知らんがな」

「マスター、これ以上は」

いつの間にか僕の上からどいていた茶々丸さんが、エヴァンジェリンさんの後ろに控えています。

「そうだな…………では、また明日」

「ちょっと待ちなさい…………よ」

明日菜さんが止めようとしたけど、そんな事など意に介さずにどこかに転移して行きました。

た、助かった……………なんでかわからないけど、明日菜さんの御蔭で助かった…………

「いったいなんなのよ…………ネギ、大丈夫？」

思わず明日菜さんの胸に飛び込んで泣き出してしまいました。

「あー、よしよし。ホントになんなのよお」

Side out

Side 明日菜

ホントになんなのよお。ネギを追いかけたら、ネギが不審者に返り討ちになっているし……

その不審者がクラスメートのエヴァと茶々丸だし、ネギは血を吸われているし……なにが如何なってるのよ……

2人がどこかに消えたら、ネギはあたしに抱きついて泣き出しちゃったし。

とりあえず部屋まで連れ帰って寝かしたけど……

Side out

Side ネギ

学校に行きたくない。考えてみると初めての事だ。メルディア魔法学校でも、麻帆良学園でも学校で嫌な事なんて何一つ無かったからそもそも行かないなんて考えた事も無かった。

だけど、それは昨日までの気持ちで今は本当に行きたくない。

「は、離して下さい。明日菜さん！」

「教師が仮病なんて使うんじゃないの！あんたは私達の担任でしょ！」

「エヴァンジェリンさんと茶々丸さんに会っちゃうじゃないですか
！」

「会うのは当たり前でしょ。あんたのクラスの一員なんだから」

「でも！」

「でもない！エヴァが悪い事してるんだったら、説得して止めさせるなりなんなりしなさいよ！」

「次会ったら、全身の血を吸われるかもしれないですよ！話す前に食べられちゃいますよ！」

「学校なら人の目があるから大丈夫でしょ！」

「……………そう…かも…しれません」

「じゃあ、とつとと歩く」

「……………はい」

大丈夫……………なんででしょうか？ネカネお姉ちゃんごめんさい、もしかしたらもう会えないかもしれない……………

大丈夫でした。エヴァンジェリンさんが怖かったですけど、襲われて血を吸われるという事は起きませんでした。

しかし、何も変わっていません。もしかしたら、明日は食べられてしまうかもしれません……
どうにかしないと……

「兄貴！久しぶりだな！」

「へ？」

声が聞こえました、でも今は僕以外居ないはずです。なんだか聞き覚えがある気がするし、下の方から聞こえたような

「兄貴、下だよ下」

丁度足元に、僕に声を掛けている人物？が居ました。

「カモくん！」

「そう！アルベール・カモミールだぜ！兄貴！」

カモくんがキメ顔(?)で言います。

「なんか困ってるようだけどよ、どうしたんだ？兄貴？」

「実は……」

僕はカモくんにこれまでの事を話しました。

「兄貴、そのエヴァンジェリンて本物か？」

「？本物って？」

カモくんはエヴァンジェリンさんの事を知っている？

「兄貴、知らないのか？エヴァンジェリン・A・K・M・アルルエリって言えば、兄貴の父親のサウザントマスターと同じ大戦の英雄だぜ？本物ならな」

「それじゃあ！父さんの事なにか知ってるかも！」

すぐにも聞きに行かなきゃ！！

「待つてくれ兄貴！本物ならだ！話を聞く限り本物じゃないみたいだしな」

「じゃあ、偽物？でも、そんな事する人いるの？」

「あゝそれが居るんだよ。エヴァンジェリンの父親であるアール・ロ・アルルエリの偽物が何人も捕まった事があるから、その娘の名を語る偽物が居てもおかしくないんだよな」

「……………そう…なんだ」

「偽物でも多少はやるようだから、正直今の兄貴だけじゃ厳しいぜ」

「どついたらいいのかなあ……………」

「それだったら、こつちも従者を連れて行けばいいさあ！そう思つて兄貴の従者候補をピックアップしてしといたぜ！」

名簿？いつたい、いつの間につつたんだろ？でも、これって……

「全員僕の生徒じゃないですか！」

「そりゃ当たり前だぜ。兄貴と接点があつて、なお且つ従者になつてくれそんな人材をピックアップしといたからな」

……確かに、接点があつて従者になつてくれそんな人は僕の生徒ぐらいだけ……

「カモくん、僕はこの中から選べない。いいや、選んじゃいけない」

「へ？」

「一般人の僕の生徒を巻き込めないよ……」

「けどよお、だったらエヴァンジェリン（仮）はどうするんだ？兄貴一人で勝てるのか？」

結局そこに行き着くんだよね……

「……たぶん、無理……」

どつしどつ……

「兄貴、魔法を知ってる生徒は居ないのか？そいつならもしかしたら……」

「居る……」

でも、多分無理だよね……

「なら、そいつは？」

「なつてくれないと思う……………」

「私なら、期間限定ならなつても良いわよ」

「そういう都合の良い返事なんて、明日菜さんからもらえないですよね……………」

「あ、兄貴……………」

……………今の声って……

「明日菜さん！！」

「なに大声あげてんのよ」

「だっ、だつて従者になつていいって！」

「条件付きだけどね」

希望が見えてきたような気がします！

Side out

Side 明日菜

「で、まずはどうすんのよ？」

「じゃあ、仮契約をするためにこの魔法陣の中でキスを一発やちゃつてくだせい」

なんだ、結構簡単にできるのね。

てつきり呪文でも唱えながらなんかやるんじゃないかと、魔法陣の中でキスを……

「てっ！なによそれ！なんでキスしないいけない訳！！」

なんで私のファーストキスを、タカミチ先生じゃなくてネギにくれてやんなきゃいけないのよ！！

「これが一番簡単な方法なんだよ、わかってくれ姐さん」

「ごめんなさい……」

納得できない。

「てっ、いうか！する必要あるの！？」

「仮契約しとけば強力なアーティファクトが手に入るかもしれないし、魔力供給を受けれる、念話がパートナーにできる、とかやっておいて基本的には損は無いだぜ！」

損は無い？正直とこ、一番信用できないキャッチフレーズよ、それ。

けど、アーティファクトをどんなのか解らないけど、ネギみたいに魔法を使えない私には必要かもしれない。

桜通りの吸血鬼 ネギ側1（後書き）

思ったより進まなかった……

茶々丸襲撃まで行こうと思ったのに……

茶々丸襲撃（ネギ側視点）は次回に持ち越しです

桜通りの吸血鬼 ネギ側2 (前書き)

第36話

感想 修次様

ありがとうございますー!!

桜通りの吸血鬼 ネギ側 2

Side ネギ

「そういえば、なんで明日菜さんは期間限定とはいえ、仮契約してくれたんですか？」

普通なら忌避しそうですけど………というか、キスする前にかなりの葛藤が見て取れたんですけど……

「簡単に言うなら、知りたいからね」

「知りたい？」

「そう、知りたいから。あんたとは違ってエヴァというか、クラスのみんなどはもう2年の付き合いだからさ。だから、なんとなくやりそうな事が判るのよ。でも、今回の事はエヴァがとてもしゃないけど、やりそうに無い事なのよ。特に、弱い者いじめっぽいことかね」

弱い者いじめ………そんなに差があるように見えただね………

「上から目線の口調だけど良い奴なのよ。少なくとも私の知ってるエヴァは、ね………だから今回の事もなにか理由か意味があるんじゃないか。って、考えてるのよ」

付き合いの差ですかね………僕では判らないことですけど、語ってる明日菜さんの表情は柔らかいものです。

「尤も、私の願望かもしれないけど……」

「でも、そうだったら良いですね」

「それを確かめる為に、あんたに協力すんのよ」

「んじゃ、まずは戦力確認だ。兄貴、複製カードを姐さんに」

「これが仮契約カードね。見た感じ普通のカードよね？」

「アデアットと言ってくだせい」

「アデアット」

カードから明日菜さんのアーティファクトが出てきましたが……
ハリセン……ですよね？普通はカードに描かれている物が出てくるはずですが……

「……………」

「……………」

「……………」

沈黙が気まずいです……

「あーあれだ。姐さんのアーティファクトは訳がわから「ど！こ！が！強力なアーティファクトよ！ただのハリセンじゃない！」

カモくんの命が明日菜さんの踏み付けで目に見えて削られて逝っ

てます！

「落ち着いてください！明日菜さんのアーティファクトがハリセンなのはカモくんの所為じゃありません！！」

なんとか明日菜さんを止められましたけど、カモくんは気絶してしまいました。

こんなんで、エヴァンジェリンさんと茶々丸さんに勝てるんでしょうか？

翌日

「兄貴！従者を先に潰しちまえばいいんです！」

「なに言ってるのよ、このエロガモ」

「それ、明日菜さんに昨日却下された案だよ……」

明日菜さんと仮契約して1日が過ぎ、エヴァンジェリンさんと茶々丸さんに勝つ為の作戦会議をしているんですが、一向に良い案がでないんです。

そこにカモくんが昨日却下された案をまた持ち出したのです。

「これしか無いぜ！兄貴の話じゃ詠唱中は無防備、って本人が言ってたんだから守る従者が居なきゃ、兄貴と姐さんの勝率が跳ね上がるんだぜ！」

「いつも一緒に居る2人を、どうやって各個撃破すんのよ」

明日菜さんの正論でカモくんが諦めるかと思ったんですが、

「いくらなんでも24時間付きつきりつて訳じゃないはずだから、尾行でもしてれば一人の時ぐらい見つかるに決まってるなあ！」

諦めません、思えば仕方が無いかもしれませんが。これまで、まったくと言って良いほど良い案が出ませんが……尾行って犯罪になるんじゃないのかな……

「それに、その所為で戦いに入ったら、負けるかもしれないのよ？そこまでの危険を侵す価値あるの？」

「そりゃあ、失敗したらの話ですけど！それに、コレ以外で良い案が無いじゃないですか！」

「そうだけど……」

明日菜さんが反論しようとしたようですが、結局明日の放課後に茶々丸さんを尾行する事になりました。

茶々丸さんが1人で帰っています。

「兄貴こりゃ、もしかするかもしれないぜ！」

「珍しい事もあるもんね……」

「罽。って、事はありませんよね？」

都合が良過ぎると思うんですが……

「エヴァだったら、正面から来ると思うわよ。尤も、家への招待がもしれないけど……」

魔法使いの家？地の利が最悪になりそうですね……

「それなら家に入らなきゃ良い話だぜ！」

「……そう（です）ね」「」

カモくん解ってるのかなあ？

「とりあえず、尾行するわよ」「

そうして、茶々丸さんを尾行し始めました。

普通に良い人ですね。重そうな荷物を持つてる人のお手伝いしたり、川に流された子猫を助けたりしてました。ロボットなのに水は大丈夫なんでしょうか？

「いつもあんなにボランティアしてるの？」

「絵に描いたような善人の行動ですぜ」「

「もしかしたら、話せばわかってくれるんじゃないんでしょうか？」

そう思えて仕方ありません。いつもそうなのは解りませんが、手慣れたるように見えますし……

「説得から入るわよ」

明日菜さん言葉に僕もカモくんも頷きます。

「茶々丸さん。少し、よろしいでしょうか？」

「ネギ先生と明日菜さんですか。できれば、手短にお願いします」

「では、単刀直入に言います。エヴァンジェリンさんと悪い事をするのを止めてくれるか、一緒に止めるように説得してくれませんか？」

できれば頷いてほしい。でも、頷かなかつたら……

「残念ですが、それに協力はできません」

頷いてくれませんでした……しかし、茶々丸さんに攻撃はしたくありません。

「では、茶々丸さんだけでも、悪い事をするのをやめてくれませんか？」

頷いて……ください……

「それもできません。私はマスターの意思に従って行動します」

「そう……ですか」

ですが、すぐに攻撃する気にはなれません。

「用事が済んだのなら、退いてくれないでしょうか？夕食の準備がありますので」

「兄貴！此処でやつつけとかないと、もうチャンスは無いかもしれねえぜ！」

カモくん言う通りです。茶々丸さんが1人なのは珍しい事、次は無いはずです。

「ごめんなさい、茶々丸さん」

謝るの対象は本当に茶々丸さんだけ？明日菜さんや、クラスの皆様さんにもでしょう。

僕は正義と生徒を天秤かけて、正義を取ったのですから……

「契約執行！60秒間！！ネギの従者 神楽坂 明日菜！！！」

「いろいろ聞かしてもらおうよ！エヴァの事も、あんたの事も！」

「残念ですが、今は話すつもりはありません」

明日菜さんが茶々丸さんにデコピンで倒そうとしています。

「兄貴！早く次の魔法であの従者を倒すんだ！」

やっぱり、未だに決意が出来てません……簡単に生徒を傷つけるなんて……

「兄貴がやれなきゃ！誰がやるだ！！！」

カモくんの、その一言が引き金になりました。

「ラス・テル マ・スキル マギステル 光の精霊11柱！集い来たりて敵を討て！！魔法の射手！！連弾・光の11矢！！！」

「姐さん！」

カモくんの声に反応して明日菜さんが下がり、代わりに僕の魔法の矢が茶々丸さんに向かい……

バシヤ……………

茶々丸さんを しました……………

生温かいアカイモノが茶々丸さんだったモノを中心に広がっています。

なんで……茶々丸さんはロボットのはず、アカイモノが茶々丸さんから出るはずがないのに……

じゃあ、コレはなんでしょうか……理解できない 否 理解したくない

ココロと動いていたモノが止まり、ソレと目が合いました。体を無くした茶々丸さんの頭と……………

S
i
d
e

o
u
t

桜通りの吸血鬼 ネギ側2（後書き）

本編補足

ネギが殺した？のはアローニーロが作った義骸の茶々丸版

身代わりに使える携帯義骸を作る上で作った試作品で内側も精巧に作られた一品。

作り終わってから、茶々丸はガイノイドだから相手を騙せない事に気付いて廃棄予定だったモノ

それと、宣伝を。思い付きで書いた、めだかボックスの短編というかプロローグみたいなのを投稿してあるので、もし良かったら見てください。

桜通りの吸血鬼 襲撃の後処理（前書き）

第37話

感想 Jun様

ありがとうございますー！ー！

今回つなぎ回

桜通りの吸血鬼 襲撃の後処理

Side 第三者

街中での殺人騒ぎ。これを鎮めるために、魔法先生全員が駆り出される事となった。

いくら認識障害があっても流石に殺人騒ぎは誤魔化せない、いや、誤魔化してはいけない。

現場の隠蔽と、目撃者の記憶操作が同時進行でなされ、2時間後にはそんな騒ぎは表からは無かった事にされた。それと、精神性の致命的となりうるシヨックをうけたネギ・スプリングフィールド、神楽坂明日菜、アルベール・カモミールに適切な処置（記憶の改竄）を施した後に解放された。

「アローニーロ殿はどうしておる……………」

残る学園側の懸念材料は、アローニーロ・アルルエリとその周辺の人物だけであった。

数こそは確認できるのは5人と少ないが、アローニーロが怒り狂うだけで麻帆良学園は消え去ることも十分にありえる。先の大戦で、帝国の兵器として投入された大虚を用意したのはアローニーロだといふのは皆が知っている事である。それに、アローニーロ自身の戦闘能力も、たかが1人だと馬鹿に出来ないほどの高さを持っている。

「タカミチ先生が所持しているダイオラマ魔法球に、タカミチ先生同伴で入りました。それが2時間前のことです」

「何しに入ったかは聞いておるか？」

「いえ。ただ、誰も入るなどの事です」

「待つ事しか、できんのか……」

Side out

Side タカミチ

初めての事だ。一緒に居た時間なんて短いモノだけど、そもそも怒っているのを今見た事が無い。

それに、僕に向けられた怒りでは無いというのに恐ろしく感じる。もし、こんな怒りに向けられれば間違いなく向けられた人間は死ぬか、殺されるだろう。そうさせない為に、こうしている訳なんだけども……

「どうした！考え事か！！随分と余裕だな！！」

素手だというのに、簡単に鉄塊を粉碎できるストレートが腹部に突き刺さる。

比喻ではなく、本当に突き刺さるのだ。普通だったなら、腹部に穴が開けば激痛だけじゃなくて生命の危機だが、開始前に渡された薬で痛みは遮断されているし、体の欠落は補肉剤ですぐに修復されている。

ソレをもう何度も繰り返し返している。まるでゾンビにでもなったかのような気分だ。

一方的な虐殺。いや、誰も殺されていないから髑りモノにされているだけか……

落ち着いてもらう為に此処で戦闘してもう2日、外の時間で2時間か……

「アローニーロさん……そろそろ落ち着きましたか？」

「ああ……………」

正直、これで落ち着いてくれてなければ、明日菜やネギ君の命の危機だ。

今回で幸運だったのは、ネギ君達が茶々丸を襲う時にアローニーロさんが近くにいた事だ。

もし、居なかつたら……想像したくないけどネギ君と明日菜とオコジヨ妖精は生きてはいなかつただろう。

たとえ生きていたとしても、人の形ではなくなっていたかもしれない。

茶々丸殺害未遂で、人を普通だつたら死んでるような状態に何回もするのだ。殺害だつたらこれ以上の状態になる……最悪麻帆良が消えてたかもしれない……ただ僕がサンドバックになつただけで落ち着くのだ、おそらくはまだ安い方だろう。

「此処を出る前に、服を如何にかしないな」

確かに……アローニーロさんはいつもの仮面付きの服装だから白が赤に変わっているし、僕は「何をしたらそうなるの？」って聞かれる状態だし。服がボロボロでも身体は完全な状態だけ……

「血塗れの服は捨てるか……ほれ、お前はこれを着ろ」

そう言い影の倉庫から取り出したスーツ……ではなく、喪服を渡された。……………なにかの冗談、なのだろうか……………？

「悪いな、コレ以外はいつも着ているような白い服しかないんだ」

良かった、出たら葬式が待っていると言っていると遠回しに言ってるわけではなかった。

「いえ、あるだけマシですから」

少しサイズが大きいかな？

でも、これで問題無いだろう。

Side out

Side 第三者

「決闘は土曜の夜だ」

いきなりの宣言に学園長は顔をしかめる。しかし、アローニーロがソレを気にする筈も無く続ける。

「エヴァから果たし状を出させれば、あの餓鬼でも喰いつくかもしれんからな」

「勝てない戦いに挑むほど、ネギ君は無謀ではないはずじゃが？」

「ハンデがあれば喰いつくだろう」

アローニーロは仮面の下で笑いながら既に次を見ている

「わかった」

「嫌なら別にやらなくていいぞ？」

「いや、そうでもしないと、ぼーやとの遊びがダラダラと続きそうだからな。それに」

「それに？」

「このまま続くと、修学旅行に影響が出そうだから、なるべく早くに終わらせたい」

正直なところ、エヴァンジェリンはもう今のネギ・スプリングフィールドに対して期待も興味も無くしていた。

元々エヴァンジェリンとっては遊び程度、つまりいつでも止められる暇つぶし位の価値しかないのだ。

その遊び程度で、従者の茶々丸が殺されかけたと知っていたら、悪い意味で対応は違っていただろうが……

「ハンデ付きなら、多少は気を紛らわす程度には楽しめるだろう」

「ぜんぜん楽しめない。そう言ってるのと同じだぞ、父様」

「実際そうなりそうだろう？違うか？」

「ハンデ次第だな」

その日のうちに、ネギ・スプリングフィールドに果たし状が届くのであった

S i d e o u t

桜通りの吸血鬼 襲撃の後処理（後書き）

短い！早い！タカミチがサンドバック！な回でした。

タカミチは犠牲になったのだ……明日菜とネギの為の犠牲にな……

タカミチの実質的な被害は、時間とスーツだけですけどね。

致命傷 回復 致命傷の無限ループを2日に渡って受けてたんですけどね。

痛みになる触覚の反応は、都合の良い薬で遮断されてたから、大し

て苦ではない！……はず……

次で、桜通りの吸血鬼は終了予定。

桜通りの吸血鬼 終結（前書き）

第38話

サブタイ通りに、今回で桜通りの吸血鬼は終了。

後書きにアンケートあり。

桜通りの吸血鬼 終結

Side 第三者

快晴となつている夜空を駆ける人影が1つ。その人影はエヴァンジェリンである。

果たし状の返事は貰ってないが、ネギにとって有利な条件で戦ってやるのだから喰いつかないはずが無い。

そう確信して、自分が指定した場所に向かっているのである。

その場所に着けば、2人の人影が見える。内心だけで微笑んで、人影から少し離れた場所に着地をする。

「まだ指定の時間10分前なのに来てるとは……随分とやる気みたいな」

「はい。この勝負に勝って、エヴァンジェリンさんには悪い事を止めて貰います。それと、僕のお父さんの手掛かりになりそうな情報も教えて貰います」

「さあ！かかって来い！最初で最後のチャンスだ！」

2対1の勝負の火蓋が切つて落とされた。

先手はネギと明日菜の2人である。尤も、エヴァンジェリンが先手をわざと打たせたのだが……

まず、契約執行でネギが明日菜を強化しエヴァンジェリンの足止めを行い、その間にネギが魔法の詠唱を完成させる。定石通りの決まりきった一手である。だが、出鼻から挫かれた。

エヴァンジェリンが影から氷輪丸を出して明日菜を斬りつけよう

としたので、明日菜が突っ込んですぐに退かざおえなくなったのだ。

「ちょっとお！？危ないじゃないエヴァー！！！！」

「危ない？当然だ、裏とはそういう世界だ。不用心に入り込めばすぐに喰われる」

「明日菜さん！アーティーフアクトを！！」

「……正直言つて、頼りないけど……無いよかマシね、アデアット
！！」

「……………随分と個性的なハ……アーティーフアクトだな」

「憐れみの目で見られたあ！！だから出したくなかったのよ！！」

「その……なんだ……アーティーフアクトで人生が決まるものでない………と思う」

だが、見た目に反して明日菜のハ……アーティーフアクトは氷輪丸の一撃を壊れずに逸らす事ができた。

ハリセンと日本刀がぶつかり合う………正直なところなにかの冗談のような光景に見えるが、本人達は結構真面目だったりする。

「いけるー！」

「いける？これでもそう言えるか？霜天に座せ、氷輪丸」

エヴァンジェリンが解号を口にする事により、氷輪丸の柄尻に鎖で繋がれた龍の尾を思わせる三日月形の刃物が付く。目に見え無

い変化もいれるなら、触れたモノを凍りつかせる能力も追加されている。

「なんかくっ付いただけでなによ！」

目に見える変化だけで判断し、ハリセンで叩こうとしたが、氷輪丸に触れただけで凍りつく

「嘘!？」

「残念だったな。氷輪丸は、凍りつかせる能力がある。」

「雷の暴風!!!」

エヴァンジェリンと明日菜が戦っている間にネギはただ観戦していた訳ではない。

強力な魔法だと前で戦っている明日菜を巻き込んでしまうので、巻き込まない立ち位置に移動して横から雷の暴風をエヴァンジェリンに向けて放ったのだ。

強力な旋風と稲妻はエヴァンジェリンを飲み込んだ。

「良い判断だったな。だが、気配も消さない奇襲など、ただ正面から攻撃するのと大して変わらんぞ？」

だが、飲み込んだだけで、エヴァンジェリンに届いていない。氷と水で形成された竜がエヴァンジェリンを中心に、とぐるを巻く事で完全防御されていたのだ。

「竜……?」

「そう、竜だ。この氷輪丸を象徴する氷の竜だ。どうだ？綺麗なもんだろ」

透き通った氷の竜。普段であれば、月光を受けて幻想的に反射しているその姿に見惚れたかもしれない。

しかし、ネギと明日菜の2人にはその姿ではなく、その眼に視線がいく。他の場所と違って、紅い氷で形作られたその眼に。

氷で作られて感情が無いはずなのに、その眼は敵は殺す絶対者のモノのように見えたのだ。

「さて、これでもまだ勝てると思うか？命乞いをすれば、命ぐらいは助けてやってもいいぞ？」

勝率はない……ネギ・スプリングフィールドは、すぐにその答えに辿り着く。

あの竜がどの程度動けるか知らないが、自分の雷の暴風を受けてもビクともしない。攻撃が届かない。その時点で勝敗は決していると、言っても過言ではない。むこうの消耗が激しいのなら、また話は違ったが、エヴァンジェリンはさして消耗しているようには見えない。

「どうした？早く答えたらどうだ？頭こぶを垂れるか、否か」

選択は二つに一つである。自分では敵わないのなら、戦うべきでは無い。そういう判断をしても誰も自分を責めないだろう、が………

「………ら………ません」

「ん？よく聞こえないぞ？」

「諦めません！！最後まで……！！」

「……………それが、おまえの答えか？」

「はい。明日菜さんは下がってください。此処からは僕だけでやります」

「馬鹿、私が出がると思ってるの？私も最後まで付き合っつわよ」

「明日菜さん……………ありがとうございます」

「主従揃って馬鹿だな。戦場では真っ先に死にかねないぞ？だが……………合格……………！」

「「は？」」

いきなりの合格宣言に、ネギと明日菜は目を点にしてエヴァンジェリンを凝視する。

「性格はサウザントマスターのまったく違うと思ってたが、根っこの方は案外似ているな。敵わない敵が目の前に居るというのに諦めずに戦おうするとは……………だが、今回は無謀に過ぎないからな。あいつの場合は実力がある程度伴っていたから、勇気と言われたがな」

「え……………え？エヴァンジェリンさんは偽物なんじゃないんですか？」

「偽物？誰に吹き込まれたか知らんが、私はぼーやの父親ナギ・スプリングフィールドと同じ本物の英雄だぞ？」

「なにが如何なってるの……………？」

桜通りの吸血鬼 終結（後書き）

海外のドッキリみたいに酷いよな、知ってるドッキリは車にミサイルを付けてソレを発射させて別の車を破壊させて警官とかに責められる。っていうドッキリが、記憶に残っている。

怖い思いをしたら、実は茶番でした、は……

アンケートは修学旅行で出るリョウメンノスクナノカミを漢字で両面宿讎をノイトラにして仲間にするか、普通に倒してしまっつか、です。

ご意見待ってます。

修学旅行の前の事(前書き)

第39話

感想 かつこう様、まつきー様
ありがとうございます！
ノイトラ化アンケート

賛成 1

反対 1

修学旅行 の前的事

Side アーロニーロ

問題無く、桜通りの吸血鬼事件は終結した。勿論、影から戦いを見守っていたが……

てか、エヴァは最後は面倒になって合格宣言してたが……良いのか？あれで？

まあ、学園長から文句は来て無いようだから、良いのだろう。

翌日が日曜日で、俺の仕事が休みだったのと修学旅行が近づいているので、皆（エヴァ、茶々丸、さよ、千雨）で新しい服などを買って帰って来たら、餓鬼とオコジョ妖精が家で待ち構えていた。

「とつとつ、帰れ」

エヴァは不機嫌だな。何も聞かずに帰れとは……

「エヴァさん、流石にそれはちょっと……」

「そののねーちゃんの言う通りだぜ！いくらなんでも酷いんじゃないのか！」

「カ、カモくん。刺激しないで……」

餓鬼は言つのが遅かったな、カモくんと呼ばれたオコジョ妖精はエヴァに殺気を叩き付けられて、あっさりと気絶させられて餓鬼の肩から崩れ落ちてしまった。

「カモくーん！！」

「落ち着いてください、ネギ先生。それは気絶しただけですから」

茶々丸が、落ち着かせるべく餓鬼に状況を説明している。……
今のうちに家に入るか。

「ちょっと、待って下さい！話だけでも聞いてください！！」

「チツ」

気付かれたか……それとエヴァ、舌打ちすな、品性が問われるぞ？

「まあいい。とりあえずは、ようこそ。と、言うておこつ」

嫌々、餓鬼共を家に入れる。

「で？家庭訪問か、ネギ先生？」

一応は教師なので、名前を付けて先生と呼んでやる。

「えっと、すみません。誰ですか？」

まずはそこからかよ……

「エヴァの近くに居る大人と言えば、判りそうなものだが……アー
ロニーロ・アルエリだ。それとネギ先生とはここに来た日に学園
長室で会った上で、学園長から紹介を受けた筈だが？」

「あ………すみません」

まあいいか……所詮は餓鬼だこのくらいは見過ごそう。

「実は、僕のお父さんの手掛かりになる情報を教えてもらいて来て来たんですけど……」

「おい、それは私に勝つたらの話だろ。だから、おまえに教える必要は無いらぬが？」

「それは解っています。でも、教えて欲しくて来たんです！」

純粋な目でこっちを見てくる。ああ、餓鬼の目だな……平気で昆虫を残酷な方法で殺す、純粋な目だな。

「大した情報じゃないぞ？」

「それでも構いません！」

（父様！なんで教えるんだ！）

（タカミチも知っている情報だし、教えないと梃子でも動きそうにないからな）

それに、行こうと思えばすぐに行ける方は教えないしな。

「京都だ、京都に紅き翼の隠れ家があった筈だ。詳しい話は、近衛詠春に聞いた方が良いだろう」

「近衛？」

「聞き覚えがあるはずだ、お前のクラスの木乃香と学園長の関係者だ」

そういえば、アイツは禿げたのだろうか？今度確認するか……聞きたい事を聞いた餓鬼は、忘れ物をして帰ってしまった。

「父様、コレどうする」

「置いたモノを忘れるか……なんかした後だとよくある事だな」

汚いモノのように（実際に汚いかもしれんが）摘んでいるオコジヨ妖精を指差して聞いてくる。

大事でなかったり、すぐに使わないモノだとさらに忘れる可能性は高くなる。

コレが前者だと憐れだな……どうせだから役に立ってもらうか……

「ソレはコレの上に置いとけ、それと、しっかり消毒しておけよ。オコジヨ妖精が変な病原菌などを持っていないと言い切れないからな」

録霊蟲を運ぶ箱になってもらうか。誰も困らんだろうし、餓鬼の監視になるだろう。

寄生されてる宿主を健康にしようとする働きもあるから完全な害ではないしな。

修学旅行が京都に決まったそうだ。……………何かの思惑を感じさせるな……………

「そこで、おぬしには修学旅行に特別に引率として一緒に行つて欲しいんじゃないが……………良いかの？」

「納得するのか？主に新田先生辺りが……………」

あの真面目な教師が、教師でも無い奴に引率をやらせるのか？

「おぬしなら此方から頼みたいくらいと言つておつたぞ。なにせ3
- Aの行く修学旅行だからの……………騒ぎを起こさないようにするの
1人でも多い方が良くと思つたんじゃろつ」

あの餓鬼が担任という理由もありそうだがな……………

「なに、有事の際で無い限りは普段と変わらないから、気軽に行くと良いじゃろつ」

「裏の話は良いのか？」

「……………誰から聞いたのかの？」

「鎌を掛けただけだ……………ハッキリと言つておこつ。なにを企んで
るか知らんが、下手な事をするとか西との関係が悪くなるぞ？」

元よりフオローする気は無いが、此方に飛び火しかねない事だからな……………

「フオツフオツフオツ、関係を良くするためのモノじゃから大丈夫じゃろっ」

……………そんなモノを餓鬼に任せて良いのか？餓鬼を使いに出す時点で嘗めていると、とられると思えるが…………

「また、茶番か？」

考えてみれば、関西呪術協会のトップは身内同然だから問題無いのか？少なくともトップだけは…………

「茶番とは失礼じゃのう…………ネギ君への試練の一つじゃ」

なら、此方を巻き込まないで欲しいんだがな…………

あその後で、行く事は承諾した。行く事はな…………

大戦から20年経っているが、大戦での遺族はまだまだ俺とエヴァに恨みを残している。と言うより、むしろ恨みは増えているだろうから、京都ではあまり目立つ事はしたくない。ましてや、関西呪術協会の本拠地に行くのは願い下げだ、行けば恨んでる連中に攻撃されるのは火を見るより明らかなことだ。

できることなら、京都に行く事すら止めた方がいいのだが、エヴァが楽しみにしているのでソレはできない。

京都に行く事ではなく、クラスの皆で行くのを楽しみしているので行く先がハワイになれば良かったのだが…………それだと空港でパスポ

ト的な意味で、問題のある生徒が居るがソレはどうとでもなる。
なにも起きないで、修学旅行をエヴァ達が楽しめればいいんだが…
……なにかが起ころんだらうな………

S i d e o u t

修学旅行 の前の事（後書き）

次は原作との相違点を書き出したのを出す予定

両面宿讎の扱いに対するアンケート終了は、今後の前書きか後書きで宣言しますので、終了宣言までに活動報告か感想にどうぞ。

設定の追加と相違点（前書き）

今回はサブタイ通りな回。……相違点はほとんど無かったな……書き出さん方が良かったかも……

感想 開け！ごまドレ様、アンデス山脈に住みたい様、ゆや様、蒼月璃煌瑠様

ありがとうございます！

ノイトラ化アンケート

賛成 4

反対 2

設定の追加と相違点

アールロニーロ・アルルエリ

持ち物

伝令神機* 1

エヴァンジェリン・A・K・M・アルルエリ

持ち物

伝令神機

相沢 さよ

コンビニでアールロニーロと出会い、そのまま家族のような関係になった。

幽霊なので、アールロニーロが作った滅却師仕様の義骸を自分の体にして生活している。

さよが、というより義骸が滅却師として高い戦闘能力を持っているのでアールロニーロ勢の中では3番目（一番目はアールロニーロ、2番目はエヴァンジェリン）に強い。

霊子兵装は銀嶺弧雀^{ぎんれいこじやく}

持ち物

クインシー・クロス
五角形の滅却十字

銀筒

ゼーレシュナイダー
魂を切り裂くもの

伝令神機

補肉剤

転移符

絡繰茶々丸

持ち物

伝令神機

補肉剤

転移符

長谷川 千雨

運悪く入学式があつた日の夜に鬼と遭遇し、更にアローニーロと遭遇した。

アローニーロに誘拐されて、歪んだ日常に戻るか裏に入るかの選択を迫られて、裏に入ることを選択した。

その所為で、アローニーロ勢の仲間入りした。

アローニーロから教わったのはあくまでも自衛手段であり、戦うつもりは無い。

アローニーロ勢では自他共に認める最弱だが、逃げや搦め手においては抜きん出ている。

持ち物

盾舜六花（完璧すぎた贋作）

穿点*2

転移符

補肉剤

携帯義骸* 3

血涙玉* 4

カハ・ネカシオン
反膜の匪* 5

伝令神機

チャチャゼロ

現在はメノスの森の奥にある研究室の番をしている。

* 1、連絡用の物。ぶつちやけると携帯電話

* 2、強力な麻酔のような物。数滴肌に垂らすだけで意識がなくなる。

* 3、身代わりなどに使える携帯可能な義骸。ただし、入れ替わるタイミングが難しいので、千雨以外は使わない

* 4、唐辛子入りの煙幕玉。

* 5、対象を閉次元に閉じ込める物。ただし、一人が限界。

31話〜39話での原作との相違点（あまり本編に影響が無いのがほとんど）

ネギにわからないトラウマ

茶々丸（義骸の偽物）を殺した記憶は無いけど、無意識に魔法の矢を忌避している。

一応まだ、ばれて無い

楓とのイベントが消失したので楓にまだネギが魔法使いとはばれてない。

まさかのイールフォルトみたいな扱い

カモに霊録蟲を寄生させたことにより、カモを通じてネギなどの情

報がア—ロ—ロに伝わる。

設定の追加と相違点（後書き）

原作と違うところしか書き出していません。

アローニードロとエヴァンジェリンのときは、持ち物に伝令神機が追加されたのみ。

茶々丸はほとんど原作と変わってないので、説明無し。

たぶん無いですけど、ここに書き加えることもあり。

修学旅行 開始(前書き)

第40話

感想 終焉を司る皆様、バクラ様、まつきー様
ありがとうございます！

ノイトラ化アンケート

賛成 4

反対 4

修学旅行 開始

Side アーロニーロ

修学旅行は集合から大騒ぎになっている。

年中お祭り騒ぎの、3・Aがいるから当然といえば当然だ。中には商売魂が凄い奴もいて、ここで商品を買っている。誰か止めさせる奴はいないのか……他は修学旅行という事で浮足立っている。

騒がしいな……ソレを静かにさせる為にも、俺と一緒に引率扱いで修学旅行に参加するのだからな。

「破ッ！……！」

簡単な方法で静かにさせる。俺の大声と発せられた気で騒ぎは一気に沈静化した。

「ありがとうございます。御蔭ですぐに点呼が取れます。ですが、次はよっぽどの事が無い限りやらなくてください」

「わかっていますよ、新田先生。静かにさせる為とはいえ、ここまですり立つことはあまりしたくないので……」

「わかっているなら結構です。では、3・Aを頼みます」

「3・Aを頼みます」と言う辺り、あまり餓鬼を頼りにして無いと思わせるな……子供と大人だから当然だろうが……」

「ロイヤルストレートフラッシュ」

「何……だと……」

「奇跡に等しい確率です」

「す………すげえ………」

「へ………凄いですか？」

現在は新幹線に何事も無く乗っており、暇つぶしに、俺、エヴァ、茶々丸、千雨、さよの5人でポーカーをしている。1人だけ手役を判っていないのがあるが、ロイヤルストレートフラッシュは最強の手役である。確率的にはまず揃わない手役であるが、ズル（鏡花水月）を使えば簡単に揃えられる。

……この1度しかやってないからな。日常生活ではこの程度しか使
い道がないんだよな……鏡花水月とかの斬魄刀は。

「……キヤーーーーー！！！！」

問題が発生したようだな……Gが出たか？

「行くのか？」

「面倒だが、仕事の内だろ」

まったく、なにが起きたんだ？騒々しく悲鳴を上げて………

なんだ、蛙か。しかし、普通の蛙ではなく少しデフォルメされたまだマシな蛙だ。

それでも、湯水の如く湧いてくるのは十分にパニックを起こしている。

「静かにしろ。それと、蛙が平気な奴は適当な袋に詰め込んでまとめるのを手伝え」

まったく。どこのどいつか知らんが、パニック乗じて何かをするつもりか？だとしても、俺等か一般人に被害が無い限りそっちにはノータッチのつもりだがな……学園長の野郎が結局餓鬼に何をさせるか言わなかったからな。だから、知っていても動くつもりは無い。

「協力したから今度手合わせをするアルよ！」

「拙者も頼むでござる」

この二人（古菲と長瀬楓）には善意の行動というのは無いのだから……人の事を言えた義理ではないのだが……

「しねえよ。学園祭なり、武道大会なりの機会にしろ」

「そこは渋々でも承諾するところアルよ!？」

「古、逆に言えば、機会さえあればアローロニーロ殿は手合わせをしてくれるという事でござるよ」

機会があつたらな……

まったく、無駄な事で時間を使わせやがって。

「お、戻って来たか」

「状況は？」

「さつきぼーやが式神に親書を盗られたが、刹那が盗り返した。相手は親書に用があるんだろつから、ここから先でもさつきと同様の騒ぎが起きるだろう。あと刹那が木乃香を守るのを手伝って欲しいと言ってたが、断っておいたぞ」

……刹那は頼る相手を間違えたな……

「私らも関わんなきゃいけねえのか……」

「ネギ先生に近づかなきゃ大丈夫なんじゃないんですか？」

「さよさんの言う通りだと思います。先行したり、ネギ先生の近くに行かなければ、巻き込まれる確率は格段に低くなると思います」

わざわざ前に出る必要も無いから全員一致で後ろから見守る（？）
こととなった。

エヴァの予想通りに騒ぎは続いた。尤も、3・Aのほとんどの生徒は落とし穴（蛙付き）に落ちようが、音羽の滝に酒が仕込まれていようが、そこまで気にせず修学旅行を満喫しているようだった。尤も、ほとんどが酔い潰れているが……お気楽すぎるだろ……この集団は……

「なんつうか……こんなんでいいのか……修学旅行は……」

修学旅行は学園の外だから、少しは普通になることを望んでいた
千雨の心のこもった悲しい一言だな。
俺に言わせればまだマシな方だな。

まだ嫌がらせの域を出て無いが、相手が直接攻勢に出れば関わった奴等の修学旅行は台無しになりかねないだろう。折角の修学旅行なのだから、なるべく裏の事情に関わらないで楽しんで欲しいものだな。

夜になり、ホテルでゆっくりしているのだが……

「ッ！」

「どうした？父様」

「木乃香の魔力がホテル内から消えた」

「何……だと……」

「それって木乃香さんが誘拐されたって事じゃ……」

「餓鬼に明日菜に刹那が助けに行ってるから大丈夫だろ」

「いや、無理そうだから助けに行けよ……」

実際は大丈夫そうなんだが……まあいい、助けに行くか。

いつの間にか餓鬼も合流していて、もう少しで捕まえられそうだったが、ゴスロリ衣装の少女の妨害で刹那と明日菜は足止め状態になっている。

「ほな、後はまかせますえ、月詠はん。うちはお嬢様を連れて行くさかい」

「そいつは無理だな」

「！」

いきなり前に現れた俺に驚いた隙を突き、女が抱えていた木乃香を奪い取る。

「アーロニーロさん！協力しに来てくれたんですね！」

どうしてすぐに気を抜く。いくら俺が木乃香を取り返しても、まだ目の前に敵が居るというのに

「アーロニーロ……やと……」

女が憎悪の籠った目で睨みつけてくる。

「うちの……両親の仇……！」

初っ端から遺族と遭遇とは……運がないな。

「大戦での遺族か……面倒な」

本当に面倒だ……怨恨が根深く根付いている奴は時として周りを多大に巻き込んだ行為を仕出かして、俺の周りに迷惑をかける事があるが、命を賭けても俺には届かない。それだというのに執拗にこちらを狙う。

こうなるかもしれないと考えては居たが、実際になると面倒で仕方がない。

「月詠はん！アローニーロを、うちの両親の仇を討つのを優先しなはれ！！」

「ん、まだ先輩とお楽しみやったのに。でも、こっちの人のほうが面白そうやな」

「！アローニーロさん手て、手を出すな。こいつらは俺の問題だ……わかりました」

刹那に木乃香を渡して、相手と向き

「ざんがんけん」

直る前に剣士に斬り付けられる。随分と緊張感のない間延びしたしやべりかただな。

「随分と余裕の無い真似をするんだな」

「そちらさんは、ずいぶんと余裕そうですね」

実際に余裕だからな。長引かせる意味もないからすぐに終わらせるか。

「にと〜れんげき、ざーんがーんけーん!!」

「這縄、鎖条鎖縛」

這縄で二刀小太刀を封じ、鎖条鎖縛で少女を捉える。

「あ〜ん、いけず〜、きりあつてくれてもええやろ〜」

「元より、斬り合うつもりなどない」

時間をかけるだけ無駄。こいつらには修学旅行が終わるまで大人しくして貰おう。

あと残ってるのは遺族の女だけだ。

「障壁突破、石の槍」

不意打ちだったが、問題無く回避できた。だが……魔法？敵は関西呪術協会だけではなのか？

「完全な不意打ちだったのに、避けられるとは……流石は仮面の英雄、アールロー・アルルエリだね」

「やられたな……」

石の槍に気付いて回避している間に、剣士と遺族は忽然と姿を消している。

目の前の奴以外に仲間がいてそいつ等が転移系のモノで逃がしたか、

自分達で逃げたかは解らないが、問題は逃げられた事だ。これで、俺が京都に居る事が関西呪術協会に伝わってしまったと考えるべきであろう。

これなら、木乃香を助けた時に遺族の首を刎ねておくべきだったな

……

「千刃黒耀剣」

今度は俺では無く、後ろの奴らを狙った無数の石の剣が放たれる。

「ツチ！」

流石にあたると判っているのを見過ごす訳にはいかずに、響転で餓鬼、明日菜、刹那と気絶してる木乃香を回収しながら、あたらな
い場所に移動をする。敵は……いないか……

「全員無事か？」

「は、はい」

「助けるならもう少し、ゆっくりとした方法で助けて欲しかったわ」

「ありがとうございます」

全員無事なのは良いが、俺が居る事ばれたという事と、敵に完全な状態で逃げられた。

勝ちとは言えない結果だな……

Side out

修学旅行 開始（後書き）

修学旅行1日目終了

千刃黒耀剣を虚閃で薙ぎ払えばフェイトを逃がさなかったのでは？
と思われる方がいると思いますが、虚閃では範囲が広すぎるので街
中とかではよっぽど開けた場所か、空に向かってしか使いません。

修学旅行 2日目(前書き)

第41話

感想 麻布十番様、まつきー様、ナディール様
ありがとうございます！！

ノイトラ化アンケート

賛成 4

反対 4

このまま 4 : 4 だったどうしよっ……………

修学旅行 2日目

Side アーロニーロ

まったくもって厄介だ……

おそらく関西呪術協会に居るのであろう遺族組は、復讐の為に俺を血眼になって俺を捜しているだろう。

今の顔は知られてないが、宿泊客の名簿で捜せば普通にアーロニーロ・アルルエリで載っているから明日までには場所がばれるだろう。いや、もっぱれているかもしれないな、元々マークされていた餓鬼と同じ場所に泊っているから簡単に見つけられる。顔が割れてないが、今日一日尾行されれば大人はどれが誰かなんて簡単に判るだろうから夜には襲われると考えた方がいいか……

問題しか無いな………認識阻害を使うか？使えば俺と判らなくなるが、遺族組がまともな手段だけできるとは考え辛い、見つからないのに業を煮やしてホテルごと消そうとしないとも言いきれない。それなら使わずに俺だけが狙われた方がマシだ。エヴァにも注意しとくよう言っておくか。

見られているな………俺を囲むように展開している。もっぱれているか………

一般人が多い場所では襲ってこないと願いたいが、1人になればすぐにも襲ってくるだろう。

今は集団行動だが、引率が少し離れるくらいなら問題ないだろう。

「エヴァ、少し掃除をしてくる。付近をさよと警戒しといてくれ、エヴァも狙われるからだろうからな」

「わかっている。京都に来たからには覚悟していたさ」

「折角の修学旅行だというのに、気を張らせて悪いな……………」

「父様のせいではない。それに、父様が守ってくれるんだろう?」

「勿論だ」

さて、掃除をしますか。

人混みから離れ、人の居ない場所にまで移動すると、結界が張られる。

どうやら一般人を巻き込まないようにする配慮はできるようだ。できれば全員がそうであって欲しいが、感情だけで動く奴もいるであろうからこの一回だけかもしれない。

突然四方から炎が迫ってくるが、掬花を振って波濤で防ぐ。実力はそこまである奴らではないようだ……

「殺したいのなら、実力不足だな」

返事代わりに今度は鬼などの妖怪が出てきて取り囲まれる。

「あゝなんだ兄ちゃん。ホントはこんな皆で1人を髑りモノになんかしたくないんだが……」

鬼のリーダー格らしい、他の鬼よりデカイ鬼が申し訳なさそうに言っているが、この程度なら問題無い。

「なら、すぐに消える」

鬼は未だに踏ん切りが付かないようだったようだが関係無い。擦花で圧碎する。

雑魚もいいところだが、数が多い。おそらく持久戦で弱ったところを狙うつもりなのだろうが、判っていて付き合うつもりは無い。

「碎ける、鏡花水月」

不意打ち同然の行動で全ての視線が集中しているうちに鏡花水月を発動して、見ていた奴の五感全てを奪う。

五感全てを奪われた奴等は本当の感覚が解らない為に、傍目から見たら変な行動をする。

倒れているのに歩こうとしたり、力を入れ過ぎて体の一部分を傷つけたり……

こうなれば大抵はほっといても何もできずに死ぬ。だが、それは望む結果では無い。

ここで殺したりすれば後で問題になるかもしれないで、記憶全てを封印するだけにしておく。

今日の日程を消化してホテルに戻って来ている。あの後追加で遺族組が来る事無く、今は平穩そのものである。

平穩であっても、静かと言う訳ではないが……

昨日は騒がしい奴等が軒並み酔い潰れていたが、今日はまだまだ元気であり、いつものごとく騒いでいる。

それを鎮めるべく新田先生と鎮圧していたが、突然静かになっていった。

これは諦めたのではない、次のために一旦なりを潜めただけだ……そんなことは新田先生も俺も承知している。問題は次でなにをやらかすかだ。

部屋を出れば、反省の為にロビーで正座のうえに説教をする。そんな通知を出したが、おこらく、いや、絶対に部屋を抜け出して何かをするであろう。基本、問題しか起こさない連中だ。

それが誰かの為だろうが、後処理をするこちらの身になって欲しいものだ。

……オコジョがやらかしたな……ホテル全体を包む仮契約の陣が展開されたのを感じ取る。

まったく、こんなでかい陣を張ってなにをするつもりだ？録霊蟲の記録をしてみるか。

……一度しっかり教育なり、調教なり、改造をする必要があるな……

「見つけたアルよ！手合わせするアル！」

「拙者も相手になるでござるよ、アローニー口殿」

馬鹿二人が現れた……てか、こいつ等も参加しているのか……

「さっきの通知を忘れたか？部屋から出れば、反省の為に正座で説教だと……」

「そ、そんなの怖くないアル。いいから手合わせするアルよ！」

「今から戻れば、見逃してくれるのでござるか？」

なにを言っているんだか、

「見逃す訳がなかつた」

それが普通だろ？こんな事に参加して唯で済むと考えるなよ。

S i d e o u t

S i d e エヴァンジェリン

こんな機会はもう無いかもしれない。だが、手を伸ばせば唯では済まないだろう。

「どうすれば良いと思う、茶々丸」

「参加せずに傍観するのが一番無難かと……」

確かに、一番無難な選択だ。しかし、これは父様と仮契約^{キス}するま

たとなない機会だ。どうすればいいんだ!!

「参加しない方が絶対に良いと思うけど……師匠が許すと思うか？
こんな事で仮契約をするのを」

「そうですね。アローロニーロさんはコレの鎮圧に動くから参加だけは止めた方がいいですよ」

「問題は仮契約が出来るという事ではない！父様とキスをする理由になるという事だ!!」

いままで一緒に寝てくれたり、抱きしめ合ったりした事は何度もあるが、キスは一度も無い。

そんな事をしようと考えた事も無かった。親子でも、スキンシップとしてやっても可笑しくないよな………？

(さよ、どう思う?)

(まさに恋する乙女ですよ……教室でああいう風になっている人を、
何度も見た事があります)

(記録中…記録中…アローロニーロ様との事を考えて身悶えているマ
スター…かわいいです…)

Side out

Side 第三者

修学旅行2日目の夜のゲーム『ネギ先生とラブラヴキツス大作戦』
は開始早々にアローロニーロに露見した為に、参加者が次々と捕獲さ

れるという事態に陥っていた。

「ちょっと、これじゃあゲームが成り立たないわよ！！カモ君、ア
ーロニーロさん容赦が無いよ！！」

「ああ、こりゃ完全に潰しに来てるぜ……」

主催者2人はアローニーロの逆鱗では無いが、あまり触れては
いけない場所に触れてしまっている事に気付いていない。もし、この
ゲームがネギと仮契約するという側面を持っていなければ、完全に
は潰そうとはしなかった。

それなら所詮は遊びであるし、参加者の恋路(?)を阻むつまりは
無い。だが、仮契約は間違い無く裏に関わらせる要因になるものだ、
それをゲームと言う隠れ蓑で本人の了承無しでさせるのは見過ごせ
る内容では無い。

魔法とは秘匿されるモノである。

そんな魔法関係者なら守るべきルールに、反抗するようなゲーム
は即刻潰すべきである。

「逃げたほうが……いいかな？そのうちここまで来そうだし……」

「そうだな……捕まった何をされるかわかったもんじゃねからな」

逃げる為の準備をしようとしたが、遅すぎた、いや、ゲームを始
めた時点で詰んでいたのだろう。

自分の影から音も無く狩人が現れたのに気付けなかったのだから……

「おそらく、参加者全員と主催者を捕獲しました」

「重ね重ね、ありがとうございます。説教は私がしておくので今日はもう御休みになってくれて構いません」

結果はアローニーロにとってあまり良いモノではなかった。生徒の1人がネギと仮契約してしまったのだ……

尤も、コレに関してはアローニーロは関与するつもりは無い。仮契約したのは自分では無いし、仮契約した生徒はネギに告白するぐらいの好意を持っているのだから、ネギの警戒度ではそのうち魔法ばれするであろうと考え、処理はネギに丸投げしたのだ。ちなみに、ネギの選択は放置であった。

元々、そこまで気にしている存在では無いから、後は仮契約した事でどうなのうが知った事ではない。

あと、アローニーロと仮契約^{キス}するかで、悩んでたエヴァンジェリンだが、悩んでいる内にゲームは終わってしまった。

S i d e o u t

修学旅行 2日目(後書き)

おまけ

Side アーロニーロ

まったく、餓鬼は何をしている。自分の使い魔がこんな事をしてかしているというのに……

「あつ、アーロニーロさん」

餓鬼？いや、この魔力は違う、式神か？

「ぼくとキスしてください」

ゴッシャ！！！！

その言葉を聞いた瞬間に足が勝手に全力で偽物を蹴った。

おおよそ人から出てはいけないような音が出たが、偽物だから問題無い。

てか、人間なら即死級の威力だったが、気にしない。悪いのは怖気の奔る事を言った偽物だ。男とキスなど考えたくも無い……

Side out

ホントにこのままアンケートが4：4だったらどうしよう……

修学旅行 3日目の光差す時間(前書き)

第42話

感想 オタツキー様、槐(えんじゅ)様、ツユリ様、幾夜様、かにかさま様、新・プルート(笑)様、黒雛様、藤様、零崎煌識様
ありがとうございます!!!

ノイトラ化アンケート終了

賛成 6

反対 10

によって、スクナは普通に倒すが決定しました!!!
ご意見ありがとうございます!!!

修学旅行 3日目の光差す時間

Side アーロニーロ

修学旅行は3日目に入り、完全自由行動になっている。

京都に来る前までは、アーロニーロはエヴァ達の班と行動するつもりだったが、狙われているので敵の戦力を分散させる為に別行動をする事にした。一緒にいても問題は無いのだが、できることなら修学旅行を楽しんで欲しいので、罔同然で単独行動をするのだ。

それに、初日の魔法使いが来るのなら、後ろを気にせずに戦いたい。

関西呪術協会の連中より修羅場を潜り抜けてきた強者なら、少しは楽しめるかもしれない。

だが、そんな考えは甘かった……………

正直うんざりしている……………搦め手というか、どっかの暗殺者のみみたいな手段にだ。

買い食いしようとした物に毒が入っている事5回、通り魔的犯行9回、裏道で襲われる事3回の計17回襲撃？された。正面から来て欲しいな……………殺さずに記憶封印だけにしてやるのに……………ちなみに、通り魔的な奴等は全員時間差で記憶封印がされるように対処した。

毒は口に入れなければ問題無い、通り魔は銅皮で防御可能、裏道は直接潰せるので一番楽。

どれも殺す気で来ている……明らかに致死量越えてたり、刃に毒が塗ってあったり、京都神鳴流が刃物持ってたたり、取り囲んで一斉に火術など。

問題は無い、問題は無いが、ここまで繰り返してやられると気が滅入る。それを見越しての行動なのだろうが……

……この辺で少し誰かをボコして憂さ晴らしをしよう……

「とうとう、来おったな……」

そこには遺族組と思われる集団と、初日に襲ってきた3人の内2人が目をギラギラさせて待ち構えていた。

どうやら誘導されていたようだな……まあいい、やることは変わらない。

大掃除と行こうか。

S u d e o u t

S i d e 第三者

場面は大きく変わるが、エヴァ達にもアローロニーロ程ではないが、刺客が送られていた。

しかし、誰もエヴァ達に近付けずに散って逝った。

「ダラシネエナ、簡単二殺サレテンジャネエヨ。風死ガ思イツキリ使エネエダロ」

「致し方あるまい。賊どもには我等を認識できぬ故に」

屋根の上に、人形とワカメに手足を生やしたような何かが居るが、誰も彼らを気にしない。

正確には認識できないのだ。認識阻害では無く、身に付ける事で特殊な霊膜が張られ、存在を破面（アローニーロ）と特殊な者（さよ）しか認識できなくなると同時に物質を透過する能力を得られる特殊な道具を使っている。その御蔭で、チャチャゼロとワカメ大使は堂々としながら刺客を闇に葬っている。勿論、さよは認識しているが、アローニーロから事前に知らされていたのでさして気にしてはいない。

なにかの冗談にしか思えない2人組に、刺客は認識できないまま消され逝った。

「あゝん、やっぱりうちの見立て通りのお人ですね、惚れてしまっ
そや〜」

「冗談は口と格好だけにするんだな」

「あんさんが言います〜?」

「……………（言うべきではなかった……………）」

アローニーロ格好は例の如く、仮面に白いフリフリが付いた服である。

アローニーロは月詠と刀を交えながら周りの奴等を1人1人穿点で気絶させている。

「あんさんも悪い人やな〜うちを盾代わりにしながら戦うなんて」

「判っていて、付き合っているお前の方が悪い人だろ」

「うちは、あんさんと斬り合えるだけでいいや〜」

月詠が邪魔になって陰陽術師達は思うように掩護できなくて、穿点で次々に気絶させられている。

月詠以外の京都神鳴流もいたが、アローニーロにあっさりと気絶させられてしまった。

実力差は目に見えるほどに出ているのに、遺族組は一步も退かないで、むしろ前に踏み出している。

(意地になっているか……殲滅するには好都合だが、不気味なのはあの白髪の少年だ……)

アローニーロは唯一、遺族組の中で動きらしい動きをしていない魔法使いである白髪の少年を警戒していた。

(そもそも、関西呪術協会の人間が、魔法使いである白髪を受け入れているのがおかしい)

関西呪術協会は一部の者を除いて魔法使いに良い印象を持っていない。事実と偏見が混じって、基本的には反魔法使いである。実力を買って仕方が無く協力をする事もあるが、それは極稀な場合であり、今回は当て嵌らない。

戦力として使っているなら、魔法使いを使い潰すつもりで最初に当てるだろうが、それをしないし、ずっと動いてないのに誰もソレを注意しないでいる。

(……なぜこいつらに協力をしているのかは解らんが、場合によっては殺しおいた方がいいな)

敵。なにか解らない敵が一番危険である。それがアローロニーロの考えである。今この場にいる者で、アローロニーロにとって一番危険なのは白髪の少年である。遺族組も、目の前の少女もアローロニーロにとっては自分に触れる事もできないような存在だが、手の内がほとんど判っていない白髪は危険視するには十分な存在である。

「そろそろ終わりにしようか………」

そう言つて、アローロニーロは解放前の掬花と鏡花水月で月詠の手元めがけて一気に降ろす。

月詠は避けれずに受け止める。

「そんなつれんへん事言わんとて〜もつと楽しみましようよ〜」

「断る。這縄、鎖条鎖縛」

「ざ〜んま〜け〜ん」

月詠は前回ののように捕えられることなく、京都神鳴流奥技である斬魔剣で這縄と鎖条鎖縛を切り裂き、無力化に成功する。

「あはっ！ やっぱり魔に属するもんでしたか〜これで、前みたいにならんですみますわ〜」

嬉しそうに、まだまだ斬り合えると喜びの声を出すが、それは間違いであった。

「縛道の七十五 五柱鉄貫ごちゅうてつかん」

鎖で繋がれた五つの五角柱が月詠の頭上に現れ、それぞれが月詠の五体を封じるべく落下する。

「そんなんありー!?!」

予想外の位置から出現した五柱鉄貫により今度こそは動きを完全に封じられる。
すかさず穿点で気絶させる。残るは1人、始めから動く気配の無かったフェイト。

「石化の邪眼」

「断空」

詠唱していた呪文を完成させ、触れたモノを石化させる光線をア
ーロニーロめがけて放つが、断空によって防がれる。

「前回といい、今回といい。不意打ちの好きな奴だな」

「そうでもないかと、届きそうにないだろ?」

「そう……だな!?!」

アーロニーロが響転で後ろにまわり、フェイトの腕を刈り取るう
としたが、反応されて失敗する。

「早い、しかも障壁を当然のように突破する。とんでもないね……」

「腕を刈り取るつもりだったが……踏み込みが浅かったか……」

失敗こそしたものの、フェイトの左腕には真っ直ぐな赤い線が入り、そこから血が流れている。

詠唱をさせない為にアローニーロが連続で斬魄刀を振り、フェイトは石の剣を使ってそれに応戦する。

だが、強化されているといえ所詮は石の剣、2、3度斬魄刀と打ち合うだけで斬られるか、砕けてしまう。

ダメになる度に石の剣の新しい物を出して対処する。

(強い……やはりこのままでは勝てないか……ここで無理をする必要もないし、退くのが最善か……だけど、気を逸らせないと無理みたいだね……)

「そいえば、まだ自己紹介してなかったね。僕はフェイト・アールリンクスだ」

「随分と今更な感じがするが……アローニーロ・アルルエリだ」

打ち合いながらやり取りをする。その間にも石の剣は何本も砕け、ダメになっていき辺りに散らばる。

(そろそろ頃合いか……)

アローニーロにとってそれは突然起こった。足元が爆発したのだ、正確には足元に転がっていた石の剣の残骸が……

水が見えた、咄嗟にソレに向けて虚弾を放つ。

(魔力を感じない……逃げられたか……まあいい、ほとんどの遺族

組は残されている)

アローニークは残された遺族組の記憶の封印をして、その場を後にする。

「まったく、とんでもなかったね……」

フェイトは暗闇で呻く。

「まさか、咄嗟の攻撃で左手を持ってかれるなんて……」

なくなってしまった体のパーツを見て、普段と変わらない表情で
眩き、

「でも、コレがあるから問題無い」

右手に持っていた薬を左腕に注射する。薬の名前は補肉剤……

Side out

修学旅行 3日目の光差す時間（後書き）

9件来たよ！！感想が！（同じ人が別に分けたのは2じゃ無くて1で数えています）

そしてアンケートで決定したのはスクナは普通に倒す！

修学旅行 3日目の夜(前書き)

第43話

感想 リンドウ様、開け！ごまドレ様、イースト様
ありがとうございます！

今回いつもより長め

修学旅行 3日目の夜

S i d e アーローニーク

ほとんどの班が何事も無く帰って来た。そう、ほとんどが、だ……
… 餓鬼と他数名がなぜか、関西呪術教会の本拠地に今晚は泊まるらしい……

録霊蟲の記録を見れば、なんでもそこが「京都で一番安全」だとか詠春が言っただけ遅いことも合わせて泊めてた……魔法使いにとっては敵の本拠地に近いと思うんだが……

……問題が起こったらどうするつもりだ？ある程度は対処はできるだろうが、フェイト相手に苦戦か、負けるだろう。……今から迎えに行った方がいいか？いや、もしかしたらこっちに来るかもしれないから、迎えに行かない方がいいか。

「旦那、酒クレ〜」

「ほれ」

今日のお礼の意味も込めて、今日買った酒をチャチャゼロにくれてやる。勿論、毒が入って無いことは確認済みのものだ。チャチャゼロは早速酒を飲み、ワカメ大使はなぜか精神統一をしている。カオスだ……人形と変なのが部屋で動いているのは。

「ん？あーまた、問題か……」

「ナンダ？戦エルノ力？」

「関西呪術協会の本拠地が襲撃された」

隠す必要も無いから教える。てか、あっさり結界破られているとか……敵で確認できたのはフェイトだけだが、今日の昼の居なくなっていた奴も居るだろう。仕方がない……エヴァ達も連れて助けに行くか。

「と、言う訳で課外授業ならぬ、課外修行だ。文句も反対意見も受け付けない」

「受け付ける！」

反対は千雨だけか……

「安心しろ、目標は1人で1人捕まえるか、妖怪とかを倒すだ。簡単だろ？」

「私は戦士じゃねえぞ」

「簡単ですね〜」

「問題ありません」

「随分と簡単な目標だな」

意識の違いがよくわかるな。ちなみに、チャチャゼロとワカメ大使はホテルの防衛の為に留守番だ。

「では、行くつか……」

影のゲートは便利だ。かなりの距離を一気に移動できるし、俺ならこの人数でも問題無く使える。

「これはマズイぜ。このまま足止めを食らったままじゃ、ジリ貧だ。ここは二手に分かれるしかない」

餓鬼共が足止めを食らっている丁度良いタイミングで来れたな。

「止めとけ、むこうにはお前等では勝てない相手が居る。お前等はホテルに戻って寝てろ」

こいつ等の実力では居るだけで邪魔になる可能性がある。相手がフェイト以外に剣士と遺族の女が居るだろうが、俺とエヴァさえ居れば問題無く対処が出来る。

「それでも！木乃香お嬢様が攫われたのに、じっとしているなんて事はできません！！」

「父様が動いてくれるんだ。おまえ等は動く必要は無い、邪魔にならないように安全な場所でじっとしてろ」

「しかし！！」

まったく、刹那は木乃香を誘拐されて普段とは違って熱くなっているな……

「問答するだけ時間の無駄だ、お前等は勝手に動け」

邪魔さえしなければどう動こうが問題無い。

「でもよう、あの鬼達を倒さないと先にすすめないぜ」

「あの程度なら問題無い、なあ、さよ」

「はい！」

さよが霊子兵装の銀嶺弧雀を展開し、鬼達に矢の雨を降らして次々に倒す。

あっけないな……

「す、凄い。一発一発に結構な魔力が込められている……」

「んじゃ、私とさよはネギ先生と……離してくれ、師匠」

俺は千雨の頭を掴んで離さない。こいつはまだ目標を達成していないからな。

「この先に、丁度よさげな相手が居る。お前はそいつと戦え」

「はあ！妖怪でも倒せばいいんだろ、だったらさよの討ち漏らしを倒しても良いだろ！」

「すみません、それなら先ほど私が殲滅してしまいました」

「だ、そうだ」

千雨が絶望したと言いたげな表情になっている。

Side out

Side 千雨

理不尽だ、まったくもって理不尽だ。だいたい私が戦士じゃないのは師匠も解っているだろうに……

ネギ先生達とさよと茶々丸を置いて、私、エヴァ、師匠の3人で影のゲートで私が相手にしなきゃいけない敵の近くまで移動した。逃げたい……逃げても簡単に捕まるんだらうけど。

「敵、強いのか？」

強かったらどうしよう……

「刹那と同じ京都神鳴流の使い手だ。しかも、刹那と違って対人戦に重点を置いている」

相性最悪じゃねーか！飛び道具の効かないふざけた流派で、しかも、対人戦に重点置いてるとか……

はは……死なないだらうけど、キツイ事になりそうだな……

「あは、やっぱり来てくれなはったな〜アローニー口はん。うちずっと待ってたんですよ〜」

……これが敵？ゴスロリ衣装でその服には不釣り合いな刀を両手に持つてるけどよ。

てか、エヴァの殺気と言うか、嫉妬が半端ねえ。ガンガンぶつけら

れてるのに、ゴスロリはむしろ嬉しそうに目を輝かせていやがる…
…もしかしくなくても戦闘狂みたいなタイプか……

「名乗った覚えはないが？」

「ん？？そういえばそうやったな、先輩とは名乗り合ったけど、
アローニールはとは名乗り合っていないやね、それじゃあ、改め
まして月詠どす、仲良う斬り合いますよ」

「アローニール・アルルエリだ、その娘の、エヴァンジェリンだ」
「こっちは長谷川 千雨だ」

「そうですか、それじゃあ、始めましょう」

師匠しか目に入っていないな……もしかして、こいつとの戦闘避け
られる？

「千雨ががんばれ、エヴァ行くぞ」

そう言つと影のゲートで行っちゃった………に、逃げてえ……

「……………」

「……………」

き、気まずい。向こうはなんか白けたような表情をしているし、
こっちは戦う気が無い。

このまま何事もなく別れられればいいんだろっけど……

「とりあえず、斬り合いますよっか」

「ホント、最悪だ」

傷付けんのも、傷付けられんのも現実じゃ絶対にお断りだ……

Side out

Side 第三者

「戦いの旋律・3倍速!!」

千雨はまずは身体強化の魔法を使う。彼女が使える数少ない魔法の1つで、1番使用頻度が多いものである。

使わなければ、アローニーロの修行について行けなかったのだが……

「にと〜れんげき、ざーんがーんけーん!!」

「拒絶する!!」

月詠の勢いの乗った初撃を三天結盾で防ぎ、三天結盾さんてんけつしゅんが消える瞬間に穿点を月詠に中てようとばすが、簡単に避けられる。

「それ、知ってますわ〜。触れただけで気を失うんやろ〜」

(師匠こいつの前で穿点を使ったな……これじゃあただ飛ばした穿点で気絶は無理かもな……)

「それに〜京都神鳴流に飛び道具は効きまへんで〜」

「そんなんは知ってるさ。でも、触れるだけでいいなら可能性はあ

る」

今度は千雨が一気に間合いを詰め、再び穿点をとばす。先ほどと同じように避けられ、お返しと言わんばかりに反撃が来るが、千雨はニヤリと笑うと丸い物を落として間合いを詰めた時の逆再生のように一気に間合いを開ける。

「拒絶する」

ボンッ！！

血涙玉の赤い煙を千雨は三天結盾で防ぐが、月詠はもろに全身に浴びてしまう。

「ゲホッ！ゲホッ！これゲホッ！とうがらゲホッ！しやなく。エグイことゲホッ！すんやなくゲホッ！」

涙を流し、咳き込みながらも千雨から目を離さずにしっかりと二刀小太刀を握っている。

「うつせえ。そもそも正々堂々戦うなんて強い奴のすることだ。私みたいな弱い奴はこういう手を使わないと勝てないんだよ」

確かに千雨は弱いが、それはアローニー口勢の中での話である。千雨にとって強い奴はアローニー口に準じている。

咳き込んでいる月詠に対して千雨は容赦をせずに追撃すべく接近する。

「くっ！」

月詠は目が涙で見えなくとも、気配で大体の位置はわかるため、接近してきた千雨を迎撃すべく小太刀を振るう。ズブリ……肉を斬る感覚が小太刀を伝って月詠に届く。だが、月詠は混乱する。千雨の気配の前でをなにかを斬ったのだ。いったい自分が斬った物はなに？

「残念。それ、偽物」

答えが聞こえたが、すぐに肌に触れた穿点により月詠の意識は闇に沈んだ。

「うわぁ、やっぱ自分とまったく同じ姿のモノが血塗れとか……気分いいもんじゃないな……」

千雨は自分とまったく同じ姿の携帯義骸に辟易しながら手早く片づけ……

「こいつ、どうしよう……」

月詠の処置に少し頭を悩ませるのだった。

「放置はまずそうだし……かといって、とうがらしまみれのこいつを運ぶなんてしたくないし……いつ起きるかわかったもんじゃないしな……」

「まったく。対応が早すぎるんじゃないのかい？情報が伝わるのは、もう少し後だと思ったんだけど……」

石の剣がアールローローめがけて飛来する

「なに、警戒は常にしている。それに、娘の修学旅行にこれ以上関わって欲しくないから、退場を願いたい」

アールローローは斬魄刀で簡単に石の剣を両断する

「そうしたいけど、それができない事情があるんだよ」

フェイトめがけて虚弾が放たれる

「雇われの身の悲しいところか？」

フェイトは石の障壁で全てを防ぐ

「そうなるね」

「……………（暇だ……）」

アールローローとフェイトの戦いは速いが、それだけであつた。

特に自分が磨き上げた技を使う訳でもなく、ぐだぐだと戦い続けているだけで、それなりの実力者ならお遊びに思えるものだ。エヴァは途中で出会った犬上 小太郎をイスしてそれを観戦していた。

ちなみに、小太郎がイスにされてるのは、簡単に言うならエヴァに負けたからである。

小太郎としては、来るであろうネギを待ち構えていたが、アールローローとエヴァが来たので見逃す訳にもいかずに戦ったら、エヴァの

一撃でノックダウンさせられて今は夢の中である。まるで海老フライのように、ロープでグルグル巻きにされてイスにされる……一部の人のとってはご褒美だろう。

「しかし、いつまで掛かるんだ？」

「さあ、陰陽術師の中ではそれなりの実力だったけど……」

「早く、スクナを解放して欲しいな（ね）」

両面宿儺の解放待ちをしているのであった……

互いの利害が一致して、見かけだけの戦いをしているのである。

アローニークは木乃香が表面上は無事に戻ってくればいい、フェイトはとりあえずスクナの封印が解ければいい。

アローニークとしては、木乃香の内面がどうなっても構わないし、両面宿儺とは再戦したいと思っていたのだから封印を解かれても良いと思っている。

フェイトは両面宿儺の封印が解ければいいし、ここで無理してアローニークに殺されるは馬鹿げていると考えていた。これは命を賭ける事では無いのだから……

「お、封印が解かれたな」

「それじゃあ、僕はこれで……」

そう言うと、フェイトは水のゲートでどこかに転移した。

「よかったのか？あいつを逃して……」

「俺としては問題無い。ただ、あいつの後ろが気になったが……」

そう、アールニーロにとっては問題無い。もしも、フェイトがアールニーロの身内を殺すような行動をしていたのなら、逃がさずに殺していたが、今回はそういう行動はしていない。他人が誘拐されようが、石にされようが、どうでもいい。

「さて、18年ぶりの再戦といこうか……」

「勝った！いくら英雄といえども、この両面宿儺に勝てへん！」

一人で勝ち誇った声で宣言し、復讐の対象を捜す。

『そう思つか？』

「な、なんや！この声……」

『なに、天挺空羅てんていくわくらと言う術で言葉を飛ばしているだけだ。それと、湖の近くの開けた場所に居る来るなら来い』

「言われずとも行つたるわ！その首を取つたる……！」

天ヶ崎 千草は両面宿儺を操り、アールニーロを討ち取るべく移動する。

「ダメだなありや……」

アールニーロは遠目で両面宿儺を確認したが、両面宿儺の力は18年前より低下していた。

「大きな……」

「ああ、大きい。だが、中身はスカスカで見かけ倒しに近いがな……まあ、左上半身が残っているだけましか」

「18年前に斬り落としたんだよな？なんで生えるんだ？」

「解らんが、期待はずれもいいところだな……」

60メートルの巨体が近づいているのに、2人は余裕である。両面宿儺はどちらにとっても、1人で対応できる強さなのだから仕方が無いと言えはそうなのだが……

「足元からみると壮観だな。上からみた景色も壮観だろうな……」

両面宿儺が剣を振り上げて攻撃態勢に入っているのに、エヴァンジェリンはまだ暢気な事を言っている。そのまま剣が振り下ろされるが、アールニーロの斬魄刀とぶつかり、あっけなく両断された。

「弱いな……だが、18年前の敬意をまだ忘れてはいない。だから、卍解で片をつけよう」

アローニーロは両面宿儺に一礼をして、その名を口にする。

「卍解 神殺鎗」

伸縮自在の卍解で両面宿儺を一刀両断する。

「興醒めだったな……」

そう言い、両面宿儺が倒れ伏すのを見て、封印作業を粛々と始める。

「確かにそうだったな。敵は両面宿儺の頭の上で油断してたから、簡単に捕まえられたしな。木乃香も無事みたいだし、一件落着だな」

「そうだな。こいつ等は……そいつは記憶封印して、他は詠春に丸投げだな。別に俺等を執拗に狙わないみたいだしな」

全員を回収した後で、関西呪術協会の石にされた奴等を治してやってから、アローニーロ達はホテルに戻った。

Side out

修学旅行 3日目の夜（後書き）

両面宿儺は弱体化が酷い。

理由は、アーロニーロに18年前に斬り落とされた左上半身の再生の為に力を使っていたからです。

ネギを筆頭に原作では活躍していたメンツは活躍なし。

でも、刹那はカモの口八丁でネギと仮契約しているという状態。

木乃香の覚醒？フラグは全部潰しちゃったけど……どうしよう……

オリジナルの事件で覚醒させないとダメなのか……

修学旅行 実質最終日（前書き）

第44話

感想 幾夜様、七誌様、まっきー様、バクラ様
ありがとうございます

修学旅行 実質最終日

Side アーロニーロ

修学旅行4日目は実質、修学旅行最後の日だ。5日目は麻帆良に午前中の内に帰るので、楽しむのは今日で最後だ。なのに、なにが悲しくて関西呪術協会の本拠地に来なくてはならない、ましてや詠春と座敷で2人だけとは……詠春は俺に殺されたいらしい。

流石にお飾りとは言え、関西呪術協会のトップの呼び出しを無視できない。餓鬼が親書を届けた後なら尚更だ。

「すみません、アーロニーロさん。できれば呼びたく無かったです
が……」

「そう思うなら呼ぶな。今の立場上は無視できないからな」

「相変わらずのようで……」

「とつとと要件を終わらせろ。修学旅行は実質今日で最後なんだ」

「では、単刀直入に言います。あなたが、記憶封印した人の封印を解いてください。それと、行方不明になっている人達の行方を知りませんか？」

「断る。俺を殺そうとして生きているだけましだろう」

助けるつもりも邪魔するつもりも無いから、そっちで勝手に解けばいいだろうに……解けないから俺に頼んでいるんだろうが。行方

不明者はチャチャゼロとワカメ大使が殺した奴だろう……遺体は全部持ち帰らせたので、喰った。

「やはり、そう答えますか……」

「で？話はそれだけか？戻りたいんだが……」

「いえ、個人的なお願いが……桜咲 刹那と木乃香を貴方が鍛えてくれないでしょうか」

詠春が頭を深々と下げて頼むが、無駄な事だ。どちらも興味はないし、詠春のお願いを聞いてやる必要も無い。

「それも断る。いくらお前が頭を下げようが、頼もつが無駄な事だ」

そう言つて、すぐにエヴァ達が待っているあるう場所まで影のゲートで転移する。

そういえば、詠春禿げてなかったな……ストレスで禿げると思つてたんだが……

Side out

Side エヴァンジェリン

父様は関西呪術協会のトップになっている詠春の場所に出向いている。詠春の実力は父様に直接攻撃を中れても、傷さえ付けられないというのに、父様を呼び出すとは……トップになって気がでかくなっているのか？だとしたら体にどちらが上が教えなければならぬいな……

せつかく父様が遺族組の大半を潰して、さよ達も気を利かせて、

父様と2人で一緒に京都を回れるようになったというのに……あいつの所為で時間が削られている……

「待ったか？エヴァ」

「ああ、待った。だから、その…キ、キキ、キスをしてくれないと許さん……」

は、恥ずかしい……やはり止めた方がよかったか…父様に、はしたないとかわれられてしまったか……

だけど、そんな考えは杞憂だったみたいで、父様は笑うと結界を張って自分の顔にかけている魔法を解き、素顔で私の額に軽く触れる程度のキスをして抱きしめてくれた。そう、素顔で。私と父様しか知らない、素顔でだ。

顔が熱くなるのがわかる。きっと今の私は耳まで真っ赤なのだろう。

「それじゃあ、行こうか」

「う、うん」

父様は顔にまた魔法をかけると同時に結界を解いて、私の手をとって歩き出す。

できれば額ではなく、唇にして欲しかったのは私だけの秘密だ。

S i d e o u t

S i d e 第三者

「どこのカップルだよ……」

「エヴァさん、幸せそうですね」

「照れてるマスター……録画中……録画中……」

エヴァンジェリンが気を利かせて別行動してると思っている千雨、さよ、茶々丸の3人はアローニーロとエヴァンジェリンの京都デートを後ろから見ている。

「親子でキスなんか普通するか？」

「千雨さん、それは日本での常識です。アローニーロ様とマスターは名前から判るように日本国外の出身です。日本以外では、ハグやキスは親しい人とのスキンシップとして日常的にする国があります。だから、親子であるアローニーロ様とマスターがハグやキスをしてもなんら不思議はありません。尤も、どちらかがそういう国の出身ならの話ですが……」

「でも、エヴァさんとアローニーロさんで、600年以上生きているんですね？ だったら今の文化はあてになりませんか？」

「……確かにそうですね。マスターの甘え具合を見ると、元来マスターがそういうのが好きだったとも取れます」

「よわい 齢600歳以上の甘えん坊吸血鬼か……どこを探してもエヴァくらいいしか見つからなさそうだな……」

「千雨さん、それは誤解です。この中で私が一番あの2人と一緒に過ごしていますが、エヴァさんがあいう純粹無垢な笑顔を向けるのはアローニーロさんだけです。他の人に向けるのは大抵、嘲笑っ

たり、可笑しかったりした時の笑みです。あと、微笑ましいものを見た時は優しげな笑みも浮かべます。確かに、エヴァさんは甘えん坊かもしれないが、アロニーロさん限定です」

(……………どうでもいい)

「そう、さよさんの言う通りです。マスターのああいふ姿はこういう機会が無い限り見られません。しかも、今回は遠出で、知り合いが近くに居ないということで気分が解放的になっていると思われるますので、一味違った甘えるマスターが見られると予想されます」

(私がおかしいのだろうか……………)

「いつの時代でも女の子は恋愛に興味津津なんです。だから、一番近い人の恋愛を観察するんです」

(親子だから恋愛じゃねえだろ……………私だけでも別行動すべきだったか……………)

そんな訳で、千雨、さよ、茶々丸はアロニーロとエヴァンジェリンの京都デートを最初から最後まで見るといふ冒険をしたのだ。

「やっぱり親子と言うより恋人だったな……………」

「なんで親子なんでしようね？」

「貴重な映像が沢山撮れました」

S i d e o u t

修学旅行 実質最終日（後書き）

修学旅行は今回で終了。

次のイベントは原作だと、ネギがエヴァの弟子になる、か……
この作品だと、エヴァがネギを弟子にする要素がネギがエヴァに勝つ時以上にならない（笑）。アールローもネギを弟子にするつもりはないし……

そんな事より、木乃香の居ないネギパーティーの未来が視えないから、木乃香覚醒イベント作んなきゃ……

餓鬼 が来た（前書き）

第45話

感想 藤様

ありがとうございます！

餓鬼 が来た

Side アーロニーロ

修学旅行は無事に終わった。でも、3・Aの何人かは裏に関わる事になった。こっちとしては勝手にしろという話だが、どんどん増えていくな……餓鬼絡みで裏に関わる奴……元々裏に関わっている奴（刹那）は問題無いとしても、その他は問題るだろうに。特に、魔法をファンタジーで夢溢れるもんだと勘違いをしている奴は……
1度、魔法の恐ろしさを教えてやった方がいいか？……必要ないか、どうなるうが知った事ではない。
そつえば、エヴァ達に渡す物があったな。

「集合」

「なにが集合だ……」

「自分のHPの更新が忙しいのか？ちうたん」

「どーして……！てめーらは……リアルでたまにその名で呼ぶ……リアルとネットの境界線しつかり引きやがれ……！」

「父様、わざわざ千雨を影のゲートで迎えに行ったんだから、なにが重なる話があるんじゃないのか？」

「俺としてはさほど重要じゃないんだが、こついう物は早めに渡した方が良いと思つてな」

机の上に置いておいた人数分の封筒をそれぞれに渡す。

「封筒？」

「修学旅行での、学園長からの個人的な謝礼だ。俺達は全員活躍したからな……」

「あの課外修行の目標ってまさかこの為に……？」

「理由の一部だな、一番は実戦の空気を知ってもらう為だ。修行では心のどっかで大丈夫、死にはしないと考えてしまうから、実戦にでないと判らない不具合もあるしな」

「あんな死にかなない修行でよく言うよ……」

「それは私も思いますね。人間の千雨さんじゃホントに死んでしまいますよ？」

失敬な、死なん程度にしっかりと管理している。それに、魂魄さえ残っていれば以前より高性能な体に定着させた上で、しっかりと使いこなせるようになるまで面倒はみてやる。

「……………この額は、中学生に持たせてはいけないんじゃないか？」

「……………これ、全部が万札ですか？」

封筒の中身を確認したようだ。確かに、中学生が持つ額じゃないが、あつて困るような物ではないし、心配なら金庫は貸してやるつもりだ。

「……………餓鬼が家に近づいているな」

しかも何人が連れてくるな……

「アローニーロ様、塩でも撒きますか？」

「あいつらが悪霊の類で、撒く塩が清め塩とかの除霊効果のあるものなら撒くが、相手は悲しい事に人間だ。塩の無駄使いになるから止しておけ」

「わかりました」

てか、悪霊の類なら問答無用で斬っているな……居ても害にしかならんだろうし。

ピンポーン

出迎えるか、面倒事の気がするが……

「なんの用だ？ 餓鬼とその他」

餓鬼にオコジヨに明日菜に木乃香に刹那か……

「アローニーロさん！！ 僕を鍛えてください！！！！」

餓鬼って呼ばれたことはスルーでいきなりそれか……

「ちょっと、ネギ！ そんな事より、修学旅行でのお礼を言うのが先でしょ！」

「……とりあえず、上げれ」

できれば早速帰ってほしいが、餓鬼とオコジヨ以外は修学旅行でのお礼を言いに来たようだから、家に上げてやる。

「アローニーロさん、修学旅行ではこのちゃんを助けていただき、ありがとうございます」

「うちを2度も助けてくれてありがとうございます」

「その口振りだと、結局裏に関わるみたいだな」

「はい。長も修学旅行の件で、自衛位はできるようにならなければいけないと思って、裏の事をこのちゃんに教える事になったのです」

「………なんか、刹那が「このちゃん」と言うのはしゃべりかたと合わないな」

「で？誰に鍛えて貰うつもりだ？」

まさか、な………

「アローニーロさんが、エヴァンジェリンさんに頼みたいんですが………」

「断る」

エヴァとハモる。

めんどくさいし、俺が鍛えると関西呪術協会全体が良い顔をしないだろう。ただでさえ恨まれているのに、これ以上好き好んで更に睨みつけられるような事はしたくない。記憶封印は見せしめの意味が

あつたからな……

「そう……ですか」

やけにあつさり引くな？詠春になにか言い含められたのか？

「餓鬼も同じ内容だろ？そつちも断る」

「そ、そんな……」

「兄貴の決意も聞かないで、ソレは横暴じゃねーのか！！」

「そうよ、ネギは修学旅行でダメダメだったから、あんたに頼んで戦い方を学びに来たのよ！」

確かに、せいぜい親書を届けただけで、その他は役立たずだったな……だが、餓鬼にそんな期待する方が可笑いと思うがな……

「アーロニーロさん聞いてください！修学旅行では、問題が起きたら自分だけで解決するつもりでしたが、木乃香さんの誘拐で僕はなにもできませんでした。それに、親書を届ける際に小太郎と言う人と1対1で戦いましたが、勝てませんでした。もし、次に戦う事があつた時に足手まといになりたくないんです！だから、僕を鍛えてください！！」

なんか決意したらしいが、どうでもいい。………目がアリカを助けに行く時のナギと重なるな………

「なんで俺なんだ？」

一応、理由を聞いておくか……

「アローニーロさんを師事しているエヴァンジェリンさん達が強かったので、アローニーロさんなら確実に僕を強くしてくれる思ったからです！」

まあ、妥当な理由だな。英雄だからとか、の理由よりはよっぽど好感が持てるな。

「諦めるつもりは？」

「ありません！！」

てきとうに試験して、落として諦めさせるか？そうすれば、付きまといられる事も無さそうだな。

「試験をしてやろう。その結果によっては、お前等全員を鍛えてやる」

「ホントですか！！」

まるで鍛えて貰えるような喜びようだ。試験当日どんな顔をするか楽しみだな……

「嘘は言わん」

尤も、最初から受からせる気は無いがな。なに、少し遊んでやるだけだ。学園長も、学園の自称正義の魔法使いも、これは文句を言わんだらう。

「試験は、1週間後の5月3日の午後3時にこの家にでやる。それまで、に多少でも身体を動かしておけよ。あと、試験は戦う事だから、お前と仮契約してるやつなら参加は自由だ。1人で挑んでも構わんがな……」

説明を終えると、餓鬼とその他は静かに帰っていった。

「随分とふざけているな。最初から合格にする気ないのだろう？父様」

「当然だろ？普通に断っても、付きまといそうだからな」

(なんか、酷いですね……………)

(そうか？師匠はこんなもんだろ？)

特に準備も必要ないが、舞台を多少は整えるのでしょうか……………

S i d e o u t

餓鬼 が来た（後書き）

次回で、ネギを試験します。

アーロニー口は合格にする気は無いんですが（笑）

餓鬼 決まっている結果（前書き）

第46話

感想 リンドウ様、七誌様、オイラム様、たぬき様、水竜様、藤様、
ブギー様

ありがとうございます。

餓鬼 決まっている結果

Side アーローニーロ

俺の周りでは何事も無く、すぐに1週間が経って試験当日の時間になった。

「さあ、勝負するアル！」

「絶対に勝ってみせるでござる」

「帰れ」

オコジヨに寄生させてある霊録蟲でこの2人に魔法がばれてるのは知っているが、どちらも仮契約していない。

餓鬼が仮契約するときにはオコジヨを使うから、確実な情報だ。

古の方は、餓鬼に中国拳法を教えていたから短い時間での成果を見に来たのと、この機会に俺と勝負をしようというのだろう。楓の方も、俺と勝負をしに来たのであろう。

「で、弟子の成果を見に来たアル。そのついでに勝負してくれてもいいじゃないアル！」

「その際は、拙者もよろしくお願いするでござる」

「寝言は寝て言え。見学は許していいが、勝負は……学園祭でのまほら武道会まで我慢するんだな」

「そのときは絶対に勝負して貰うアルよ！」

「毎年参加者は少ないでござるから、可能性は十分あるでござるな」
お前等と当たればな。

「さて、これがそちらの最大戦力か？」

「はい。全力で行きます」

餓鬼、明日菜、のどか、刹那、木乃香、の5人が……のどかまで引つ張ってくるあたり本気と見える。
全員動きやすい格好になっているし、問題は無いだろう。

「付いて来い。場所を移さない事には話にならん」

「ようこそ、ダイオラマ魔法球 通称、勉強部屋に。なにぶん殺風景な場所だが、暴れるにはこういう場所の方がいいだろ」

「ダイオラマ魔法球……魔法の箱庭みたいなもので、とっても高価なんですよ……」

「さつき駄菓子屋の地下に入ったはずよね？なんで青空が広がってるの？」

「凄い、これも……魔法」

「確かに、鍛錬ならこつこついう場所の方が気兼ね無く力が振えますね……」

「は〜凄いやな〜」

それぞれ思う事があるが、すぐに集中して貰わないとな……

「さて、これより試験を始めようと思うが、なにか質問がある奴は居るか？」

刹那が手を上げる

「戦つとこの前言いましたが、倒さなくては合格にならないんですか？それと、相手は何ですか？」

もつともな質問だな

「勝つ必要性は無い。というか、勝てんだろう。相手は俺であつて、俺では無い」

「は？」

「意味はすぐに解る。砕ける、鏡花水月」

なに、ただの遊びだ。

Side out

Side 第三者

ネギ達にはアールローロが解号を口にした途端に、まるで、自分達の周りに張られたガラスが砕けるような音と共に、アールローロが見えなくなつた。正確には、アールローロがまったくの別人になつていた。

「お父……さん？」

かつて、紅き翼を率いて魔法世界を救つた千の呪文を使いこなすと言われ、「サウザントマスター」と呼ばれた連合側の英雄にしてネギ・スプリングフィールドの父親、ネギ・スプリングフィールドがアールローロの居た場所に立っていた。

「んな訳ねーだろ。お前等のここに連れて来たのは誰だつた？アールローロ・アルエルだろうが。言いたい事があるんだろうが、黙つて聞け。コレが、お前等の相手だ」

ナギの姿をしたアールローロが、ナギと同じ声で自分を指さして言う。

「中身こそアールローロだが、これから使う技はネギ・スプリングフィールドの技を模倣したモノだからな。偽物だからといって、甘く見んじゃねーぞ、殺す気で来い。……なに呆けてんだ？とつとと来やがれ！」

最初に動いたのは刹那。ネギパーティーの中で現在の記憶では最も場数を踏んでいるし、斬るのに躊躇いなどは無い。強い事は知っているし、斬ろうとしたところで触れる事すら困難な相手だ。それに、前から一度は刀を交えてみたいと思つていたので。それに、刀の間合いに入ると同時に斬り付けようと

「待つてください!!」

したが、ネギの大声で動きを鈍らせてしまった。敵の目の前で……

「戦場での不測の事態で、一々動きを鈍らせてるようじゃ、まだまだだな」

刹那は夕凧の刃に触れないように掴まれ、アローニーロに頭突きを喰らわせられる。

痛みで顔を歪めながら、なぜ大声を上げたかと批判するように睨む。

「それとネギ!!なに従者の邪魔をしてんだ!自分の従者を死なせたいのか!あと、従者連中はアーツィファクトを使って掩護するなりしろ!何の為に仮契約してると思ってんだ!戦う為だろうが!」

その言葉に従い、それぞれのアーツィファクトをだす。

明日菜はハリセンの「ハマノツルギ」を、のどかは「いどのえにつき」を、刹那は「七首・十六串呂」を、木乃香もとりあえず「東風の檜扇」と「南風の末広」で武装する。

「うっし、そんじゃあ来やがれ」

その言葉と同時に、明日菜と刹那が挟み打ちにするように移動して、アローニーロを攻め立てる。

だが、ハマノツルギも七首・十六串呂もアローニーロに中らず、七首・十六串呂は魔法の射手で、ハマノツルギはネギが持っている杖と同じ見た目の物で受け止められて、押し負けていた。

その間に、ネギ、のどか、木乃香は動いていなかった。

のどかは自分のアーツィファクトの、いどのえにつきの能力で

アローニーロの表層心理を読もうとしていたが、意味がなかった。読めない訳ではないが、なにが来たとかしかの考えしか読めなくてアローニーロと戦う上で先手を取れるようなモノでは無い。

アローニーロは今も反射で戦っている。なにが来たから、なにをする。そんなモノである。

だが、いどのえにつきに対してはかなり有効である。表層心理を読むのは、現在どう考えているかを読むのである。

ならば、なにも考えなければいい。戦略を考えずに、場当たりのな行動で戦えば、いどのえにつきはあまり役には立たない。尤も、実力差があるからできる事で、同レベルの相手に使えば負けるような方法であった。

木乃香は、なにもできないでいた。

一応、魔法を使えるが、ネギに簡単な治癒の魔法を習っただけだし、魔法媒体がないのと、使う状況でもない。アーティファクトも同様の理由で使えない。

ネギは混乱していた。

魔法であれば、姿を偽装するのは簡単にできる。だが、そういう次元では無い。

今目の前で戦っているアローニーロはどう見ても自分の父親のナギ・スプリングフィードそのものに見えない。6年前のあの日に、自分を助けてくれた父親に……

だが、本人だって言っていたでは、自分は偽物だと。

しかし、目が、耳が、捉える情報はアローニーロではなくナギだと訴える。自分が目指す父親であると……

「ネギ、てめえは何しに来たんだ？」

既に明日菜と刹那は倒され、アローニーロがネギの前に立っ

る。

だというのに、ネギはなにもしないでいる。未だに混乱から抜け出せないでいる。

「たかだか幻影に騙されて、折角の機会を台無しにするつもりか？」

ネギが感じているのは幻影だが、鏡花水月の完全催眠により、現実と遜色ないものだ。

「本来なら、この時点で不合格だが、チャンスをやろう」

「チャンス……？」

「そう、チャンスだ、

お前と仮契約してる奴全員の首を持って来い。

そうしたら、合格にしてやるよ」

まるで当然のように、アローロニー口は言う。

「お父さんは、そんな事言わない！！！！！！！！」

混乱などネギの頭から一気に吹き飛び、激情により魔力を爆発させてネギの姿をしたアローロニー口に殴りかかる。

それに、アローニーロは笑い

「当たり前だ。俺はナギじゃなくて、アローニーロだ」

真正面から迎え撃つ。

傍目からは互角の勝負に見えるが、実態は最初からアローニーロの勝利は揺るがない。

ネギはにわか仕立ての中国拳法でアローニーロを攻め立ててはいるが、どの攻撃も決定打になっていない。

アローニーロはネギが攻撃するたびに、攻撃し返す。まるで喧嘩の殴り合いのような攻撃をしている。

当然、魔力を激情により爆発させた身体強化が長く続く訳も、その程度でアローニーロが倒せる訳もなく、当然の結果で、ネギはアローニーロに負ける。

「もう動けねえのか？軟弱だな」

無茶な身体強化による反動によって、もうネギは指一本動かせなくなつた。

「結果は不合格だ。次に目覚めたら、反省会でもするんだな」

S i d e o u t

餓鬼 決まっている結果（後書き）

ナギの姿でぼこる。てか、アローロニーロだから、途中のセリフを言わしたかったら、こうしたんですけどね（笑）

他にも、「憧れとは、理解からもっとも遠い感情だ」という藍染のセリフを言わしたかったけど、挟めるタイミングがなかった………

日常？ 地下の住人（前書き）

第47話

感想 リンドウ様、ライコウ様、皐月二八様、トウトウ様、才
イラム様、たぬき様、水竜様、藤様
ありがとうございます！！

日常？ 地下の住人

Side アーロニーロ

昨日はガツカリというか、予想通りというか……

餓鬼はナギの姿になるだけで最初は役立たずになるし、明日菜と刹那は向かって来たのは評価するが、ただ挟み打ちにただけで刹那は翼を出さなかった。

のどかと木乃香は後方支援だが、いどのえにつきは役に立たないような戦いをしたから無意味、回復をできる東風の檜扇はあくまで傷を治すだけだから、気絶してるのには無意味だった。

最後に餓鬼を怒らせる事を言ったら、激情に任せて魔力を暴走させて、諸刃の剣の身体強化をした状態で殴り合ったが、想定範囲内の強さであった。

しかも、起きても碌に反省会をせずにこっちに文句を言ってくる始末だったしな……

つまらん試験だったな……あの為にあいつの頼みを聞かねばならないというのは少し癪だが、約束を破る訳にもいかない。とつとと済ましたいから今日の内に必要なモノは揃えて、明日渡しに行くか……

餓鬼とのどかと夕映がドラゴンに襲われている。なんでここに居るかは知らないが、助けられない訳にはいかんだろ……あいつも見ているんだろうしな……

「縛道の七十三 倒山晶」トウサンクリスタル

四角すいを逆さにした形の結界がドラゴンを包み込み、ドラゴンの動きを完全に封じる。

おそらく中で出ようと暴れているだろうが、倒山晶はビクともせず
に佇んでいる。

「まったく、なんで此処にいる。気軽に来るような場所ではないはずだが？」

「ア、アローニークさん。実は、ここにお父さんの手掛かりがある
って、この地図に……」

……なぜ、身構えた……てか、失念していたな……確かに、そんな地図を詠春に渡されていたな……まあいい、ついでだから、あいつにこいつ等を押しつけるか。

「まあいい。付いて来い」

「いやいや、意外でしたよ。あなたが期限を決めてないのに、こんなに早く届けに来てくれるとは。それと、そちらの3人をついでとはいえ、此処に連れて来るとは……」

アルビレオが白々しく3人の事を指摘する。いや、今はクウネル・サンダースだったな。

「嫌な事でも、先延ばしにはしない。ましてや、協力してもらったんだからな」

3人は話について行けずにただ、黙っているだけだ。

「そう思っなら、キ「ヒュッン!!」…エヴァも連れて来ればよかったですじゃないですか。彼女が来てくれるなら、最高級の紅茶を出しますよ?」

クウネルがうつかり、別の名前を言いそうになったのでそれを遮る為に神鎗を顔の横に伸ばす。エヴァを馴れ馴れしくキティとは呼ばせん。

「それだと、コレは最高級では無いようだな」

テーブルに出されているティーポットとカップの中の紅茶を指さす。今迄此処に何度か来たが、1回目以降に出された紅茶は警戒して手を付けなかった。

「いえいえ、今回はあなた以外のお客様が居るので最高級ですよ。というか、あなたはどんな紅茶を出しても最初の1回以降手を付けないじゃないですか」

手を付けないのところで、餓鬼が信じられないという目でこっちを見てくる。

「信用できん。それだけだ」

嵌められたからな………

「しかし、珍しいですねえ。あなたがこんなにもおしゃべりを私とするなんて……なにか下心が御有りで？」

「面倒事を押し付けたい訳だが？」

「でしたら、エヴァの笑顔のしやし」

なにが言いたいかよく解ったので、喉元を掴んで壁に押し付け、ついでに神鎗を突き付ける。

「冗談だとしても、不快になる冗談を俺に言ったら、場合によっては命はないぞ」

「こ、降参です。まったく、あなたは どうしてエヴァと私を遠ざけるのか解りませんよ……の、喉が……」

「言ったはずだが？ 場合によっては命はないと……」

まったく……真面目にしている気は無いのか？ こいつは……俺がなにを押し付けたいか判っているだろうに。

「まあ、私は構いませんよ……あなたに言われずとも、やるつもりでしたので」

いきなり真面目になるか……まあいい。

「それじゃあ、後は頼もつか。では「次はエヴァを連れて来てください」……」

こいつには何かをしておいた方が良さだろうか……性癖を改変

させる程のなにかを……

「怖い顔してますよ。それと、いい加減に喉元から手を離してください。あなたの力で簡単に首の骨が粉々に碎けるんですから、怖くて仕方がないんですよ？」

よく言う。そんな事をまずしないと判っているくせに……

「必要なモノがあったら言え。そのくらいは用意してやる」

そう言い捨てて、図書館島を後にした。

「と、言う訳で、早速必要になりそうなモノを言いに来ましたよ」

こいつ早く死なないかな……確かに昨日「用意してやる」とは言ったが、こんなに早く言いに来るとは……

「まず、あなたの使っていないダイオラマ魔法球を貸してください。できれば、秘密基地が良いですね。次に魔法媒体ですね。これはネギ君が使っても壊れないレベルのを複数用意してくれるとありがたいですね」

2つとも修行するならあった方が良い物だな。

「いいだろう。その体では運べないから、届ければいいな？」

「ありがとうございます。ここに来るだけでも結構きついんですよ
ね」

「なら、とつとと帰れ」

「ひどいですね。まあ、本当にきついのですぐに帰りますが」

さて、あいつがもう2度と家の付近に近寄れないように結界を追加しておくか……

Side out

Side クウネル

「ほれ、これで良いか？」

「ふむ……どれも買うなら高級品ですね」

アローニーロが頼んだ品を早速持って来てくれました。やはり、エヴァは連れて来てませんか……

連れて来てくれれば、服を幾つかあげる用意があるんですけどねえ

……

18年前は一定以上近付けないようにされた上で、メノスの森と一緒に入ろうとしたら、今回貸してくれるよう頼んだ秘密基地に放りこまれましたから……いくらなんでも過保護でしょうに……

「そういえば、お前どうやって秘密基地に入るつもりだ？ここから

離れられないはずだろ？」

「あなたが追加でかけた封印の御蔭でアレは大分落ち着いているので、多少は無理がききます。その御蔭で昨日はあなたの家に行けたんですよ？まあ、それでも秘密基地には入れないんですが……そっちはあなたとの仮契約で出たアーティファクトの『写し身の義骸』でもう一人の私に頑張ってもらいますよ」

「まだ持つてやがったか……」

こんな便利なアーティファクトを手放すわけないでしょう？仮契約は罠に嵌めてしたんですけど……

アーロニーロが初めて此処に来た際に、ティーカップに細工をして仮契約させたんですよね。その所為で、紅茶に手を付けなくなりましたが……

Side out

アーティファクト

写し身の義骸

能力

自分の性格と能力をコピーした義骸を生み出す。容姿は自分で任意のモノにできる。

オリジナルはコピーが経験したこと全てを追体験できる。

日常？ 地下の住人（後書き）

アルビレオはあの場所からあまり離れられないみたいなので、即席で考案したアーティファクトでダイオラマ魔法球を使えるようにしました。

悪魔 襲来（前書き）

第48話

感想 吹風様、トウトウ様、まつきー様、秋田皓平27歳様、
藤様

ありがとうございます…！

悪魔 襲来

Side 千雨

ん？……………消えた？

浴場にいた、のどかに夕映に古に刹那に木乃香が消えたな。

全員ネギ先生の関係で魔法を知ったじゃねえか……………なんつーか、ピンポイントで狙い打ちにされてんな……………

流石に、見なかった事にはしちやいけなさそうだな……………仕方がねえ、師匠に一報しておくか……………

Side out

Side アーロニーロ

『そんなわけなんだけど、どう思うんだ？師匠』

伝令神機で千雨の報告を受けている。

「学園側の仕業ではないな。十中八九、敵の仕業だろう」

問題は何処の誰がやったかだな……………学園結界を潜り抜けたのだから、結構な実力者だろう。

『あーやっぱり敵か……………そっちに行った方がいいか？』

「いや、来ない方が良さだろう。移動のときはかなり無防備になるし、女子寮は結界に守られている。まあ、その結界が突破されたわけだが……………」

まったく、こういう事無いように結界が張ってあったり、夜の警備があるというのに……

さて、敵の狙いはやはり餓鬼か？攫われたのはどいつも餓鬼の関係者だから、餓鬼が狙いと考えるのが普通だが、西の長の娘が混じっているからそう決め付けるのは早計か……

『わかった。それじゃあ、休んでいるから。 ツーツー』

餓鬼の方はどうなっている？……なんで明日菜を攫われて、京都にいたハーフと戦いに行ってたんだよ……
助けを求める事を知らんのか？あの餓鬼は……

プルルル、プルルル。

電話か……

「もしもし」

『儂じゃ、緊急の案件があるんじやが、良いかの』

「餓鬼が無謀にも、なんの情報も無い相手に挑んでる話か？」

『わかっておるのなら、話は早い。早急にネギ君と協力者と人質を救出して、侵入者の捕縛か、排除を頼みたい。それと、現場には特殊な結界が張られておって魔法は役に立たんが、できるかの』

「問題無い」

『では、頼む……この状況では、おぬししか頼れんのじゃ』

いつも飄々としている学園長が随分と真摯な態度だったな。そこまで切羽詰まっているということか……
それか、餓鬼がそれほど大事ということか……

「話は聞いていたな？エヴァ」

「勿論だ、父様。準備は済ましてある」

「さよと茶々丸は留守番だ」

「なぜですか？アーロニーロ様」

「そうですね！私達だって戦えます！」

「戦えるうんぬんの問題では無い。誰が此処を守っておくんだ？相手の狙いは餓鬼のようだが、フェイクの可能性もある。だから、お前等は家を守っている」

それに、相手が張っている結界がどのような物かはまだ完全には解っていない。茶々丸は問題無いだろすが、滅却師のさよは戦えない可能性もある。だから、家を守るという理由で戦場に近づけさせない。

Side out

Side 第三者

それは戦いと言うのにはお粗末なモノであった。
かたや、2人掛かりで1人の紳士の姿の男性を攻撃し、かたや、2

人の攻撃を簡単にいなしている。

誰が見ても実力差は明らかで、男性の後ろにはハルバートを持っている褐色の肌でウエディングドレスのようなものを着た女性が控えている。

もし、その女性が加勢すれば簡単に決着が着くであろうが、その女性には微動だにせずに目の前の戦いを見物している。それと、水の牢屋の番人達と人質達が見ている。

「さて、ネギ君。いつまで遊んでいるんだい？体は十分温まっただろう？本気で来たまえ」

「くっ！」

男性の言葉にネギは歯を食いしばる事しかできない。魔法使いは魔法を主力にしているから、魔法使いと言われるのだ。魔法を使えないこの状況では全力の半分にも満たない力しか行使できない。いくら修行を積んだと言っても、それは魔法に関するモノであり、こんな近接戦闘に役立つモノでは無い。

「隙あり!!」

小太郎が意識が少しズレている男性に死角からの攻撃を仕掛けるが、受け止められてしまう。

「まったくダメだな。不意打ちの際に声をあげるなんて……不意打ちにならんよ……」

まるで戦いの師匠のような口振りだが、今やっているのは模擬戦なんかでは無く、真正銘の実戦である。

弱い方が殺され、強い方が生き残る。それがどちらかは明白……強

い方の気まぐれで弱い方が生きているにすぎないのだ。
その戦いに、水を差す。

「射殺せ、神鎗」

突如として伸びて来た刀の刃に反応して、男性掴んでいた手を離し、すぐにしゃがむ。

刀の刃は男性が立っただけならば首があった所を素通りして、伸びて来た時と同じように縮んでいく。

「首を取るつもりだったんだがな……これでは、普通に戦わねばならんな」

「伸縮自在の不思議な刀、縦長の穴が開いているだけの仮面、白いフリフリの付いた服、アローニーロ・アルエリかね？」

「そうだが？なにか問題でも？」

「いやいや、むしろ待っていたからね。私も、彼女も……これで依頼はこなせそうだよ」

「そうですね、ヘルマン卿。お久しぶりです、首刎ね公殿」

静観を続けていた女性がアローニーロの登場により、ヘルマン卿の隣立って、自分も戦うと意思表示をする。

「下がっていても構いませんよ？クラリツサ伯爵」

「ヘルマン卿こそ、下がっていても構いませんよ……子供の遊びに付き合っていてお疲れでしょう」

「まさか、下がる訳が無い（ありません）」

（今の内にお前等は安全な場所まで下がれ）

（でも！人質にされている生徒が！）

（解決済みだ）

（え？）

場面は変わり、水の牢屋に気配を消して近づいていた人影が1つあった。

氷輪丸を手にしているエヴァンジェリンである。アローニーロが敵の気を引いている内に、助ける算段で行動していたのだ。牢屋の番人のスライムにも、人質にも気取られずに牢屋のすぐ近くに来たのだ。

（敵との距離、位置関係、父様以外には気付かれていない。全ての条件は揃っている。後は決行するだけか……）

たかだか魔法生物の力だけで作られた水の牢屋など、簡単に崩壊させられる。

「霜天に座せ、氷輪丸」

氷の竜が姿を現し、スライム3匹を簡単に喰い散らして続いて水

を氷に変化させて氷の牢屋を作る。

エヴァンジェリンは人質達が騒いでいるのを無視して、氷の竜に氷の牢屋を持たせてそのまま結界の外まで一気に移動する。

（敵は後2人居た。足手まといも2人居たからすぐに戻らねばならんな……）

「人質は助けられてしまったね」

「ですが、問題はなにもありません」

ヘルマンとクラリツサは人質が救出されるのを、ただ黙って見ていただけである。

もはや人質に価値は無いから当然である。彼と彼女にとっては目標をおびき出す為の餌でしかない。神楽坂明日菜に付けさせたペンダントによって結界を張っていたが、依頼を考えれば余計な事であったし、元々強い相手だろうと、真っ向勝負で挑むのが2人の性分であった。

「では、自己紹介といきましょうか。ヴィルヘルム・ヨーゼフ・フォン・ヘルマンです。今はしがない雇われ悪魔です」

「会ったのは二度目ですが、あの時は自己紹介ができませんでしたね。リーベル・ファラン・ソン・クラリツサです。ヘルマン卿と同じく、今はしがない雇われ悪魔です」

2人はアローニーロに向かって優雅に一礼すると、本来の姿を現

す。

「ああ、20年前の最終決戦で門を守っていた、伯爵級の悪魔か」

「お久しぶりです、首刎ね公殿」と言われた時から、アールローロは女性が誰なのかずっと考えていたが、解らないうでいた。

そもそも、首刎ね公と呼ばれていたのは大戦前までであるから、てつきり賞金首時代に会った人物と考えていた。最終決戦でも、首刎ね公と呼ばれた由縁を彷彿させる戦い方をしたので、首刎ね公殿と呼ばれたのにもアールローロは納得した。

そして見落としていた。アールローロを言う事を聞かずに、未だに戦場に残っているネギの方がヘルマンを見て、魔力を爆発させる直前だということに……

S i d e o u t

悪魔 襲来（後書き）

ヘルマン襲来！それと、敵の戦力増強で「戦争 決戦」でた門の守護をしていた悪魔も参加。流石にヘルマンだけでは戦力不足に思っ
て、参加させました。

戦闘シーンは次回に持ち越し。

悪魔 迎撃（前書き）

第49話

感想 吹風様、トウートウー様
ありがとうございます……

悪魔 迎撃

Side 第三者

強者は3人(?) 弱者は2人。強者はアローニーロ、ヘルマン、クラリツサであり、弱者はネギと小太郎である。強さだけで言うのなら、状況はアローニーロ、ネギ、小太郎が優勢である。だが、ともに相対できるかと問われれば、ヘルマン、クラリツサが優勢である。

結界は消え、魔法が使えるようになっていたが、ネギと小太郎は戦力と言えない。

片方は屈辱だが退こうとしているのに、もう片方は仇と言える存在を認知した事によって暴走した。

「うアああああ嗚呼アアああアア!!!」

アローニーロの試験の時より激しく魔力を爆発させ、ネギは限界以上の身体強化によってヘルマンに肉薄し、その顔を殴る。だが、殴ると同時にヘルマンの隣に立っていたクラリツサのハルバートに捉えられて吹っ飛ばされる。

「ネギ!」

小太郎が叫び、吹っ飛ばされたネギに駆け寄ろうとしたが、その速さ以上でまた、ヘルマンに肉薄しようとし……

今度はアローニーロに吹っ飛ばされた。

「ネギー！！！」

先ほどより勢いよく吹っ飛ばされたネギに、小太郎は今度こそネギに駆け寄り、気絶しているネギを担いで戦線を離脱する。

「ネギ君が私達の攻撃範囲内に入る前に服を掴んで、気絶させてから、私達とネギ君の間に自分が入るように飛ばす。実に見事な手際でしたよ」

「そんな事より、始めようか……………」

敵。

戦う理由はそれだけで十分。誰かを傷つけたとか、依頼されとかは所詮敵と認識する為の理由付けでしかない。

「悪魔パンチ！！」

強烈なヘルマンの攻撃がアローロニーロの胸めがけて打ち込まれる。アローロニーロはそれを左手にもった神鎗で逸らし、それに続くかのように繰り出されたクラリツサのハルバートの一撃を右手の未解放の掬花で受け流し、ハルバートを斬るつもりで掬花を振り下ろす。が、それに反応、いや、予想していたのだろうクラリツサはハルバートの斧頭と突起を反転させ、掬花の勢いがのる前にぶつけ、それを阻止する。この間にもヘルマンの悪魔パンチが炸裂していたが、全て逸らされていた。

「怪力、近接戦闘に優れている……………っといったところか？」

「ええ、そうですね。私もクラリッサ伯爵も、相手をすぐ近くで感じられる近接戦闘が好きなので」

ヘルマンの一言でクラリッサが一步引いた。ちなみに、ヘルマンは気付いていない…………

「しかし、怪力というのは貴方もでしょう？逸らすにしても、受け流すにしても結構な力が無ければ簡単に突破されてしまいますからね。貴方は一体なんなんですか？私達のような魔族では無い、亜人でも無い、ましてや人間では無い。依頼人も疑問に思っていましたよ？私も気になりますよが」

「なに、ただのそういう存在だ」

笑い、再び攻防を開始する。しかし、どちらも決定打に欠けていた。

アローニークは、2人の連携のせいで思うように斬り込めない。

ヘルマンとクラリッサは、伸縮自在の神鎗の間合いの変化で踏みこめなくて倒せない。

「いつまで遊んでいるんだ？父様」

役割を終えたエヴァンジェリンがその戦いに参加する。

1対2から2対2へ、数の上では対等、戦力としては均衡が崩された瞬間である。

Side out

Side エヴァンジェリンVSクラリッサ

「氷竜旋尾！」

氷輪丸から氷で形成された斬撃が放たれ、クラリツサを襲つ。

「ハアツ！！」

それを魔力を込めたハルバートによつて粉碎し、そのままエヴァンジェリンをハルバートの攻撃範囲に納めるべく肉薄し、そのままハルバートを振^{ふる}つて攻撃する。

エヴァンジェリンは氷輪丸で受け止め、ハルバートの斧頭を凍りつかせる。が、すぐに氷だけ砕かれ、そのまま力押しされる。

「その程度ですか？」

「まさか」

エヴァンジェリンは13匹の氷の竜を出し、クラリツサに襲いかからせる。

だが、それに焦ることなく、魔力を込めたハルバートで次々と砕いてく。しかし、一匹だけ潜り抜けてクラリツサに体当たりをする。

「その程度か？」

「フツ、まさか（思ったより、体当たりが響きますね。だから……）」

自分に体当たりをした氷の竜を砕くと、先ほどとは逆の問答に笑い、今迄最高のスピードで一気に肉薄して今迄とは比べようの無い魔力を込めたハルバートをエヴァンジェリンに振り下ろす。

「これで、決めます」

「なっ!!」

驚き、その場を動いていないエヴァンジェリンにハルバートの強力な一撃が叩き込まれる。

(勝った!!)

そう思ったのは一瞬だった。手応えが違いすぎたのだ。確かに中つたが、生き物を叩き潰した感覚では無かったのだ、むしろ、さつき砕いたばかりの氷の塊といえる竜の手応えに酷似していた。

「竜霰架」

静かに、確実に、氷のように冷えきった刃は敵の喉に喰らい付いた。

刃を中心として、クラリツサは氷漬けにされ、砕かれる。

「すまんな、できればもう少し楽しんででも良かったんだが、父様の方がもう少しで終わりそうだったから、決めさせてもらった」

Side out

Side アーロニーロVSヘルマン

「やはり、二刀流よりこっちの方がしっくりくるな」

神鎗を腰の鞘に納め、掬花を解放したアーロニーロが体に染み込んでいると言っているいい動きで掬花を振る。

ヘルマンは居合い拳もどきでアールローにダメージを与えようとしているが、アールローに届く前に掬花が波濤によって打ち消されていた。

（当然と言えば、当然ですかね。間合いの差もありますし、2人掛かりで攻めきれなかったのを1人で勝てる訳が無い。ですが、このまま殺られるのは悪魔の名折れでしょうな……）

意を決したヘルマンは一息で掬花の間合いに踏み込み、左手で繰り出した悪魔パンチで上段からの掬花を相殺するが、追従している波濤は威力を弱めるしかできずに、左腕は飲み込まれてダメージを負うがそれを無視してそのままアールローを拳の間合いに納める。

「悪魔パンチ！！！」

捨て身の特攻。他人にはそう見えるだろうが、ヘルマンにとっては今の自分に手繰り寄せられる唯一の勝利の可能性。アールローには勝つ必要性などは無い、依頼されたのは戦力調査だから相手が普通だったらこのままやられてもなにも問題無い。だが、相手は普通では無いのだ。悪魔を簡単に殺せる存在であるアールローだから、このままやられてしまえば本国に帰国では無く死んでしまう。生き残つるこそがヘルマンにとっての勝利である。

全力を注いだ悪魔パンチは結果として受け止められていた。掬花の一撃を相殺された時点でアールローは掬花から手を離して、ヘルマンの来るであろう一撃に備えていたのだ。

「届きませんでしたか……本気だったんですが……」

「なかなかの一撃だったぞ……もろに入れられてたら危ない程にはな」

互いに笑うと、最後の呪文をアローニーロが唱える

「六芒の星と五芒の星よ、悪しき靈に封印を、封魔の壺」

（また、つまらない封印生活ですか……久々に強敵と戦えた事を考えても、割に合わない結果でしたな）

アローニーロの影から出ていた魔法の壺の中にヘルマンが封印されて、事件は終了したのだった。

S i d e o u t

悪魔 迎撃（後書き）

ヘルマン襲来終了。

麻帆良祭までアーロニーロが関わるイベント無いな……アーロニーロが消滅させたイベントもあつたな……そいえばもうすぐ開始して2カ月だな……時期も丁度良いから番外を書くか………

日常？ 会話と動き（前書き）

第50話

感想 吹風様、トウトウ様、まっきー様、藤様、七誌様、秋田
皓平27歳様

ありがとうございます！

日常？ 会話と動き

Side アーロニーロ

「アーロニーロさん！僕達を鍛えてください！！」

おそらく、俺は心底嫌そうな顔をしているだろう。餓鬼と一緒に居る小太郎とかいうハーフが非常に気まずそうな顔になっている。さつきまでは期待に胸を膨らませた少年の顔だったのにな。

「帰れ。お前は弟子入り試験に落ちただろう。それに魔法はクウネル、武術は古に鍛えてもらっているだろ」

「そうですけど……足りないんです！」

求めているのが大き過ぎると思うがな。前の悪魔襲撃なら、魔法使いとして役立たずのは当然だった。後方攻撃型の魔法使いは魔法が使えない状況なら一般人と変わらないから、餓鬼以上に経験のある魔法先生達も役立たずだったしな。タカミチなら勝てたかもしれないが、出張で居ないので役立たずだ。

「はつきり言おうか。お前はこの学園に何しに来てる？強くなる為に来てんのか？」

前々から思っていた事だ。たしか立派な魔法使いになる為の修行でこの学園に教師をしに来ている筈なのに、こいつとその周りは、強くなるうと、強くしようとしている。そんなに英雄を育てたいんだか……

「……………違います」

「だったら、すべき事をしろ」

とりあえず、帰ったか……………まったくもって、時間の無駄だったな。

「出てきたらどうだ？」

「やっぱり、気付かれてた力」

物影から超 鈴音が出てくる。

俺から隠れたかつたら、魔力を完全に遮断する物でもない駄目だろうな。

「まあ、とりあえず上げれ」

「おや？ネギ先生達と違って家に上がらせてもらえるの力」

そんなに以外か？俺が家に人を入れるが……………

「良い家だね」

「さて、世辞いいから本題を話すんだな。腹の探り合いなんてやつでも、時間の無駄だからな」

学園長が警戒している謎の天才が、なにも無しにここに来る訳が無いからな……………

「それじゃあ、お言葉に甘えて単刀直入に話すヨ。私はある計画を

するつもりネ、できれば協力してほしいヨ。悲劇を回避するために……」

悲劇か……くだらんな。

「もちろん、タダ働きをしるとは言わないヨ。それ相応の報酬の用意はあるネ」

「くだらん、悲劇の回避や報酬は二の次だ。協力して欲しいなら、まずは計画に関する話をしろ」

興味がでるか、自分にとって有益な結果に持って行けるかが問題だ。

「はつきり言わせてもらうヨ。いくら英雄でも、私は無条件で信用は置けない。ましてや、元賞金首にはネ……龍宮のように、完全にギブアンドテイクで動いてくれるか？そういう契約をしてからでないと、計画に関する話はできないヨ」

元賞金首か……それを指摘した奴はこいつが初めてだな。

「それでは、お帰り願おうか。互いに信頼できないのでは、これ以上話す事は無い」

「そうみただネ。出来れば、不干渉だけでも約束して欲しいネ」

「断る」

「……それじゃあ、諦めて帰るヨ。でも、計画は必ず成功させるヨ」

「どうなるうが、知った事では無い」

本当に、知った事では無い。気に入らない内容なら叩き潰し、どうでもいいなら傍観するだけだ。

Side out

Side 超

やはり、悲劇というキーワードを持ち出しても関心は無かったネ
……………
詳しく内容を話せば、対応は違ったモノになったかもしれないけど、これでいいネ。

これで動きの予測がしやすくなった。アローニーロが敵かもしれない相手にする行動は2つ、壊滅させる力、放置する力。今回は放置を出させるのに成功したヨ。少なくとも、今のアローニーロにとっては、私は調べはしても、今すぐに刈り取るうとする対象にはならないからはずネ。

でも、このまま、ただ挑めば負けるのは目に見えているヨ……………伸縮自在の刀、槍に変容して波濤を生み出す刀、切ったモノを倍の重さにする刀、完全催眠をかける刀、人外の身体能力、豊富な経験、卓越した魔法。人が届く領域に居ない存在……………一番良いのは戦わないう事力……………おそらく避けられないから、その選択は無いヨ。誰にもばれずに計画の成功は不可能に近い。その為の時間稼ぎの戦力だけど、アローニーロ相手にどれ程もつか……………京都に封印されていた両面宿儺を一刀両断をしたように、横に刀が振られただけでいつきに戦力を削られてしまうヨ。逆に言えば、アローニーロさえいなければ、可能性は見えてくる……………

やはり、時間強制跳躍弾で最初に御退場をしてもらうしか勝ち目

は無いネ。その次はエヴァンジェリン、なんにしても、計画は成
功させるヨ。そこに為だけに、来たのだから。

S i d e
o u t

日常？ 会話と動き（後書き）

正直悩んでる。茶々丸の扱いを……
学園祭で敵にするのか、味方にするのか……

日曜だったのに投稿が無かったのは、茶々丸の苦悩をサモナイ3の
クノンみたいな感じで書こうとしてて、失敗したからなんですけど
ね……

追記 7月15日修正

またもや文字数が減ることに……
てか、削るのとちよっとした追加してない。

日常？ 些細な事（前書き）

第51話

感想 吹風様、トウトウ様、藤様
いつもありがとうございます！

日常？ 些細な事

Side アーロ二ーロ

暇だな……別に不満がある訳では無い。ただ、なにか起きないか期待しているだけである。

超がなにか計画を練っているようだが、それをいつやるかは不明である。調べようと思えば調べられるが、そこまでする必要は感じない。わざわざ人の頭を覗いたり、別人になりすましてまで調べるのは面倒だしな……まあ、人間関係や過去の記録は調べたが……まさかの麻帆良以前の情報が無い不審人物だった訳だが。

そういえば、もうすぐ麻帆良祭だな……まさか、そこでなにかをやらかすのか？……まさかな……

「暇そうですね？もし良かったら、相談にのってくださいませんか？」

「クウネルか……」

写し身の義骸だな……それにしてもこいつが相談ねえ、怪しいな……まあ、暇だから相談にのるんだが……

「実は、ネギ君にナギの言葉をいつ伝えようか迷っているんですよ。あとなぜか、ネギ君は最近忙しいのか来てくれませんか……」

クウネルのとこに行かないのは「だつたら、すべき事をしろ」と言ったせいか？実際はそれが普通なんだが……英雄を育てたい奴等が修正するんだらうな……

「それは俺に相談するような事か？伝えたかつたら勝手に伝えればいいだろ」

なぜ俺に相談するか解らん。勝手にやって、勝手に終わってくれ。こっちに影響が無ければ特になにもしないのだから。

「いえ、そういう訳にいかないですよ。ナギはあなたが、もしも近くに居るようなら意見を聞いておけと言ってたんですよ。あなたは身内以外には公平ですし、強さは私達紅き翼全員が認めているものですから」

どうでも良い話だな……というか、どんだけ可能性の低い場合を想定していたんだ？馬鹿か？

「勝手にしろ、俺に関係の無い話だ」

「らしいと言えば、らしい返事ですね……あなたはナギにもう一度会いたいと思わないので？」

「思わん。大して思い出がある訳ではないし、興味も無い」

あいつが何をしようと、何をなしたかなんて関係が無い。俺等に関係も興味の無い出来事。

「で？他に話があるんじゃないのか？」

「もちろんありますよ。ネギ君が戦闘形態として魔法戦士を選択した場合に、あなたに助言とかして欲しんですよ。私はあなたの知っ
ての通り、完全に後衛型の魔法使いなので、魔法戦士に関する動き
とかは本に載ってる程度の知識しかないのです」

「良い手本を知っているだろ？」

動きが良過ぎて、手本にならんくらいの者をな。

「ナギの事を言ってるんですか？ナギの動きは、今のネギ君では無理ですよ。真似ができるのはあなたぐらいじゃないですか？……
あなたが鍛えてくれるのが、一番良いんですがね……絶対に首を縦
に振らないのですよ？」

「もちろん」

首を縦に振りながら言う。

「………大変なんですよ？ネギ君以外にも、学園長のお孫さんとか
も訓練してるんですからね？まあ、その分の報酬は本人達の知らな
いところで受け取っているんですが………」

「秘密基地の温泉でか？」

「………さて？なんの事ですか？」

魔力が乱れているぞ？クウネルよ………てか、やっぱり覗いたり、
自分好みの服を着せたりしてるなこいつは………俺には関係無いか
ら放置だが。

「安心しろ、例えそういう事があっても俺は知らんし、気付かない」

あくまで憶測だ。それだけで警察に突き出したりはしない。あいつ等は運が無かったただけだ、こんな変態を師事する事になったんだから……まあ、俺が鍛えればこいつとはあまり接点がなかったんだらうが……

「そうですね。あなたが知りようも無いし、気付きようも無い事柄でしたね……」

これって共犯扱いになるんだらうか？まあ、こいつが捕まる事は無いだらうから何も問題ないだろ。

「もう話す事もないから帰っていいか？」

暇は潰せたから良い時間だったとしようか。

「いいですよ。話したい事は話しましたし……そういえば、なんで秘密基地には傷が治る温泉があるんですか？」

正直にいうと元がそうだったからだが……

「温泉っていいだろ？」

良い笑顔で右手の親指を立てて言う。

「そうですね！」

クウネルも俺と同じように良い笑顔で右手の親指を立てて言う。多分、クウネルは邪な事を考えている……俺はそんなんじゃない。

もう随分と前の事になるが日本人だったのだ、純粹に温泉が好きなのだ。特にお世話にならなかったが、秘密基地の温泉は、これでもか！っと言う位に健康に良い温泉だったし、一度入れば何度も入りたくなるような気持ち良さもある。まあ、入る為にわざわざ秘密基地を使うのもなんだったから、今の家とかでも出るようにしたりしているが。

傍目からは心が通じ合っている状態の2人。実際にはまったく通じ合っていない2人なんだろうな……多分。

帰っても特にやる事はないんだが……洗濯物はまだ乾いて無い、昼飯はもう作ってある、晩飯は今日はエヴァが作るから俺が作る必要は無い。考えると主夫だよな……普段やってる事が。

まあ、父親だから当然か？一番歳喰ってるし……

S i d e o u t

日常？ 些細な事（後書き）

次からは麻帆良祭に入る予定。

どうもオリジナルの話が思い付かないんで…… オリジナリティがな
いんだよな……

麻帆良祭 開始(前書き)

第52話

感想 トウータワー様

ありがとうございます！

麻帆良祭 開始

Side アーロニーロ

麻帆良祭はかなり規模がでかい。学園都市全土で一斉に学園祭が行われるから当然だが、存在自体が非常識だから他の事も非常識なのが普通に思える。まあ、俺が気にすべき事でも、変えられる事でも無いからどうでもいいが。あと、消すだけなら結構簡単にできる。消すというより削るだが……御大層な鍵を作ろうとするだけで、材料としてごっそり世界から削り取られる……随分と軽いモンだよな土地だろうが魂魄だろうが……そんな事はしないがな。鍵を作っても開けるべき扉は無いだろうし、興味もない。

にしても退屈だ……見回りをしている訳だが、俺の視覚内で問題行動をする奴はもうほとんど居ない。

麻帆良祭で気が緩んで馬鹿をやらかす奴が居ると思ったんだが、ほとんど居ない。少なくとも俺の見える範囲には……退屈だ……それにさつきからうざい視線がずっと付きまといやがる。処分してくるかな……だが、そうすると起きるかもしれない祭りが潰れてしまつかもしれない。

「高音、お前が嫌いでもこしても問題無い奴は近くに居ないか？」

「アーロニーロさんでも、居たとしても教えられません！」

「……………私の嫌いな人はすぐそこに居ますけど」

「愛衣！」

「お姉様、冗談ですよ、冗談」

ちなみに見回りは俺、高音、佐倉 愛衣の3人でしている。夜の警備だと、ガンドルフィーニも加えて4人でやる事もある。まあ、夜の警備は基本は俺と操影術を使う奴の組み合わせが多いんだが。俺を手本にする気なのが露骨すぎるが少し気にくわないが、それはどうでもいいか。

高音は成長が著しい奴なんだがな。影の鎧を服を着たまま肌にぴったり展開する地味だが難しい事が出来るようになってるし、黒衣の夜想曲も使いこなしている。将来有望だな、戦闘面では……

正直言つて、世界樹の祝福というか呪いである告白したら成功率120%の阻止とかも見回りの意味が含まれているんだが、それならなにかしら理由をつけて効果範囲を完全に閉鎖すればわざわざ魔法生徒まで動員する必要は無いと思うんだがな。そうすれば魔法生徒でも麻帆良祭をのびのび楽しめるだろうに……

まったくもって、暇だな………すべき事が無いというのは。

Side out

Side エヴァンジェリン

………なんか、父様がすごく暇を持って余してる気がする………そんな訳は………あるな。今は見回りをしている時間だから、騒動がなければぼーと歩き回っているだけのようなものだからな………こっちもさほど忙しい訳でもないが………というか、どうしてお化け屋敷に決まってしまったのだらうか………元本職(?)のさよが冗談混じりに言っただけなのに、他に良い案が無かったせいでそれでいいかという事になったせいとか？まあ、私達は準備に貢献したから麻帆良祭中

はやることが無いんだが。

「で、いつもの4人組な訳だがどうする？バラけるか、去年、一昨年みたいにこのまま各自が予定していた時間までできとくに麻帆良祭を回るか？」

「私は予定は無いんですから、ずっと歩きまわるつもりですよ」

「私も予定は無いから一緒にいい」

「すみませんマスター。私は超とハカセに呼ばれているので、麻帆良祭中は完全に別行動させて貰います」

「別に謝る事ではない。元々予定があつたのなら、仕方の無い事だ」

そうなると3人で回るのか……やはり屋台巡りが順当か？全員始まる前に父様から十分な軍資金（お小遣い）を貰っている。

「屋台巡り以外に何か案はあるか？」

3人で回るんだからさよと千雨の意見を聞かないとな。私1人が楽しんで意味は無いしな。

「これに参加つてどうですか！」

笑顔でさよが差し出しているのは、まほら武道会予選？去年、一昨年父様が参加して魔力も気を使わずに純粋な身体能力と体術で簡単に優勝したやつじゃないか。

「優勝はぜってえ無理だろ。師匠が参加するんだろ？参加者が全員

憐れだな……………」

「しかも、開始時間は18時……………すぐに時間を潰すのには使えないな。それにお前等は……………普通に戦えるな」

さよは身体能力が普段は抑えているが凄まじく体術もある程度は使える、千雨は人間の域を出ている訳ではないが、十分に身体能力は高いし相手の動きを阻害する攻撃の仕方を心得ているから、2人は父様が参加してなければ十分優勝を狙える。私も魔法と氷輪丸が使えなくても一般人相手には十分すぎるくらいには戦える。やろうと思えば1〜4位を私達で独占できるか？

「それに、今回は賞金が跳ね上がっているんですよ！」

「あゝ確かに跳ね上がってんな……………あんなさびれた大会だったのにな」

「だとしても、父様に勝てる奴は出てこないだろうな」

刃物を禁止しようが、詠唱を禁止しようが、飛び道具を禁止にしても届かないだろう。勝てそうなのは神に準じるような存在くらいだ。勿論そんな存在がこんな大会に出るような事はしないだろうか。父様の勝ち揺ぎ無い。

それなのに、大会に一千万の優勝賞金を出すのだからなにか裏があるのか？

「で、参加するんですか？しないんですか？」

「私はパス。これで目立つと狙われそうな気がする」

「私は参加しよう。そして父様と表彰台に上る！」

「では3人ですね……」

3人？千雨は参加しないのか？一体誰が3人目だ？

「私が参加するのだ。エヴァンジェリンよ」

「ワカメ…大使……」

父様の作ったふざけた存在が、いつの間にかさよの隣に立っていた。いくらなんでも、こいつが普通に居るのは問題じゃないのか？着ぐるみで押し通すにも無理がありそうだし……

「心配は無用。周りを騙す為の用意はある」

そう言うと、どこからともなく腕輪を取り出し、それを装着する。効果は劇的だった……さつきまでは手足が生えたワカメだったのに、今は瘦躯で、肩にかかる程度の長さの黒髪をもつ白皙の中性的な容姿の男性に変貌している。差があり過ぎじゃないか……

「姿は変わっても、私は私だ。これまで通りにワカメ大使と呼ぶがいい」

ああ、残念過ぎるイケメンだな……もしかして、こいつを連れて歩かないといけないのか？

Side out

麻帆良祭 開始（後書き）

と言う訳で、まほら武道会にアーロニーロ、エヴァ、さよ、ワカメ大使が参加します。ワカメ大使の姿を変えるのは麻帆良祭中だけのつもりです。

番外 7月7日(前書き)

7月7日七夕ですね。

どうせだから、番外でその日のアーロニードとエヴァンジェリンのお祭りの話。

時間軸は30話と31話の間です。

番外 7月7日

Side 第三者

7月7日。日本で言えば七夕である。七夕と言えば短冊に願い事を書いて笹に飾る風習があるが、あくまで願掛けであり、御利益がしつかり(?)あるわけではない。

そもそも、七夕伝説では織姫(井上という苗字を連想してはいけない)と彦星は働き者であったが、結婚をしたらその夫婦生活が楽しくて、2人とも働かなくなったので、結婚を許した天帝は怒り、2人を天の川を隔てて引き離れたが、年に1度、7月7日だけ合つ事を許し、天の川にどこからかやってきたカササギが橋を架けてくれ会つ事ができるようにした。と、いう話であり、地域などで若干の差はあるものの、だいたいがこういうのである。

昔は神事として取り扱われたきたが、利益に貪欲だったり、商店街を賑わそうという商売人達によって7月最初のイベントとして取り扱われている。まあ、忘れ去られるよりはマシかもしれないが……お祭りが大好きな大半の日本人は、そんな事を一切気にせずにお祭りを楽しんでいるが……

「今年もやって来たな」

「そうだな」

七夕祭りには他とは一線を引いた親子がいた。

無論、アルルエリ親子である。格好は2人とも浴衣で、アローニーロは青で、染め抜きで待雪草まつゆきくさがあしらってある。エヴァンジェリンはアローニーロの浴衣の色の対になるように赤で、染め抜きで馬酔木アゼをあしらってある。どちらもエヴァンジェリンの手作りで、エヴァンジェリンの思いが反映されている品である。(待雪草は“希望”の意味であしらわれ、馬酔木は“清純な愛(あなたと二人で旅をしましょう)”の意味であしらわれている)

この親にこの子あり、そんな言葉を彷彿させるような容姿である。実際は、アローニーロがエヴァンジェリンに合わせているのだが……..
にこやかに親子で手を繋いで歩いているだけというのに、人の目を引いている。

その御蔭で、人混みの中だというのに少しだけ、周りとの空間に余裕がある。

Side out

Side エヴァンジェリン

父様とのデート。思えば、これで何回目だろうな……..。どれも麻帆良に来てからのものだが、何時でもこうして手を繋いで離さない…….別に離したい訳じゃない。ただ、手を離すときにどうしても離したくなくなるのだ。
怖いのだろう、恐れているのだろう、また繋げてもらえる保証がないから…….

そんな事を考えるのは止そうか、折角のデートなのだから。

「あつ、エヴァちゃん」

「……………」

明石親子か……明石教授は随分と気まずそうな顔をしているな。まっ、私達の事を知っているから当然か。自分の娘が、自分より年上の英雄に対してちん付けでフランクに接しているんだから。知らないのだからそれ位のことには目くじらは立てないんだがな

……………」

「裕奈、そつちもデートか？」

「うん、そつだよー、折角のお祭りだしね」

裕奈とは気が合うところがある、特に父が好きなところかな。

「そついえば、短冊にお願い書いて来たー？」

「特別なイベントでもあるのか？」

「あるんだよー、なんでも短冊にお願いを書いて、それを決められた笹に付けて選ばれると願いが叶うかも！？っていうのが。それに選ばれれば商品を贈られるから、みんなクジ引き感覚で参加してるし」

抽選会……みたいなもんだな……」

「そつか」

ただ願いを書くだけでいいなら、参加するのも悪くないな。

「ちなみに私は、お父さんと結婚できるようになりますように、って書いたよー」

らしいといえば、らしいな。

「では私は、一緒に永くいられるように、と書くか」

Side out

Side 第三者

気軽に参加できるイベントいう事で、参加するべく決められた笹の場所にアローニールとエヴァンジェリンは移動した。途中で色々なモノを見ながら。

「銀嶺弧雀でなくとも、あんな的に当てる事は簡単です！」

さよが弓をつかった的当てで、パーフェクトを出していたり

「計算は得意です。どこに当てればどう動くの予測は簡単です」

「流石ガイノイド……的確に当てている。こっちも負けられないね……」

なぜか、茶々丸と真名が射的で勝負をしていたり

「木乃香お嬢様に近づくと不審者は居ないか……」

「お前が不審者だろ」と、言われてもおかしくない刹那がいたり

「勝負アル！」

「にんにん」

なぜか、戦隊ものの悪役のお面をかぶった2人組に勝負を挑まれたり（アローロニーロがすぐに倒しました）

「あっちのほうから、小さい男の子の泣き声が……！」

「委員長、まさか………」

「待っていてください！今すぐに助けにいきますから！」

（やっぱり、そうなるのね………）

誰もが平常運行であった。

「平和、だな………」

「どいつもこいつも普段と変わらないだけのようだがな」

「普段と変わらない。そういうのが良いだろう」

そうしている内に、決められたの笹の前に着く。

短冊が笹が見えない程に付けられ、もはや短冊のおぼけのような有様である。

「凄いな……みんな気軽に参加しまくっているな………」

「どんな願いが書いてあるんだ？」

『小さな男の子と出会いがありますように 雪広 あやか』

エヴァンジェリンは無言でそれを破って捨てた。欲望ダダ漏れ、
というか欲望そのままであった。

「どれどれ……」

『なるべく長く平穏が続きますように 長谷川 千雨』

「………なんか、すまん………」

アーロニーロには申し訳なさから、その場に居ない相手に謝って
しまった。

謝っても、修行内容を改めるつもりは一切ないのだが………

「私達もお願いを書こうか………」

「そうだな………」

人のお願いを見て若干気分が下がったが、そのまま自分達の願
いを短冊に書いて笹に付けるのだった。

エヴァンジェリンは『父様と永くいれるように』アローニーロは『
幸せが永く続くように』と書いた。

ヒュ~~~~~パーン

「花火、か………」

様々な色の花火が花を夜空に咲かせるとすぐに消えてゆく。

中には星型や、ハート型のような変わった形の花を咲かせて消えてゆく物も混じっている。

「夏祭りらしいな」

「夏の風物詩になっているしな……」

そんな、夏祭りの一コマ。それが、アローニート口にとっては大切なモノ。

決して、繰り返せない1度しかない光景であった。

S i d e o u t

番外 7月7日（後書き）

Side 第三者

完全な蛇足になるが、選ばれた短冊は千雨の『なるべく長く平穩が続きますように』だった。送られた商品は七夕伝説にちなんだデザインがされた、織姫Ｔシャツと彦星Ｔシャツに洗剤などの生活必需品だった。

Side out

麻帆良祭 まほら武道会の開始（前書き）

第53話

感想 藤様、麻布十番様、まつきー様。トウートウー様、安藤様、七誌様

ありがとうございます！！

ワカメ大使の人氣に嫉妬しました……元が朽木白哉だからって人氣
ですぎだろ（笑）

麻帆良祭 まほら武道会の開始

Side 第三者

まほら武道会は麻帆良祭の伝統行事であった伝説の格闘大会。しかし、形骸化が進んでおり参加者も少なく、賞金がたった10万ということもあり、ただ続いているだけの武道会だった。そのさびれた大会を形骸化する前の状態に近付けたのが、超 鈴音である。完全に電子的措置により記録の映像化を防ぎ、複数の大会の合併と買収により賞金を一千万に引き上げた事により前年と比べるのが馬鹿らしい程に、参加者が増えて賑わっていた。お金の力は偉大なり。

現在はその予選が始まるうとしていた。

「このグループではお前以外にめぼしい選手は居ないようだな、高音」

「このグループの本戦出場は私とアローニークさんで決まりですね！」

Aグループ有力参加者 アローニーク・アルルエリ 高音・D・グッドマン

「なんか、凄そうな人ばっかね……」

「明日菜さん、凄そうじゃなくて凄い人も混じってますよ……タカミチとか、アローニークさんとか……」

Bグループ有力参加者 神楽坂明日菜 ネギ・スプリングフィールド

「おおっ！ー！今年は予選から戦いがいがありそうアル！」

「そつでござるな。しかし、拙者達の目的はアローニーロ殿との手合わせでござるー！」

Cグループ有力参加者 古菲 長瀬楓

「……………（こいつー！京都で俺を一撃で倒した女！）」

「どうした？嫌な事でも思い出しているのか？」

Dグループ有力参加者 犬上小太郎 エヴァンジェリン・A・K・M・アルルエリ

「……………よろしく（なんでロボットが武道会に参加しているんだ？）

「イエ、オ気ツカイ無ク」

Eグループ有力参加者 タカミチ・T・高畑 T・ANK・3
(愛称 田中さん)

「頑張りましょう！ワカメ大使！」

「この程度の有象無象相手に後れを取る事などありえぬ。だが、油断などせず^{うちたお}に全て打倒して見せよう」

Fグループ有力参加者 相沢さよ ワカメ大使

「え〜と、よろしくお願いします?」

「なんで疑問形なんだい?」

Gグループ有力参加者 佐倉愛衣 龍宮真名

「俺の烈空拳で予選突破したる!」

「そつやな、たっちゃん!山ちゃんもポチもみんなで予選突破すんぞ!」

「おお!」

「1グループ2人まで本戦出場なんだよな?俺達4人だから2人は予選落ちになるじゃないのか?」

「「「あつ!……………」」」

(このグループで強そうなのはあの4人だけか…………)

Hグループ有力参加者 中村達也 豪徳寺薫 大豪院ポチ 山下慶一 桜咲刹那

予選はバトルロワイヤルで行われ、最後まで立っていた2人までが本戦に出場ができるルールになっており、誰にでも可能性はある。可能性だけなら…………

Aグループ

『さあ！始まりました、まほら武道会予選！Aグループには去年の優勝者であるアローロニー口選手がいます！今年も優勝して3年連続の勝者になるんでしょうか！？』

朝倉和美のナレーションにより優勝最有力候補であるアローロニー口に視線と敵が集中する。無論それだけでアローロニー口が引くことも怖気づく訳もなく、堂々としている。

『広域指導員で金髪といつも白い服を着てる事だった二つ名、金白の男！今年も鍛えられたその技で勝ちあがるのか〜！！』

その言葉で麻帆良祭に来ていただけの参加者も、誰がアローロニー口かをすぐに断定する。金髪で白い服は1人しか居なかったから……

例え1つのグループが丸々敵になろうが、アローロニー口にとっては問題の無い数である。素手だろうが、魔法を使わ無かろうが、銅皮を持ち体術も優れているアローロニー口は全身が凶器になりうるのだ。殴られようが、蹴られようが体の内部にダメージを与える攻撃でなければ、恐れるに足りない。

「弱いな……」

「圧倒的ですわね……」

全滅させるのにさほど時間は掛からなかった……

Bグループ

「ハアッ！！」

『おおーとっ！！噂の子供先生、自分より大きい相手を吹っ飛ばしました！流石は古菲の弟子！子供だからと言って侮れない！』

「ちよつとネギ、吹っ飛ばすのはやり過ぎじゃないの？」

近くでハリセン（アーティーフアクトのハマノツルギ）で適当にシバキ倒している明日菜がネギを注意しながら次の獲物を捜している。

（…………明日菜さんの目の方が危ない気がするんですが…………）

Cグループ

「アイヤー！どいつもこいつも骨が無いアル！」

「賞金目的の参加者は、本戦に出れるに値しない奴ばかりでござるな」

2人とも危なげなく、敵を倒していつて本戦出場を勝ち取る。

何気なく楓は分身の術を使って普通の参加者を驚かせていたのは余談だろう。

Dグループ

「ハッハッハッハ！どいつもこいつも木刀（アローニークお手製のありえない強度を誇る一品）を使うまでもないな！弱すぎるぞ！」

「やっぱり、強いな……………」

「ありがとうございます!!」(エヴァンジェリンに蹴られた奴)

『カエルの子はカエル!アローロニーロ選手の娘のエヴァンジェリン選手は、素手でバツタバツタと敵をなぎ倒しています!』

なぜかハッスルしているエヴァンジェリンによりDグループもすくに決着がつく。

Eグループ

「居合い拳!」

『広域指導員でデスメガネの異名をもつタカミチ選手!なぜか彼の前に立っている選手は次々に倒れていく!』

「ロケットパンチ」

拳圧を飛ばすタカミチ、拳を直に飛ばす田中さん。結構おもしろいコンビなのかもしれない。

Fグループ

「一本背負い!」

「兄等^{けい}では、決して届かない。それだけだ……」

さよはなぜか柔道の技である一本背負いを綺麗に決め、ワカメ大使は邪魔になりそうな奴等を次々と気絶させていった。

Gグループ

「退避よし！やっちゃってください！」

「……なんの為に参加してるんだい？」

「え？お姉様が参加しているからですけど？」

結局真名が500円玉で愛衣以外を倒して、Gグループの戦いは終わった。

Hグループ

「残るは誰か決めねばならない！例え友達だろうと！」

「ああ！誰が勝ち残っても恨まない！正々堂々と戦って勝ち残るならー！」

「残りが少ない。決めようぜ、誰が進むか……」

「進めるのは2人だけか……」

男同士の熱血友情劇場が開かれていたが、戦いは非情である。

「ひゃくれつあつかざん
百烈桜華斬」

刹那の放った百烈桜華斬により、立ち位置的に攻撃が届かなかった山下慶一以外が倒されてしまう。

「みつ、みんな！おのれ……卑怯だぞ！」

「あ、いや、その……隙だらけというか、もう私とあなた達以外は残ってなかったの……」

Fグループはそうして戦いに決着がついた。

S i d e o u t

まはら武道会予定表

第1回戦

第1試合 ワカメ大使VS桜咲刹那

第2試合 ネギ・スプリングフィールドVSタカミチ・T・高畑

第3試合 相沢さよVS長瀬楓

第4試合 高音・D・グッドマンVST・ANK・3

第5試合 古菲VS龍宮真名

第6試合 山下慶一VSEヴァンジェリン・A・K・M・アルルエリ

第7試合 犬上小太郎VS佐倉愛衣

第8試合 アーロニーロ・アルルエリVS神楽坂明日菜

麻帆良祭 まほら武道会の開始（後書き）

今回予選で次から本戦。クウネルことアルビレオが参加しないのは必要が無いからですよ？感想で倒して欲しかった人！すみません。

麻帆良祭 まほら武道会 第1回戦 前半（前書き）

第54話

感想 White Seal様、藤様、匿名希望様、トウートウー様
ありがとうございます！！

匿名希望ってのせない方がいいんですかね？本気かネタ名か判らな
いんですよ……

麻帆良祭 まほら武道会 第1回戦 前半

Side 第三者

まほら武道会本戦第1回戦にして、第1試合はワカメ大使対桜咲刹那の試合である。

ワカメ大使は特別な腕輪で姿を人間にしており、剣道着で木刀を持っている。それに対する刹那はメイド服でデッキブラシを持っている。何しに来たと言われてもおかしくない格好に思える……………

ワカメ大使は普段の姿こそふざけているが、相当な実力者なのは間違い無しである。刹那は本当の姿こそは解っていないがワカメ大使の発する雰囲気と、その身のこなしから油断の出来ない相手と判断した。

『まほら武道会本戦、第1回戦、第1試合はワカメ大使選手と桜咲刹那選手です！』

(強い…………おそらく勝てる相手では無い…………だからこそ、この機会に戦えるを喜ぶべきかもな)

『どちらも獲物を持っていて強そうです！しかし！イケメンなのに、登録名がワカメ大使とはふざけているのか！凄く残念なイケメンだ！』

(誰かの為に強くなるうとして目か…………悪くはない)

『それでは！まほら武道会第1試合開始！』

試合開始の合図と同時に木刀とデッキブラシの鏝迫り合い(?)

になる。

（なるほど、この程度は反応できるか……）

（なんだこの木刀は！？気で強化されて無いのに気で強化したデッキブラシと平然と打ち合えるか！）

「一時も気を逸らすな。ただ、目の前の相手に集中しろ」

最初で最後の警告と同時に、ワカメ大使と刹那が鏝迫り合いを止めて距離を取る。すぐに距離を詰め、ワカメ大使の攻めが始まる。

振り下ろされる一撃、払うような一撃、斬り上げる一撃、一点を狙う突き、どれもが刹那にとっての危険な一撃であり、見惚れる程に研ぎ澄まされている達人の域の技。斬り返すこともできず、防ぐだけで限界である。

始めから刹那は解っていた、勝とうとするなら一撃で決めるしかない。実力差はさっきほどの防戦でよくわかった。自分が戦った相手で、ナギ・スプリングフィールドの姿をしたアローニー口並みに強く、研ぎ澄まされた太刀筋は到着点の一つであろう。羨ましい……刹那は純粹にそう思った。どれ程の時間を掛けてそこに行き着いたのだろうか？自分もその高みに立ち、このちゃんを守るようになるのだろうか？できればもっとあの太刀筋を見ていたい……もし、こちらが決めに行けば相手も決めに来るだろう。そう考え、刹那は勝ちを度外視して持久戦に持ち込もうとした。それに、ワカメ大使は応えた。

刹那では受け切れない一撃で……………

「その程度で私の太刀筋を見続けようは、驕りがすぎたな」

ワカメ大使は戦いを楽しむつもりも、赤の他人のために自分の技を見せるつもりは無い。

ワカメ大使は鍛える為と守る為に作られた。だから、守る強さを求める刹那に、似通った点をほんの少し見出しただけある。

そもそも、ワカメ大使がこのまほら武道会に参加しているのは妹のように感じているさよに、数日前に誘われたからである。しかし、いつもの姿での参加は無理がある為に、アローニーロに頼んで姿を変える腕輪を作って貰ったのだ。

S i d e o u t

S i d e アーローニーロ

魅せる試合をするきゼロだな……………まあ、戦う為じゃなくて、さよの為に参加してるからなワカメ大使は……………

シスコンで妹的存在（義骸的に）がさよだったからか、さよに甘いからな……………他にもさよの訓練相手にしまくったせいで情が移ったのかもしれんが……………

「お疲れ様です、簡単に勝ちましたね！」

「あの程度で手こずる訳がなかつ」

当然だな。義骸の能力的にはさよより低かったりするが、磨き上

げた技を持っているから刹那相手に負けるなんて論外、勝って当然だ。

「次はぼーやにタカミチか……普通なら勝つのはタカミチだが……」

既にリングには餓鬼とタカミチが揃って戦い始めている。タカミチの奴は勝つ気が無いな……丁度良い機会だから餓鬼の成長具合を見る気だな。

「勝つ気の無い奴に負ける程に、餓鬼は弱くないだろ」

強くなっているな。才能は原石としては最高級で、磨く師匠は世界屈指の魔法使いと言えるであろうアルビレオだから成長しているのは当然だが……やはり後衛型と前衛型での違いでうまく教えを生かせてないように見える。

ん？タカミチが棄権して餓鬼の勝ちになったか……

「次は私の番ですね……」

さよが静かに闘志を燃やしているな……念のために釘をさしておくか。

「張り切りすぎて、力加減を間違えるなよ？殺しかねないからな」

「……わかってます」

大丈夫なのだろうか……少し心配になってきたな……

Side out

『さあ！第三試合が始まります！まずは相沢さよ選手、予選では綺麗に一本背負いを決めていました！それに対するは長瀬楓選手、予選では分身の術で皆の度肝を抜いていました！』

「分身の術とハッキリと言わないでほしいでござる……」

できれば忍者に繋がるような事を大勢が見ている場所で、言わないでほしいでござるよ……

「あれが分身の術じゃなかったら、なんなんですか？」

……そんな真剣な顔をして小声で聞いても教えないでござるよ？これは秘密でござるから。

「さて、さよ殿はアローニー口殿の関係者なのでござるっ」

中学入学当時からエヴァ殿と仲良く、アルルエリ家にお世話になっていると人伝で聞いてあるからほぼ間違いないでござるが、確認は必要。

「そうですね。手加減はいりませんから、最初から全力で来てくださーい」

随分と自信があるようでござるな？なら、最初から本気で行くでござる。

『さあ！第3試合開始！！』

「！ーッ」

「楓忍法！ー四つ身分身 朧十字！ー！ー」

開始の合図と共に分身を4体でさよ殿を囲むように展開し、四方から攻撃したでござるが……

「見えています」

二つは手で受け止められ、もう二つは避けられたでござるか……
凄い反応速度でござるよ……

「では、次はこっちの番ですね」

良い笑顔で言うと、同時に掴んでた手を一気に引き寄せ、分身を一撃で破壊したでござるよ。

拙者の見間違いで無ければ、腕が回転してたでござるよ。さよ殿は改造人間だったのでござるか……

このままむざむざやられるのは甲賀中忍の名折れ。それに、これに勝てないとアローロー口殿と手合わせができないでござるからな……

しかし、正直厳しいでござるな。さよ殿とはどうも身体能力から差がついているようでござるし、戦い慣れしているようでござるから経験でも勝てそうでないでござるよ。忍具が使えればもう少しやりようがあったんでござるが……無い物ねだりは無駄でござるな。

「止まっていれば、的ですよ！ー」

「いやいや、拙者は止まっていないでござるよ……」

さっきから考え事はしてるでござるが、動きは一切止めてないでござるよ？それでも、さよ殿には止まっているように見えているよ
うでござる……

改造人間恐るべし……で、ござるな。こちらから分身と一緒に攻撃
したでござるが、分身は返り討ちにされてしまって全滅。

……むう……修行が足りなかったようでござるな。

「待った！でござる」

「へ？」

「拙者の負けでござるから、棄権をするでござる」

「ここで無理したら骨折しかねないでござるし、退くことも戦略の
一つでござるよ。」

Side out

Side 高音

遂に来ましたわ、私の出番が！

対戦相手 T・ANK・3 というロボット……なぜ参加しているか
疑問が尽きませんが！踏み台になって貰いますわ！

愛衣も、アローニーロさんも見ている前で勝たせて貰います！

「ロケットパンチ」

それは知っています。弱点は真っ直ぐ飛ぶ事と、飛ばすのが腕だ
から最高で2発までしか連射出来ず、再装填にタイムラグがある事。

麻帆良祭 まほら武道会 第1回戦 前半（後書き）

どうも戦闘シーンがうまく思い浮かばない……
こんなんでいいんでしょうか？

麻帆良祭 まほら武道会 第1回戦 後半(前書き)

第55話

感想 まつき様、開け！ごまドレ様、トウートウー様、藤様
ありがとうございます！！

麻帆良祭 まほら武道会 第1回戦 後半

Side 古

相手は真名アルか……正直に言って勝てるか判らない相手……幸いにも真名の得意な銃はルールで使えないが、予選では500円玉で参加者に撃ち込んでいたアル……距離を詰められ無ければ負けは確実。真名もそれを解っているから簡単には行かないアル。対抗策は自体はある。あまり気乗りしない方法アル。でも、そうでもないかと怪我無しで真名に勝てる気はしないアル……真名は私と違って命懸けの戦いに身を置いていた戦士。私はどこまで行っても武術の修行の域を出ない場所に居た。戦士と格闘家、実際に戦えばどっちの方が有利かわかっているアル。戦士なら格闘家と違って勝つ為の手段は最善を尽くす。だから、今回は格闘家では無く戦士として戦うアル。

試合開始と共に真名との距離をジグザグに動きながら詰める。それに対して行われるのは500円玉による迎撃と私との距離の維持予想通りアル。自分に当たりそうな500円玉だけを布槍術で進路をずらす。

「なるほど、玉切れ狙いか……らしくないんじゃないのかい？」

「らしくない……真名の言う通りアル。でも、後の事を考えるなら最善アル」

やっぱり玉切れ狙いは真名には簡単にはばれてしまったアル。隠すつもりは無かったが、できればもっと玉を使った後ではれた方がよかったアル……500円玉が無くなれば形勢はこっちに傾く、問題

はどれ程の時間で玉切れに出来るかアル。

それと、真名には悪いけど、私はアローニーロしか見ていないアル。私を知る中で一番強くて、一番相手にしてくれない存在。数少ない手合わせの機会を掴む為に、勝たせてもらうアル！……………本当に、らしくないアル……………

Side out

Side 真名

厄介だね。500円玉を撃てば古の狙い通りにどんどん消耗していく、撃たなければ簡単に距離を詰められて中国拳法の餌食になる。中途半端に撃っては古を止められない……………

依頼を考えればこの方が良いんだろうが、私を見ていないで戦っているのは少し癪に障るね……………だけど、布の方が消耗は激しかったようだね。もうボロボロになって使い物にならない……………

「代わりは用意して持ってきているアル」

用意のいい事で……………やれやれ、本気なんだろうね……………根比べは好きじゃないんだけどね……………

さて、この演劇をどこで終わらせるかが問題か……………綱渡りに近いから、どちらかのミスで勝敗は決まる。

……………やはり、こっちの玉切れが一番自然に見えるかね？

玉切れをして古に強力な一撃を入れられて私の負け。

……………いくらまほネットでどんな怪我でも治せる補肉剤を取り寄せてあるからといって、モロに受けるもんじゃ無かったね……………

S i d e o u t

S i d e アーロニーロ

予定調和だろうか？学園側のタカミチが棄権でこの大会から離れ、超側と思える真名もこの大会から離れる。

何かがあるのだろうか？学園長からは超の動きに注意するようにとしか言われてない。精々なにかするかもしれないという程度の認識である。大抵の事には対応できる自信はある。できなければ逃げるだけだが……

まあ、いい。今には関係の無い話だ。

この後はエヴァの試合だが、相手が弱すぎる。予選は運で残ったが、本戦ではそれは無いからここで退場は確定事項。その次は小太郎と愛衣か……小太郎が勝つか？愛衣はそもそも戦闘に向いて無いからな。それで次は俺と明日菜か……考えるまでも無いな。例えば咸卦法を使いこなせても明日菜では勝てん。

S i d e o u t

S i d e 第三者

第6試合、第7試合はアーロニーロの予想通りの結果だった。

予想外と言えるのは、エヴァンジェリンがただ勝つのではつまらない。と、いう事で、キャメルクラッチ（うつ伏せ状態になった対戦相手の背中に乗り、首から顎を掴んで相手が海老反り状になるようにするプロレスの技）を決めて、相手にギブアップさせた事と、第7試合で小太郎が女を殴らないという信条のために、殴らずに愛衣

を倒した事ぐらいであろう。

『さあ！第1回戦最後の試合です！まずは去年、一昨年のまほら武道会の優勝者で、今年で3連覇の掛かって最有力優勝候補のアーロニーロ・アルエリ選手だー！！予選では向かってくる参加者を全て1人で倒した強者！！それに対するは、神楽坂明日菜選手！予選ではハリセンで他の参加者をしばき倒していたが、それがアーロニーロ選手に通用するのか！！それでは！試合開始！！！！』

「ハアアツ！！」

明日菜のハリセンによる一撃。アーロニーロは真正面からのそれを素手で受け止める。

いくら魔法完全無力能力を持っていようが、相手が魔法を使わなければ無意味な能力である。魔法を使って無い今のアーロニーロにとっては普通のハリセンと変わりがない。

（一対一で対峙していると、実験で咸卦法を会得させたのを思い出すな……）

元より勝ち目など明日菜には無い。アーティファクトは不完全で、咸卦法は不完全ながらも無意識に使っているが、それでもアーロニーロの身体能力に並ぶ事さえできていない。

「ちょっと！少しは真面目に戦いなさいよ！」

「真面目に？それではすぐに終わってしまって、観客がつまらんだろ？」

最初の一撃以降アローニーロは、のらりくらりとハリセンを避けるだけで明日菜に1度も攻撃を仕掛けていない。命を賭ける訳でも、相手が強い訳でもないこの戦いはアローニーロにとっては遊びも同然。勝つて当然で見世物なら、自分がどう楽しむか、観客をどう楽しませるかである。別にそこまでサービスする訳ではないが……

「そつだな……これなんかどうだ？」

まるで何かを勧めるかのような口調だが、そんなモノでは無い。言葉を言い終わると同時に、明日菜の足元から何かが破裂したような音が出る。

「え？なに……」

明らかかな怪奇現象に明日菜はアローニーロとの距離を開けるが、なおも破裂音は明日菜の足元から聞こえる。

アローニーロの手はポケットに入られている。そう、アローニーロはリングが壊れない程度の威力の居合い拳を明日菜の足元に放ち続けているのだ。攻撃というより、嫌がらせである。

「……え〜い!!! なにか解らないけど、あんたの仕業ね! 不気味だから止めなさい!!!」

「断る」

明日菜はなおも続く破裂音を気にしながらであるが、元凶であるアローニーロに突撃する。

考えなしの突撃がアローニーロに届く訳もないが、アローニーロはここで少しふざけた。いままで足元しか狙ってなかった居合い拳を足首に中てて、明日菜を転倒させたが、リングから落ちなかったか

ら追撃で明日菜をリング外の水の中に蹴落とした。さらに、水から顔を出した明日菜の額にデコピン程度の威力の居合い拳を放ち続けた。

地味に痛いのと、馬鹿にされているとわかった明日菜はキレたが、それと同時に場外のカウントが数え切られたので明日菜の負けである。明日菜はいつかアローニー口を殴ってやるうと決心した。

S i d e o u t

麻帆良祭 まほら武道会 第1回戦 後半（後書き）

今回はおふざけ状態のアーロニーロでした。

あんな事されたら、殴ってやるうっておもいますよね？

麻帆良祭 まほら武道会 第2回戦(前書き)

第56話

感想 グラーム様

ありがとうございます…!!

今回、難産だったな……

麻帆良祭 まほら武道会 第2回戦

Side ワカメ大使

1回戦は終わり、次は2回戦か……相手はまたしても子供、しかも先程の相手より幼い。普通だったらまだ学校に通っているような子供だ。子供だからと言って手加減をするつもりなどは無い。前に立ちほだかるなら、倒すのみ……

「兄^{けい}は強いが、年齢を鑑みればの話であって、兄^{けい}の実力と私との間には天地ほどの隔りがある。時として退く事も重要だ、怪我をする前に棄権をしろ」

だが、無意味に怪我をさせるのは私の望む事でも無い。

「だとしても！諦めるつもりはありません！小太郎君と決勝で会おうと約束したんです！！」

約束か……守るべきモノだな……だが、その約束を守るのには不可能だ。どちらにも2回戦では自分以上の強者と戦うゆえに、2回戦敗退は既に決まっているも同然。

それに、私はこんな子供に負ける失態は犯さない。

「もう一度言う、怪我をする前に棄権をしろ。でなければ、軽い怪我では済まない」

「何度言われても棄権なんてしません！僕は勝ちます！」

どこからそんな根拠の無い自信が出てくるか理解できんな……

「勝てる、その考え自体が私への侮辱であり、兄の驕りだ。兄程度の実力で勝てるなら、私は此処には立っていない」

「勝ってみせます！」

「そうか……ならば戦うまでだ」

所詮は子供だ、怪我をすれば棄権をするだろう。

Side out

Side 第三者

ワカメ大使とネギの試合は戦いとは言えるモノではなかった。ネギが向かって行き、ワカメ大使は顔色一つ変えずに木刀で打ち払う。それを何度も繰り返し返してネギは大きな怪我こそ無いものの、長く続く一方的な状態は見えていられないものである。

ネギは諦めない。愚直にも思える想いで身体能力強化の魔法だけでワカメ大使に勝てない戦いを挑み、まだ立って向かっていく。ただただ小太郎との約束を守るためだけに……

「ネギ！もう止める！」

見かねた小太郎がネギに止めるように言うが、ネギは止まらない。初めての同等の友達との約束を守る為に、ネギには初めから諦めるつもりは無い。

「今の貴様のような状態を『無駄』と言うのだ」

冷淡にワカメ大使はネギを木刀で打ち倒す。それで決着がついた。いままで打ち込まて蓄積したダメージが限界を突破し、ネギは眠るように気絶する。

ソレを一瞥すると、ワカメ大使は静かにリングを後にする。

「なぜあのような事をやらした、アールローロよ」

「あれは父様の指示だったのか？なんでまたそんな事を？」

「意味など無い。強いて言えば、餓鬼の根性を見る意味があったか？高評価だったな」

アールローロは天挺空羅で試合が始まった直後にワカメ大使に1つの命令を出していた。「もういいと伝えるまで決めるな」ワカメ大使は命令に従い、試合をわざと長引かせていたのだ。

「理解できかねるな……」

「別に理解する必要性は無い。気まぐれだ」

(気まぐれでドラゴンの群れを狩った事があつたな……)

アールローロはケラケラと笑うと、エヴァンジェリンとワカメ大使と、始まるさよの試合を観戦する。

勝敗など見なくても確信しているが、過程を見るべく静かになにもせず。

「ハッ!!」

「クウ!!」

これまでの試合を思い返すと些か迫力に欠けるところがあるが、武道会＝殴り合いと考える一般人からすれば、最も武道会らしいと言える試合である。打撃の瞬間などにさよの腕が回転して無ければもっと普通だったのだが……

純粋な格闘戦……一般人からすればだが……さよは気で腕と服を強化して、さらに攻守で腕を回転させて威力を上げたり、攻撃を逸らしたりしている。それに対する高音は服の下に影の鎧を展開しており、打撃の際には魔法力をさらに纏って威力の底上げをしていた。

対等に思えるが、そうでは無い。徐々に高音が押され始めていた。影の鎧は肌にピッタリと纏えば7倍の防御力を誇るが、衝撃は完全に消せずにダメージとして高音に蓄積してきている。さよにもダメージは蓄積しているが、高音程では無いし、限界値も高音より高い。

どちらも顔だけは絶対に狙わずに繰り返されていた応酬は終わりは迎えた。高音の負けで。

『おお〜と!!高音選手ダウン!カウントを始めます!』

「やはり、勝てませんでしたわ……」

負けるというのにその表情は晴れやかである。彼女としても、悔いの残らない試合だったのだ。

「結構強かったですよ」

「当たり前ですわ、特訓には妥協なんてしてませんから。ですが、秘匿しながらの戦いではこの程度ですわ。尤も、アローニー口さんの関係者で無ければ私が勝っていましたわ！」

「あはは……」

数え上げられるカウント聞きながらさよは苦笑し、自信満々に言い放った高音をカウントを数え終わると肩を貸して一緒に観客の拍手喝采を聞きながらリングを後にする。

「次は私達アル」

「さよの奴は随分と観客受けの良い試合をしたな」

「私達もするアル？」

「ハッ、見世物だが、わざわざそう考えて戦おうとは思って無い。そうだろ？」

「確かにそうアル。私は最善を尽くすアル」

「……前の試合もそうだったが、らしく無いな」

「それは自分でも思うアル。後この一回で挑戦権が手に入るからそれまでアル」

古の目的はただ一つ、アローニー口との手合わせのみ。だが、目の前の壁はとても高い。それはそれで古の心を奮起させるのだが……

リングに立てば2人とも集中し、ピンツと張り詰めた空気が漂う。会場の観客もその空気に触れると、自然とさつきまでの拍手喝采をしていたのが嘘のように静まり返って、緊張感が会場全体を包み込む。

観客のほとんどが、瞬きも躊躇うほどにリングの2人を注視する。おそらく先ほどの試合と違って、短期決戦になると、空気で察したのだろう。

沈黙の中、試合開始の合図が発せられる。

まず、古の布槍術により槍と化した布がエヴァンジェリンを襲うが、木刀によって防がれ近付こうと前進する。だが、防がれる前に布から手を離して、新しい布を取り出してエヴァンジェリンとの距離を維持しつつまたもや布槍術でエヴァンジェリンを襲う。それと同時に、古は今度は先程とは逆に自分から踏み込み一息でエヴァンジェリンの懐に入り、必殺になりうる一撃を叩き込んだ。

エヴァンジェリンは吹き飛んだが、ダメージはほとんど無く、リングから落ちる前に体制を整えて再び古と向き合う。古の攻撃は失敗したのだ。エヴァンジェリンは叩き込まれる前に、手首を掴んで拳から伝わるはずだった衝撃を関節などを経由することで軽減しつつ、まだ残っていた衝撃を吹き飛ばされたことでさらに軽減してほとんどの衝撃を殺したのだ。ほとんどのダメージが無いエヴァンジェリンと違い、古は深刻なダメージを負っていた。作用反作用の法則（簡単に言うと、モノを押しした際に自分にも押したのと同じ力がかかる）によりエヴァンジェリンと同じ分の衝撃が掴まれた手首に集中して掛かったのだ。

自分が与えるはずだったダメージが返って来たようなものだ。そ

の一撃で決めるつもりだったので、掴まれた古の右手首は赤くはれ上がっていて痛々しい、最低でもこの試合では使えないだろう。壊れてもいいと思って使えば別だろうが……

古の負けは確定したと言っても過言ではない。だが、そうなった事で古は吹っ切れた。

元々勝つ為だけに挑んでた試合だったが、負けは決まっているなら、自分らしく戦おうと……

S i d e o u t

S i d e 古

やっぱりこういう考えで戦った方が私らしいアル。勝ち負けに拘らずに、全力で強敵に挑む。思えば自分の基礎みたいなものアル。

「顔が変わったな！そっちの方がらしいぞ！」

こつちに合わせて右手を使わずに向かってくる。律義アルね……
それでも、あまり長くは続かないアル……

何度か攻撃を逸らせていけど、胸のあたりを強打されて倒れる。
ああ、負けたアル……後で真名に謝りに行かなきゃならないアル。
向かい合わずに戦って、ごめんなさいって……

S i d e o u t

S i d e アーロニーロ

ふむ、エヴァが勝つのは当然だが、古はかなり頑張ったな。相手

が高音とかだつたら勝てたかもな。さて、次は俺の番だな。

「それでは始めるか？小太郎」

「ふん……」

愛想の無い子供だな……そこまで嫌われる事をした覚えは無いんだが……まあいい。長引かせる意味は無いから速攻で終わらせるか。

「犬上流・狼牙「遅い」があ……」

打撃を鳩尾に打ち込む。無力化するならそれだけで事足りる。

……… 思えば、残ってる参加者全員俺関係だな……… いいのか？これ………？

Side out

麻帆良祭 まほら武道会 第2回戦（後書き）

ワカメ大使がかっこよく無い？アーロニーロの出番が少ない？小太郎の扱いが悪い？
すいません……

麻帆良祭 まほら武道会 準決勝戦（前書き）

第57話

感想 藤様

ありがとうございます！

麻帆良祭 まほら武道会 準決勝戦

Side 第三者

まほら武道会は準決勝になり、残っている参加者はみなアーク二口の関係者だという大会としては少しどうかと思うような状態になっている。その裏で地味に行動してるが1人だけ居た、千雨である。

「たくつ、なにが治しといてやれ、だ。補肉剤でも渡せばそれで終わりだろ」

伝令神機によって伝えられたアーク二口からの命令で仕方が無く、大会の負傷者の怪我を治しに行くところである。千雨からすれば全員軽傷だから、わざわざ盾舜六花の双天帰盾を使う程ではないと思ってるが、師匠命令なのでできない訳にはいかない。

「おーい、全員生きてるかー？」

大会での負傷者が集められている部屋に入っただけの第一声がそれである。

「あんだ、それは冗談でもどうかと思わよ」

ネギが寝ているベッドの傍らに座っている明日菜が千雨にツッコミを入れるが、千雨はそれをスルーして確認する。

「一般人は居ないよな？」

「……居ないわよ。エヴァに1回戦でやられた奴は怪我なんてしてないから、すぐに会場の観客席に行ったみたいだし。ここに居るのはネギに、刹那に、高音さんに、小太郎に、くーふえに私ね」

「あれ、龍宮は？深刻じゃねえだろうけど、休んでないと駄目だろ？」

「そうアル。なのに、真名は居ないアル」

「知らないわよ……私がここに来た時にはもう居なかったわよ」

「まあいいか。居る奴だけ治せば……」

「それでしたら、私から治してくれませんか？全身が痛くて眠れやしないので……」

高音が首だけを動かして言う。影の鎧で全身に衝撃を分散させて受けていたから、全身打撲と検査で判定されおり、ベッドで安静にしていたのだ。

「わかった。怪我を治すだけなら、すぐに終わるからすぐに眠れるようになるぜ、先輩。双天帰盾、私は拒絶する」

高音が盾に囲まれると同時に、高音への事象の拒絶が始まって瞬間に怪我をする前の状態になる。

「凄い……魔法ってなんでもできるのね……」

「それで骨折も治せるアルか？私の右手首は最低でも、ヒビは入ってるぽいアル……」

「そんならい簡単だ。あと、これは魔法じゃないらしいぞ?」

軽く負傷者の怪我を治していったが、1人だけ微妙なのがいた。

「……グウウウ……」

「…痛いなら、治してやるけど……」

「こんくらいはほつといても、勝手になおおおお!!!」

小太郎が大丈夫だと思わせるポーズをしようとすると同時に、ア
ーロニーロにやられた鳩尾に激痛がはしり、ベッドの上で身悶える。

「強がんな、無理すんな。師匠の打撃は痕は残らないけど、ダメー
ジは長い間残る……」

しみじみと、なにかを思い出している千雨は、それ以上なにも言
わずに小太郎を治す。ちなみに治すのに一番時間がかかったのは小
太郎であった。

場面は変わり、まほら武道会会場でのリングの上では、ワカメ大
使とさよが戦っている。

ワカメ大使が斬り込めば、さよは半歩ずらすだけで紙一重で回避し、
腕を回転させてワカメ大使に殴り掛かる。さよの攻撃も、半歩ずら
すことで避けら、そこからワカメ大使が斬り返す。中りそつで中ら
ない、そんな攻防が静かに繰り返されていた。どちらの攻撃も中ら
ず、まるで調和された舞のように見える。いままで何度も手合わせ

で互いの手の内を知り尽くしている事と、出せる力に制限をかけられているから起こっている現象である。

本来なら一般人に見えない戦闘が繰り広げられそうだったが、アローニークの「ヤ　チャ視点になるのはマズイだろ？」ということ、一般人でもなんとか見える速さで戦わされているのだ。2人も熱が入ると全力で戦いかねないから、制限をかけられたのだが……

それが制限時間まで続くと思われたが、急にさよがペタリと座り込んでしまう。

「あはは、体力と集中力が切れちゃいました……もう戦えないので、棄権します」

力無く笑うと、ワカメ大使の手を借りながらリングを後にする。これで決勝に駒を進めたのはワカメ大使。

Side out

Side アローニーク

「思い出すと、俺だけが素手で手合わせするのは初めてだな？」

「そういえばそうだな……いつもほぼ対等の条件で戦ってたからな……」

基本的に持っているのや使うモノは同じにしての手合わせを中心にしてやったから、自分に有利な状態での特訓はあまりやらなかった。まあ、世の中には素手の方が強い奴もいるから、自分だけが武器を持っているのは有利な状況とは言えんだろうがな。

そう思っていると、エヴァが木刀で鳩尾を狙った突きが来る。それを裏拳で木刀の腹にあたる部分を打ちすえて軌道を逸らし、そのまま進んでくるエヴァの右手を左手で掴む。視線が合い……

ファンタズミックゴリア
「幻想空間」

引きずり込まれる。景色が一気に変わり、エヴァが持っている別荘と同じになる。

「どうせ戦うのなら、お互いに全力を出した方がすっきりするだろ？父様」

「確かにな……」

わざわざ試合中にやる事ではないが、良い機会だろう。制限した状態ではつまらん試合だったからな。

「卍解！大紅蓮氷輪丸！」

「卍解、神殺鎗」

互いに卍解し、構える。相手は贗作であっても、氷雪系最強は伊達では無い。あらゆるモノを氷結させたり、氷を操るのが普通だ。それに比べてこちらは、マツハ500で13？まで伸縮自在という単純な能力しかない。単純ゆえに、強力でもあるんだがな。

「フ……」

エヴァが笑うと同時に空が雲で覆われる。

「おいおい、最初から全力だな！」

氷輪丸の基礎能力にして、最も強大な能力『天相從臨』てんそうじゆつりん 天候すら支配する一人持ってはいけないような力。それを使って来る攻撃はおそらく……

「氷天百華葬！！吹雪！」

大紅蓮氷輪丸で作られた雪が本物の吹雪のように迫りくる。触れれば一瞬で花のように凍りつく。それがほぼ全方向からくるのだから回避は不可能。まあ、触れさえしなければ威力は激減して、大した脅威ではない。

「縛道の七十三 倒山晶」

自分を囲むだけの狭いのを展開して雪は倒山晶で全てを受ける。氷天百華葬の弱点は直接の攻撃では無い事だ。触れれば凍るのは大したことだが、自身が凍らなければ恐れる程では無い。凍っても内側に影響が無ければ、氷漬けになっても氷を砕いて出る事は可能だしな。

「射殺せ」

実際には殺す気は無いが、こう言った方が雰囲気が出る。倒山晶と氷の壁を貫通して神殺鎗の刃先がエヴァの体に深々と突き刺さるが、手応えが違う。見えていたエヴァが砕け散り、それに合わせて氷天百華葬でできた氷も砕ける。氷残人形か……次は

「後方からの直接の斬撃」

「なっ!？」

振り向かずに後ろから迫って来ていたエヴァに神殺鎗を向け、伸ばして振る。手応えはあったが、氷だけだな……

「まるで後ろにも目が付いてるみたいだな……」

「まさか、ただの予測にすぎん。俺が教えた戦い方を実践してくれているからな」

殺し合いたたかいでは正々堂々戦うな、自分より強い奴と殺し合うたたかうなら後ろからでも確実に殺せ、それが出来ないなら最初から殺し合うたたかうな。逃げる事だけに集中しろ。そう教えた。

「人の視界は体の前方しか見えん。なら、おのずと何所から来るか予測はできる」

これは殺し合いではないから、遠距離攻撃してくるかもしれないが、予測通りだった。

「それでは、普通に斬り合おうか？」

そう言っつて、エヴァに斬りかかる。間合いは変化自由の神殺鎗の前では、どの様な読みも簡単に覆される。太刀筋の延長上に体があれば斬る事は簡単だ、ただ刀身を伸縮させて相手の防御を避け、再び伸縮させれば良いだけだ。それゆえに、神殺鎗と斬り合う際には刀身を絶対に向けさせない事と、打ち合う時にはなるべく神殺鎗の鐔に近いところを狙う。最短の長さは脇差し位と決まっているからな。一合二合と次々に回数を重ねていき、すでに数十回は打ち合った
だろか？

エヴァも俺も退く気は無いが、幻想空間に長く居過ぎると現実の方が不動になっているから不自然すぎるので、こちら辺でけりを付ける。

「水天逆巻け、掬花」

掬花を出して始解して槍の状態でエヴァの腹を貫く。エヴァの意識は完全に神殺鎗に集中していたので、不意打ちは成功した。

「私の負けか……父様強いな……」

「判りにくいだろうが、エヴァも強くなっている。気を落とすなよ？」

掬花を引き抜き、抱きしめる。血が付くとかは気にしない。

「うん……」

顔を胸にうずくめてくるから、そのまま頭を撫でる。

「それじゃあ、戻るか」

そうして決着はついた。まだワカメ大使が残っているのか………決勝が棄権じゃ様にならないからしっかり戦わなきゃいけないだよな………

Side out

麻帆良祭 まほら武道会 準決勝戦（後書き）

次回でまほら武道会は終了。

麻帆良祭 まほら武道会 決勝戦（前書き）

第58話

麻帆良祭 まほら武道会 決勝戦

Side 第三者

アローニーロとエヴァンジェリンが現実に戻って来たら既に3分も経過していたので、明らかに不自然だったが、試合を再開して適当なところでアローニーロの勝ちになった。幻想空間で決着はついていたので、アローニーロとエヴァンジェリンは共にあまりやる気が無かったが……

「さあ！いよいよ決勝戦！優勝を手にするのは、3年連続制覇が懸かっているアローニーロ選手か！それとも、今回初参加にして決勝まで勝ち残ったワカメ大使選手か！それでは！試合かい」バキインッ！」「……」

少々フライング気味だが、アローニーロとワカメ大使が衝突した。素手のアローニーロと小太刀の長さの木刀を両手に握っているワカメ大使は常人に見えるギリギリの速さで一進一退を繰り返す。

ワカメ大使が右手の小太刀の木刀を振れば、アローニーロはそれを左手ではじく。アローニーロが右ストレートを打ち込もうすれば、ワカメ大使はそれを避けて斬り込む。

現在ワカメ大使が小太刀の木刀を使っているのは、普通の長さなものでは無いのはアローニーロは素手で試合に挑むので、拳の距離を詰められれば、不利になるゆえの選択であった。

手数、出せる力はほぼ同じ。間合いは僅かにワカメ大使の方が広いが、その程度では勝ち手繰り寄せられない。それに、経験で言えば、圧倒的にアローニーロに分が傾いている。

だが、それでワカメ大使が諦めたり、すぐに負けるなどという事も絶対に起きない。アールニー口の最高傑作（ネタ的意味合い）であるワカメ大使は、その程度の軟な精神構造でも強さでも無い。それにシスコン属性を持つワカメ大使は、さよの見てる前では本来以上の実力を発揮する。シスコン侮りがたし……それでも、アールニー口と渡り合えても、勝てはしない。

ワカメ大使がどういう存在かを、最も理解しているのは本人ではなく、アールニー口である。行動パターン、思考パターンはどれもアールニー口が創ったモノなのだから当然なのだが……

「負けないでください！！ワカメ大使！！」

さよからの突然の声援。ワカメ大使にとってはこれ以上のものはほとんど存在しない。声援を聞き、一瞬だけ目を見開いたが、すぐに元に戻り、アールニー口に言う。

「どうやら、私は負けられない理由が出来たようだな……」

ワカメ大使の持つ木刀がアールニー口を肩から腰にかけて打ちつける。防御も回避もできなかったアールニー口はもろに食らい、よろめき……倒れ

ダン！！

なかった。足でしっかりとリングを踏み締め、勝ったと思っていたワカメ大使に先程のお返しと言わんばかりの強烈な一撃を叩き込む。

「双骨」

双骨を打ち込まれたワカメ大使は膝を着き、

「……く……」

倒れた。もしも、あの一撃がワカメ大使がいつも使う千本桜の贗作であつたのなら、もしも、勝つたと思わずに追撃をしていたのなら、ワカメ大使の勝ちで決着は付いていただろう。だが、今握っているのは木刀であるし、勝つたと思つた事で、できた一瞬の油断で、ワカメ大使は掴みかけた勝利を手放してしまった。

『決まつたあああああ！勝者はアール・アールエリ選手！3年連続で、まほら武道会の唯一の勝利者だあああ！』

その宣言と共に会場での熱がいつきにピークへと上がり、まほら武道会の全ての工程を終了しても、観客の興奮が冷めなかつた。

Side out

Side 超

魔法を世界にばらす前に、まほら武道会で撮つた魔法の映像をネットに流すつもりだったけど、ほぼ失敗ネ……

簡単な布石でネットで噂になる程度のもを出す予定だったが、予想以上に素人目で魔法と判るモノを誰も使わなかつたヨ……誰かが使うと思つてたが、予想以上に秘匿に気を使っているネ……

……今すぐにも強制時間跳躍弾を撃ち込めたら、どれ程楽なと力……しかし、それは出来ない。いや、しても無駄力……計画の決行は明日だから今すぐ跳躍させても無意味。まったく、描いたとおりに行かないとしても、こんなところで躓くとは思って無かつたヨ……

これで明日はうまく行くのだろうカ……なに弱気になってるカ、準備はしてきたし、上手くいけば、アローニー口を筆頭に相手の主要戦力が帰ってくる頃には全てが終わった後ヨ。それに、主要戦力が多少残っていても勝てるようにアレを使えるようにしたんじゃないカ。

でも、上手いかなかった場合は、成功率が極端に低くなる……作戦というより賭けに近い……

「超さん、大丈夫ですか？」

「ハカセか……私は大丈夫なように見えないカ？」

「はい。思い詰めた顔をしてました」

どうやら酷い顔をしてるようだネ、いままで3日連続徹夜した時しか、大丈夫か聞かれた事はないから、その時程に酷いんだろうネ

……

「そんな事より、ハカセは望めば手を引けるヨ？それでも、一緒にやるつもりカ？」

「なに言ってるんですか？言ったじゃないですか、お手伝いしますって。茶々丸と違って、私の意思で参加してるんですから、最後まででやりますよ」

………そうか。でも、成功しても、失敗しても罪は私1人で被るヨ。それしかできないっていう事もあるが、私が残せるモノはもうほとんど無いからネ……

「茶々丸は問題無いカ？最悪あちら側に付くと思っていたが……」

「問題無いですよ……少なくとも、茶々丸が負けるまではこちら側です」

「まず無いネ……現実の体が破壊でもされない限りは、電腦戦では負けは無いヨ」

電子精靈なんてモノがあるが、アローニーロもエヴァンジェリンもその強力な使い手では無いから勝負さえできない。少なくともネットではこちらが圧倒的ヨ。情報だけでは勝てないが、有利にする事はできる。このアドバンテージが無くなったら、最悪の状態なら、負けは確定したも同然になってしまうが……

「全ては、明日の為に来たんだヨ。意地でも成功させてみせるヨ！」

勝ち以外では、来た意味がほとんど無いのだから。

S i d e o u t

麻帆良祭 まほら武道会 決勝戦（後書き）

次で火星人と戦争だー！その前に、なんかはさんだ方がいいのかな？
まあ、なにか思いついたらはさむか……

追記 7月15日修正

ここは少し削るだけでよかった。さて…本編書くか。

麻帆良祭 狙撃手と滅却師（前書き）

第59話

にじファンよ、私は帰ってきたあああああー！！！
と、言うほどではありませんかね……修正は矛盾が無いようにする
為に削るだけでしたし。

麻帆良祭 狙撃手と滅却師

Side 真名

『予定を早めるヨ、そっちは準備できてる力？それ次第では今すぐにも決行するヨ』

超からの通信。どうやら急ぐ用事ができたようだね。

「問題無い。アルルエリ親子は私の射程範囲に捉えている」

最大の障害になるであろうアルルエリ親子を一番最初に排除し、次に魔法関係者を狙い撃ちにする。実力は英雄だという事も頷けるほどと知っているし、修学旅行で鬼神を1人で倒したのを実際に見てホントに驚かされた。だけど、死角からの狙撃は避けれるかな？避けれたら人間じゃ無い。いや、元々人間じゃないか……

『チャンスは1度だけヨ。アローニーロに強制時間跳躍弾を中てたら、すぐに近くのエヴァンジェリンにも中てる。片方だけに当てたら最悪ヨ、殺されたと勘違いして殺しに来ると思われるからネ……』

失敗は死に直結する、か……麻帆良に来る前を思い出すね。

「狙撃に失敗したら、転移符ですぐに移動するようにしておくよ」

そうしても、草の根をかき分けてでも見つけそうだけどね。帰ってくる前に捕まえられれば、すぐに殺されかねないだろうね。

『狙撃ポイントは随時変更して捕まらないように頼むヨ、その為に

大量の転移符と、各狙撃ポイントに装備を用意したんだヨ」

「言われずとも、給料分は働くさ」

それさえ出来なければ傭兵失格だ。

スコープ越しに2人を見る。屋台で食べ物など買ったりして笑顔で過ごしている。2人とも麻帆良祭を楽しんでいるようだ……

恨みとかは無いけど、狙い撃たせて貰うよ。アローニーロ・アルエルエリに、エヴァンジェリンA・K・M・アルエルエリ。

狙うは胸部。中りさえすればそれでいいのだ、わざわざ狙いにくい手足や頭部なんて狙わずに一番面積の広い場所を撃つ。

狙いは正確だった。引き金を引き、弾丸が発射され、そのままアローニーロの胸に一直線に進む。

中った、そう思った。だが、中らなかつた。

中らなかつたのは簡単な理由だ、アローニーロが避けたのだ。実際に目にしてけど、信じられなかつた。気付かれていた？いや、そんなはずは無い。狙撃を警戒している様子なんて私が見ている限りでは一度もなかつた。

「まさか、避けるなんて……まさしくバケモノだね……」

近付けば避けられ無い距離で撃てるかもしれないけど、近付くなんて絶対にしたくない。近付けばすぐに喰われる。仕事をするべく別の狙撃ポイントに

「お2人が親子水入らずで楽しんでいるのに狙撃なんて、無粋じゃないんですか？」

「相沢さよ……なぜここに……？」

狙撃手が私だとばれるているのは判る。アールローに狙撃ポイントが発見されたのなら少し納得がいかないけど判る。だが、ここでアールローの関係者であるとは言え、さよにこの場所に発見されている？

「拘束させて貰います。なにを撃ち込まれるか、アールローさんが疑問に思っていましたよ？」

いつもはどこか抜けているような雰囲気なのに、今は狩人のような雰囲気だ。これは、逃げるにしろ戦うにしろ骨が折れそうだね……

Side out

Side 第三者

龍宮真名は相沢さよから転移符を使って建築物の屋上を伝って逃げ回っている。しかし、真名の使う転移符ではさよの補足可能範囲外に逃げる事はできず、常人では見続けることが出来ない鬼ごっこを繰り返していた。

(転移符の数も少なくなってきたし、ここなら問題ないだろ)

「鬼ごっこは止めですか？真名さん」

「ああ、流石にそろそろ仕事に移らないと依頼主から文句を言われても仕方が無いからね。それと、普通の武器では勝てそうにないから、特別な武器を使える場所に来たかったしね」

そう言い。2つの刀をさよに見せるかのように取り出す。刀身が湾曲した形の刀と四角形の四つの角に牙がついている鍔がある刀がその手に握られている。

「蹴散らせ、ロス・ロボス『群狼』」

解号を口にし、煙のようなモノに包まれ、出てくると真名の姿は激変していた。服はオオカミの毛皮のようなコートをとったカウボーイを思わせる姿に変わり、左目部分にポインターの様なモノが形成され、先程まで刀を握っていた手には銃が握られている。だが、その銃は引き金と銃口以外はそれらしい部品が見当たらないまるで玩具の銃のように見える。

「斬魄刀……？」

さよに取ってはありえない光景であった。何度か見た事のある、アーロニーロの作った幾つかの斬魄刀解放と酷似していた。

「これはそう言う種類の物なのかい？超はこれの名前と使い方以外は教えてくれなかったからね。使えば、それで良いんだけど。それに、これは弾薬費がタダだしね」

そう言うと、銃口を向け、引き金を引く。それと同時にその銃にとっての弾丸である、青い閃光が銃口からさよに向かって撃たれる。

「くっ！（アレは虚閃！なんで銃から！？）」

さよは驚いたが、すぐに避けて銀嶺弧雀で矢を放つが、迎撃とし

て撃たれた虚閃にあっさりと飲み込まれてしまつて真名に届かない。だが、逆に真名が撃つても虚閃はさよに中らない。

「確かに強力ですが、その程度ではいくら撃つても中りませんよ？」

「そうだね。でも、これでも避け切れるかい？」
『セロ・メトラジェット 無限装弾虚閃』

「え？え？ええ〜!？」

連射。現代の銃ならそれを売りにしている機関銃などがある、真名の持つ2丁拳銃の片方がまさにそのように虚閃を連射で撃っている。

「降参するかい？」

なんとか避け切つたさよに対して真名は言うが、本気ですとは思つてはいない。

「まさか。それに、それについて大分解りました。虚閃は真名さんの魔力を消費しないで撃たれていますね？」

「……………」

「おそらく、その背中の弾倉が魔力タンクになってますね。虚閃を撃つ際に僅かですが、漏れ出ている魔力を感じました。それと、右は1発の威力、範囲は低めですが数回撃て、左は威力、範囲が右より高く1発限り。あと、射程範囲自体は狭くしてありますね」

「……………全部正解だ。私の魔力を使って撃ち続けるとすぐに魔力切れが起きるから、魔力タンクを付けている。射程範囲は元のままだ

と被害が馬鹿にならないから、狭くされているという訳さ」

「やれやれと言わんばかりに左手だけを開くが、右手の銃はじつとさよに照準を合わせている。」

「なら、範囲外から射抜かせて貰います」

「相手の攻撃範囲外から撃つ。それは私の専売特許だよ」

「さよが飛廉脚ひれんきゃくで距離を離そうとするが

「なっ!?! (響転も使える!?!)」

「すかさず反応して響転で追いかけて距離を離させない。鬼ごっこが再開されるが、今度は虚閃と矢を撃ち合いながらの空中戦であり、魔法関係者であっても介入が難しいものである。」

「普通に追いかけても追いつけないし、これ以上時間を取られるわけにはいかなか……あまり使いたく無かったけど、仕方ないね」

「突然真名が撃つを止め、銃を腰のホルスターの納めると同時に、背中の弾倉からナニかが飛び出してくる。」

「狼……?」

「そうナニかの姿は狼であった。そしてすぐにさよの優秀な能力は、それがどのような代物かを理解する。」

「魔力の塊……それも、広域殲滅魔法何十発分の………なんて危険なモノを」

「危険なんて百も承知さ。だから、あまり近付かないでくれよ。こいつらを私の近くで爆発させるなんてしたくないからね」

真名が狼の弾頭をさよに襲わせようとしたところで、連絡が入る。

「こんな時に……」

『そっちはいつまで時間をかけてるヨ。こっちはもう済んだから、そっちも手早く頼むヨ』

「まさか、勝ったのかい？あのアールローローに……」

「え……？」

S i d e o u t

麻帆良祭 狙撃手と滅却師（後書き）

本編補足

さよが真名をすぐに発見し、その場に行けたのはアローニー口の認識同期で即座にさよに情報が伝わったからです。

真名は群狼を使う事で、虚閃、虚弾、響転が使え、破面や死神がよく使う霊子を足場にするみたいな事もできるようになっている。全部魔力で代用するようになっていたため、背中の弾倉は魔力タンクになっており、例えば使用者に魔力がなくても使える安心？設計になっている。

あと、この群狼に自分の魂を引き裂き分かち合う能力はない。

麻帆良祭 破面と人間の戦い（前書き）

第60話

感想 大之様

ありがとうございます！

麻帆良祭 破面と人間の戦い

Side 第三者

時間は少し巻き戻って、アローニーロが狙撃された直後である。

「狙撃で倒されるくらいなら、大戦で死んでいた」

「誰に言っているんだ？父様」

エヴァンジェリンは狙撃を弾丸の進む音だけを頼りに避けた父親に微妙なツツコミを入れる。

「そんな事はどうでも良い。それより騒祭りぎとアレが問題だ」

麻帆良は混乱に包まれていた。突如現れたロボット軍団が、魔力溜まりのある場所を制圧すべく行動し、さらになにやら装置を付けられた鬼神とアローニーロ達には見覚えのあるモノも混じって行動している。

「大虚だ…と…？なぜアレがここに居る！あいつはヘラス帝国と父様しか持っていないだろ！？」

「そう、俺とヘラス帝国しか持っていない。それが問題だ。もしかしたらアレの所為で魔法世界で戦争が起きるかもしれない。他人がいくら殺し合おうと知った事ではないが、大虚は俺が作ったから、おそらく飛び火するだろう。流石に、それは嫌だからな…：…砕ける、鏡花水月」

幸いとも言うべきか、アーク二一〇は対処できる方法を持っていた。鏡花水月は1度その始解を見た者を何時いかなる時でも完全催眠の術中に落とす事ができる。その能力を使い、今迄始解を見た事のある人物全員に大虚を鬼神と認識するようにした。

「後は片づけるだけだ。別れて鬼神を先に潰すぞ」

「わかった。それより父様、結界が変えられているがそっちはどうするんだ？」

「術式を弄られているのか、管理しているシステムが乗っ取られたかで対応が変わるが、おそらく後者だろ。普通の携帯が通じない。まあ、伝令神機は問題無く使えるから連絡に問題は無い。結界は機械関係だから俺等の出れる幕ではないから、適任な千雨に任せる」

それぞれ鬼神と鬼神の皮を被らされた大虚を潰すべく、行動を開始する。

「先に千雨に連絡を入れなければな。魔法先生などはロボットへの対応が忙しくて対処できてない可能性がある」

『もしもし！師匠か！』

「ああそつだ。無事か？」

『怪我なんてしてねえから無事だな。てか、なんだこの状況は！なんでロボットに襲われるんだよ！』

「知るか。それより、学園のネットワークの支配権を奪取しろ」

『はあっ！？いきなりそれかよ！？まあ、やんなきゃいけないんだろ……？』

「拒否権は無い。迅速に頼むぞ、今敵に攻め込まれれば、此処には居られない状況になりうるからな」

『誰か護衛に回してくれよ？じゃないとハッキング中にやられるとか私は嫌なんだが』

「問題無い。頼りになるのがそっちに行っただけだから」

『もしかしてワカ『ハズレダゼ、千雨』チャチャゼロかよ………』

アローニーロは学園結界のせいで普段は出てこないチャチャゼロを向かわせていたのだ。

「さて、あとは敵の殲滅をするだけか……」

「その必要は無いヨ」

卍型の鏢、柄頭に途切れた鎖がついている全てが漆黒に染まった長めの日本刀を持ち、黒いロングコートに似た独特の服に身を包んだ超が突然姿を現し、日本刀でアローニーロを斬り付ける。

刃先は銅皮を斬り裂き、浅くではあるがアローニーロに傷をつける。

「『天鎖斬月』てんさざんげつだと？なぜお前が持っている」

「……………」

本来は強大な力を具現化した卍解はそれに見合った大きさや影響を持つているが、天鎖斬月の力は単純な強化のみ。その力を刀と服に凝縮した事で可能とする高速戦闘が天鎖斬月の最大の売りである。その速さはアールローを超える。それを解っているから、アールローは斬られると同時に影の倉庫から取り出た詫助で迫ってくる天鎖斬月を防ごうとしたが、触れる直前に止まり、横薙ぎから突きに攻撃を変化させてアールローに迫る。それを鏡花水月で逸らす、すぐに軌道修正をして再びアールローに迫る。そのようなやりとりを何度も繰り返す。

現状で言うなら、アールローは選択を間違えた。神殺鎗のなら、天鎖斬月と同等以上の速さで攻撃でき、超を斬り伏せられたらう。しかし、アールローは倒すではなく、捕縛する事を優先した為に最も適してる詫助を選んだ。アールローの予想を超える反応速度を超が出さなければ、簡単に詫助の能力で天鎖斬月は使えない重さになっていたのである。捕縛を諦め、神殺鎗を取り出そうにも、こゝも攻め立てられてでは影の倉庫から出して使えない。いつも影の倉庫にしまつてあるから、取り出す際に僅かだが時間がある。その普通なら突けないような弱点を超は突いていた。

例え隙間無く刃に囲まれても、そののほとんどをほぼ同時に斬り落とせる速さの全てアールローを斬る為だけに使う。少しずつであるが、アールローの体の傷が増えていく。

「縛道の九十九 禁」

ベルトと鋏が超を拘束すべくそれなりの速さで放たれるが、全てを簡単に避けられる。

「縛道なんて無駄ヨ。いくら強力でも、中らなければ意味は無いヨ」

「無駄か……確かにそうかもしれんが、楽しめれば意味はある」

「潔く、強制時間跳躍弾を受けてくれると楽でいいんだけどネ……まだ、戦うつもりか？」

「いや、お前とは戦わないな」

「は？なにを言って……」

ゴトオ！！明らかに重々しい音たてながらいきなり超が膝を着く。

「何が……どうなってるヨ！」

「さて、お前が先程から避けていた詫助はどっちの手に持っていた？」

「まさか！」

超は理解する。アールニールの術中に嵌められていた事に……鏡花水月の完全催眠で詫助を持っている手を左右逆だと誤認させられていたのだ。

「天鎖斬月は着る正解。詫助に斬られれば全体が重くなって使い手の重しになる。それを解っていたから詫助を避けていたのだろう？さて、お前がなぜ天鎖斬月を持っているのか、なぜ詫助の能力を知っているのかキリキリ吐いて貰おうか？」

膝を着いて動けない超に近寄り、問いかける。答えなければ頭の中を覗く準備をしつつ……

「アールローロが後になってこの状況を思い出せばこう言うだろう」
気を抜き過ぎていた」と。

「カハ・ネガシオン
反膜の匪」

「…何…だと…」

戦ってる最中と比べれば格段に油断していたとはいえ、アールローロに超が目的のモノを使うのは簡単ではなかったが、不可能ではなかった。アールローロの胸に押しつけられた手の平に乗る小さな箱状のモノは能力を存分に発揮し、アールローロを閉次元へと閉じ込める。その光景を目の当たりにした超に笑みがこぼれる。

「勝ちが！勝ちが見えて来たヨ！あと残っている厄介な人物はエヴァンジェリン、ワカメ大使、さよ、タカミチ、学園長だけ！その他はロボットと真名でどうにでもなるネ！アールローロは何時戻ってくるかは解らないから急ゲホッ！ゲホッ！…ハア…ハア。先に治療しないと死にそうネ…」

アールローロと互角以上に戦う。それは人間である超にとっては無理に無理を何度も重ねて実現させた奇跡に等しい事だった。その代償が解りやすい形で出て来たのだ。本来は人間の体では不可能な高速戦闘だけで、超の体は瀕死の重体になっている。だが、その程度なら補肉剤を使えばすぐに治るのだから安い代償だ。

「ふう…補肉剤が無かったら死んでいたヨ。天鎖斬月は詫助の能力の所為で重くてもう使えないネ。まっ、実質の被害はそれだけだから安いものヨ」

「正解を解き、斬月に戻ったのを動かそうとしたがビクともしない

ので仕方無くその場に放置しようとしたとこで空を奔る青い閃光が目に入る。

「あの色は群狼の虚閃ネ……相手は氷の竜や桜が見えないから、さよか……目くらましの鬼神と大虚が優先的に狙われている今はいいが、あんなに目立つ戦いしていると増援がすぐに来てしまうヨ。仕方無いから急ぐように連絡を入れる力」

連絡用のモノを取り出し、真名のモノへと繋げる。

「そっちはいつまで時間をかけてるヨ。こっちはもう済んだから、そっちも手早く頼むヨ」

『まさか、勝ったのかい？あのアールローロに……』

「まだ、勝ったとは言えないよ。勝ったと言えるのは作戦を成功させた時ヨ。戻ってくるのは時間の問題ネ、だからさよをとっと倒すヨ」

『よく相手がわかったね。それより戻ってくるって、どういうことだい？強制時間跳躍弾でちよっと先の未来に行ったんだろ？』

「真名が気にする事じゃないヨ。傭兵なら傭兵らしく役目を果たすヨ」

『……わかった』

「さて、私は私の成すべく事を成すヨ」

Side out

麻帆良祭 破面と人間の戦い（後書き）

超が群狼や天鎖斬月を持っているのは、今は明言しませんが、ほとんどの読者は予想がついてますよね？

本編補足

超は天鎖斬月に改造を施しており、使い手の考えた通りに動くようにして、使い手の魔力を消費せずに使う為に魔力タンク付きになっている。

また、アローニードロとの戦闘中には超人薬を服用することで動きは全て見きっていた。

麻帆良祭 最弱（前書き）

第61話

感想 七誌様、安藤様、空箱様、紅茶ラテ様
ありがとうございます！！

麻帆良祭 最弱

Side 千雨

あー、めんどくせー。つっても、現実で戦わさせられるよかは何百倍もマシなんだろうけど……ロボットに対する攻撃手段が無い訳じゃねえけど、数が数だから私じゃすぐにやられるなんて、簡単に想像ができる。正面から挑めばの話だけど……

「オイオイ、隠レルナラモット目立ツ場所二居テクレヨ。ジャネエト敵ガ来ネエダロ」

殺人人形が私に理解できない戯言を言っているは無視だ。私にはやんなきゃいけねえ事があるんだから、できれば師匠の家でやりたいが、こんな騒ぎの中を突っ走る度胸なんてない。幸いにもノートパソコンからでもできるし、電源も確保した、あとは指令を出すだけだ。もしかしたら無駄かもしれないけど……

「おお！やっとな私を使ってくれますか！千雨様！」

牛のような動物の頭蓋骨をそのまま象った仮面というか、かぶりモノを着けた男がいきなり画面いっぱいにドアップで映ったので、ノートパソコンを閉じたい衝動に駆られるが、それを抑え付ける。できれば使いたくないが、これの力がたぶん必要だ。

「ああ、状況は解っているな。やる事も」

「もちろんです。すでに葬討部隊は待機しています。後は命令を受けるだけです」

画面に映っている変人みたな奴は、ルドボーン・チェルトと言
つて、師匠の作った電子精霊らしい。でも、精霊なんて見た目でも
能力でも無い。ハッキリ言っただけ、こいつは質の悪いコンピューターウ
イルスだ。勝手にこいつは自分の部下を増殖させて私のホームペー
ジの防衛と敵サイトライバルへの攻撃をしている。自己増殖とかまんまワー
ムじゃねえかと思っただけ、その認識は甘かった。こいつはどのウ
イルスとも同じ事ができる。それも、進化をしながらである。ファ
イアーウォールやワクチンソフトなんて全部無視して行動している。
私のパソコンから追い出したいが、非常に残念な事にそれが出来な
い。

「どの位の数を動かせる？」

「必要な数だけです」

「心強い事で……。てか、いつもなら命令無しで動いているのに珍
しいな」

「実は……先程この機会に麻帆良のネット支配権を千雨様に献上し
ようと行動したのですが、失敗してしまいました……。その罰は後のちほ
どしっかり受けます」

なにを献上しようとしてんだ！この罫體は！……さてよ？こいつ
が正攻法で勝てなかった？こいつの基本戦術である人海戦術はネッ
トでも有効だ。それが通じない相手か……

「さあ、御命令を。人の身では行けない電腦世界での千雨様の手足
となって、役目を果たしましょう」

作戦考えないと勝てねえな。

S i d e o u t

S i d e 茶々丸

現在麻帆良学園のネットワークは超側に掌握されています。その管理は私がしています。

超とマスターの約束で今回だけは、マスターと敵対する形になってしまっていますが、負けたらすぐに降伏してマスター達のお手伝いをするつもりです。捕虜が元味方に不利な事をする、戦争ではよくあることです。

「またですか……」

私が掌握する際にその機に乗じて謎の勢力が支配権を奪取しようと動きましたが、それは数にモノをいわせた単純な方法でしたので隔離して各個撃破というので簡単に削除できました。その謎の勢力がまた攻めてきました。

例え、私の望んでる事でなくとも手を抜くつもりはありません。全力で戦い、負ければ潔く降参します。しかし……攻めてくる謎の勢力は、なぜかイメージとしては人間の頭蓋骨のかぶりモノを身に付けた者なんでしょうか？服が白で統一されているからアローニー口様が用意した電子精霊の類でしょうが、個々の能力が低すぎる。これが一番恐ろしい……あのアローニー口様がただ数合わせに思える弱いモノを作るとは考えにくい。ちなみにあくまでデータなので、本来なら0と1の数字の序列が全てなんです。超かハカセの手によって見るだけで状況が判り易くされています。

「お初にお目に掛かります。葬討部隊隊長のルドボーンと言います。

以後、お見知り「ドツカーン!!」少々気が早いようですね。茶々丸様」

「いえ、こつちの領地に入った時点で攻撃を受けるのは当然でしょう。戦争なんですから」

他とは違う牛のような頭蓋骨の被りモノを身に付けた自称葬討部隊隊長に向けて削除ミサイルプログラムを撃ちましたが、部下と思えるモノが複数で盾を作り出して防ぎきりました。先程の侵攻では見られなかった動き……

「そうでしたな……では、生おい上がり、『アルボラ髑髏樹』。先程の侵攻であなたは私の部下を全て倒しきった。しかし、すぐに知るでしょう、そんな事ができても私達には勝てない事に」

間違い無くアローロニー口様の作った電子妖精ですね……変身をする電子精霊を作ろうと考えるのはあの人以外には居そうにないですから……

私の目の前で次々と部下を増殖させていく。根源を断たない限り無限に増殖し続ける厄介な能力を持つているのですか……なるほど、なぜ個々が弱いかが解りました。これで個々が強いとつまらないとか、と言う理由でそうなるように作ったのでしょうか。

「元さえ絶つてしまえばこちらの勝ちです。なら、それ相応の火力で潰すだけです」

邪魔な立ち木は伐採か焼却処分が妥当でしょう。チェインソーと火炎放射機のイメージで削除しようとはしましたが、先程と同様の手段で防がれます。どうやら火力がまだまだ足りないようなので、さらに火力を上げて消し飛ばす。

「言ったはずですが？そんな事ができて、私達に勝てないと」

……………そもそも本体が出て来た時点で勝ち目は無いようです。現実と違って一手で状況をひっくり返すことは事実上不可能です。なぜかと言いますと、削除する場合はそれ用のプログラムを使うのですが、削除できる速さに限界が存在し、目の前の相手はそれ以上の速さで増殖しているからです。本体を削除できれば状況はひっくり返るでしょうが、本体に届く前に全て止められます。隔離という手もありますが、隔離されてない部下がそのプログラムを破壊するでしょうし、隔離しても増殖は止めないでしょうし……時間稼ぎくらいにはなるでしょうが。

尤も、こつちが守りなので悲観なんてしません。攻める側だったら無限の防衛戦力に諦めたかもしれませんが、今回は守りに徹すれば最悪結界関係の場所は攻め落とされる事も無いでしょう。

「いくら数を増やしても、私がいる限りここは落ちません」

「ええ、そうでしょうね。だから、今度は私だけで無く、私達で戦っているんですよ」

今度は私だけで無く、私達？

「私1人ではこの膨大な数の部下を操り切れない。なら、それが出来る人に命令で動く。あなたの敗因は1人で戦った事です」

「まだ負けてはいませんか？」

「いや、茶々丸。お前の負けだ」

「 電腦世界から現実世界に引き戻されました。どうやら強制的にリンクを切断されたようです。」

「ケケケ、現実ノ防御ガオザナリニナツテタゼ」

「私の護衛として、いくらか私の姉妹や兄弟に当たるロボットが配備されていたはずですが？」

「数が少なきゃ私とチャチャゼロで十分に対処できる」

「そうですか……私の負けです」

やはり勝てませんでしたか……まさか直接現実の本体を叩く戦法を千雨さんが使うとは……

「千雨様、残念なお知らせがあります……アーロニーロ様がこの麻帆良学園から消えるのを確認しました……」

「嘘……だろ……?」

S i d e o u t

麻帆良祭 最弱（後書き）

戦いは数だよ、兄貴！それを1人でできるルドボーン。見た目も合わせて破面で気に入ってる1人。

次はさよVS真名の続きを書く予定。エヴァとワカメ大使はどうしたとか言わないで下さい。今は雑魚の相手してるんで……

麻帆良祭 狙撃手と滅却師 2 (前書き)

第62話

感想 まつき様、七誌様
ありがとうございます！

麻帆良祭 狙撃手と滅却師 2

Side さよ

信じられない、アローニーロさんが負けるなんて……だけど、アローニーロさんの魔力をまったく感じない。魔力を感じない理由として上げられるは、私の感知範囲外にアローニーロさんが移動した、もしくはアローニーロさんが隠れたのどちらか。殺された可能性もあるけど、それはかなり低い。なぜなら死んだとしてもすぐに魔力が消えるわけじゃないから、感じられないのはありえない。死体を魔力を遮断する布で覆ったり、完全に消滅してない限りは……

「それじゃあ、続きといこうか」

狼型の弾頭を従えた真名さんが相手。爆発すると解つてて狼に近付くのは論外、でも近付かなければ私の矢は中りそうに無い。なら狙うのは

「魂を切り裂くものによる攻撃で結合を緩くして魔力を奪う」
ゼーレシュナイダー

今のままでは魔力を奪って無力化は不可能。できないならできるようにするだけ……その前にいくらか確認する事がありますが。

「いけ」

短く、簡単な真名さんの命令で狼が私に向かって一斉に走り出します。まずは、普通の矢による応戦。中りはしたけど、まるで炎を射抜いた時のように貫いてそれで終わり。外見上はなんら変化は無し、魔力量が僅かに減っただけ。射抜かれた一体が突然爆発しまし

た。なんで!?

真名さんを見てみると笑っています。おそらく警告なんでしょう、目の前で爆発させることでその威力を見せ付けて降参を考えさせる材料にさせるつもりなんでしょう。

ですが、私は今は降参するつもりはありません。今度は、後ろに退きつつ今度は一体に集中して矢を放つ。先程と似たような結果でしたが、魔力量が確実に減りました。普通の矢でも魔力量を減らし続ければ無力化もおそらくは可能。だけど、魔力の再充填できるかもしれないから、できれば一気に片をつけたい。

右手で銀筒をいくつも取り出し、近くにきている狼にそれぞれ1つずつ投擲。

「ツイエルトクリカチタンキーツ・ハルト・ファイエルト銀鞭下りて五手石床に墮つ!!」グリッツ「五架縛」!!」

さらに銀筒を取り出し、五架縛で拘束した狼達の横の方に複数をかためて投擲。

「レンゼ・フオルメル・ヴェント・イン・ゲラール大気の戦陣を杯に受けよ!!」ハイゼン「聖噬」!!」

柱状の結界で五架縛ごと攻撃、結果は消滅。残しておいた一体をゼーレシユナイダーで射抜く。

こちらも結果は上々で、結合が緩んだことで魔力を奪う事に成功し、その魔力を銀筒に籠めます。倒せる事は判ったので、後は数の差をどう埋めるかが問題になります。ですが……

「降参したらどうだい?下手したら死んでしまうよ?」

狼に囲まれてしまいました……いつの間にか追加で狼が出されて

いたようで、それによって球場の包囲網を敷かれて逃げ場がありません。1人相手に、馬鹿みたいに正面だけで攻める必要は無いですから当然の布陣なんでしょうが、やられると非常に腹が立ちますね……こうゆう状況は始めてではありませんが、その時は負けてしまいましたし……

「あはは、そうですね。降参

Side out

Side 真名

「あはは、そうですね。降参

苦笑いしながらそう言うてくれた。やっと諦めてくれたか、流石にクラスメイトを爆破するのは少し気が引けるからね。

なんてしませんよ」

「なっ?!」

後ろを取られた?! ありえない! ずっと見ていたが、瞬動のような高速の移動法はさよは使っていない、それにさよは魔法を使わないはず!

「なるほど、転移符か……」

失念していたね…… 転移符は少々値段は高いがありがたふれた道具の部類に入るから、さよが持っているてもなんら不思議は無い。むしろ今迄使わなかったのが不思議なくらいだ。

「こつも近くては、あの狼は使えませんか」

先程狼を射抜いた剣のようなモノで斬り付けてきたから、咄嗟に弾倉から魔力で構築した武器を作り出したが、構成が甘かったのかすぐに斬られてしまう。

「そつでもないさ」

互いに無傷で勝つのはやはり無理があつたか……狼を集結させ、一斉に噛み付かせるが、転移符でまた移動される。はあ……、最初とは完全に逆だね。いつそのことさよを無視して仕事に取り掛かれたら良いんだけど、流石にそれは無理だろう。銃を使った戦法に戻してもいいけど、それで決着がなかなかつかないこつちの戦法にしたつていうのに……本気を出す訳にもいかないし。

リヒト・レーゲン
「光の雨!!」

上か……仕方が無い。ホルスターから銃を取り出し、虚閃を撃つて迎撃する。やっぱり狼より銃の方が扱いやすいね。

レンゼ・フォルメル・ヴェント・イ・グラール
「大気の戦陣を杯に受けよ!!」
ハイゼン
「聖噬」!!」

狼を消滅させた技。それを同時に複数使ってくるとは、殺す気か？それとも、この程度では死なないと思われているのか？

回避したが、回避した場所には小さい筒状のモノがばら撒かれており、さらに上から降ってくる。

イ・シエンク・ツァイヒ
「盃よ西方に傾け!!」
ヴォルコール
「緑杯」!!」

爆弾のように幾つかは爆発というか、衝撃波を発生させてばら撒かれていた筒を移動させる。おそらく背中の方でも似たような事が起きているんだろう。このままでは回避が間に合わない！仕方がない転移符を使つて……パツアアン！！

転移符を使おうと取り出した瞬間に射抜かれ、使えなくなる。予想通りだと、さよが笑っているのが幻視できた…………

「ツイエルトクラマオンキーツ・ハルト・ツイエルト銀鞭下りて五手石床に墮つ！！ケリツツ『五架縛』！！」

狼を縛り付けた5つの帯が今度は私を縛り付ける、それが何重にも……負けだね。

S i d e o u t

麻帆良祭 狙撃手と滅却師 2 (後書き)

銀筒を多様しすぎたか？実際に数さえあれば、十分に使えると思うんですが、原作では力が戻った途端にお払い箱という……いや、一応使ってるか、破芒陣シュブレンガーの発動だけに。

実はワカメ大使が乱入するパターンを思い付いたけど、うまく形にできなくてボツという……てか、真名が死ぬパターンが頭をよぎったので……

麻帆良祭 終局に向かう祭り（前書き）

第63話

感想 七誌様、三元牌様
ありがとうございます！！

麻帆良祭 終局に向かう祭り

Side エヴァンジェリン

まったく、鬼神と大虚に無駄に時間だけを掛けさせられた。それに、どういう訳か父様が動いていない？私以外と伝令神機で連絡を取ったりして私より出遅れるの当然だが、動いていないみたいのはおかしい。もしかしたら、周りに被害を出さないように戦っているのかもしれないが。

プルルルル

「もしもし？」

電話？誰からだ？

『もしもし、エヴァさんですよね？』

「ああ、そうだが。なんの用だ、さよ」

『実はですね、私は真名さんと戦って勝ったんですけど、真名さんが斬魄刀らしき物を使っただんですよ』

「なんだと？本当か？」

斬魄刀は父様しか作ってないはずだが……

『はい、刀みたいのを持って解号と思えるのを口にしたら姿が変わったので。斬魄刀なのか、違うのかは私では判断ができないので』

「とりあえず回収しておけ。ところでさよ、父様が今どの辺に居るかは教えてくれないか？お前の探知能力で判るだろ？」

『……………エヴァさん、落ち着いて聞いて下さい。魔力を感知できないので、アローニーロさんは少なくともこの麻帆良学園に存在しません。それをやったのはおそらく超さんです』

「……………なに？父様が負けたというのか？」

『おそらく……………方法は判りませんが、アローニーロさんを転移させたと思います』

「ただ転移させただけなら、すぐに戻って来ているはずだ。どの位の時間いないんだ？」

例え魔法世界に飛ばされたとしても、父様ならすぐに戻ってこれる。だから

『10分も経ってないと思います』

「わかった。……………千雨の奴はもう仕事を終えて居るだろう」

手早く伝令神機を操作して千雨の伝令神機と繋げる。

『もしもし』

「千雨だな、超は今どこに居るか判るな？」

『判るけど、何しに行くつもりだ？』

「ちよつと話を聞きに行くだけだ、話をな……」

Side out

Side 超

結界がいつもの状態に戻ったという事は茶々丸が負けたか……別にもう問題は無いヨ。真名も来ない事を考えるとさよに負けたようだネ。

「ハカセ、準備は良いカ？」

「はい、問題ありません」

だとしても、ここで魔法を完成させればこっちの勝ちネ。できれば真名と一緒に魔法を発動させるハカセを守って確実にしたかったが、負けて捕まった人物の助力は諦めなければならぬヨ。

「超さん！」

「ん？ネギ先生に、その取り巻き達力……」

「なんでこんな事をしているんですか！」

「別にネギ先生には関係の無い事ヨ」

「関係無くはありません！僕は超さんの担任です！」

だからどうしたヨ？教師と生徒という関係が今にどう影響すると

思っているんだか……

「甘いネ、その甘さが敗因よ」

「え？」

待機させておいたロボットに一齐に姿を現させ、ガトリングで集中砲火させて全員を強制時間跳躍弾でちよつと先の未来に飛ばす。あつけないものネ……中には初弾には何とか反応しているのも混じっていたが、雨のように降り注ぐ弾を続けて回避できずに中つてしまふ。英雄の子供と言つても、実戦慣れしてなければこの程度の不意打ちにすら反応できずに負けヨ。

突然氷の竜が現れ、ネギ先生達を倒したロボット達全てを動けないように壊す。

「ぼーやも不甲斐ないものだな。あの程度の不意打ちであつさりと御退場とは。さて、父様に何をしたかを教えて貰おうか？」

「エヴァンジェリン……」

相手はエヴァンジェリンか、ロボット達は時間稼ぎにも成らなかつた力。強制時間跳躍弾で飛ばせれば一番良いんが、多分無理ヨ……諦める理由にはならないけどネ。

「その位なら教えても良いヨ、アーロニーロは閉次元に閉じ込めヨ」

「閉次元か…それなら、父様が帰って来るまでにお前を倒しておこうか！」

まったく、血の気が多いヨ……いや、アローニーロに褒められる
手柄が欲しいんだろウネ……

「万象一切灰燼と為せ！、『流刃若火』！」

相手が氷雪系最強なら、こっちは？熱系最強で対抗する。実に単
純な答えヨ。

Side out

Side 第三者

超の斬魄刀解放により流刃若火から炎が溢れ出し、超の近くは溢
れ出た炎で一気に燃えるモノは火で包まれて燃やしつくされる。

「なぜおまえがソレを持っている？ソレは斬魄刀！父様の持ち物だ
！！答えろ！超 鈴音！」

エヴァンジェリンは流刃若火を知っている。修行で自分の敬愛す
る父親がそれを使って、自分と模擬戦をして何度も負かされた斬魄
刀だ。能力は自分の使う氷輪丸と対極になるというのに、始解では
勝負にならない攻撃力を持つかなり強力な斬魄刀。

故に、いくら頭に血が上っていようが、それが本物のかの確認を
する意味を合わせて行動する。

「出て来い！アヨン！あの小娘をひねり潰せ！！」

アヨンは超に向かって走り出す。

「鬼火」

不可視の熱攻撃によりアヨンの屈強な体に穴が開くが、アヨンはそれを触って確認するものの、決して走りを止めずに超へと向かって行く。恐怖などを感じず、ただ目の前の敵を殺すだけのバケモノであるアヨンに対してたかが体が開く程度の攻撃などは無意味。

「攻撃力、生命力、瞬発力どれをとってもアヨンは脅威に値する怪物ヨ。でも、単純な行動パターンだけは、見切っていれば簡単に避けられ、簡単に斬られるヨ。単純ゆえに強力であるが、その単純さで負けるヨ」

超はアヨンの一撃を紙一重で避けると、懐に入り込んで丁度体が半分になるように両断する。普通ならそこで止めるであろうが、超は追撃をアヨンにし、灰すら残らぬように焼きつくす。

「アヨンを簡単に………出来損ないの贗作ではないようだな。なら、卍解！大紅蓮氷輪丸！！」

アヨンは純粹な肉弾戦ならエヴァンジェリンにもひけは取らない。それが簡単に殺されたのはエヴァンジェリンにとっては驚愕でしかない、頭の上っていた血が引いて行くのが解る。だから、冷静になつて卍解をして敵を見据える。

「卍解 大紅蓮氷輪丸力………氷の竜だけでは、流刃若火の炎は消せないヨ」

エヴァンジェリンが超に斬り付ける形で鏢迫り合いになり、火と氷がぶつかり、入り乱れる。能力としては流刃若火の炎の方が強く、エヴァンジェリンから離れた氷はすぐに溶けてしまう。

「虚閃」

エヴァンジェリンは一旦距離を取ると紅い虚閃を超に向かって放ち、続いて氷の竜を出現させて突撃させる。超はそれら全てを斬り裂くとともに炎で包んで焼きつくす。

「解らん、確かに流刃若火は強力だ。しかし、それを使うおまえは人間の域を出ていないのに、父様に勝てた？不意打ちだろうと人間の速さでは触れる事すらできないというのに」

「簡単な話ヨ、戦った際に速くなれる物を使っただけヨ。尤も、今は使えなくされたけどネ」

罅迫り合いと遠距離攻撃への対応でエヴァンジェリンは超の身体能力のおおよそを解った。超の動きは達人と言えるようなキレはあるが、一撃の重さや速さといったものはあくまで人間のレベルである。超とて解っているのだ、自分程度の身体能力では並べないことに。それ故に超は流刃若火だけで打ち合えば押し負けると解っているから、派手に炎を使って近付けないようにしている消極的な戦法で戦っている。

それに、エヴァンジェリン勝ったとしても、それは直接超の計画の成就には繋がらない。今は時間稼ぎだけをしていればいいのだ。

そこに幾つかの人影が近付く。

「エヴァさんと超さん、随分と派手にやってますね……」

「あれは……流刃若火か？」

「ネギ君達が見当たらないが……」

「流石に、この歳での戦闘は骨が折れるのう」

学園に大量に出現したロボット達の殲滅し、未だに戦っている此処に集まってきたさよ、ワカメ大使、タカミチ、学園長である。超から距離を取ったエヴァンジェリンがその近くに降り立つ。

「全員いいか、超は私の獲物だ、お前等は手を出すな」

言いたい事だけを早口で言っつて、超と距離を詰めようと動こうとしたエヴァンジェリンに超が笑っているのが目に入る。

「城郭炎上!!!」
じょうかくえんじょう

炎の壁で対象を囲む技を放つて、エヴァンジェリン達を封じ込める。これによつて超にとっては自分では勝てないかもしれない人も合わせて、脅威となる人物全ての無力化に成功した。

「勝った！後は魔力増幅装置を持たせた虚を配置させればほぼ終了
ヨ！」

邪魔者は居ない。他にも魔法関係者は残っているだろうが、残っているのは雑魚同然であろうし、ロボットと戦つて消耗しているであろう。それに、すぐに此処にこれる人自体存在はしないだろう。

「ハカセ！そつちは問題な……………」

見えた、残っている最後の協力者であるハカセがOKサインを出している後ろで、なにも無い空間から腕が突き出て来るのが……

「そこから逃げ!…」

超が言い終わる前に腕に続いて全身が出て来て、ハカセに一撃を入れて気絶させられて、呪文詠唱を強制的に中断させる。

「まったく、閉次元への隔離だけでは無く、簡易とはいえ封印の術式も加えられていたせいで戻ってくるのに思ったより時間が掛かったな……」

アローニーク・アルルエリが閉次元から戻って来た。

S i d e o u t

麻帆良祭 終局に向かう祭り（後書き）

場面を想像したらアークローニークが敵に思えた。やっぱり中三を攻撃してるところを想像するとな……

麻帆良祭終わったらどうしよ……ネギをつい今回も役立たずにしてしまったが……

まあ、描写してませんけどロボ相手に結構頑張っていたんですよ、ワカメ大使とネギパーティーは。

追記 ネギはカシオペアなる便利アイテムは持っていません。

麻帆良祭 終局（前書き）

第64話

感想 まつきー様

麻帆良祭 終局

Side 第三者

アローニーロがハカセを気絶させ、周りを確認すれば城郭炎上の炎の壁と言つか塊があり、その中からエヴァ、さよ、ワカメ大使、タカミチ、学園長の魔力を感じてやや困惑した声で聞く。

「さて、俺がいない間に何がどうなっていたんだ？」

それに答えられるのは超ただ1人だが、超は答えない。

「説明は無し、か……まあ、いい。お前を倒してそれで終わりだ」

アローニーロは敵対してる超に答えて貰えるとは思っていないので、とりあえず終わらせるべく動きだす。

「ここまで来て！ここまで来て負けられないヨ！！後一步で成就するところだった！！！」

激情に任せて流刃若火を振るうが、人間の域では余程の事がなければアローニーロには中らない。斬撃とは別の炎が結構恐ろしいかったりするが、対応できないわけではない。

「水天逆巻け、掬花」

大量の波濤と共に掬花を振り下ろす。波濤はすぐに流刃若火の炎によって蒸発してしまう。そこに間をおかずに次の一手を指す。

「氷牙征嵐！」

冷気の渦が氷の嵐となって超に襲い掛かるが、これも流刃若火の炎によって瞬く間に蒸発してしまうが、立て続けに受けた冷却攻撃のせいで普通の炎程度に弱まっている。炎の勢いで若干掬花の勢いが殺されたが、掬花が超に届く。

「クウツ！！」

上段から下段への単純な一撃だったが、避ける事が出来ずに受け止める。体勢は悪くなかった、むしろ良い方だったが、身体能力がその一撃を受け止めきれぬ力を持っていなかった為に吹っ飛ばされる。いや、超は自分から飛ばされることで衝撃をなるべく逃がした。超は飛ばされながらも流刃若火を使って炎の斬撃を放つが、再び放たれた氷牙征嵐で弱められてから掬花で打ち払われる。

「城郭炎上！！！」

炎の斬撃を放つてすぐに、封印と言うより隔離に近い技を放つ。炎はアーク二口を包み、世界から隔絶させる。超にとっては一か八かの賭けだった。流刃若火には改造する時間が無かったのと、付ける魔力タンクが無かったから天鎖斬月と違って使い手の魔力を消費せずに能力は使えない。エヴァンジェリンに続いてアーク二口との戦闘で、先程放った城郭炎上で魔力はもうほとんど残っていない。いくらアーク二口とて、掬花と氷牙征嵐で炎を弱めたところであの炎の壁を通り抜ける事はできない。

「ハア…ハア…呪文詠唱を……」

なけなしの体力と気力を振り絞り、転移符を懐から取り出して指

定位置に移動する。立つ体力も気力も無いので地面に寝た状態で呪文詠唱を紡ぎ始める。

「甘いな。炎では、こいつを使うだけですぐに終わってしまう」

後ろから、正確に言うならつい先程城郭炎上を放った位置の方から声が聞こえた。

「『滅火皇子』エスティンギルカ！！！！」

超が振り向き、目線のさきにはクレイモアのような形状の斬魄刀である滅火皇子を手に持ったアーロニーロがいた。本物は流刃若火を封じる為だけに作られた存在の贗作を使って、炎を斬魄刀の内側に封じ込めたのだ。贗作である為に能力が低くなっているのと、炎全般を封じ込めれるように変えた所為で、封じ込めるに些か時間が掛かったが、問題無く効果を発揮した。

「城郭炎上を使いさえしなければ、戦ってる最中にこいつを使うつもりは無かったんだがな……」

残念だ、と言い動く事もままならない超の行動に確実に反応できる位置まで近づくと

「白伏」

鬼道で意識を混濁させて完全に超を無力化する。

「殺しはしない。聞きたい事があるんでな」

Side our

S i d e アーロニーロ

「さて、この状況をどうする？」

エヴァ達を閉じ込めていた城郭炎上を滅火皇子で封じ込め、全員救出した訳だが……

「一番良いのは無かった事にすることじゃが……」

今回の騒ぎは範囲が麻帆良学園全体という広範囲で起きた為に、記憶操作ではカバーしきれないだろうし、時間強制跳躍弾でちよつと先の未来に行ってしまうた魔法使いがいても足りんだろう。茶々丸の話ではまだ戻って来るまでに時間があるらしいが。

「しかし学園長、魔法生徒を動員しても手が回らないと思います。それに、一般人全員に記憶操作を掛けねばならないと考えると、絶対に時間と魔力が足りないでしょう」

正論だな。

「いまさらイベントだったと言っても、手遅れじゃろうし……何か良い案は無いかの？アーロニーロ殿」

話を振る相手を間違えているんじゃないのか？このじじいは……

「諦めて本国に救援を頼んだらどうだ？未来の英雄を差し出せば、元老院はよろこんで魔法使いをこっそりと派遣してくれるだろう？」

「それは駄目じゃ、この問題は儂等の問題じゃから本国には救援を

頼めん」

本当はネギを本国に渡したくないだけだろうに………というか、その儂等に俺も入っているのか？

「少しよろしいでしょうか、アローニー口様」

「何だ？茶々丸」

「実は、今回の騒ぎは超が魔法を世界にばらすという計画だったんです」

「なんと……恐ろしい事を……」

「そういえば、俺等は超が何を計画しているかをまったく知らずに戦っていたな……」

行動から世界樹の魔力を使って何かをしようとしているとしかわからなかったし、計画に関しての情報がまったく無かったからな。

「その計画の要となるのが強制認識魔法と世界樹の魔力だったので。幸いにも強制認識魔法の術式とその理論がしっかりであるので、それを変えれば強制認識魔法によって今回の件はそういうイベントだった、と認識させる事も可能だと思われます」

「それなら上手くいくかもな………世界屈指の魔法使いが4人も居れば、どうにかなるだろ」

幸いにも時間はダイオラマ魔法球で引き伸ばせるしな。

「しかし……皆が戻って来るのが22時頃なんじゃろ？ダイオラマ魔法球を使っても時間が足りんのではないか？」

「強引というか、普通ではやらない方法だがある程度は伸ばせる。ダイオラマ魔法球のなかでダイオラマ魔法球を使つてな」

俺が複数所持しているからできる荒業だな。

「それなら、できるかもしれんの。残る問題はどうやって今おる人達を帰らせないかだが……」

「仕方が無いから、出れなくなつて貰うしかないだろ。結界を張るなら、世界樹の魔力を少々使つたらうが」

人の出入りを防ぐ結界を張ればいいだろう。正義の為とか言えば、大抵の魔法関係者はそれでよしとするからな。こつちとしては思い付いたままに対応していればいい。他に対応のしようが無いというのもあるが……

「それほどの結界を張れるのなら、アーロニーロ殿にそれを頼もうか。そういえば、超はどうしたんじゃ？アーロニーロ殿」

「ああ、殺したよ。今回の騒ぎを考えればそれが順当だろ」

実際には聞く事があるから、ロープで縛って家に転移させたんだがな。

「……そう……か。それでは、各自対応を済ませて麻帆良学園祭を終了させようかの」

学園長の言葉を聞いてから、動き出す。ちなみに仕事は俺は結果を張るのと強制認識魔法の研究だ。面倒だが、仕方が無いか……

S i d e o u t

麻帆良祭 終局（後書き）

麻帆良祭自体は今回で終了。まだ後片付けが残ってるんですけどね。

彼女にとっての過去（前書き）

第65話

彼女にとっての過去

Side 超

過去を変える。少なくともタイムマシンがある今ならばそれは可能なんだろう。でも、母様は反対した。なぜか解らなかった、いつもどこか悲しさを滲ませる目で全てを見ているのを、過去を変える事で無かった事にできるというのに。

母様にとって「かけがえのない、ただ一人の人に帰って来て欲しく無いの？」と、聞いた事があった。

母様は「帰って来て欲しい」と言ったが、一緒にこうも言った、「その為に、娘であるお前を失う危険は冒せない」と……抱きしめ、泣きながら言っていた。絶対に成功しないと解っていたんだらう。

敵対したモノに容赦無い爺様相手に、私が勝てる訳がないと……

だけど、私は準備をして過去に旅立った。準備と言っても、爺様の遺品である斬魄刀で私が適性のある流刃若火と斬月と群狼に、使えそうな技術に、母様の手記と言つか日記に、換金出来そうな物品とかのようなどにかく役立ちそうモノを纏める位の事しかしてないが……意外にも、母様の従者が手伝ってくれた。

「約束して下さい。成功しようが、失敗しようが生きて帰ってくる」と

最初からそのつもりだったから、二つ返事で約束した。私からすれば第二の母親とも言える存在だ。

過去についてまずやったのは確認だ。手記通りなのか、タイミング的に問題無いのかなどの確認作業。

もしかしたら過去とは違う別の場所に来ているかもしれないから、怠れない作業だった。幸いにも無事に過去に連れていかし、平
行して進めていた入学なども問題無かった。流石に名前は元のを
えそうにないから、適当に決めた超鈴音を名乗り、ついでに口調も
変えて超鈴音と言う仮面を被った。なにも問題無く、進んでいた。

私は魔法使い達に睨まれていたが、それはなにも問題無い。予測
していた事の1つだし、派手に動かない限りは監視が関の山だろう。
私という存在以外は全てが手記通りに進んでいく、もしかしたら会
って話をするだけで未来を変える事はできるかもしれないが、確実
に人の一生を大きく変えるなら、世界規模それそうおの騒ぎにした方がいいだ
ろう。その為の計画もある、世界に魔法と魔法世界の存在を強制認
識させる計画が。これが成功すれば、間違い無く歴史が動き、多く
の人の人生を変えるだろう。その中に、確実に、変えたい人は含ま
れるだろう。

結果は失敗。だけど、きっと変わるだろう。全てを知って変わる
だろう。別に世界を救いたいわけではない、母様がまた笑うように、
自分のせいで死んでしまった爺様が、死なないようにする為だ。他
はついでだ、もしかしたら助かる命も出てくるかもしれないから……
……魔法世界を知っていれば、崩壊後に移民の受け入れをしたりす
るかもしれないし、戦争になったとしても母様と爺様は簡単に生き
残るだろう。

「夢、だったのか……………」

過去の回想。それも、未来から来る直前のモノとは少し思うところ

がある。…………どうやら、仮面が外れてしまったみたいだ。ヨとか
ネとかを付けなくなるのは随分と久しぶりだ……

ここは何処かと思って動こうとしたら嚴重に台みたいなのに縛ら
れているので、頭を動かせば怪しげな薬品や、生き物っぽいなにか
があるのが見えた。どうやらメノスの森の奥にある研究室みたいだ。

「目が覚めたか？」

「バツチリと」

いつからそこに立っていたのだろうか？すぐ傍にアローロニーロ、
いや、爺様が素顔で立っている。

「覗かせて貰った。記憶に改竄や植え付けられた跡は一切無かった、
つまりお前は俺の孫に当たるらしいな」

やっぱり見られていたようだ。

「疑わないのか？」

「斬月、群狼、流刃若火を調べたが、間違い無く俺が作った物だ。
それに、お前の荷物全てを回収して調べたが、その中に未来から来
たというのを信じられる物が幾つかあったからな」

「そう……か……」

当然だと思う。敵なら徹底的に潰すのが基本だ。ましてや油断し
ていたとはいえ、自分に一敗喰わせた存在がどの様なかを調べる
のは当然。

「爺様、ハカセはどうなった？」

「気掛かりな事はそれだけ、爺様にとってハカセはどうなっている存在だから。」

「今回の事件に葉加瀬聡美はなにも関わって無い、それが事実の一つだ。それと、超鈴音は俺に殺されて既に居ない、これも事実の一つだ。全ての罪は超鈴音に被ってもらおう」

「ありがとう……爺様」

「フンツ。未来で俺はなぜ死んだ？」

「私を庇って頭部を刃物で貫かれたことによる即死。ほとんどの怪我を治せる補肉剤でも効果は無く、死んでしまった」

「俺にお似合いの最後だな……誰かに殺されるとは……」

「自業自得だと思っている？確かに他人からしたら酷い人だ。でも、家族にとってはかけがえの無い人だ。」

「それを回避する為に未来から来た。油断すれば今回のように足元を掬われると……警告する為に」

「それだけなのに、随分とでかい騒ぎにしたな」

「こつこつ騒ぎでなければ長くは憶えていられない。それに、計画が成功すれば不確定な未来は確実に変わる。尤も、爺様に殺される確率が高かったが……」

「……………いくらなんでも、いきなり殺しはしない」

「嘘だ！母様がよく話を聞いた！敵と認識したら相手が何であろうと殺したと、それに人をぶちのめしといてそれは無い。まほら武道会でも楽しんでいた」

映像は全て見ていた。流石に幻想空間内は見れなかったが、中である程度は楽しめる戦いをしていただろう。

「それより、これからどうするつもりだ？」

「帰る、そう約束をしたから」

来る前から決まっていた事だ。……………帰ったら間違いなく母様の愛のムチを受けるだろうが……………

「これで、未来は変わると思う？爺様は帰った時にいるだろうか？」

「知るか。だが、少なくとも何かは変わっているだろう」

爺様が判るはずが無いか……………願わくば、望む結果になっていることを。

Side out

Side アーロニーロ

タイムマシンとかは正直に言って信じられなかった。しかし、実物が目の前にあったり、信用するに値する情報があるなら、信じるしかない。まあ、使える状態が限定されている未完成品に大した興

味も無い。

「ここでお別れか……」

「達者で暮らせよ?」

「疑問形なのはなぜ?」

「いや、成功しているのなら、向こうで俺が待っているんじゃないかと思つてな……」

「あつ!愛のムチが2倍、いや!2乗の可能性が!……」

元の数値は知らんが、2乗では凄い事になりそうだな……

「覚悟を決めるしかない……今迄計画を最優先にして修行を甘くしていたが、調整すれば私が旅だったすぐ後に跳ぶ事も可能はず……」

……大丈夫なのだろうか?

「ハア……諦めよう。例え跳べたとしても、成長具合でどの程度の期間居なかったの判別される……。ああ、爺様別れる前に頼みごとさせてもらうよ、群狼は真名に報酬の一部として渡したから、群狼は真名に返しておいて欲しい」

「まあ、いいだろう。これは今の俺の物では無いしな」

嵩張るこれを持ち歩くようになるか甚だ疑問だがな……

「今度こそ、お別れ」

「会う事はもう無いだろう」

消えるのを待ち、完全に消えるのを待ってからその場を去る。そういえば、魔法関係者の集まりがあったな。

「今回の件での一番の功労者はアークロー殿じゃな」

超鈴音は魔法を世界にばらそうとし、俺がそれを止めるべく殺した。それを事実としているから、そんな学園長の言葉に頷く奴は居ても、反対する奴は居ない。英雄であり、立派な魔法使いである俺がやった事を正しいと思いついでいるのがほとんどだ。もちろん、少数だが疑問に思っている奴がいる。自分の受け持ちの生徒を殺された事になっているネギに、超のクラスメイトの娘がいる明石教授とかな。本物の正義を目指しているのなら、それが当然なんだろうが、そういう奴等以外は誰もそう思わない。

「なにか質問や疑問がある者はおるか？……ふむ、解散とする」

解散の言葉と共にほとんどが帰路につくが、中にはすぐに帰路につかずに留まる奴もいる。そいつらは人が居なくなると同時にこっちに来て

「歯をくいしばれ！」

明石教授の渾身の右ストレートが顔面に叩き込まれる。どういう気持かはなんとなく解るから、大人しく殴られる。それでも、鋼皮のせいで殴った明石教授のほうがダメージが大きいのだが……

「なぜ殴られたか、解っているだろう。アローニーロ」

「嫌って言う程にな」

手でエヴァを制止しつつ立ちあがり、見据える。

「だったらなぜ！」

「あれほどの事をして、そのまま済むと思うか？」

明石教授は言葉に詰まる。当然か、理解はしているが、感情では赦せない。と、言ったところだろう。

「一生幽閉か処刑、あれほどの事ならそうなっても可笑しくは無い。解っているだろう？」

「そう……だが！……」

「それとネギ、お前の話は今度聞いてやるから今日は止める」

「え？あ、はい」

やはり、こんなことで尊敬の目で見られるのも、怒りの籠った目で見られるのも気分の良いモンじゃないな。

S
i
d
e

o
u
t

彼女にとっての過去（後書き）

次どうするか……

なにか話を挟むか、いきなり魔法世界に直行して完結？させるのか
……なんか夏休み中に終わりそうな勢いだな。

日常？ 微妙に動く（前書き）

第66話

日常？ 微妙に動く

Side ネギ

なんで超さんが殺されたのかのは学園長の話でなぜかは知っている。でも、いくらなんでも殺す必要はないと思っていただけ、アーロニーロさん達は殺されて当然だと言う。

なんで？アーロニーロさんは立派な魔法使いなのに、罪を犯した超さんを救うのではなく、殺した？

立派な魔法使いを目指している魔法先生達のほとんどはそれを疑問に思わずに受け入れている？

解らない、解りたくない。そんなのが正義なんて、救えたかもしれないのに切り捨てるなんて……父さんなら、父さんならそんな事をしないで救ったはずなんだ。魔法世界を救ったように……

「師匠、僕が間違っているんでしょうか？……」

間違っているのではないか？その疑問に答えてくれそうな人物として、真っ先に思い付いたのが師匠だったので、いつものように修行来た合間の休憩時間に今回の件を聞いてみた。タカミチは出張で居ないし、学園長とアーロニーロさんはそんな相談をするような間柄ではないので消去法でそうなったとも言えるのだけど……そういうえば、魔法関係者の集まりに師匠が参加してなかったのはなんでだろう？

「いえ、ネギ君は間違っていない。ただ、価値観や考え方の差で

しょう」

「価値観や考え方の…差？」

「はい。立派な魔法使いと一言で言っても、紛争地帯でそれを止めるべく行動する者、あらゆる怪我を治せる薬を開発した者、国を守るべく行動する者、画期的な術式を組み上げた者、どれも立派な魔法使いになりえます。しかし、どれもやること成す事は違いますし、考えが違います。戦うだけが魔法使いの本分ではありません。魔法を使ってなにかを成す事が魔法使いの本分です」

たしかに、そうかもしれない。でも、僕が感じたのはソレなのだろうか？

「知識だけでは限界がありますから、実物を見たり触れられたりすれば良いんですがね」

見たり、触れたり……

「師匠、魔法世界に行けば見れるでしょうか？」

少なくとも、麻帆良学園よりは多くの魔法使いを見て、触れるはず………そうすればもしかしたら自分にとっての答えが掴めるかもしれない。

「……向こうは此処より遥かに危険ですよ？それでも行くのなら私は止めませんが、私以外の大人にもシツカリと相談してから決めてください」

師匠以外の大人の人か……今すぐ相談できる候補は学園長にア―

ロニー口さんだけど、どちらも相談できるような人じゃない。夕カミチが出張から帰って来るまでに考えを纏めておこう。

Side out

Side 千雨

「なんつーか、随分と変な面子だよな？」

私、さよ、明日菜、木乃香、刹那、真名の6人で新作のパフェを食べてたりする。ホントに変わった面子だよな、別に仲が悪い訳じゃないけど仲良くパフェを食べるために集まるような仲では無いしな。

最初は真名が相談があるって事で私とさよに話を持ち掛けてきて、カフェに入って少ししたら明日菜、木乃香、刹那の3人が来た。こっちは聞きたい事があるらしい。

「確かにそうやね。今までこの顔触れと一緒にパフェなんて食べたことあらへんしな」

「それより、新作のパフェなんて私達に奢っていいの？」

「それは私も思うね。そこまで高くはないけど、簡単に奢るような値段ではないしね」

「問題ありませんよ？アローロニー口さんから十分にお小遣いを貰っていますし、臨時収入もありましたし」

「そう、なんですか」

さよ、エヴァンジェリン、茶々丸は解るけど、なぜか師匠は私にもお小遣いをくれるんだよな。臨時収入は学園祭で協力したから師匠経由で学園長から貰ったんだよな。前回のもまだ使いきってないからとりあえず貯めるているんだけどな。

「とりあえず、相談があつたんだよな？それはどうした？」

「ああ、そうだったね。実はね、アローニーロに口添えして欲しいんだよ。私がいきなり頼んでもあの人は受けてくれそうにないからね」

まあ、そうだろうな。私はエヴァ以外の頼みを聞いているところ以外は見た事ないけど。

「内容次第でしょうね。アローニーロさんは興味がなければ放置するのが普通ですから」

「まあ、伝えて欲しいこと位は伝えるぜ。さよが」

「なんで私なんですか?!」

「いや、お前は師匠の家に住んでんだろ。帰ったら伝えればいい話だろうが」

なぜ、なるほどという顔をするんだよ……てか、思えば伝令神機で伝えればいい話だよな？

「頼みたいのは、この前返してもらった物を常に持ち歩けるようにコンパクトに出来ないか。だよ」

「それってもしかして……」

「？さよは物に心当たりがあるのか？」

「わかった。ちょっと待ってる」

伝令神機を取り出して、手早くメールを打って送信する。

「アローニー口は携帯を持っているのかい？」

真名が意外と言わんばかりの表情で聞いてくる。何百年も生きてから老人が機械に疎いみたいに、師匠もに疎いと思えわれているのか？携帯だろうと、パソコンだろうと普通に使いこなしているんだが。

「普通に持つてるけど……おっ、返信が来たぞ。土日以外の午後5時までに来ればしてやるって」

「それは良い話だ。今度行かせてもらおうよ」

「そう言えば明日菜さん達は何を聞きたいんですか？」

話の邪魔をしないように黙っていた明日菜達にさよが話を振る。

私達に何を聞きたいのだろうか？師匠関連の話だろうか？

「いやさあ、超が転校したでしょ？学園祭で騒ぎを起こしたのはあいつだったから、転校は嘘って判っているから本当はどうなったか知りたいのよ。なぜかネギは言いたがらないし」

場の空気が凍る。私もさよもどうなったかは知っている。雰囲気

から察するに真名も知っているんだろうが、本当ならそれは魔法先生達しか知っていないはずの事だが、私達は跳ばされてなかったの
で知っている。

「え、なに……聞いちゃいけない事だった？」

「ああ、私達は知らなくて良い事、知ってちゃいけない事だ……」

師匠が殺したなんて言える訳がない。人が死ぬなんて当然のこと
だが、多少でも親しい奴だったらそれが大きく影響する。それに、
殺されて当然と思われるんだから……

「知る必要も、意味も無いからね。例えば、保健所に連れていかれ
た犬や猫の辿る道とか……」

真名の例えが明らかに狙っていやがる。そんな的確すぎる例えを
言わないで欲しい。

「……………私はなにも聞いて無い。それでいいわよ……………」

「そうしてくれ……………」

空気が、重苦しい……………

「あの、私も聞きたい事があるんですけどいいですか？」

「答えられるのなら」

「まほら武道会に出てたワカメ大使と名乗っていた人はアーロニー
口さんの関係者だと思っっているんですが、また会えないかと思いま

して」

まさかのワカメ大使！？……そういえばまほら武道会で刹那はワカメ大使に負けていたな……再戦希望か？

「見事な太刀筋でしたので、できれば再び手合わせをしたいのですが……無理でしょうか？」

「無理、だと思えますよ？ワカメ大使は刹那さんに微塵も興味がなさそうでしたので」

ワカメ大使が興味あるのはさよの事だけじゃないのか？

明らかにさよには優しいし、まほら武道会に出たのはさよに誘われたからって言ってたし……

「そうですか……せめて本名だけでいいですから教えてもらえませんか？」

「は？ワカメってストップ！」

さよが言い終える前にその口を塞ぐ。ワカメ大使が本名と言うのは明らかに常識から外れているし、正体を考えると正直に話してもいいかどうか判らない。

(……おい、なに言おうとしてんだ！)

(いえ、ワカメ大使が本名って教えるつもりですけど？)

(あいつは特別だし、ほいほい教えていいことか?!)

(教えても良いんじゃないですか？アールローニーロさんは隠していませんよ？)

(私達にはそうだが、その他の奴にまでそうかは解らんだろ！)

「あの……」

コソコソと話している私達に刹那が申し訳無さそうに話し掛ける。

「悪い、それは私達が勝手に言っちゃいけないことだと思っから言えない」

「そう……ですか……」

残念そうな顔をしているが、本当の姿をみたら下手すればそんなんじゃないぞ……

S i d e o u t

日常？ 微妙に動く（後書き）

最近感想とかが来なくて若干「あゝ」とか思ってる。

駄目だしでもいいから感想待ってます。悪口みたいなのが来たら流石にそれは削除とかがしますが。

日常？ 相談（前書き）

第67話

感想 狐唄様、空箱様、かにかま様、開け！ごまドレ様
ありがとうございます！

ちなみに今、ホクホク顔だったりします（感想が嬉しくて）

日常？ 相談

Side アーロニーロ

出張から帰って来たタカミチが相談があると言ってきたので、バーの隅っこで一緒に軽く酒を飲んでいたりする。ホントは違うところで飲む予定だったんだがな……

「ネギが魔法世界に行きたいと？」

「そうなんですよ、アーロニーロさん。反対、すべきでしょうか？」

「タカミチ、お前はどっ思っているんだ？結局はお前の意見だ、俺が口出しする事ではない」

「個人的にはネギ君の意思を尊重したいです。しかし、魔法世界は安全とは言い難いですし……」

奴隷法があつたり、こつちには無い病気があつたりするからな。尤も、法律や意識の差は外国なら普通にあることだが、それをあいつ等が意識するとは思えん。

「ネギについて行くと思われる連中が居る事と、明日菜か？」

ネギも大切だろうが、こつちも大切だろうに……黄昏の姫御子様がないな。

「はい……完全なる世界はおそらくまだ滅びていないはずなので、できれば明日菜君を麻帆良学園から出したくはありません。まして

や、敵の本拠地がある魔法世界ならなおさらです」

「敵とは完全なる世界の連中か？それとも元老院共か？」

両方だろうがな……完全なる世界にとってはネギは精々邪魔になるかもしれない存在だが、黄昏の姫御子であるアスナは重要な鍵のはずだ。代わりを作ったり、見つけたりはしていない限りは。

元老院は両方を手に入れたらだろう。今なら傀儡にできる未来の英雄に、魔法完全無力化能力を有する黄昏の姫御子をな。元老院がどう使うかは知らんが、どうせ私欲を満たす道具にされるくらいだろう。

「……明言しなければなりませんか？」

「いや、必要無い」

なに、解っている。タカミチにとっては味方と言えるのは紅き翼連中だけだろうからな、クルトとジャックは少し怪しいがな……

「魔法世界に行って何をするつもりかは知らんが、今のままではほとんどが死体で帰ってくるだろうな」

冗談では無い、むしろ死体が戻って来た方が幸運だろう。もし、紛争地域に行けば人の命なんて簡単に消し飛ばし、平和ボケしている日本人思考で行けば身ぐるみ剥がされて殺されるのは十分にあり得る。

「縁起でもない……」

「タカミチ、お前は十分に知っているはずだろう？20年前には戦

争中だったが魔法世界に居たんだろうが、それに戦争が終わった後の2年間も魔法世界に居ただろう？あの時よりは治安は良くなっているだろうが、ナギの息子であるネギが物見遊山で行けるような安全な場所か？」

流石に街のすぐ傍で魔物が出たりはしないだろうが、ゴロツキはどの街にも居るからそいつらが偶々ネギを獲物にして殺しかねない。不安要素を上げていけばキリが無いが、少なくとも安全な場所では無い。

「……………護衛が必要かもしれないですね」

「護衛より、まずは魔法世界についての知識を叩き込め。それに、あいつ等を守って無事に帰ってこれるような護衛は居ないだろうに……………」

まず本人達に知識が無いと話にならないだろうに……………それに護衛をできる奴がいるのか？

「アローニーロさんならできるんじゃないのですか？」

「できたとしてもやらん」

学園長が根回しをしないように後で釘を刺しに行くか……………いくら俺でも、麻帆良学園の魔法関係者全員にネギの護衛をして魔法世界に行くと思われたら雰囲気に行かざるおえないだろう。なにが悲しくて、ネギの護衛をしなければならぬのだ……………

「お、見つけたぞ。父様」

「来たか」

「エヴァンジェリン？」

歳はおおよそ20代前半の金髪の美しい女性がこちらに笑いながら歩いてくる。まあ、エヴァなんだがな。

「なにが悲しくて男と2人で飲み続けるんだよ」

「……………（男の友情とかは無いのか？）」

「そういう訳で、私も参加するぞ」

「別に構いませんけど……………」

適当にエヴァの分とおかわりのカクテルを頼み、全員にグラスが満たされる。

「では、乾杯といこうか？父様」

「そうだな、なにに乾杯する？エヴァ」

「では、良い夜に」

「良い夜に」

タカミチを無視してエヴァとグラスを軽く打ち合わせてカクテルを煽る。

「そつえば、タカミチは父様になんの相談をしていたんだ？」

「ネギ君が魔法世界に行きたがっているのをどうするべきかを」

「下らん事で私と父様の時間を削るな」

ホントならエヴァと飲む予定だったから、少しエヴァはタカミチに怒っている。珍しいという事でこっちを俺が優先したのが原因だが、エヴァはそう思っていない。

「下らんって、重要な事だ。ネギ君はナギさんの息子なんだから！」

酒が入っていることでタカミチの気が少し大きくなっているみたいだな。エヴァにそんな口を訊くとは。まあ、ネギ関連だと英雄を神格化しそうな奴ならそうなるんだが。

「私にはあのぼーやの事が解りそうで解らんわ！父親が好きなのは解るが、ぼーやが見ているのは英雄 ナギ・スプリングフィールドと言う虚像ではないのか？！しかも、それをどいつもこいつも助長させている！だいたいお前等正義の「エヴァ、止める」……わかっただ」

エヴァが言っている事は正論だろう。だが、こんな所で声を張り上げて主張する事ではない。

それに、エヴァは自称正義の魔法使いを良く思っていない、何百年と執拗に殺そうとしてきたのだから当然なのだが、20年前に英雄になった途端にそれを忘れたように好意的になったのだ。一部以外は存在自体が気に入らないのだろう。俺は別にそういう訳ではないが、自称正義の魔法使いだからといってどうするわけでもない。あくまで、そいつ次第だな。

「喧嘩なんて馬鹿らしい。それより、少し提案があるんだが？」

「提案？」

（悪人の目をしている……）

「なに、ネギとその仲間になるモノだ。きっと、無駄にはならないはずだ。尤も、それを受けるかはネギ達次第だ」

なに、多少楽しませてもらうだけだ。

S i d e o u t

日常？ 相談（後書き）

繋ぎ回。 前回もそうだったけど気にしない。

日常？ 刹那とワカメ大使（前書き）

第68話

前書きに質問を書くのは個人的にどうかと思っているので、後書きに質問を書いております。

日常？ 刹那とワカメ大使

Side アーロニーロ

俺の提案は受け入れられ、やることになった。思い付きだから別に受け入れられなくても良かったのだが、コレはこれで面白い事になるだろう。

「おっ、よかった。師匠、私の部屋のクーラーが壊れたから修理の手配してくれないか？あと、さよに幽体離脱しているときに人に憑くのは止めるように言ってくれ。憑かれると寒気がしたり、肩が重くなるんだよ」

ちなみに千雨は長期休暇中は寮ではなく、俺の家で寝起きしている。

「クーラーの使い過ぎは体に良くないが？まあ、すぐに修理の手配はするが……さよの件は本人に言えばいいだろ」

言っても聞かないだろうがな。

「見えない相手にどう言えと？」

根本的な問題だったな。霊体のさよはほとんどの奴に見えない、千雨もそのほとんどの奴に入る。

「食事の時は義骸を着ているだろ。その時に言え」

さよが霊体で居る事はさほど珍しくない。夏では「義骸を着て無ければ暑くありません！」とか言って霊体で居る事がほとんどになる。その間は義骸は俺に預けている。

「てか、あいつは霊体でなにをやってんだよ」

「この前は壁を歩いて遊んでたな」

霊体でないとできない事をやって楽しんでいるんだろう。

「……………（ホントになにやってんだよ）」

「そう言えば……………昨日、刹那がワカメ大使と再戦したいと言ってたとかあったよな？」

「ああ、あったけど」

「暇だから刹那を連れて来い。望み通りにワカメ大使と再戦させてやる」

「師匠が自分で連れて来たらどうだ？探知能力で居場所なんてすぐに解るだろ、私には解らないんだから（それに、この炎天下の中を歩き回るなんて冗談じゃない）」

「……………それもそうだな。無駄に時間を掛けさせるよりはそっちの方が良いか。」

「暇潰しの為に捜してくるから、留守番を頼むぞ」

「了解」

「ワカメ大使と再戦させてやる」

「は？すみません、本当ですか？」

「ああ、本当だ。これでも一度も嘘を言った事がない」

「えっと、今からですか？できれば別の機会にしたんですが……ちよつとこのちゃんと約束がありまして……」

「機会は今回だけだ」

「そ、そんな……」

「それやったら問題あらへんよ？うちがせつちゃんの用事に付き合えばいいだけやもの」

刹那が木乃香に「ありがとう」と言いながら手を握り締めている。
……気のせいだろうか？百合の花が咲いてるようにみえるのは？

Side out

Side 第三者

そうして決まった刹那のワカメ大使との再戦。開催場所は勉強部屋、観客はアローロニーロ、エヴァンジェリン、さよ、木乃香の4人。

相対する刹那とワカメ大使はどちらも正装で、ワカメ大使は麻帆良祭のときのように人間の姿である。すでに互いに刀を抜き、臨戦態勢で開始の合図を待っている。

「では、開始！」

開始の合図と同時に駆け出して互いに距離を詰める。

火花を散らしての鏝迫り合いになるが、すぐに互いに距離を僅かにとって再び刃を交える。

「斬岩剣！！」

刹那が神鳴流奥義である岩をも真つ二つに斬れる一撃を繰り出す
が、岩を斬れる程度では千本桜は斬れも折れもしない。ワカメ大使はそれを受け流し、突きを繰り出す。僅かにかすり、刹那の頬に紅い線をつける。

「なぜ本気で来ない。前は一般人の目があったからいた仕方がないと判断したが、今回は見られようと問題のない者しかない。だというのに、なぜ本気で来ない」

ワカメ大使も本気を出していないが、それは実力に差がありワカメ大使が本気で掛かれば一瞬で終わってしまう。それだけは絶対にしないようにとアローロニーロに言い含まれているが、今すぐにも刹那を斬って捨てようかと考えてしまう。

理由は簡単な事だ、刹那が本気で来ない事。まほら武道会で手合わせしているので、ワカメ大使は今の状態では刹那の刀は自分に届きはしないと解っている。それは刹那も解っている、というのに本気で来ない。それはワカメ大使にとっては耐えがたい侮辱にしかない。小手調べはまほら武道会ですでに終えている。なら、殺し

てはならないというルール以外はない現状では、格下の刹那が最初から本気で来るのが普通だとワカメ大使は考えていた。

「アデアット」

白い翼と自身のアーティファクトたる建御雷タケミカズチと七首・十六串呂を出し、ワカメ大使を見据える。

その目は相手を嘗めている目では無く、相手に畏敬の念を持っている目である。戦うのであれば畏れる存在、曇りの無い太刀筋には尊敬する存在。刹那の中でのワカメ大使の位置付けを目がよく物語っていた。

「失礼しました。本物かどうか判断すべく、本気を出していませんでした。こういうことで、アーロニーロさんを信用していいのかと思っていたので」

（あれ？俺なんか刹那にやったか？）

（あれじゃないか？いつだかの試験の時にぼーやが混乱すると解っていて、ナギ・スプリングフィールドの姿になっただろ、その時みに誰かがあの格好にさせられているとか考えたんだろ）

（姿を変えているという点では間違っていないな……）

外野（アーロニーロとエヴァンジェリン）の話など耳に入らずに刹那とワカメ大使が火花を散らして剣を交えている。

七首・十六串呂による多方向からの攻撃と刹那の京都神鳴流の技によってワカメ大使の服に刹那の攻撃が掠るようになっていく。だが、それは刹那を焦らせた。どの攻撃も服より下にはまったく触れていないのは避けられているとの変わりない。

「真・雷光剣！！！！」

選択は決戦奥義。避けられるのなら、避けれない攻撃をすればいい。七首・十六串呂によつて逃げ場を塞がれ、迎え打つのは危険と判断したワカメ大使は、塞がれていない唯一の逃げ場の空中に跳んで真・雷光剣を避ける。刹那はすぐにそれに反応して飛んで追いつがる。空中でも全力を出せる人間は少ない。魔法使いの中には飛べる者が多くいるが、あくまで移動手段として使う者が多く、戦闘ではしっかりとした足場がある場所で戦うのが普通である。それ故に、空中は自分の独壇場と考えて小細工無しの全力の一撃をワカメ大使に叩き込むべく一直線に突き進む。

だが、自分の独壇場なんて刹那の考えは木端微塵にされた。足場の無い空中なら踏ん張りのしよう無いから腕力の差があつても、勢いのついた刹那の一撃にワカメ大使は簡単に押し負ける。だが、刹那が押し負けた。

「なん……だと……？」

「何を驚いている。なにも無いはずの空中で私が立っているのがそこまで不思議か？」

刹那が知りようのなかった事だが、ワカメ大使は数少ない空中でも全力のだせる人間？であった。

足場を瞬時に作り出し、空中であろうと地に足がついているときと、なんら遜色のない行動が可能である。

「ワカメ大使、もう良いぞ」

アーロニーロの一言を聞き、ワカメ大使が目を見開く。

「桜咲刹那、これには驚くな。そして、相手の容姿に惑わされるな」

そのような言葉と共に身に付けている腕輪に手を伸ばし、外した。

「な……」

刹那は言葉を失い、頭が真っ白になる。相手が先程まで戦っていた男の面影など何処にも無い、バケモノとは言い難いが、妖怪と言った方がいいようなワカメに手足を生やした異形の姿に変わってしまったのだ。

戦って負けた過去が無ければ、そのような事にならずに切り捨てようとしたであろう。だが、相手は間違い無く尊敬する存在に値する太刀筋である妖怪（？）である。そして、心のどこかで納得するあの見事な太刀筋は妖怪として長い時間を生きて磨き上げた技だからあそこまで研ぎ澄まされているのか…と。

しかし、相手がどれ程強かろうが、どれ程の技術を持っていようが、人は見た目でまず考えてしまう。今回の場合は、「ワカメの妖怪に負けた」と。相手を見た目で判断しなかった大人であれば、そのような考えは出ずにそのまま戦ったであろう。しかし、刹那はそこまでできていない為に、ワカメの妖怪に負けたので軽い自己嫌悪に陥る「妖怪の方が強いのは解る。でも、ワカメの妖怪に負けるのはありえない」などの考えが頭の中をぐるぐると回って、ワカメ大使は本来の姿に戻っただけだというのに、刹那は戦意は底辺にまで落ち、最後にワカメ大使が本名であることを理解して模擬戦を放棄した。

Side out

日常？ 刹那とワカメ大使（後書き）

刹那がワカメ大使に再戦する話でした。開け！ごまドレ様の要望により刹那がワカメ大使の絶望の姿を目に！元関西だとワカメ大使はワカメの妖怪と判断してもおかしくありませんよね？

質問は、とつとと魔法世界入りでもするべきでしょうか？それとも日常？をもう少し挟むべきでしょうかね？

日常？ 遊ぼう（前書き）

第69話

感想 大之様、狐唄様、開け！ごまドレ、オイラム様、
u n l i m
i t e r 様

ありがとうございます…！

日常？ 遊ぼう

Side エヴァンジェリン

夏休みか……考えてみると特にやるような事が思い付かない。冬だろうと泳ぎに行こうと思えば別荘で泳げるから、わざわざ市民プールに行く必要は感じない。そもそも、炎天下の中を歩いて出掛けようとは思えない。そんな訳で自分の部屋でゴロゴロしながらクーラーをガンガンにかけてアイスを食べている。

個人の部屋に小さい冷蔵庫を設置してあるから、冷房の効いてない廊下を通って台所にある冷蔵庫にわざわざアイスとかを取りに行かなくていいのは本当に便利だ。私の場合は影の倉庫にしまっておくという手もあるが、流石にそれは少しどうかと思うのでしない。

「マスター、クーラーを使っている状態でアイスを食べるとお腹をこわしてしまう危険性があります」

自分の部屋があるのになぜか私の部屋にいつも入り浸っている茶々丸が警告してくるが、心配は無用だ。

「安心しろ茶々丸、不老不死の真祖の体はこの程度では腹がこわれるような作りにはなっていない。極寒の状況でも寒さを感じたりはしたが、腹をこわしたり風邪をひいたりしたことは一度もなかった」

大紅蓮氷輪丸を使いこなすための修行中に、氷漬けに近い状態に何度もなったりしたが、休めば何の問題無く体は全快した。

「しかし、あまりにもだらしないうちをしているとアローロニー口様に呆れられてしまいますが」

……一理あるな。

「しかし、やるような事がない。夏休みの宿題はすでにやってしまった」

「運動や読書はどうでしょうか？」

「運動といっても炎天下の中やるのか？読書も読むのに良い本がない。服を作るという案もあるが、気乗りしない」

「いつそのこと新しい魔法や技でもつくるか？永久氷結魔法とか……」

「それでは、クラスの皆さんとどこかに遊びに行くというのはどうでしょう」

「騒いで楽しいかもしれないが、流石にすぐにはできないな。相手の予定があるしな。まあ、ノリの良い連中だからタダで遊びに行けるなら簡単に喰い付くだろうが……」

問題は何処に遊びに行くかになるな……海、山、川、森、プール、カラオケ、ボウリング、ショッピング、映画、このくらいか？

「とりあえず、行きそうな連中に声をかけておくか」

夏休みで寮に残ってる連中は遊びに飢えているだろうから2つ返事だろう。

「お供します、マスター」

「うっし！勝負するぞ！吸血鬼のねーちゃん！」

なんで私は友達を遊びに誘いに行つて、狗のハーフと勝負することになっているのだろうか……自重しろ小狗。

「待て、お前は女は殴らない主義だろう？」

吸血鬼は女じゃないと言つたら、去勢してやるつ。

「……そうやけど、自分より強くて手合わせができる相手がおらん
のやー！」

あー、あれか。強い奴に挑みたいが、相手になつてくれそうなのが私くらいしか居ないと……殴らないで手合わせなんてどうやってやるつもりかは知らんが、やるつもりは無い。

「他をあたれ、タカミチとか」

タカミチなら男だし、タカミチ以外には迷惑にはならない。強さ
でいうなら父様の方が適任だろうが、父様も相手にしないだろう。

「接点の無い奴にいきなり話し掛けられへんわ！それに、俺はその
オッサンは麻帆良祭以降一度も見た事ないわ！」

タカミチは相変わらず出張で頑張っているみたいだな。

「ガッア……………！」

「私と手合わせしたかったら、初撃をどうにかできるようにするんだな」

鳩尾に一撃を入れて無力化する。せめてこれくらいは防げないと、手合わせにならない。

「フンツ……………弱いな」

……………京都で会ったときよりは強くなっているようだが、それでもまだ弱い部類だ。

茶々丸が蹲っている小狗に掛けよって、獣耳をさわりながら検査をしているようだ。検査などせずともいいというのに。力加減は完璧だ。

「茶々丸、そんな奴は捨て置け」

「解りました」

寮に普通に入って目的の部屋に向かう。どうせ暇だから部屋でなんかやっているだろう。

「遊びに来たぞ、明日菜に木乃香」

「ノックぐらいしなさいよ……………」

「なんや、エヴァちゃんがこっちに来るのはえらい久しぶりやな」

「自重してしてたからな。ぼーやにあまり関わると碌な事にならん
と思っただな」

アレは元老院とか英雄の息子という肩書きで疫病神に近いモノを
持っているからな。まあ、元を考えればこの2人は関わってないの
が不思議なくらいだから。どっという訳かえらくぼーやにのめり込ん
でいるが、本人の問題だから特にとやかく言うつもりは無い。

「なんや、てつきりネギ君が嫌いやから来ーひんと思っただわ」

「別に嫌いなわけではない。それより、明日にでも一緒に遊びに行
かないか？」

「パス。合宿前に出来る限り夏休みの宿題を終わらしときたいから」

「合宿？」

「ああ、エヴァちゃんは知らへんね。白き翼っていうネギ君の目的
達成のお手伝いをするクラブみたいなもので29日に合宿をするん
だよ」

また変な事をしているな……名前に紅き翼のパクリか？

「まあ、頑張れ」

久々に遊ぼうと思っていたのだが……仕方ないからいつもの面子
(私、茶々丸、さよ、千雨)で遊びにいくしかないな……明日は父
様は仕事のはずだからな。

「ボウリングに明日行くぞ、さよに千雨」

「私はいいですよ」

「パス」

付き合いが悪いな、千雨……

「理由は聞いておこうか？」

「服を作ってるんだよ。こだわって作っているから時間が掛かるんだよ」

「手伝ってやるから明日はボウリングに付き合いえ」

「どうせ全員がパーフェクトゲームをだして勝負にならんだろ」

全員が体の動かし方を解っているから、カーブは出来なくてもストリートで絶好の位置に中てられる。

「勝負をしに行くんじゃないに決まってるだろ。折角の夏休みだから子供組で遊びに行くんだ」

(齡^{よわ}600越えの吸血鬼、ガイノイド、60年位前に死んだ幽霊、どれも子供と言えない気がするんだが……)

Side out

日常？ 遊ぼう（後書き）

ボーリングをエヴァ達で次回やります。アーローニーロ不在で偶には行こうかとちょっと思っています。

日常？ 4人（前書き）

第70話

日常？ 4人

Side 第三者

体をイメージ通りに動かすのは意外と難しい。例えば、目を瞑ってチヨウチヨ結びするとやり慣れていないとどうしても形が崩れてしまう。そして、動かす体の範囲が大きくなると比例して全てをイメージ通りに動かすのは難しさを増す。だが、体をイメージ通りに動かせれるというのは大抵の場面で役立つ。

手先が器用とかいうのは、イメージ通りに動かせるに近い。まるで機械のような精密の動きができれば、外的要因の変化がない限りは同じ結果を出せるのだ。それはボウリングのような完全に決められた状況でかなりの強みである。ただ、全員がそれを出来ると決まりきった結果にしなければならないのだが……

「全員連続ストライクか……解っていたが、こういうので予想通りすぎるのも面白くないな」

流石にカーブは練習をしなければ投げられないが、カーブでなくともストライクは取れるので全員が連続ストライクを出して同点になっている。例え遊びであろうとも、誰も手を抜くつもりが無いのだ。

「だから嫌なんだよ。この結果は目に見えてたから」

千雨はそう言いつつも、集中して狙いをつけ、理想的なフォームでボーリング玉を投げて綺麗にストライクを取る。

「なにかやりますか？決められた状況を作りだすとか」

「ボーリングの遊び方ではありませんが、このまま全員でフルスコアを出してもつまらないと思えます」

唯一カーブを使ってストライクを出している茶々丸もさよの意見に賛成し、そこから間違った遊び方が始められた。ガター（ガーターは誤り。Wikiより）にならないようにギリギリでボーリング玉を転がしたり、斜めに一列だけ倒したり、スプリットをわざわざ作ってそれで全部倒してスペアを取ったり。

「……………なにをやっていたんだろうな、私達……………」

思い付きというのはやっている時は面白かったりするが、一時的な面白さであることが多い。それを後になって思い返すといたままれない気持ちになったり、後悔したりする。今まさにエヴァンジェリンはそういう心境であった。

「エヴァさんが一番ノリノリだったじゃありませんか」

「今は一番テンションが低いけどな」

ベンチに座って後悔しているエヴァンジェリンに、生温かい視線を向けるだけでさよ、千雨、茶々丸の誰も慰めようとはしない。下手に慰めても逆効果と知っているからの対応で、慰めるのがめんどくさいとかそんな非情な理由では無い。茶々丸は珍しい主人の姿をしっかりと録画をしてたりする。

「次どうする？」

「エヴァさんが何かを決めていたりしますか？茶々丸さん」

「いえ、マスターは皆さんの意見を聞きながら決めるつもりだったはずですよ」

「とりあえず飯にしよう。その辺のファーストフード店でいいだろ、お持ち帰りで」

この面子では誰かが奢るなんて絶対にしない、自分の分は自分で負担する。エヴァンジェリンがこの面子ではよくリーダー格になるが、それは一時的であって命令には絶対的な強制力は皆無である。あくまで立場は対等である。アローニーロが勝手に決めた事だが。

「マスターの分も適当にお願いします。私はマスターとここで待っていますので」

茶々丸は食べるフリはできるが、わざわざそれをしなくても良いように店で食べずにお持ち帰りであまり人の居ない場所で食べるのだ。4人いるのに1人だけ食べてない、その程度なら学園の認識障害であまり問題にはならないだろうが、それが効かないエヴァンジェリン達からしたら他人の目が気になるのだ。

「やっぱ、思うところあるよな」

「なにがですか？」

千雨がポツリと溢した一言をさよが拾い上げる。

「私達の関係だよ。なんつーか、家族みたいだろ。師匠は私達全員を娘みたいに面倒を見てくれるだろ……本当の親より私を理解しているし、頼りになる。最初はなんだこれとか思ってたけど、今じゃ

「当然な関係だよな」

「家族ですよ。互いの深い場所にはあまり触れませんが、困って手を伸ばせばその手を絶対に掴んでくれる。ん？これだと仲間と言った方がいいでしょうか？私と千雨さんはいつかは死によって絶対に別れてしまいますが」

「は？お前幽霊だろ、なんで死ぬんだよ」

「義骸を着てる時に義骸が人間なら死ぬ状況になったら、霊体の私も一緒に死ぬようになっていきます。私が人間としての一生を過ごせるようにする為の処置です」

「なんでわざわざ死ぬような処置を……」

「私は死んでも死にきれなかったから幽霊になった、と思います。なら、人間として一生を過ごせば私は十分なのでそうして貰ったんです。だから、この義骸は成長も老化もする人間と同じようになっているんです。その他は人間を軽く凌駕しますが」

「……ハア、なんで死亡率の高い裏を知っていてそんな選択するんだか」

「私の一生ですからとやかく言われる筋合いはありませんよ」

「言わねーよ。本人が本心でそう言っているんだから。それより、早く適当に買ってエヴァと茶々丸と合流すんぞ」

「フフ、皆さん同じようなことを言っただけです」

「師匠やエヴァにも同じような事言ったのかよ……」

「エヴァさんと茶々丸さんにです。アーロニーロさんは『死んでももう化けて出てくるなよ』って言いました」

さよと千雨は適当に3人分を買って店を出て、エヴァンジェリンと茶々丸が待っているベンチに戻ると案の定ナンパされている。

「ねえねえ、俺達と一緒に遊ぼうよ」

「君達いくつ？かわいいね」

「敵は2人ですか」

「さよ、敵って言うな、あれは雑魚だろ。てか、いつも思うがよくナンパされるな」

エヴァンジェリンのナンパされる確率は80%以上だったりする。

「茶々丸が対処するから私達はなにもしなくていいだろ。ほれ……」

千雨とさよの視線の先で、茶々丸が手刀でナンパ男の意識を簡単に刈り取った。

「なんでエヴァが倒さないんだろうな。茶々丸より速く動けるだろうに」

「この前『父様以外の男は触るのも嫌』って、言ってましたよ」

「そうか……（どんだけだよ）」

「戻ってきたか、昼になにを買ってきた？道化師か？それとも白い服の紳士か？」

エヴァンジェリンがさよと千雨に気付いて、本日の昼ご飯が何かをイメージキャラで聞く。

「道化師ですよ。冷えることはありませんけど、時間が経つと微妙になるから早く食べましょう」

夏の暑さの御蔭で食べ物は冷える事がないが、折角のジュースが温くなったりする前に木陰にあるベンチに座って食べ始める。

「食い終わったらどうする？」

予定が決まっていないので、食べながら話をする。

「……………特に楽しめる場所が思いつかないから帰ろう」

「賛成」

「賛成で、帰ったら服を作るの手伝ってもらおうぞ」

「賛成で」

「満場一致で決定。帰るか……………」

Side out

日常？ 4人（後書き）

書いてて思った。家でごろごろしてる千雨とかの話を書いた方がほのぼのっぽくなっただんじやないかって……

日常？ 千羽のとある一日(前書き)

第71話

日常？ 千雨のとある1日

Side 千雨

暑い……夏はこの一言で事足りる。湿度が高いから纏わり付くような暑さでやる気を削がれる。私の部屋のクーラーが一昨日壊れてすぐに師匠に修理の手配を頼んだが、修理に来るのは今日の午後3時位になるといふ。昨日はエヴァ達と出掛けてほとんど自分の部屋に居なかったから、暑さを感じるのは寝る時ぐら이었다。しかし、今日はお出掛けの予定は無いので部屋に居ようと思ったが、部屋の温度が高い為にパソコンを使えば熱暴走でもするんじゃないかと考えてしまう。だから、部屋でパソコンをやるのは諦めてリビングでノートパソコンを使って自分のホームページを更新する事にした。折角、昨日エヴァに手伝って貰って服が完成したのに、まさか暑さのせいで自分の部屋でパソコンが出来ないとは……

「なんで今日に限ってソファを占拠してんだよ……」

「テレビで暇を潰しているからだ」

いつもならエヴァは部屋が別荘に籠ってなんかしてるのに、今日はソファに寝転がってテレビのお笑い番組を見て笑ってやがる。思わず溢した一言に律義に返すし……

「私が座るところを空ける」

「断ると言つと解っているだろ？」

素直に解つたと言つとは思っていないが、駄目元だ。動けば運が

良かった、動かなければいつも通り。
てか、せめてテレビから目を離して私を見て言え。

「すいません。マスターは『3時間耐久お笑い地獄』を昨日の夜に楽しみにしていたのですが、昨日の夜は千雨さんの服作りの手伝いをして見れなかったので、撮っておいたのを今見ているんです。ですから、どうか今は邪魔をしないであげて下さい」

ソファアのすぐ傍で待機していた茶々丸がエヴァのフォロー？をするが、それって因果関係を考えて結局エヴァが原因じゃないのか？エヴァが昨日私を誘わなければ手伝いなんてしなくて良かったんだから。

「んじゃ、悪いけど茶々丸の部屋を使わしてくれねえ？自分の部屋じゃクーラーが壊れせいで暑くてやる気が削がれるんだ」

「構いません。ただ、間違っても写真立てなどを壊さないで下さい」
「解ってる」

茶々丸の部屋に入る。猫の写真などがまず目に入る。前入ったときと配置が変わっているな……

目に付くのは写真とそれを納めている写真立てしかない、生活感なんて写真以外には無いが、必要が無いからだろう。

「これだけは位置が変わらないな」

私、師匠、エヴァ、さよ、茶々丸、チャチャゼロ、ワカメ大使、アヨンの8人？が写っている写真を見る。師匠が中心にし、右にエヴァ、茶々丸にチャチャゼロが抱えられて、後ろにアヨンが立って

いる。左にさよ、ワカメ大使、私の順番で並んでいる。さよと師匠だけが笑っており、エヴァは少し素気なく見え、私は反抗的な目を向けており、残りは表情さえよく解らない。今と比べると茶々丸はホントに表情が変わったな……

「さて、ホームページを更新するか」

私のホームページ、ちうのホームページなんだが、最近は防衛とかの能力がルドボーンの所為で頭が可笑しいと思えるくらいに凶化された。麻帆良祭の時に麻帆良学園のネットワークを掌握してしまったので、必要なら学園中のパソコンを使う事ができるし、欲しい情報が麻帆良限定だがすぐに手に入る。

この前勝手に、ちうのホームページの宣伝テロップを作って到る所にそれを張ろうとしゃがったので、下手をしたらハッキングで罪に問われるかと思った……

「ルドボーン、勝手になんかすんなよ」

「……………解っています」

最初の間はなんだ。私に忠実なら即答するくらいになれよ……………まあいいか。

昨日の夜に一人で撮影会をして撮った写真の背景を削って載せ、コメントを書けば更新は完了だ。

「おっ！もう書き込みがあるな。どいつもこいつも夏休みで暇なんだろうな」

頬をほころばせながら書き込みを読み、最後に書かれている名前の欄を見て、止まる。

闇の福音

次の書き込みも読み、また名前の欄で止まる。

カラクリ従者

「おい！！お前等テレビ見てんじゃないか！！！！！！」

つい画面に向かって怒鳴ってしまうが、すぐに落ち着いて次の書き込みを読み、名前の欄を見る。

元・幽霊

「さよ！お前もか！！！！いつもどこかに出掛けているのに今日は家に居んのかよ！！」

マジで夏休みで暇な連中じゃねえか……………あと一件か

仮面の白魔女

「師匠おおおおおおおお！！！！！！」

今ある書き込み全部身内じゃねえか！！！！

思いつきり手を打ちつけたくなる衝動に駆られたが、ここは私の部屋じゃない、茶々丸の部屋だ。打ちつけたら写真立てが倒れて壊れてしまうかもしれないから、何度も「落ち着け」と自分に言い聞かせてその衝動を抑える。

「はは、考えてみてみる。むしろ今まで師匠達の書き込みが無かつ

たのが不思議なくらいだったんだ。これは起きるべくして、起った事だ。だから、気にする事は無いはずだ……」

自分に言い聞かせるように言う。

「千雨さん、お昼ご飯ですよ」

「…もうそんな時間か」

茶々丸に呼ばれるまでそんな時間になっているのに気付かなかつた。多分「落ち付け」と言い聞かせてる間に思った以上の時間を掛けていたんだな。

「そうめんか……」

日本の夏の季節料理の代表格の細長い白いめん。調理は柔らかくなるまで煮て、冷やすだけで、めんつゆなり醤油を付けるだけのお手軽の誰にも出来る一品。何日も続くと明らかかな手抜きか、そんなペースで使わないとなくならない程貰ったかのかと考えてしまうモノでもあるよな。

「もっとさっぱりしたい方はレモン汁でもどうぞ」

「いらね」

「私は入れます」

「私も入れるから次は私に渡せよ」

私は少数派か……いや、エヴァはその時の気分だからそうも言い

きれないか。

昼食もそこで終わらし、茶々丸の部屋に戻ってノートパソコンを回収して自分の部屋に戻る。熱気が籠っており、とてもじゃないが居る気になれないのでノートパソコンを置いてリビングに行き、誰もいないのを確認してソファーに寝転がる。

「なんかやってねえか？」

学生は夏休みでも世間には関係無いらしく、くだらないトーク番組やニュースしかやっていない。

レンタルビデオ屋にでも行って映画でも借りてきた方がまだマシな内容だな……金ならあるが、あまりそんな事で浪費したくは無い。服の制作費やノートパソコンとかに使うのが多いんだから。

「暇だな……」

夏休みの宿題なんて4人で協力してすぐに終わらしたから、夏休み序盤だったのに暇を持って余している。運動部にも入っていれば夏の大会とか言って練習してるんだろうが、私は生憎と帰宅部だ。やりたい事がないからこうなっているんだろうから、夏休みの間だけでもやるべき事を見つければいい。去年と一昨年はそう溢したせいで、メノスの森でサバイバル訓練やらされたりしたせいでその印象がでかすぎた為にあまり良い思い出が出てこなかったりする。

「あれ？」

日は既に傾いて外がオレンジ色を重ね塗りされている。

「暇すぎて寝ちまったか。昨晚の疲れもあったらだろうけど……」

夕飯まであんまり時間が無そうだし、時間になるまでここで待ってるか……

S i d e o u t

日常？ 千雨のとある1日（後書き）

前回を書いてて思った事を書いてみた。

次から魔法世界関連で動かす予定。あくまで予定ですから。感想とかくねると喜びます。

魔法世界 裏で動く(前書き)

第72話

感想 開け！ごまドレ様
ありがとうございます！！

魔法世界 裏で動く

Side アーロニーロ

「魔法世界に行くぞ」

その一言にあからさまに嫌な顔をするのが1名、行ってみたいと目を輝かしているのが1名、私には関係ないという顔をしているのが1名、ただ成り行きに任せているのが1名。

「行ってどうするつもりだ、父様。むこうには何も無いだろ」

流石に何も無いと言う程ではないはずだ。一応ヘラス帝国にも家はあるのだから、尤も何年も使っていないのだから埃まみれになっているかもしれないが。

「実際に、なにも無かったら良かったんだがな」

「なに？」

「少々掃除が必要なようだな」

信頼できるかと言えば微妙な奴からの情報だが、信憑性はあるので無視はできない。

「もしもの時の状況を想定して、全員で魔法世界に行く。これは決定事項だ」

安全とは言い難い場所に置いて行くなど出来ない。むこうも安全

とは言えないが、ここに残っているよりは手が届きやすいだろう。

「師匠、魔法世界は危ないってこの前言って無かったか？」

「日本よりは危ないな。尤も、日本並みに平和な場所は世界基準で少ないから、日本レベルで考えれば大抵の場所が危険だ」

危険レベルで言えば魔法世界は地域にもよるがトップレベルと認識しているが、相手に居場所が断定されてなければ魔法世界の方が安全だ。

「とりあえず、長旅の用意をしろ。せつかだから魔法世界観光もするからな」

流石に行つてやることをやってすぐに帰るのは良くないだろう。せつかくの長期休暇なのだから旅行の一つや二つはした方が良い思い出になるだろう。一般人には話せない内容になる可能性が非常に高いが……

「準備は怠るなよ。戦争にでも行くような気構えで準備しておけ」

戦わせるつもりは無いが、避けられなければ戦わなければならぬ。まったくもって嫌な事だがな。

Side out

Side クルト

さてはて、アローニークは動いてくれるでしょうか？この手の取引ならどちらにも損はないですから普通なら受けてくれますが、普

通なんて当てはまらない人物ですからどう動くはあいまいな予測しかできません。駒になつてくれるような存在では無いと解つていますが、やはり使いたいですね。彼とは利害が一致する限りは良きパートナーにでもなんでもなれますから。

「クルト議員、失礼します」

入室を許可してないのに私の執務室に入るとは、礼儀作法がなっていないですね。いったいどこの誰でなんですか？

「入室をまだ許可し……」

振り向きざまに刀の刃が目前に迫っているのを確認し、しゃがんで避け、いつも定位置に置いてある愛刀をすぐに抜いて斬りかかる。敵は1人、執務室は広いほうですが刃物を心置きなく振り回せる環境では無いので、すぐに決めたいですね。大事な資料が沢山ありますし。

「斬岩剣」

あまり派手な技を使う訳にもいかず、ただ対象を斬るだけの技で斬り付ける。ただの暗殺者なら初撃を避けた私の勝ち、だったんですがね……あっさりと手で刀を掴まれてそこで私の行動は終了。そもそも、そんな事するする必要があつたか疑問ですが。

「少なくとも平和ボケはしていないみたいだな。クルト・ゲートル」

「貴方に命を狙われるいわれはないはずですよ。アローニーロ・アルエリ」

本当に無いはずです。そもそもアローニークとの接点は18年前と、この前ある情報を送った事しかない。誰かの依頼で殺しに来たかもしれませんが、それならこんな茶番をせず、死させ感じさせずに殺されていたでしょう。

「殺す気など最初はなから無い。ただ、18年前に俺に鍛えて貰おうとした餓鬼が、どう成長したかを確認しただけだ。お前の師である詠春は、平和ボケして腕が鈍っているぞ」

素晴らしくどうでも良い情報ですね。それは置いておきましょうか、アローニークが此処に来たということはおそらく情報の確認でしょう。

「別に18年振りで積る話がある訳ではないでしょう？用件だけをどうぞ」

「ああ、お前からの情報。元老院が再び俺とエヴァを賞金首にしよう」と画策しているという情報は本当か？」

「ええ、本当です。貴方達は、元老院にとっては敵以外のなにものでもない。不老不死ではないかと考えられる英雄の親子がヘラス帝国側に存在するというのは非常に目障りなんですよ。皆が妄信する英雄は連合の紅き翼だけでいい、というのが元老院共の考えなので。尤も、今回の件は些か突出した一部の過激派が画策した事なのです。あなたは画策した人達を許さないでしょう？ですから、その人達の情報に貴方に渡します。代わりに、貴方は私にあるモノを貸して欲しい」

どんな策でも、ヘラス帝国から絶対になにかしらの干渉があるでしょうから成功はしないとおもいますが、最悪の場合はまた戦争に

なるでしょう。それすらも解らない頭の腐った馬鹿など必要ありませんし、その命で個人的に欲しいモノが手に入れば万々歳ですが……

「特に必要の無いものなら良いだろう」

「貴方しか持っていないモノですよ。貴方とエヴァンジェリンが使っている……」

「まあ、いいだろう。使いやすそうなら……これでいいだろ。ああ、説明書も付けてやる」

そのままでも使えますが、やはり能力を使えるようにならないと真価は発揮できませんから、時間を見つけて特訓するとしましよう。

「これが情報です。ついでに貴方に指し向けられて殺される予定だった人達の上げましょう。必要無いので」

麻帆良に居るエヴァンジェリンに刺客を指し向け、エヴァンジェリンがアーク二号に殺させてそれをあらかじめ用意していた手駒の魔法先生とそうでない魔法先生に目撃させて、それを理由に捕縛する。逃げれば賞金首として再び指名手配、逃げなかつたらそのまま捕縛。それが計画だったようですが、本気で上手く行くと思っていたのでしょうか？これから消える存在の考えなど、今更知っても意味の無い事ですな……

2日後

「クルト議員！緊急事態ですー！！」

「なんですか？騒々しい……」

「どうやらもう殺ったようですね。てっきり受け取って即座に殺る思っていました。が、シツカリと準備なり調査でもしたんでしょう。」

「元老院5名が互いに殺し合って、全員死亡したのが確認できました……………」

「なんです……………と……………？その5名は誰ですか？」

「それはこれから行われる会議で話すそうです。なので、すぐに会議室に移動して下さい」

錯乱させる薬でも使ったのでしょうか？ありえない話ではありませんが、どう服用させたのが疑問ですね。恨みなんて馬鹿にならない程に買っていますから毒物には十分な対処をしているはずですから難しいはずなんです……………」

「それでは、緊急会議を開始する！理由は皆の知つての通り、我々元老院の一員達がどういふ訳か5人が殺し合い、その原因が一切不明という事件が起こったからだ！」

会議で如何にかなる問題では無いと思えますがね。それに、被疑者であり、被害者であるのが全員死んでいるのでは、現場検証と目撃者探ししかやれることは無い。それでアローニー口の尻尾が掴めるとは考えにくいですから、なぜか殺し合ったで事件は終了になるでしょう。此処は、不安感を煽って互いに喰い合ってもらいでもしてもらいますか……………なに、犠牲は無駄にはしませんから、存分に喰い合ってください。ただ邪魔なだけの国の害悪どもが……………」

Side out

魔法世界 裏で動く（後書き）

小悪党の考えそんな策だよな。襲撃者から目撃者まで用意してからシナリオ通りに動かす。情報が漏れればそれだけで破綻したり、先に潰されますがね。

ちよつとここの小説で魔法世界知識

英雄は紅き翼とアルルエリ親子で、それぞれ戦争時に付いていた陣営の国内で今でも強い影響力がある。敵国だった陣営だと知られてはいるけど、ナギ以外は人気が無い。とりわけ、アローニーロが一番人気が無かったりする。

魔法世界 処理（前書き）

第73話

感想 開け！ごまドレ様、零崎煌識様、
White Seal様
ありがとうございます！！

魔法世界 処理

Side アーロニーク

馬鹿な事を考えた輩を処分した。特に難しい事では無かったが、此方に疑念を向けさせない為にちよつと小細工させてもらった。まずはアリバイを鏡花水月で作らせてもらった。目撃者にタカミチを始めとした魔法先生とし、事件当日はあいつ等が旧世界と言っている麻帆良学園で謎の襲撃者 俺が用意したものと戦って撃退し、そしてなぜか宴会になったと。

癖などを完璧に模倣する人形に全てやらせたが、それだけでも見抜けなかっただろうし、駄目押しに鏡花水月の完全催眠によって誰にも見破れなくした。

次に、犯行で自分の手を汚さなかった。薬も魔法も痕が残ると考えて、ここでも鏡花水月を存分に使わせてもらった。元老院共が丁度良い事に計画で集まるそうなので、その時に集まる予定であった実行する奴等のリーダー格を始末し、成り代わってその場に入った。その後は鏡花水月を計画に使えるかもしれない魔導具として元老院に始解を見せて完全催眠に陥らせ、俺を認識から消して他の人間が俺に見え、攻撃してくるといふ幻を見せた。そうして殺し合って貰い、相討ちを演じさせた。

元々その場所は人払いをしてあったので、成り代わりしている俺は誰にも見られずに入入りできたし、発見までに時間が掛かった。そして、予め集めておいた計画に参加するはずだったメンバーを、誰も逃さずにメノスの森に入れ、虚達の餌になって貰った。

自分に繋がる可能性のある証拠など何処にも残さなかった。真相を知っているのは俺だけ、クルトは俺がやったとは解っているだろうが証拠は何も無い。だから、捕まる事は無い。あいつが洩らすなんて、本人の意思ではないだろう。

「掃除は終了。あとは観光でもするか」

第二第三の馬鹿が出てくるかもしれないが、少なくとも今すぐには出てこないだろう。元々、計画は杜撰であつたし、帝国側の英雄と言う看板を一応は背負っているのだ。今まで特に気にした事は無かつたモノだが……

「とりあえずは姿を変えた状態で過ごすか」

明日にも麻帆良にいる人形を回収してから、麻帆良での姿に戻るか……いや、こつちなら仮面でも問題無いか。

「おかえりー！、父様」

「ただいま、エヴァ」

隠れ家に帰るとエヴァが抱き付こうと突撃してきたので、それをしっかりと受け止める。ワカメ大使の為に作った腕輪を元に、年齢詐称薬と同じような効果を持つのを作ったのでそれを装備しているエヴァはさらに幼い姿　　だいたい5歳位　　になっている。なぜか言動までもが幼くなっているが、問題は無い。

「僅かだが、血の匂いがする。もう少し気をつけた方がいいぞ、父様」

「そうか……吸血鬼は誤魔化せなかつたか」

密着しているので互いに小声で会話する。

市販の消臭スプレーを使ったのだが、まだにおいがするのなら、

全部を綺麗にしておいた方が良かったか。意識なんてさせないつもりだったのだがな……

「私だけは誤魔化さないで欲しい。私にとっては父様が全てなんだから、必要があるなら頼って欲しい。親子なんだから……」

「ありがとうな、エヴァ。でも、親子のなら尚の事頼れない時もある。今回は、1人の方が都合がよかったからだかな」

強く抱きしめ、エヴァの頭を撫でて抱えていたエヴァを降ろす。

「アーロニーロ様が帰って来たので、食事にしましょう」

茶々丸の一言で次が決まり、すぐに行動に移す。

「師匠、小さいと不便なんだが。アメとか貰ったけど、くれた奴が危ない気がするんだけど……」

「食べてもなんとありませんでしたけど？」

「おめえの体と一緒にするな、こっちは普通の体なんだ」

エヴァと同じように、幼い姿になっているさよと千雨の会話しているのは見えて和む。

「小さいと不便か……。それも明日までだ、そうすれば麻帆帆良に置いて来た人形がこっちに来るから、腕輪を外してもいい」

「……アリバイ工作か？なんか知らない内に、私達は犯罪に巻き込まれているのか？」

千雨は気付いたようだ。なに、問題など無い。

「真実が幸せに繋がるとは限らない。知らなくても幸せに過ごせるモノだ」

「……知らぬが仏……」

……千雨が遠い目をしている……

「まあ、明日は予定があるから、人形が着いたらすぐに行かなければならない場所がある」

「それって、こつちに来てから叩き込まれた礼儀作法が関係するんですか？」

「ああ。ヘラス帝国のお偉いさんに謁見するからな。失礼の無いようにな」

「会うのはどうせテオドラだろ。公式な場所で無い限りは、笑って吹き飛ばせるだろ」

「流石にそれはやらんな。帝国側の英雄の肩書きが持っているから、友好的に行つた方が良い」

それに、個人的に仲が良い訳では無い。仲が良いと国民の人気取りが出来るから、そういう風に見えるようにするかもしれないが……

……

「久し振りだな、テオドラ。18年間変わってないようだな」

普通だったら、不敬罪に問われるかもしれないが、俺は問題無い。帝国が作った20年前の大戦映画でも、敬語なんて一切使わないみたいを描かれていたしな。

「変わってないのはそちらだけであろう。妾は成長したが、アーロニークとエヴァンジェリンは18年前となに1つ変わっておらんではないか。それより、姿を消していたのに今日こんにちに突然の来訪だ？」

「ヘラス帝国に来たから、挨拶に来ただけだ。一カ月近くは魔法世界に滞在する予定なんだな……」

「ふむ、そうであったか。それでは、そちらの3人はなんじゃ？お主の従者かの？」

後ろに控えているさよ、茶々丸、千雨を指さして問う。

「まさか、俺に従者は不要だ。ちょっと手元に置いていただけだ」

「そうか……。もう下がっていいぞ。そうだ、この後で一緒に食事でもどうじゃ？全員の席を用意するが？」

「喜んで参加しよう」

食事位を断る訳にもいかない。それに、きっと何かを話したいの
だろう。

皇族と一緒に食事なんてまずあり得ないことだ。戦争の時も一度
もした事が無いし、しようなんて思った事がない。理由は、無駄に
堅苦しい礼儀作法が必要であつたり、普通であれば相手の顔色を窺
いながらの食事になつたりするからだ。尤も、今回はそんな事は必
要無いみたいだが。

「ん？どうした？早く席についたらどうなんじゃ？」

「中身は変わってないようだな。じゃじゃ馬娘」

「さつきも言った通り、成長しておるわ！政務にも携わつておるし、
見た目は大人そのものじゃ！！」

フランクなテオドラにさよと千雨は目を丸くしているな。仕方が
無いが、さつきとは全然違う感じがするから。今はテオドラの本質
であろう、遊び盛りの子供が前面に出ている。

「人間換算ではまだ10代の子供がよく言う。それより、話がある

んじゃないのか？」

「食べながら聞いて欲しい。終戦20年のオステイア終戦記念祭がある、その時に行われる拳闘大会に参加して欲しいのじゃ。その終戦記念祭には、妾も特別親善大使として参加するからの」

「政治的な判断か？帝国の英雄として参加して欲しいと？こっちにはこの手札があると印象付ける為に」

英雄は軒並み、所在不明だったりするからな。

「いや、ジャックが参加するらしいからの、帝国側のアローニークに参加して貰って、優勝して欲しいんじゃ。アレに勝てるのはナギかお主しかおらんからの」

国の張り合いか……碌な事ではないな。

「まあ、参加はしよう」

「おお！それでは早速」待て、参加はする「…なんじゃ、その含みのある言い方は」

「なに、簡単な事だ。最初はアローニーク・アルルエリの名では参加せずに、てきとうな名前で参加するだけだ」

「……………優勝して、アローニーク・アルルエリとばらしてくれれば、それで良いじゃろう。参加してくれるだけでも恩の字じゃ。しかし、それだと無名の選手として、一から築かねばならないじゃろうに……」

「その程度がどうした。時間はあるから、オスティア終戦記念祭の拳闘大会に呼ばれる位の注目度なんて簡単に集められる」

なに、簡単な事だ。

テオドラとの食事は終了して、帝国にある家に行く事にした。埃が溜まっていたら影の倉庫で埃だけをしまって集めて捨てるか。

「父様、なんで受けたんだ」

エヴァが不機嫌そうに聞いてくる。

「面白い事になりそうだからだ」

「大会は9月の最後なんだろう？それまで魔法世界にずっと居るつもりか？」

「いや、黒腔を使って行き来するつもりだ」

「それならいい」

一緒にいる時間が減るのが嫌だったのだろう。昼間は学校で一緒に居れないから良くて、夜は一緒に居れる限られた時間だからな。

「師匠、ヘラスの家ってあれか？人が住んでいるみたいなんだが…」

問題がありそうだな

Side out

魔法世界 処理（後書き）

アーロニーロ「魔法世界は滅ぶべくして滅ぶ！」

「誰もが君のようになりたいと思うだろう！」

「金さえだせば、死神さえ騙せると思ったのだろう」

声優つながりで、ラウ・ル・クルーゼのうる覚えの台詞が変わって出てきた。なんでだろうね……

魔法世界 元付き人（前書き）

第74話

魔法世界 元付き人

S i d e エヴァンジェリン

ヘラス帝国にある家に住んでいる奴は1人だけ、心当たりがある。いや、そいつしか、そんなふざけた事しかやらないだろう。ハッキリ言っただけはそいつが嫌いだ。父様は敵意や悪意を向けてこないから放置しているが、私は積極的に排除したいと思っていた。私が排除する前に、そいつとは別れる事になったが、今再び前に現れる。父様の視界に入る前に消そう。

「父様、私が中を見てくる。だから皆と此処で待っていてくれ」

できるだけ笑顔で言っただけ、すぐに家の扉を開けて入る。あいつはすぐそこには居なかったが、影の倉庫から氷輪丸を抜き身で取り出して、居たらすぐに斬れるように構えて、一部屋一部屋風潰しに捜して行く。

父様と私が使っていた家具類は全て持って行ったので、今ある家具類は全部あいつのなのだろう。一部屋とリビング以外はなにも無く、あつても1人暮らしになら十分な物しかなかった。どうやらは今外出しているみたいだな。ならすぐに家の中に入ってもらい、帰ってきたのを感じ付かれる前に排除するか。

「チツ！氷輪丸で凍らしながらなら、血の匂いも封殺できるというのに……斬るのが居ないと……」

まあいい。父様が会う前に消せれば、もう死んでいたとも言えは済む話だ。

「アーローニー口様あああ！！ユリア・ヘネパスはずつとあなたの様の帰りを待っていました！！！！！」

ちくしょおおおおおおおお！！！！！！

Side out

Side アーローニー口

飛び付こうとしたユリア・ヘネパスを受け止める気がないので避ける。

「拒絶する」

俺が避けたことで、ユリアに飛び付かれる形になる千雨が三天結盾でそれを防ぐ。グシャツ、そんな感じの音がしたが亜人は人間より丈夫な傾向にあるから大丈夫だろう。

「ア〜ロニ〜口様〜！私を受け止めて下さいよ！！！」

すぐさま立ち直ったユリアが泣き出しそうな顔と声で訴えてくるが、いくら涙目で訴えても、俺の考えや行動は変わらない。

「死ねええええええええええ！！！」

「エヴァンジェリン！！！」

エヴァの奇声を上げながらの不意打ちにユリアは反応し、エヴァは氷輪丸で、ユリアは剣で打ち合う。やはり、仲が悪いか。仕方が無い……

「2人とも、止める」

静かに、囁くように言う。殺気を混ぜたそれは2人に届き、動きを止めさせる。

安全なはずの街中で、英雄と有名人が殺し合いなどという事件はシヨッキングすぎるだろうに……

「全員、聞きたい事があるだろうが、とりあえずは家に入れ」

全員で家に入ったところで、ユリアを知らないであろうから説明する。

「こいつの名前はユリア・ヘネパス。俺のファンの1人で、大戦時は俺の付き人なんてやっていたが、あまり必要はなかったな」

「なんで師匠の家に住んでんだよ……」

「これも仕事内です。私はアーロニーロ様が帝国に来た時に、家ですぐに過ごせるように家の管理を任されているのです。普段はテオドラ様の親衛隊として働いています。ところで……あなた、アーロニーロ様を師匠って呼んだけど……」

「戦場で生き残る為の術を叩き込んだ。一応は、師弟関係だ」

「嘘……」

目を見開いて驚いているが、そんなに意外か？俺が弟子みたいなものを取るなど。

「嘘では無いぞ。それに、そっちのとは父様と協力関係で、緑髪は私の従者だ」

「初めまして、相沢 さよです」

「絡繰 茶々丸です」

エヴァがさよと茶々丸を指さして関係を言う。
してやったり、と言いたげな顔だな。

「まあ、一カ月近く滞在予定だからよろしくな」

「一カ月なんて言わないで、永住したらどうですか？皆が喜びます！」

皆と言うのは、英雄像を崇拜している連中なんだろうな……

Side out

Side 第三者

ユリアを含めた6人で一カ月近くは過ごすが決定したが、それは御近所からしたら迷惑極まりない争いの始まりであった。

まず、エヴァンジェリンはユリアが嫌いである。自分の父親に近づくと目障り極まりない女という認識だ。さよと千雨はアーロニー口が自分から近付けたのでエヴァンジェリン的にはまだ許せるが、ユリアは違う。たまたま大戦前に、アーロニー口が帝国に提供する薬の効力を見せつけるためだけに使われた存在だ。それだけのはずなのに、感謝の気持ちを愛情と履き違えて捉えて、アーロニー口の傍

に居ようとしている。所詮は盲目的な恋でしかなく、本物の愛情では無い。それが、気に入らないのだ。愛しも、愛されもしない奴が自分の親、つまりアローニーロの伴侶になろうとしているが。

対するユリアは、エヴァンジェリンとはできれば仲良くしたいが、本人にその気がまったく無い。その上に、自分に敵意しか向けてくるのだ。だが、その程度で諦めたりはしない。自分を救ってくれたアローニーロへの気持ちはその程度で諦めるような軽いモノではないのだ。その気持ちは愛情ではなく、盲目的な恋だと気付かないで……ただ突き進んでいる。エヴァンジェリンは娘になるかもしれないが、邪魔になるなら多少は手荒な事をして、仕方が無い考えている。

あくまでも水面下での行動が基本だが、アローニーロが居なければ割と御近所さんにも判るような殺気や、冷気が家から漏れ出ることが多々あり、その際には茶々丸は自分の主人であるエヴァンジェリンを掩護、さよと千雨は安全圏（アローニーロが偽名で戦っている闘技場）まで退避している。

ユリアは結構強かったりする。エヴァンジェリンに条件付きでなら、勝てはしなくても良い線はいける。エヴァンジェリンが全力を出すには広い空間が必要だが、ユリアは狭くても全力を出せる。テオドラの親衛隊として閉所での戦闘を想定した訓練によって、広域殲滅のような派手な戦法では無く、堅実に守りながらの剣を使った近接戦闘。

エヴァンジェリンとユリアは家を壊さずに戦わなければならない為に、必然的に被害が出にくい近接戦闘をする。エヴァンジェリンは広い場所で何度か戦おうとしたが、そういう場所に行ってもユリアは付いて来ない、幻想空間に引きずり込もうとしても目を合わせない、強制転移魔法で無理矢理移動させても転移符を使ってすぐに逃げる。ユリアは自分が不利になる状況は徹底的に避けているのだ。

「塵も残さずに消してやるから、家の中以外で戦え!!!」

「ふっ、私はそんな馬鹿な事はしません。実力差は解っているので、最善の選択しかしません」

そんな会話をなんども繰り返し、アローニーロが帰って来る前には完全に片付けられた状態にされていたりする。

S i d e o u t

魔法世界 元付き人（後書き）

ユリアは出てきたけど、あんまり出番が無いかも……

魔法世界 前準備（前書き）

第75話

魔法世界 前準備

Side アーロニーロ

「……何をやっているんだか……」

目の前で流れているニュースを再度確認するが、内容は変わる事無く、問題だと思わせる。

ネギとその仲間が賞金首になっていると言う。ゲートポートを破壊した犯人の可能性があるだとか……元老院は、今は上から下まで大騒ぎだろうな。未来の英雄が賞金首になっているのだから。顔写真が魔法世界中に出回ってしまったから、疑いを晴らさないとゲートポート襲撃の犯人という英雄になるには大きな汚点が付くだろう。まあ、放置で良いだろう。わざわざ探し出すのは面倒だし、今頃元老院達が血眼になって捜しているだろうから、よほど運が悪くない限りは死なないだろうしな。

「そんな事など、気にする意味など無いか」

やるべき事が決まっているのだから、それに集中すべきなのだろう。

「しかし、少し気になるな……」

ゲートポートを襲撃するなんて余程とち狂った奴か、あると困る奴しかない。ただ、ネギ達が巻き込まれたのが偶然なのか、狙ってやられたのが気掛かりになる。偶然ならどうでも良いが、狙ってなら完全なる世界の連中の可能性が高い。黄昏の姫御子のアスナが居るから、鍵自体は完全なる世界の手の内にあるも同然。魔法世

界はあいつ等のホームグラウンドも同然だ。尤も、偶然か必然かを知る術がないのだから、どっちとは明確な判断が出来ない。

……エヴァ達だけでも麻帆良の家に送るべきかもしれないな。早計かもしれないが、確実に安全に帰れるのは今だろう。明日や明後日はどうなっているかは解らない。

「少し、弱気かもな」

20年前と同じようにできれば一番面白いのだろうが、さよ、茶々丸、千雨の3人も居るから同じように動けない。もし俺が完全なる世界なら、20年前の英雄は全員の動きは止めようとする。前回の儀式を止めた中心人物が居ないだけで、成功率は上がるだろうし、不安要素は取り除いておきたい。問題は方法だ。殺すか、何かで縛り付けるか。後者ならまだいいが、前者だったらヤバイな、刃物で頭部を貫かれて即死だったら笑えない。それに、縛り付けるのにエヴァ達が使われなくても限らない。できればすぐ手が届く場所に置いて守りたいが、魔法世界で手元で守るのと麻帆良で自衛させるのでは、はたしてどちらの方が安全なのだろうか？

「父様」

「どうした？エヴァ」

エヴァが心配そうに顔を覗きこんでいた。考える事に集中しすぎていたな……

「何を悩んでいるが解らないが、前にも言ったが頼って欲しい」

「なら、さよと千雨から魔法世界に居る間は特に目を離さないで欲しい。ゲートポート襲撃は、完全なる世界の前準備の可能性がある。

取り越し苦労ならいいが、そうでなかったら大変だ」

滅びる行く世界と親しい人物を天秤にかければ親しい人物に傾く。魔法世界がどうなるうが知った事ではないが、相手の一方的な意思で動かされるのは気に入らない。自分の意思で選んだ選択肢でなくては、楽しめなくて意味が無い。

「わかった。本人達には教えないのか？狙われるかもしれないと」

「今は憶測の域だ。遊びに来ているのに余計な不安を持たせたくは無いです」

それに、これは俺の問題だろう。相手がほぼ断定されていて、なお且つ勝てる相手に無い限りはあまり戦わせたくは無いです。戦う力を与えといて変かもしれないが、戦力にしたのはついでにすぎない。造ってみたかったら、欲しかったから、利害が一致したから与えたいにすぎない。

「影からワカメ大使とアヨンにも守らせる。大抵はこれで良いだろうが、守りながらの戦いでは限界がある。その時はエヴァ、お前だけが頼りだ」

「解ってる」

ワカメ大使はさよばかりを気にかけてしまう、アヨンは単純すぎる。両方がいても守りに穴が開きやすい。チャチャゼロに千雨の護衛をさせた方が良いな。

「それでは、行ってくる」

闘技場で無名だった拳闘士を演じにな。

『圧倒的だああ！！Mr・アンノウン！この闘技場に姿を現して早2週間。留まる事を知らない快進撃を未だに続けています！勝利インタビューです。今回の相手はどうでしたか？』

「弱イ、ソレダケテ事足りルヨ」

変装、と言っても黒い布を幾重にも折り重ねたように作られた異様に着難く、また脱げ難い服を着て、さらに、覆面に手袋も身に付けることで完全に肌の露出をゼロにしてある。それと、声をアーロニ―口自身の2つの顔の声が甲高い方になっているだけだ。

『余裕だ！2対1という数の不利をもともせず、この闘技場で名立たるペアを相手にして弱いとは！その強さの底がまったく見えません！しかし！！次の相手はこの闘技場で最も強いペアだ！Mr・アンノウン選手は勝てるのか！？』

そういえば、名前に一切つつこまれなかったな。冗談半分でMr・を名前の欄に入れたらそれでOKが出たし……偽名と云うか、名称があれば何でも良いんだろうな。きつと、有名人と同じ名前でもOKが出すのだろう。実力が追い付かなければイロモノや偽物呼ばわりされたりするんだろう。

「1人で此処まで来た実力は確かに素晴らしい。だが、我ら兄弟に1人で挑むのは無謀だな」

「そうだね、兄さん。だけど、拳闘の世界は完全に実力が全てだから、ここで叩き潰させてもらおうよ」

……なんか昔に、この2人に似た双子と戦ったような気がするな。もしかして血縁者か？ただの他人の空似という可能性もあるが。

『それでは！試合開始！！』

開始の合図と共に臆を狙って影槍を放つ。

「おっと、そのスピードでは中らんよ」

華麗なバックステップで2人とも避ける。

「今度はこっちから行かせてもらおうよ」

兄のほうは詠唱をしているので、おそらく弟が足止め、兄が砲台の役割なのだろう。弟を手早く潰して詠唱が完成する前にけりをつけるか。

影の鎧を服の下と手袋の上に展開する。身体強化の魔法を使っていようが、届きはしない。

遅く感じる俺を殴ろうとした腕をかくぐり簡単に懐に入り

「なっ！」

一撃を入れる。手応えはしっかりあった。

「今だよ！兄さん！」

だが、意識を刈りきれずに捕まえられる。

「千の雷！！」

対軍勢用の攻撃魔法を使うとは、弟を犠牲にしてまで勝ちたいんだか……

「弟ゴト攻撃スルナンテ、酷イ兄ガ居タモンダネ。弟ガ嫌イナノカイ？」

「まさか、一撃だけは完全無効化できるアーティファクトを持っている。だから、広範囲の攻撃魔法と一緒に攻撃しても大丈夫なのだよ」

「アツソウ。ケド、ソナモノハ無意味ダツタネ」

一撃しか完全無効化できないなんて使えない。それに、こうして相手が耐えきり、前衛を潰されてしまえば簡単に負ける。

すでに防御姿勢に入っているが、無意味。障壁など簡単に砕き、その下の軟な体を殴る。つまらんな……所詮はこの闘技場だけで満足してる輩だから当然か……

S i d e o u t

魔法世界 思わず遭遇（前書き）

第76話

魔法世界 思わず遭遇

Side アーロニーロ

少なくとも、俺の周りでは何事も無く時間が過ぎた。ただ、さよと千雨が麻帆良に帰す事をよしとしなかった為に未だに魔法世界に居る。今回は、本当に危険かもしれない魔法世界に留まっては欲しく無かったんだがな。

「良いのか？無理矢理にでも麻帆良に送れたのに、さよと千雨を私達と一緒に行動させて」

「向こうよりこっちの方が守りを固められる。テオドラの御蔭でな」

貸し一つを消費して、こっちに居る間はテオドラの客人として傍に居れるようにして、最悪の場合は親衛隊に護衛させるようにしてもらった。どうせあと10年位で消えるのだから貸し一つの消費は別にいいだろう。特に欲しいモノも無いしな。

「妾は気兼ね無く話せる相手が居るのは歓迎じゃ。……それに、何を要求されるか判らなかつた貸しをこれで清算できるのなら安いモノじゃ（ボソツ）」

テオドラは「それに、」の後を小さな声で言ったが、俺とエヴァの耳はそれを聞き逃さなかつた。まあ、どうこうするつもりなどはまったく無いが。

「護衛として俺等が同行しているのをメガロメセンブリア元老院とアリアドネーはどう捉えるかな？親善大使だというのに、保有戦力

が凄まじいの一言しか出ないだろう」

「妾からしたら、お主らは戦力に数えられんじゃがの……世界より自分の利益を優先させる輩じゃ。しかも、帝国に忠誠心など持っておらんからの」

「だが、そんなのが帝国の英雄だ。まあ、忠誠心なんて紅き翼の連中も持っていないだろうがな……元々は戦争を早く終わらせようとして戦争に参加したのが、紅き翼のリーダーたるナギ・スプリングフィールドだ。連合の為というより、戦争で苦しんでいる奴の為に戦っていたとされる」

まあ、これはある程度美化されて伝えられている紅き翼の話だ。実際の心中は俺は興味がなかったから、知ろうなんてしなかった。

「ナギ・スプリングフィールドと言えば、そっくりな拳闘士がいると話題になっておったのう」

あの偽物か。おそらくネギなんだろう。元の姿は指名手配されているから姿を変えるのは当然だが、魔法にあまり頼らずに顔を隠すとかは思いつかなかったのだろうか？

「あれは偽物だ。だが、姓事態は本物だ」

「……そうか。やはり、そうなのか」

「いったい何人が気付いているんだろうな？あれは近い存在というのに……」

気付いてそうなのは元老院、完全なる世界、俺等位だろう。

「ん？」

「どうした、アローニーロよ？」

この魔力は……

「少し気になる奴を見つけた。ちょっと行ってくる」

さてはて、どうしてあいつが此処に居るんだろうか？

Side out

Side フェイト

こういうのを運が無いっていうんだらうね。

「久しぶりだな。フェイト・アーウェルンクス」

オスティア終戦記念祭に来ているのは知ってたけど、まさかこうして向こうから来て、顔を合わせる事になるなんて考えていなかった。元々会いに行くつもりだったけど、出鼻を挫かれた感じがする。アローニーロに関する情報では、完全なる世界の目的を知っても自分からは何もしようとはしなかったらしいが、テオドラ第三皇女に依頼されて完全なる世界を敵とした。できれば排除しておきたいけど、どう敵対しないという言葉を書かせるかだ、言質さえとれれば縛れる。

「良いのかい？帝国の英雄が、帝国のお姫様の傍を離れても」

「構わん。優先順位は低くはないが、お前の存在の方が優先順位が高い」

完全なる世界の構成員とばれてるのか？ありえない話じゃない。アールローニーは初代の土のアーウェルンクスと一回だけけど、接触したことがある。同型の僕を完全なる世界の構成員と判断されても可笑しくも無い。

「どつという意味だい？」

「お前の後ろに何が居るのかをハッキリと知りたい。候補は上がっているがな」

完全に目を付けられてしまった、これはマイナス要素だ。

「それを知ってどうするんだい？」

「知って満足する、それだけだな。世界が滅びるなら、それをどう自分にとって有益な事にするかが問題だ。前回は止める事によって、名声と貸し一つを得た。今回は何が得られるかどつちに付くかが変わる」

暗に報酬次第で僕達に協力しても良いって言いたいようだね。だけど、与えられるモノなんてほとんど無い。ただの金品なんかには見向きもしないだろうし、何を欲しているかなんて予想ができない。デユナミスと相談すべきだろう。協力してもらえれば、それだけで成功率が格段に上がる。

「誰かを救おうとかはまったく考えないようだね」

「心外だな、家族は大切にする」

「救うとはまったく違うと思うよ。依頼は君がなにを欲するか解らないから、言ってくれば用意できるモノなら用意するけど？」

道具で縛ってしまえば協力するしか道は無い。エヴァンジェリンを始めとする家族を人質にする方法もあるが、それをやったら間違い無く邪魔をするか殲滅させられる。できれば互いに了承して協力して欲しい。

「自分で考えるんだな、人形」

「君が満足できるモノ用意さえできれば、僕達とは敵対しないかい？」

「その時の状況による。ああ、それと、俺と敵対した時に俺の家族を傷つけるなら、容赦はせんぞ」

「君の家族には、なるべく手を出さないでおくとするよ」

敵対したら、そんなことを言っている余裕なんてないだろうけど。言いたい事を言ったらすぐにどこかに行ってしまった。警告、のもりだったのかな？なんにしても、こっちの動きを先んじて潰すなんて事はしないだけマシなんだろう。

「まあ、構わないか。みんな、準備は出来ているかい？」

僕が声を掛けたことで、建物の陰に隠れていた調、焰、栞、曆、環が出てくる。

「はい、出来ています」

「それより、良かったのですか？逃がしても……」

「逃がしてもらったのはこっちの方だよ。アールローロが殺る気になれば、一振りで見んな斬られてもおかしくはなかったからね。彼は伸縮自在の刀型のアーティファクトみたいなものを持っているからね」

みんなが近くに来ていたのを気付いているようだったし、京都で両面宿儺を一刀両断したように、隠れていた彼女達を付近の建物ごと斬るなんて離れ技でも、簡単にやってのけれるだろう。

ホーラリガルティクスエンコンバマデヂャファイニータ
「時の回廊と無限抱擁で気付かれずに閉じ込められたのでは……」

「彼は女だろうが、子供だろうが平気で殺すような存在だ。それに今はまだ敵対していない。彼を怒らすような事をすればすぐに斬られるよ。だから、もしも彼と敵対した状態で出会ってしまったら、戦わないで逃げるか、降参した方が良い」

背中から斬られる結果になるかもしれないけど、戦いを挑むよりはマシな結果になりやすいだろう。

S i d e o u t

魔法世界 思わず遭遇（後書き）

最近ダメだなと思う。元々ダメなのが更にダメになっている気が……
いろいろと足りないんだろうけど、特に発想が足りないんだろくな

……

大会で戦う以外に、原作主人公組との接点が思いつかない。

次で戦わせよう。ラカンと

魔法世界 VS ジャック・ラカン（前書き）

第77話

魔法世界 VS ジャック・ラカン

Side アーロニーロ

苦戦もせずには大会で準決勝まで来て、ここでジャック・ラカンとカゲタロウのペアに当たった。

「うっし！楽しもうぜ、アーロニーロ！」

まだ、Mr・アンノウンの姿なんだが、なぜ馬鹿のジャックにアーロニーロだとばれている？俺と判るはずが無いはず………闘技場のVIP席を見る。テオドラと目が一瞬合ったが、すぐに逸らされた。情報の出所はやはりお前か……

「マツタク、困ッタモノダヨ。カゲタロウヲ倒シテカラ、バラソウト思ッテイタノニ………これではこの姿に戻らねばならんな」

一瞬でMr・アンノウンの姿から、よく知られているアーロニーロ・アルルエリの姿になる。

『なっ！！なんとー！Mr・アンノウン選手が一瞬で帝国の英雄アーロニーロ・アルルエリの姿になりました！！本物なのでしょっか！！？本物なら、この試合は英雄同士の滅多に見れない貴重な試合になります！！』

「本物がどうかは、試合を見て決めろ」

Side out

試合は始まる前から異様な盛り上がりを見せた。理由として上げられるのは、対戦カードが普通ではありえない組み合わせである。どちらも大戦の英雄であり、両者ともに公式な場には10年あまり姿を出していなかった。そして、大戦時にあつたであろう戦いの再現に近いものを見れるだろうと大多数の者が考えた。

「うらあつ!!」

「ふん」

ラカンが大きく振りかぶってアールローに斬りかかる。千の顔ホ・ヘーグーメを持つ英雄の大剣と未解放の掬花が盛大に火花と衝突により発生した突風をキーンと硬い金属同士を一回ぶつけた音と共に発する。互いに距離を取り、一步踏み出せば自分の間合いに入る距離に調整する。

「かつてえ! やっぱそれもアールティファクトか?」

「硬いのはそつちもそうだろ。それと、試合にこれがなんなのか関係があるか?」

「確かに、そうだなつ!!」

同時に大きく一步踏み出し、再び大剣と掬花が互いを斬ろうと刃を相手の刃に滑らせる。今度は1回の金属音ではなく、ギャリリリイイイイ!! と引き伸ばされたような不快な金属音を発する。

どちらの武器にも外傷は無し、かたや至高の宝具、かたや使い手の強さと同じ強さを持つ刀。挨拶同然の斬り合いで損傷などありえ

ない。

「そいつを槍にしないのか？」

斬り合った時からのラカンの疑問だ。大戦時には刀を槍に変えて戦った事が一度だけあった。その時は惨敗して、改めて上がまだ居る事を認識したのだ。その時とは状況が大分違うが、ラカンにとってはリベンジマッチだ。

「2人が相手では刀の方が良いんでな」

「だったら槍で本気で来てくれ。カゲちゃんには試合前に俺達の戦いに手をださいでくれって言ってある」

勝つにしろ負けるにしろ、ラカンは1回は1人で戦ってみたかったのだ。だから、自分の今回の相棒に無理を言って手を出さないでくれと言っておいたのだ。このような機会は滅多に無い。下手をすればもう2度と会え無いかもしれない相手だ。今回の機会を逃すつもりなど全く無い。

「それなら、水天逆巻け、掬花」

刀が槍に変容する。それを見た途端にラカンは獰猛な野獣のような狩る側のような笑みを浮かべ、目は猛禽類を思わせる鋭さを持つ。まさに血がたぎっていると思わせ、闘争を求める狂獣とも見て取れる。

それに対するアローニーロは目に見える変化は無い。仮面をし、露出の無い服に手袋をしているから当然なのだ……しかし、見えずとも変化はあった。笑っている、見えないはずの素顔がそうなっていると想像ができる。変化は雰囲気だけだが、それでも大きな

変化だ。

「笑っているな。初めて感じたぜ、戦いの中で素に近いお前の感情を。癖なのか生来のモノか知らねえけど、感情にも仮面を被っているみたいな感じがしてたからな」

「それはお前等が感じれて無いただ、仮面を被っていても解る事はできる。それより、今は戦う時だろ？」

「そうだな！！！」

笑った顔のまま大剣を捨て置き、素手で殴りかかる。自身の肉体こそがラカンにとって用いる最強の武器と自負しているから、武器を持つより素手で戦った方が強いと思っている。選択に迷いや疑念などは無い、ただ目の前の敵に挑む事だけに集中する。

「羅漢パンチ！！！」

パンチと共に放たれた拳圧が掬花に追従している波濤を吹き飛ばし、ラカンの拳とアール二口の掬花が衝突する。ぶつかり合い、衝撃が生まれてそれが解り易い形で目に見えるようになる。互いに退くつもりが無くしてリングをしっかりと踏み締めていた。それによって普通は跳ぶなどして逃がすような衝撃が2人の体を伝ってリングに行き着き、その衝撃に耐えられなかったリングが罅割れた。

だが、たかだが足場が罅割れた位では2人はどうも思わない。些細な事だと、見えていようと、感じていても思い、一瞬たりともそつちに意識は向けずに、目の前の相手だけに集中する。

「付いて行けんな……………」

リングの隅のほうで観戦しているカゲタロウが呟く。巻き込まれないように、アローニーロとラカンが戦っている反対側に居続けるようにリング内を移動しながら、英雄同士の戦いを見ている感想がそれである。

カゲタロウは強い部類に入ると自負していた。飲み友達であるラカンと比べると見劣りはするだろうが、それでもそう簡単に後れを取るほど実力差は無いと思っていた。だが、付いて行けないと思わせるには十分な光景であった。一撃でリングなど簡単に砕き、衝撃が計り知れない攻撃をくらっても両者共に平然と戦いを続けている。

攻撃は絶え間なく、常人では耐えられない一撃だろうとも、アローニーロとラカンは常人とは違う次元の存在であるから平然と繰り出し、避け、防ぎ、相殺する。

アローニーロの掬花がラカンを打ちすえれば、お返しとばかりにラカンの拳が打ち込まれる。鍛えぬかれた筋肉が、鋼皮が、相手の攻撃を弱め、致命傷には程遠いダメージとなっている。それが闘争に火に油を注ぐかのように燃え上がらせる。相手も自分もまだまだ戦えると……………

「やっぱり！戦いはこうでなきゃなあ！！！」

「あの時より、随分と強くなったな」

「当然だろ！！上が居たから、越えようとしているんでな！！！」

2度目は無かったが、大戦時にアローニーロ1人に敗れた紅き翼は、次は勝つための努力はナギとラカンを筆頭に誰も惜しまなかった。そして、大戦が終結して20年後にこうして戦えるとは思っていなかった事だ。

「鍛えられた筋力、膨大と言ってもいい程の量の気、それらを運用することではば互角でいる」

「それはお互い様だろ」

「いや、違うな。底が見え始めている」

気は有限である。それはラカンだけでなく、アローニーロにも言えることだが、アローニーロとラカンでは量が違う。死したモノを貪欲に喰らって、絶対量をずっと増やしてきたバケモノに類するアローニーロと、己の体だけのラカンとは差があつて当然だ。だが、ラカンは気合いでその差をある程度は埋めていた。

「それも、お互い様だろ」

「まあ、否定はしないな。では、お互いラストスパートと行くこうか」

「勝つ、それだけだ！！」

叩き付けるように振り下ろされる掬花。それを試合中に何度もしたようにラカンは右手の羅漢パンチで追従する波濤もろとも相殺する。続けて左手で掬花を打ちすえて進路上から退かし、そのまま懐に入る。槍は穂先より下は基本的に満足にダメージを与えられない。

それ故に懐に入られると槍は弱い。

「W^{ダブル}羅漢パンチ!!!」

擦花を打ちすえられた事で体制を崩されていたアーロニー口はもろにラカンのW羅漢パンチ　ただ単に両手で羅漢パンチをする技　を喰って飛ばされる。手応えにラカンが笑う、完全に中つたと……

確信、それは油断でしかなかった

「ああ………?」

擦花が投げられ、穂先がラカンの腹に貫通こそしていないものの、深々と突き刺さった。

「フハハハハッ!!!残念だったな、ジャック・ラカン!」

僅かに仮面の下の方から血が滲み出しながら笑って、アーロニー口は立ちあがって響転ですぐに近付き、ラカンに突き刺さった擦花を掴む。

「W羅漢パンチは俺にとっては必殺技に成り得なかった」

穂先にラカンが突き刺さったままで軽々と持ち上げ、リングへと叩き付ける。さらに追撃として今まで相殺されていた波濤が襲い掛

かる。

「お前の負けだ、ジャック」

アールニーは掬花の始解を解き、その場に座り込む。

「楽しめたが、短期間に何度もやろうなんて思えんな。さて、カゲタロウお前は どうする？俺に挑むのか？それとも棄権するのか？」

「棄権など出来ようはずが無い。それは勝ち上がれなかった拳闘士 全てへの侮辱になる」

「まあ、その答えは解っていたが……」

しかし、戦うと解っていると言つのにアールニーは立とうとしない。

「尋常に勝負をしたいのだが……」

「構わん、来い」

カゲタロウは一瞬は迷っている素振りを見せたが、すぐ迷いを振り払ってアールニーに攻撃する。

「千の影槍!!」

「一桁足りんぞ？万の影槍」

その時、カゲタロウは一瞬だが悟りの境地に立った。自分の10倍もの密度の影槍の束はもはや1つの形にすら見え、まるで巨大な

槌かのように見えた。千の影槍とカゲタロウは万の影槍にアツサリと飲み込まれた。

アールロニーロは気と体力をラカンとの戦闘で大分消耗していたが、魔力は万全の状態とさほど変わらなかつたから、魔力にモノをいわせた普通ではありえない数の影槍で、カゲタロウを圧倒したのだ。

「ここまでくると、無駄な数が多すぎて割に合わんな。地味に見えるが、数は恐ろしい程あるから対軍魔法として使えるな」

「……………しよ、勝者はMr・アンノウン選手。いえ、アールロニーロ・アールエリ選手！！ジャック・ラカン選手とカゲタロウ選手を倒して決勝進出だー！！もはや優勝したも同然だが、次の試合も注目だー！！！！！！」

影槍に飲み込まれる光景をみて、啞然としていたがすぐに仕事であるアウンスを再開して結果を全員に告げた。試合を見て頭を抱えている人物が複数いたりする。

S i d e o u t

魔法世界 VS ジャック・ラカン（後書き）

カゲタロウはあっさりしすぎたか？

次はネギと小太郎と戦わせようと思っっているんですが、Side
ネギを書いたほうが良いんですね？原作との相違点なんてほとん
ど無いから、必要無いと思っっているんですけど……
感想とか待ってます。

おまけ

さよ「私達、出番が最近は無い気がしませんか？」

千雨「出番がある時は大抵何かに巻き込まれるときだから、無い方
が平和なんだけどな……てか、メタ発言は良いのか？」

チャチャゼロ「良いインジャーノカ？出番言ッたら一番無いノハ
誰ダト思ッテルンダ？」

茶々丸「姉さんじゃないのですか？学園結界の所為で学園に居る限
りは、動けない設定のせいで、22話から41話は出番なしでした
し」

ワカメ大使「原作キャラだと言うのに、不遇の扱いだな。原作でも
魔力がある程度は戻っている状態でのネギへの試練の時も出番なし
だったから、作者が結界内では動けない方が自然だろうと思っ
ての
設定だったな」

ナギ「一番酷いのはネギだろ。良いとこ無しだからな」

ナギ以外（なんでも出て来るし……）

魔法世界 VS ネギ&小太郎(前書き)

第78話

魔法世界 VS ネギ&小太郎

Side アーロニーロ

敵情視察なんてせずに、ただ座して待っているだけだ。敵情視察なんてしたら手札が見えてつまらなくなってしまふ。どういう経緯があったかは知らないが、テオドラとかの各国のお偉いさんが、ネギに修行をつけているらしい。正直なところ、お前等はそれで良いのか？とか言つてやりたいが、相手が強くないとつまらないのでほおつておく。

だが、そんな事で3国が協力しているというのは、少しだけどうかと思う。

「なんで3国のお偉いさんがあの2人の修行に付き合っているんだろつな……………」

「不満でもあんのか？強い相手と戦つのはお前も楽しいだろう」

「不満では無い。ただの疑問だ」

そして、なんでジャックが此処に居るんだろつな。十中八九はテオドラの所為なんだろうが……

「俺の弟子だ、簡単には勝てないぜ」

「ネギはすでに術中に掛かっているから、やろうと思えば不戦勝で勝てる。まあ、そんなつまらない事はしないがな」

鏡花水月の完全催眠はこんな事に使うようなものではないと思つ

ている。真剣勝負ではなるべく正々堂々と戦うつもりなので、掬花が主体になる。波濤も結構脅威になるが、伸縮自在、斬られる度に重量倍加、完全催眠に比べるといくらか良心的にさえ思える。

「侮りは不要だが、騒ぎ立てる必要は無い。傲おごらず、逸はらず、ただ座して敵を待てばいい」

「……………似合わねーぞ、それ」

悪かったな、似合わない台詞を言つて。

Side out

Side 第三者

10月6日

アローニーロ・アルルエリと、ナギ・スプリングフィールドを名乗るネギと小太郎のペアの戦いが始まる前から、闘技場は異様な熱気に包まれていた。前回のアローニーロとラカンの戦いは魔法に頼らない戦士の戦いであり、魔法を使つてなかつたので多少派手さに欠ける試合だった。それでも、観客を魅了したが、やはり華々しさのある試合の方が見栄えが良い。今回はサウザントマスターのパチモンであるが、魔法戦士というスタイルは同じであるから派手な見栄えの良い試合になると皆が思っているだ。

『さあ！皆様ご待望のオスティア終戦記念祭・拳闘大会の決勝戦が始まります！！』

アナウンスにより始まりが近い事を宣言され、更に熱気が強まる。

「まったく、無駄に盛り上がっているな……………」

アローニーロはその熱に浮かされるような事無く、ただ自分の相手だけを見ている。拳闘でのアローニーロが考える礼儀である。

「勝ちは見えているか？勝利を掴み取る算段は立てられたか？負けを考えているような情弱な心構えで挑むなよ？」

「全力でアローニーロさんに挑みます！！」

「そつや！それしか道が見えへんからな！！！！」

ただ開き直っただけに思える言葉だが、その言葉には自信が感じ取れ、強がりでも自暴自棄になっている訳でもないと解る。理解し、アローニーロが笑う。

『決勝戦を、開始します！！！！』

試合開始の合図がなされた。後は、戦うだけである。

先に動いたのネギ、アーティファクトのハマノツルギをだし、アローニーロに斬りかかる。アローニーロはそれを未解放の掬花で受け止める。行動し終えた硬直を狙って小太郎が殴りかかっているが、軽くあしらわれてしまう。

ミッレ・ヴァインクラ

ネギは期間限定でテオドラと仮契約し、千の絆と言うアーティファクトを手にしていた。効果は自身の従者の仮契約カードを入れる事で、本来なら従者しか使えないアーティファクトを使えるようにするカードホルダー。従者が複数いるネギには使えるアーティフ

アクトである。

「他人のアーティファクトを使える？だが、それがどうした？そんなモノは意味が無い」

ハマノツルギは魔法を無力化できるから魔法使いにとっては危険極まりないが、アローニーロにとってはさして脅威にはならない。障壁を無意味にされるのは確かに面倒だが、それだけだ。

掬花を始解し、すぐに振るう。が、まるで軌道を知っていたのかのように避けられてリングに一部を粉碎する。

(なに？完全に避けられた？)

そこでアローニーロは思い返す、ネギの従者のアーティファクトを。一つだけだが、これを可能する事ができるアーティファクトを知っている。それを使われているなら、この結果は自然な成り行きだろう。だが、同時にアローニーロは疑問に思った。それは本という形状で、読む必要があるのにそれをまったく行っていない事に。

(可能性は2つ。従者が念話で読み上げているか、なにかしらの道具でいどのえにつきの内容を知るか)

アローニーロがそう考えたところでネギの魔力が乱れた、まるで心の声が聞こえているかのよう。その反応ですぐにアローニーロは結論に行き着く、自分の表層心理が読まれているという結論に。

(感づかれた)

(予想通りやな)

ばれるなんて事はハマノツルギを出した時から解っていたのだ、
だとしても障壁を無効化できるハマノツルギ無しでは強固なアー
ロー口の障壁すら突破するのは難しい。

「隠し玉はそれだけか？だとしたら、残念だ」

「小太郎君！」

「わかつとる！」

小太郎は狗神を肉体に取り込み、獣化奥義「狗音影装」を発動す
る。

「20秒間、俺とだけ付き合ってもらおうで」

「そんなに持つのか？」

アーローロー口は口ではそう言っているが、なにかしらの手を打つ
のに時間が必要なら待つつもりだった。それも、いどのえにつきと
読み上げ耳を通じてネギに伝わる。同時に、それまで小太郎で暇を
潰すとも……

小太郎は幼い頃から戦ってきた。戦う事ばかりの人生で自然と強
くなってきた、その中で格上と戦う機会は何度もあり、時には卑怯
とも取れる戦法で勝ち残った事もある。だが、アーローロー口は小手
先の技では時間稼ぎすら難しい相手だ。

「喜べ、今は障壁と武器は無しだ」

「余裕やな……」

見下されるなら、その油断でしかない余裕を利用して喉元に盛大に噛み付き、喉を食いちぎらせてもらう。

「後悔すんなや!！」

小太郎は分身を5体出し、すぐにアローニーロを取り囲むように配置して避けられない微妙に時間をずらして攻撃を仕掛ける。ただそれだけの攻撃が中る訳がなく、分身4体はあっさりとカウンターを中てられて消される。

「弱いな」

「まだや!！」

今度は小太郎自身が接近戦を仕掛ける。

「馬鹿正直な攻撃は簡単に中るはずが……」

途中でアローニーロの言葉が止まる。影から小太郎の分身が出てきてアローニーロを掴んで僅かに動きを阻害させる。その隙につき、アローニーロに密着するような状態になる。

「気色悪い」

アレな趣味が無いアローニーロにはすぐに引き剥がそうとしようとしたが、小太郎のほうが早かった。

「0距離なら、ちつたあ痛いやる？」

口から爆発する影弾を複数一度に吐きだす。1つが爆発すると他の影弾を誘爆してさらに爆発を過激にする。

「チツ！服が少し破けた！」

爆煙の中から舌打ちをし、悪態をつくアローニー口が気絶させられた小太郎を引きずりながら出てくる。服が爆発によって破けて少しボロくなつた事以外では変化は無く、アローニー口は健在である。

「さて、準備は済んだか？済んで無ければ、コレでもう少し暇を潰す事にするか？」

引きずってきた小太郎を指さし、さらに心で続ける。「あまりにも待たせると、小太郎が無事では済まないかもしれんぞ？」と。

「準備は済みました。此処からが全開です！術式兵装 雷天大壮2
雷天双壮」

「なるほどな……闇の魔法か。それならば、匹敵できるかもな。エヴァが作った究極技法に引けを取らない魔法」

暗にエヴァンジェリンを褒めつつ、アローニー口はネギを観察する。名前での系統を取り込んだかは解る、なら、それがどのような形になっているのかを理解しよう。だが、すぐに中断させられる。ネギが秒速150？で動き、手に握っていたハマノツルギでアローニー口を斬りかかる。

「速いな。それにハマノツルギによって障壁は無効化されるから、

ただの人間では今の一撃で終わっていた。だが、付け焼刃の剣術ではな……………」

真剣白刃取りによりハマノツルギを掴み取っていたアローニー口が言う。

「お前の戦い方では無い。ジャックのように武器を持たない方が強い。邪魔だ、壊れる」

アローニー口の表層心理を聞いて、ネギは退こうとしたが、遅かった。アローニー口が掴んでいたハマノツルギに一気に力を込めて破壊した。アティファクトは破壊されても再びカードから出せるが、アローニー口はそれを許すつもりはなく、一気に掬花で攻め立てる。

（さて、今のお前は電気みたいなものになっているが、それが何時まで続くかな？）

速くなった、それに伴って打撃などの攻撃力も上がって全体的に強くなり、いどのえにつきと読み上げ耳で相手の次の行動を読み取れる。だというのに、ネギは防戦一方になっていた。

（ありえない！なんで雷化状態なのに同じ速さで押されてる！？）

ネギは雷化状態で思考加速などもあり、普段より速い頭の回転で必死に考える。使える手札はほとんど無い。アティファクトを出そうにもそんな暇は無い。例え出せたとしてもこの状況を動かせるようなアティファクトは無い。魔法はどうか、オリジナル融合呪文なら障壁を突破して届く。だが、詠唱をしている余裕はない。詠唱無しでの魔法なら撃てるだろうが、威力が期待できない。詰んで

いる。

(なんで！なんで！なんで！万全の用意をした！命懸けで闇の魔法を会得した！なのに！届かない！)

歯を食いしばり、睨み付けるようにアローニーロを見る。

(怖い顔だな)

ネギの耳に読み上げ耳から伝わる、アローニーロの余裕のある心の声。

今のアローニーロとネギの圧倒的差は余裕であった。勝たねばならない、万全の準備をした、などの精神的圧力で焦燥に駆られ、動きに無駄でて、視野を狭めて追い詰められていた。余裕無い人間はよく失敗を犯す。普段であればしないような失敗を……

「え？」

最初にアローニーロが粉碎したリングの一部の破片を踏んで体勢を崩す。

「所詮は子供か……そんな失敗で負けるとは」

アローニーロの一撃を叩き込まれ、ネギは気絶する。

S i d e o u t

魔法世界 VS ネギ&小太郎（後書き）

感想とか待ってます。

魔法世界 判断(前書き)

第79話

感想 吹風様、開け！ごまドレ様
ありがとうございます！！

魔法世界 判断

Side 小太郎

「負け、やったな」

「……うん」

元々優勝は無理やったんや、大戦時の英雄が当時よりも強くなつて2人も参加してた大会だったんだから。それなのに！

「いつまでウジウジしとるんや！！それでどうにかなるんか！！」

「だつ、だつて……あの賞金が無いと夏美さん達を奴隷から解放できない……」

本命は強くなる事や経験を積む事じゃなくて、奴隷になってしまった夏美のねーちゃん達を奴隷から解放するための金稼ぎやったから……優勝賞金があれば解放に必要な金額にすぐに届いたのに……

「そつやけど………だったらすぐに次の大会を考えなければならんやろ！奴隷から解放するために！！」

拳闘大会がこれつきりじゃ無い。時間はかかるだろうけど、拳闘で稼げば良い。俺は戦うことしかできひんから……

「戦う事しか頭に無いのか？ 脳筋が」

「は？」

「え？」

い、いつのまにそこに居たんや、それよりなんでこんなところにア
ーロニーロが……

「人を頼るといふ事を知らんのか？まあ、そんなどうでもいい事と
これは置いておこう。ほれ」

いかにもいらないう感じでおいたのは……優勝賞金！！？な
んぢや！？

「まあ、テオドラとかから話は聞いたぞ。3-Aの3人が奴隷にな
つていて解放するのに金が必要ってな。流石にエヴァのクラスで人
が減るのはどうかと思うからな、使え」

そう言うтусぐにどっかに行ってしまった……。案外良い奴だっ
たんか？

「まあ、なんにしてもこれで奴隷から解放できるな。なんか納得で
きない気がしなくもないが……」

「そう、だね……」

俺等の努力はなんやったんろうか……

S i d e o u t

S i d e アーロニーロ

「大会優勝おめでとう。それと、存外甘いんもんだね君は」

呼ばれたから来てみれば開口一番にその言葉か……。甘いか……。確かにそうかもな、タダで手を差し伸べるなんてな……………

「なんとも言え、フェイト・アーウェルンクス」

用意されていたイスに座り、見据える。

「まあ、そんなどうでも良い事は置いておこうか。依頼をしたい。

依頼内容は完全なる世界の邪魔をする者達の足止めか排除を、報酬はこの造物主の掟だ」

そう言いながらモノを見せる。

「君がなにを欲するか皆目見当がつかなかったから、僕等でないと提供できないコレを選んだよ。コレは造物主ライフメーカーの力を持った素晴らしいアイテムだ。前払いで渡してもいい」

「使い方は？それと具体的にどのような事ができる？」

どんな道具だろうが使い方が解らなければ使えない。

「使い方は受けてくれたら教えるよ。できる事は、魔法世界人を跡形も無く消せるね」

僅かに、忌々しそうに消せると言った。嫌な記憶でもあるだろうか？

「偉大なる主グランドマスターキーの鍵という御大層な名前だというのに、随分と下らな

「い事しかできんようだな」

「僕だって全てを知っている訳ではないから、君が研究すれば違う使い道が見つかるかもしれないよ？」

「道具は基本的に決まった方向にしか使えない。それは魔導具なら特に顕著にできるが、特定の力を操作できるモノなら応用の幅がある。そういうモノなら……」

「興味深いが、そんな使えないモノでは依頼は受けん」

「……どうして、使えないと言うんだい？」

「造物主の力を持っていると言ったな。そして魔法世界人を跡形も無く消せるとも言った。それにできるのは幻想操作といったところか？だとしたら下らないし、消える世界でしか使えん道具ではな」

「完全なる世界の計画が成功すれば魔法世界は消える。なら、魔法世界^{そつ}でしか使えない道具など記念品程度の価値しかない。似たような法則の世界をダイオラマ魔法球で作ればそこでも使えるかもしれないが、手間を考えるとわざわざ作る意味が無いし、箱庭の神になるつもりは無い。」

「依頼は受けない。そういう事かい？」

「そうなるな」

「使えない道具に興味は無い。そんなものはどこになりとも捨ててしまえ。」

「残念だね、非常に残念だよ。君さえ協力してくれれば全てが上手く行くのに……後学のために聞かせてくれないかい、なんだったら協力してくれたんだい？」

「魔法世界の存続のための計画だったら、その報酬で受けていた」

魔法世界に完全なる世界にする。不完全たる世界をどういう基準で完全なる世界にするかは知らんが、碌なものではないだろう。

「存続より素晴らしいモノだよ。誰もが幸せな楽園を造り上げるんだから。そこなら、誰もが受け入れられて幸せが待っている。真祖の吸血鬼だろうと、正体不明のバケモノだろうと例外にはなりえない。この手を掴んで、役割を果たせば手にする事ができる。君は大切な家族と永遠に過ごせるよ」

腕を伸ばし、握手の形にして待っている。

幸せが待っているか、ありきたりだというのに心惹かれるな。それが本当だろうと、嘘であろうと……

「魅力的な悪魔の囁きだな」

「協力する気になったかい？」

「だが、永遠など幻想だ、虚実だ、願望だ、時間が及ぼす変化を畏れて生み出された妄言であり、限りあるモノの対義語にしか過ぎない」

永遠など存在できない、例え理論上では永遠が可能だとして、それが本当だろうと永遠に意味を俺には見出せない。随分と、冷めたものだな。

「やっぱり、君は協力してくれないかい」

「ついさつき断つただろ。それに、中身を知ってますます協力する気が無くなった。俺は揺り籠など所望していないんでな」

こいつの言った完全なる世界など、自立できない赤ん坊の為の揺り籠と大差ないだろう。幸せと言う餌を与えられ、限られた世界で過ごす。

「完全なる世界を揺り籠と言うか……的を射てるね。だけど、揺り籠を所望していないのは君だけかもしれないよ？誰もが大なり小なり悩みを持ち、自分に優しい世界を求めている。完全なる世界はそういう人達の楽園となる」

「馬鹿馬鹿しいな。救済を謳いながらその実は現実に押し潰されそうになっている人間の為の揺り籠と言うのか」

「だが、そこなら魔法世界人は消滅せずに済んで誰もが幸せに過ごせる。消滅するよりはよっぽどマシだろ？君と繋がりを持つ魔法世界人に、消えるなんて君は言うのかい？」

俺を解ってないようだ。20年前から消えると知っていたのだ、とっくに見限っている。

「言うな。魔法世界は滅ぶべくして滅びるのだから、魔法世界人の消滅は必然だ」

存続自体の方法は時間稼ぎならあるが、それをやるには時間が掛かるだろうからおそらくは間に合わない。それに、幻想を現実にす

る魔法でも無い限りはまた崩壊の危機が訪れる。

「さて、話す事はもう無いから帰らせてもらう。」

「敵を放置するのかい？」

おかしな事を言う

「お前が死んだら、完全なる世界の行動に支障をきたすだろう。それでは楽しめないから、今は殺さない。尤も、俺の家族に牙を剥くなら今すぐに殺してやるが？」

「つくづくおかしな存在だね。君の行動と価値観は理解できないよ。」

お前なんかに理解してもらおうとは思って無い。楽しめれば、それでいいからな。

S i d e o u t

魔法世界 判断（後書き）

感想とか待ってます。

魔法世界 離脱（前書き）

第80話

短い

魔法世界 離脱

Side アーロニーロ

フェイトを見逃したから、祭りが完全なる世界の計画通りに始められるだろう。いつ始まるかを聞いておくべきだったかもな。まあ、俺に依頼をしてきたところを考えるともうすぐ始まるんだろうがな。それまでにエヴァ達を麻帆良に帰しておいた方が良さだろう。流石に、確実になっているのを教えずに留まらせるつもりは無い。早速呼んで話をしておくか。

「選べ、麻帆良に帰ってそのままのんびりするか、このまま魔法世界に残って起きるであろう狂騒に巻き込まれるか。俺としては麻帆良に帰って欲しいな、狂騒は殺し合いに発展するだろうからな」

訓練のように安全が保障できないから、安全であろう麻帆良に帰ってほしい。それに、完全なる世界が目的を達した時に魔法世界に居たらどうなるかがハッキリしない。完全なる世界は出入りが自由なのか？それとも入ったら2度と出れないのか？疑問は尽きないが、居たら巻き込まれるのは確定しているのだ。

「私は父様がなんて言おうが付いて行く」

エヴァは予想通り。

「私はマスターとアールロー口様に付いて行きます。と、言いたいのですが、私では足手まといになるので麻帆良で帰りを待っています」

茶々丸も予想通り。

「私も麻帆良に帰る。防御と回復なんて私が居なくても十分だしな」
「そもそも千雨は勝つ為じゃなくて、生き残る為に力を手にしたから当然の判断」

「……………私も帰ります。家で待ってますから、必ず帰って来てくださいね」

さよはどこか寂しそうに笑って言った。

「それでは、早速送ろう。何時始まるか解らないからな、早いに越した事はないからすぐに準備をして来い」

簡単に返事をしてエヴァ以外は荷物をまとめに行く。

「どうした、エヴァ？」

なぜか俺を見つめたままため息をする。呆れられる憶えは無いんだが……………？

「さよは一緒に戦いたがっていると解っているだろう？だというのに、なんで手を差し伸ばして掴めと言わないんだ。一緒に戦えと言えば、あいつは戦うのに……………」

「そんな事が……」

さよは別に実力不足ではない。だが、今回は戦わせるつもりは毛頭無い。危険というのもあるが、さよは元々戦いに向いていない。

「手を血で濡らすのは俺等だけでいい。優しいさよが俺等のようにすぐに相手を殺せるか？ 殺せないだろう。戦う力を持っていようが、殺すのには向いていない」

送還されると知らなければ、京都では鬼を射抜きさえしなかっただろう。一度死んだから、命を大切にしている節がある。

「さよ達も、かわいい娘か？」

不機嫌そうに言うな……

「預かっている子供ってとこだな。俺の娘はエヴァ、お前だけだ……」

この体の本質は強欲なバケモノだからな。喰らって自分の一部として発現させることのできるな……

さよも茶々丸も千雨も俺達からはかけ離れている。だからか、家族と言いながら自分の中では不鮮明な位置に置いて居る。

「それに、2人だけなら20年前のように動きやすいからな」

「そつちが本命か？」

「多分な……」

S i d e o u t

S i d e さよ

「よかつたのかよ」

アローニーロさんに黒腔で魔法世界から麻帆良に送ってもらい、家に着いたら千雨さんが言いました。

「なにが、です?」

聞かなくても判る。けど、

「自分だけでも残って、師匠とエヴァと一緒に戦いたかつたんだろ。師匠の役に立ちたいから」

アローニーロさんの役に立ちたい、たしかにそう思ってます。今があるのはアローニーロさんの御蔭で、出会っていなければずっと幽霊をしていたかもしれぬ。

「残って戦う事では役に立てません。今回はアローニーロさんは楽しむ為に戦うみたいですから、私が居ても……ただ……邪魔なだけです……」

だから、役立たずという訳じゃないけど、居てもダメです。だから、迷惑にならないように麻帆良に帰ってきたんです。

「さよさんの判断は当然のモノです。私達はマスターとアローニーロ様に協力はできても、隣に立つ事は出来ません」

そう、2人はきつと届かない場所に立っている。だから、これで良い……

「（まっ、私がこれ以上入り込む事じゃないな。さよが決めた事だし、望む判断じゃなくても安全を考えるなら、最善である判断のはずだからな）……それじゃ、もうすぐ始まる新学期の準備をしとかないとな。新学期早々に忘れ物とかはごめんだからな」

「そうですね。もうすぐ夏休みは終わりですから、頭を徐々に切り変えないといけませんね」

思えば、随分と長くて変わった夏休みでしたね。魔法世界に行ったり、なぜから歳位の姿になってちよつと間だけ生活したり、拳闘というものを生でみたり、国のお姫様と友達になったりして普通だったらありえない事ばかりでした。今まで一番変わっていた夏休みでした。

S i d e o u t

魔法世界 離脱（後書き）

原作（ネギま！の方）を持って無いから、よく解らないところに突入したせいでイマイチ思い通りに進まない……たしか舞踏会が襲われるだっけ？その前にネギがクルトと戦うんだっけ？原作持たずに書いている弊害が………原作と違うのなんて誰も気にしないよね？意見とか待ってます。

ネギがクルトと戦うで合っているなら、次でそれを書こうと思っ
ます。

魔法世界 抜けて行った結果（前書き）

第81話

感想 White Seal様、近代哲学の祖の片割れ様
ありがとうございます。

魔法世界 抜けて行った結果

Side 第三者

舞踏会、そんなものに興味を微塵も持たない人物は捜せばいくらでもいる。舞踏会より武道会に居た方が自然に見え、なお且つそちらの方が乗り気で参加するだろう。尤も、今回は舞踏会に参加するより重要な事ができたから、ジャック・ラカンが始まる直前で抜け出した。

その後をアローニーロが追いかけているのは、ただ単に舞踏会よりこっちの方が面白そうであるという理由だった。

「アローニーロ、なんのつもりだ？」

「なにがだ？」

ラカンはある程度はアローニーロを信用している。同時に、信頼は出来ないとも思っている。アローニーロの言葉を信じて、頼れるとは思っていない。

「なんでついて来てるかだ」

「そんな事か？こっちの方が見てて面白そうだからだ」

だから、ラカンはアローニーロは言葉そのままの行動をすると考ええる。例えば自分がアローニーロの目の前で殺されかけたとしても、アローニーロは全てが終わるまでずっと見てるだけであろうと。

「見つけた……」

「ジャック・ラカンにアローニーロ・アルルエリか、考え得る限りは最悪の組み合わせだね」

相手の姿を確認してフェイト・アーウェルンクス目を細めて考える。ラカンならどうにかなるが、アローニーロはどうにもならない可能性の方が高い。それに、まだ計画は始まっていないのにアローニーロが動いているのは不自然だ。

「始めに言っておくが、俺は見学だ。まあ、信用出来んかもしれんがな」

「いや、信用するよ。それなら君の行動も納得ができるからね。ただ……君と戦いたがっている困ったのがいるんだよ」

フェイトが言い終わる前に1つの影が跳び出し、アローニーロに迷い無く突撃する。それに反応して、アローニーロはすぐに掬花と神鎗で自分に向かって振るわれた二刀小太刀を防ぐ。

「ふふふ、お久しゅうやな、アローニーロはん。こんなところで会うなんて、うちら2人は運命の赤い糸で繋がれているんとちゃいますかな？」

目を輝かせながら月詠が心底うれしそうに、まるで恋人に愛を囁くようにアローニーロに言う。

「やっぱり、先輩もそそりますけど、アローニーロはんの方がもっとそそりますわ。さあ！うちの欲望を満たしてくれなはれ！」

「ふん……馬鹿馬鹿しい」

狂おしいほど月詠がアローニーロを求めているのに、アローニーロは知った事かという風に月詠は眼中に無いかのような態度であり、さながら道端に落ちている小石を見るような感じであった。

「さて、ジャック・ラカン。こつちも始めようか」

「ハッ！そんなじゃあ、思いつきり始めようか！」

魔法世界での最高峰の戦いの火蓋が切って落とされた。

「ざくんがくんけくん 式ノ太刀」

京都神鳴流に存在する式ノ太刀とは、元来は手前にいる人間を傷付けずにその後ろに居る、またはあるモノだけを斬る京都神鳴流奥義である。ほんの少し使い方を変えれば、かなり強度を誇る魔法使いの障壁であろうともそれに影響されずに、狙った魔法使いだけを斬る事が可能である。尤も、それは普通の魔法使いには有効だろうが、アローニーロには効果が薄かった。

ギヤリリリイイイ！！金属同士を勢いよくこすった時に起きる甲高い不愉快な音が、月詠の刀とアローニーロの鋼皮で火花と共に発せられる。

「斬れそうなのは見た目だけか？」

一瞬だけ呆気に取られた月詠であったが、アローニーロの一言で我に返ってすぐに距離を取る。前回戦った時は一太刀も入れられな

かったのだから、やっと一太刀入れられたのだから喜ぶところかもしれないが、少なくとも喜べるような結果では無かった。岩を両断する技を受けて斬れないなど、強固な鱗を持つ竜種でも無い限りはありえない。

「アローニーロはん、あんさん何ですか？」

気による強化などで傷が浅いなどは可能性として考えていたが、斬岩剣で斬れないのは完全な想定外の事態であった。だから、少々が動転して思わず聞いてしまった。

「そういう存在だ。理解なんて不可能だろう、ただそういう存在^モと受け入れるんだな」

答えになつてない答えではあったが、アローニーロは答えた。だが、動転した気を元に戻すには十分であった。いままで相手が何なのかは知りも理解もせずただ戦って斬ってきたのだ、今回は相手が人型で岩よりも堅いだけだ。普通なら、恐れるには十分な理由になりえるだろうが、月詠にとっては少々不服なだけだ。斬ろうとしても斬れないなら、斬り合う楽しみもあつたモノじゃない。

「もう一つ、いいですか？アローニーロはんは、斬れますか？」

「まあ、斬れるな」

その答えに月詠は笑う。つまり、斬岩剣以上なら斬れる可能性があるあると……

「それやったら、良いです。それなら斬り合いを楽しめなはるか
ら」

笑顔のまま月詠はアールニー口に再び斬りかかる。勿論アールニー口は応戦する。

「毎日、毎日、今の為に腕を磨いて来はったんや！こうして斬り合う為に！夢にまで見はったんよ？アールニー口はん以上に強い人が居いひんかったから！」

目を狂気の色に染め上げ、熱に浮かされたように、ただ斬り合う人形かのように、お互いを血を求めて斬ろうとする。斬り合うと言っても、月詠の刀はアールニー口を斬れてなく、アールニー口の刀は月詠を徐々に斬っている。どれもごく浅い斬り傷だが、アールニー口と斬り結ぶ度に数を増やしていった、無視できないモノになるというのに、まるで消耗してないように逆に太刀筋が鋭くなっている。

「二刀連撃斬鉄閃 二ノ太刀」

月詠の二刀小太刀の刀身から螺旋状の気が飛ばされる。アールニー口の障壁を無視し、そのままアールニー口を襲うが、それを斬り伏せる。だが、届いた。

「ツチ」

舌打ちをし、アールニー口は自分の左肩を確認する。服と共にほんの僅かだが、アールニー口の鋼皮を斬って、血を流させていた。

「アッハア！やっと届きましたや。これで、やっと斬り合いになりますわ」

笑いながら月詠はアローニー口の血を流す肩を見据えながら、まるで自分を抱きしめるように腕を組む。

「ふふふ、これでどの程度でアローニー口はんを斬れるかが解りましたや。次は直接斬りますから、互いに血を流しながら、一緒に楽しみましょう?」

今度は腕を開き、まるで全てを受け入れると言わんばかりのポーズである。

狂気を目に宿したまま、慈母のような全てを受け入れる優しげな笑みを浮かべていたが、すぐにその表情が狂気に駆られたとモノと変わってアローニー口に瞬動で近づく。

刃と刃が瞬間的に触れ合えば火花を散らし、刃と肌が瞬間的に触れ合えば血を散らす。刃を持った武器を使った殺し合いの当然の風景であり、月詠が求めていた斬り合いである。

「狂っているな……」

「その狂ってるのに、付き合おうているアローニー口はんもじゅぶん、狂ってますやろ?」

(違い無い。殺し合いですらも楽しむのは、頭が平和な奴らからしたら十分狂っている)

月詠の問いにアローニー口は心の中で反芻し、頷く。死を感じる戦いを楽しんでいるという点は同類であると……それでも、かけ離れた存在だ。

「もう、終わるな」

「？、なんのこと……？」

アールと月詠は斬り傷が多いが、致命傷には程遠い。尤も、月詠は出血量がそろそろ危険域に届きそうのだが、アールが言ったのはそんな事では無く、もう一組の戦いの行方だった。

ラカンがフェイトに敗北して、消えるまであまり時間が残っていなかったのだ……

S i d e o u t

魔法世界 抜けて行った結果（後書き）

一言、言わして下さい。ここに「次は」って書くのは基本的に予定であって、確定事項ではありません。つい、アローニー口をラカンに同行させて、月詠をアローニー口と戦わせてしまいました。……

…問題は、無いはずだ……

次はラカンVSフェイトになるかな？

感想とか待ってます。

魔法世界 抜けて行った結果2（前書き）

第82話

魔法世界 抜けて行った結果2

Side 第三者

「うらあー!!」

声と共に気合いを込めたラカンの拳がフェイトめがけて振り下ろされ、地面を砕く。フェイトにかすっただけだが、常人だったら顔を激痛に歪めただろう。

「ほんと、恐ろしいよ。君といい、アーロニーロといい僕の障壁を簡単に突破して攻撃を届かせるんだから。それでも、僕は勝たなきゃいけないんだけど」

だが、フェイトは淡々とまるで痛みが無いかのように喋りだす。

「だったら、全力でぶつかってくればいいだろ」

「そうだね、そうしなければ届かないだろうね」

単純な殴り合い。行動だけを見て言うならそれで事足りるだろう。尤も、一撃で簡単に岩など粉碎できる威力の拳での殴り合いで、普通なら人間の体からはでないような音を轟かせているから実際に見ない限りは殴り合いなどとは思えないだろうが……

「攻撃魔法は使わねえのか？」

「長い詠唱してる暇はないし、攻撃魔法を使っても動きを止めれるくらいだろ？」

中途半端な威力の攻撃魔法なら効果が無いだろうし、強力な攻撃魔法でも中らないかもしれないのだ。そのような無駄になる可能性が高い事に魔力を使う程に余裕は無い。そうフェイトは考えて、攻撃魔法なんて使わない。

「だったら、こうして身体強化に割り振った方が確実に無駄が無い」

身体強化の魔法をかけ、ラカンの懐に入ってまずは右で鍛えられた腹筋にめり込ませ、続けて無防備な顎に今度は左でアッパーで殴り上げ、フィニッシュとして右足で回転蹴りを頭に入れる。

(手応えはあった。だけど、この程度ではまだまだだろう)

吹き飛ばされ、盛大に出た土煙の中から何事も無かったかのように腕をぐるぐる回し、首をゴキッ、ゴキッ、と鳴らしながらラカンが出てくる。生物の弱点である頭に、強烈な打撃を二発も打ち込んだというのに平然としてしているのは、流石は死なない男の異名を持つジャック・ラカンと言ったところであろう。

「いい攻撃だったぜ。俺が受けた体術でも1、2を争うくらいには」

ラカンは笑いながら言う。その笑いは攻撃的と感じさせ、ラカンがアローニーロと戦っている最中に見せたのと酷似していた。

「ところで、現状の1番になっているのを叩きだしたの誰だい？」

「ナギだぜ」

「へえ、サウザントマスターが……意外だね。てつきりアール二一
口が叩きだしたと思っていたよ」

「アール二一とは殴り合った事が無いんでな」

「そうかい。ついでに聞くけど、さっきと同等の攻撃を後何発打ち
込んだら君は倒れるんだい？」

「一万発」

普通なら冗談か嘘と切り捨てられる数だが、大戦を戦い抜いた英雄であるラカンが言くと、本当と思える。耐えるだけなら、それ以上の数を打ち込まれても耐えそうだが……

「それなら、一万発でも打ち込むよ」

「やってみやがれ」

短い会話を終え、ラカンとフェイトは殴り合いを再開する。肩を、胸を、腹を、拳を、自分の拳で速く、重く、鋭く、互いに打つてない場所が無い程に殴り合う。しかし、拮抗はしていなかった。体格差、能力差、経験の差。魔法に関するモノ以外は、フェイトはラカンに負けている。だから、フェイト・アールウェルックスが身体強化の魔法を使っても、ジャック・ラカンに殴り合いで勝てないのは当然の結果である。

戦いが始まってからフェイト・アールウェルックスはジャック・ラカンに抵抗していたにすぎない。だから、フェイトがラカンに殴り飛ばされたのは当然の結果だろう。

「どうした！まだまだ行けんたる！」

齒を剥き出しにしてラカンは飛ばされたフェイトに咆える。まだまだ満足していないと

「ああ、そうだね。まだまだ行けるね……けど、もう余裕は無いんだ」

ラカンと声音と比べると冷淡に感じる温度差のある声で答え、最後になる一手を放つ。それは、ほんの一瞬の出来事だった。フェイトが飛ばされてぶつかつた事で舞い上がった土煙の中から、魔法世界と魔法世界人に対する絶対の力を持つ魔法を放った。

「『リライト』魔法世界人である君には、この世界にある数少ない絶対な力を持つ魔法だよ。時間のように決して避けられない影響力を持つ、ね。だけど、中らなければ無意味だから絶対に中てられる状況を作る必要があった。殴り合いだけをしていたのは、君がアローニークと拳闘大会で戦った際に近接戦闘ばかりをしていて、アローニークが投げた槍に反応できなかったから、その時の状況を参考にしようして戦った」

アローニークとラカンの試合をフェイトは直に見ていた。打倒すべき敵の情報をほんの少しでも得る為に、そしてその試合で魔法世界人であるラカンを倒す為の策を思い付き、実行した。

フェイトが攻撃魔法を使わなかったのや、ラカンに合わせて殴り合いをしておのや、言葉は意識を打撃だけに向けさせて、離れた位置から攻撃はしてこないと先入観を植え付けるためだ。

全てはリライトを中てる為の策。それは成功し、見事にラカンにリライトを中てた。

「まさか、こんな負け方するとは夢にも思わなかったぜ」

ラカンは体に大穴が空き、倒れる。

「さようなら、そして、完全なる世界にようこそ、ジャック・ラカン。君はこれから幸せな世界に行くのだから、悲しむ必要も悔む必要も無い。そこで、全ての望みが叶うのだから」

さながら死ぬ寸前の人を諭す神父のようにフェイトは語りかける。

「フェイトは〜ん、そろそろ戻りましょうよ〜」

「アローニーロはどうしたんだい？さっきまで戦ってただろう？」

「ん〜、どっか行ってしまいましたわ〜。今は十分楽しめた、次はもっと楽しませろって言うてはりましたよ〜」

アローニーロはラカンがフェイトに負けるのを見終わったら、すぐに移動していた。

「……そうかい。それじゃ、すぐに移動しようか」

ラカンはまだ消えてないが、消えるのは時間の問題だと判断してすぐに水を媒介とした転移魔法でフェイトと月詠はその場から消える。

消える直前のラカンが、誰かに何かを伝える為に動いてもフェイトや月詠などが知り得ない事である。

Side out

魔法世界 抜けて行った結果2（後書き）

ネギVSクルトは書かなくていいか、なんて決めた今日この頃。

下手に書いたらおかしなことに成りそうなんで……まあ、今も十分

おかしいと思いますが……

駆け足で進めちゃいますかな。

感想とか待っています。

魔法世界 決戦の少し前（前書き）

第83話

感想 White Seal様、がう様
ありがとうございます！

魔法世界 決戦の少し前

Side アーロニーロ

「アーロニーロ！なぜラカンを見殺しにした！」

テオドラが服のフリフリの部分を掴みかかってきて鬼のような形相で怒鳴る。いくら掴み易いからといって、あまり掴まないで欲しいんだがな。結構後が残ってるから……

「なぜ俺が見殺しにしたと？」

少なくともフェイトが言っていた完全なる世界の目的が本当だとしたら、死んだのではなく完全なる世界に送られたと考えるべきだろう。負けたところを見たが、出血などのような損傷ではなく消失と言った感じだったから、完全に消えたのかもしれないが……

「しらばっくれるで無い！お主がラカンの後を追いかけるように舞踏会を抜け出したのは知っているのじゃ！」

「あくまでそういう風に見えただけであろう？実際に俺がどう動いたのかは、俺以外は知らない。ただの言い掛かりだ。まあ、知った事でどうこう出来る話では無いがな」

知ったところで意味など無いだろ。

「はぐらかさずにハッキリ答えるのじゃ！お主はラカンがどうなったかを見ていたのであるう！……」

「体が大穴が空くところまで見た、その後は知らん。内臓が半分ほど消失してたようだから、どうなったかは予想が簡単だがな」

嘘をつく理由が無いので正直に話す。良い奴だったが、それだけだ。どうせ魔法世界が消滅する時には一緒に消えていただろうから遅いか早いかの違いだろう。武力を持っていたが、それでは滅びる世界は救えない。

「なっ、なぜじゃ！お主…なら、ラカンのひっ、1人くらい簡単に助けられたであろう！」

気丈に振舞って（というか、怒鳴って）いたが、ラカンが死んだと思っただけの感情を押し留めてたが決壊したんだろう。涙を浮かべ、声も震えている。

「無理だな。ラカンの状態は初めて見る状態だったから手の施しようが無かった」

助ける気が最初から毛頭程も無かった、というのもあるがな。とりあえず、テオドラには俺の部屋から御退場してもらおう。やるべき事が多少はあるからな。

「さて、状況はどうなっているだ？エヴァ」

「大方は父様の予想通りだな。おそらく完全なる世界の連中は、舞踏会に参加している各国の要人を処分して混乱を招く予定だったんだろうが、私と父様の^{大虚}で要人は誰一人欠ける事無く襲撃を乗り切った」

「よくやったな、エヴァ」

エヴァの頭を撫でながら褒める。おそらくこれで開戦はすぐになるだろう。

「完全なる世界が再び行動をしたと解つてから、各国は急いで艦隊などの戦いの準備を始めている。準備は数日で終えてすぐに攻撃が始まるだろう」

「どうせすぐに作戦会議にでも招集されるだろうから休める時に休んでおけよ」

激戦になるのは決まっている。そうならないとつまらないだろうから、そうなって欲しいだけだが。一度開戦してしまえば休む暇など無いだろう。それに、完全なる世界の本拠地への突入の要員に入られるだろうから連戦になる可能性が非常に高い。休養不足で死にましたなんて笑い話にすらなれない間抜けな死に方だ。

「アローニー口様、各国の皆様が完全なる世界について話し合いたいと……」

ノックの後に扉越しに用件が伝えられる。ようは作戦会議なんだろうが、準備の為の情報も少しでも欲しいのだろう。別に隠す必要もないから聞かれれば答えるとしようか。

「わかった。俺だけで十分か？」

「はい。そのように伺っております」

すぐに部屋を出ると人間で軍服を着ている奴に連れられて、暫定的な会議室まで歩く事になった。

なんと言うか……くだらん。魔法世界の危機だと言うのに、まずは魔法世界が残ったその後の事を考えている。まあ、これは仕方ない事なんだろうが……。戦艦一機動かすだけでかなりの金がかかる。それを全体の数は知らんが、かなりの数を動かすからかなりの金が必要になる。他にも戦艦を動かす費用に入るだろうが、積載する食糧やら医療品などの金額もかさむ。ハッキリ言うと、馬鹿にならない金が必要になる。できれば、財政を圧迫する程の金は使いたくないのが国のお偉いさんの考えだ。

他にも配置なども問題になる。魔法世界人を消し去る魔法『リライト』の前では幻想でない人間以外は無力になる。そうになると必然的に亜人ばかりの帝国は前に出にくくなり、人間が多い連合が前に出されるし、亜人や人間が混同してるアリアドネーは帝国と連合に板挟みにされている。中立は辛いな……

帝国は物資などの支援に徹するから、連合とアリアドネーになるべく前に出て欲しい。相手の魔法の特性を考えれば当然なんだが、連合は自分達ばかり血を流させられるから反対する。アリアドネーは両者の落とし所を頑張って捜しているが、どちらもこの機会に相手の国力を少しでも削ってやろうと腹の中で考えているからか、なかなか見つからない。

「お前等、戦う気があんのか？」

会議室にある視線全部が俺に注がれる。会議に参加なんてまったくして無かった俺がいきなり発言したから当然なのかもしれないが……

「今回の戦いは20年前の悪夢の再来というのを忘れていないか？それを止めた奴が居ないのだから、発動する前に全てを終わらせる必要があるというのを忘れていないか？」

前は国一つ犠牲にしてアリカが止めたが、今回は似たような事はできない。どうなるかと知った事ではないが、現状をいまひとつ解っていないようないな。

「手段を選んでられる余裕などあるのか？あつたらいいな」

どうせ戦略については素人同然なんだから、本職の奴らに任せる。元よりこんな会議に参加している意味なんてほとんど無いようだしな。誰も俺に完全なる世界について何か知っているかなんて聞かないしな。

「作戦なんかが決まったら教えてくれ、戦争の素人が居ても邪魔なだけだからな」

そう言つて会議室から退出する。しかし、救おうとしている連中から襲いかかられるというのは、いったいどうゆう心境なんだろうな？

そうなつても救おうとしているのは素晴らしい精神なんだろうが、所詮は弱い奴にしか受け入れられないような新しい幻想なのだろう……尤も、世界の半分くらいは受け入れる弱い奴の気がしなくもないが……

S
i
d
e

o
u
t

魔法世界 決戦の少し前（後書き）

次で決戦に行っちまおうか。ネギ達が苦勞しててもアーロニーロには関係無い事ですし………

魔法世界 決戦開始(前書き)

第84話

魔法世界 決戦開始

Side アーロニーロ

なんで、こつなつたんだらうな……

「どうして戦争を知らない子供と一緒に突入するんだか……」

人材不足なんかのせいで無くて実力とネームバリューで選ばれたんだらうと思うが、そこまで継り付きたいのかねえ？英雄とか、その子供に……

「い、ごめんなさい……」

「謝るな。お前が決めた事ではないだろ」

どついつ訳か、ネギとその仲間達と完全なる世界の本拠地に突入する事にされていた。しかも、突入してネギ達の必要としている最グレイ後の鍵トクメンスタキー

と黄昏の姫御子の奪還を優先させるとありがたい御命令もテオドラからあった。俺はお前の部下ではないんだが……テオドラから命令が来たということ、ジャックを復活させる為にかなりの私情があると思えるな。最後の鍵があれば、それで消えた奴等を復活させられるらしいが、それは「今回は」って事になるだらう。

「しかし……こんなのは作戦と言えるのか？」

まず、連合、アリアドネー、帝国の艦隊による攻撃と共に俺達を乗せた船が単機で敵本拠地に突入、最後の鍵と人質を奪還する。細

かな作戦は現場で決定しろとか……

20年前も似たような作戦を選んで一応は勝ったが、作戦自体は失敗していた。失敗した作戦なんてそのまま持ち出すな。決死隊みたいなのを作って、そいつらにも突撃させるとかは考えなかったのか？ 総合戦力をもっと増強するとかして改善しろ。

本拠地にどの程度の戦力が居るかは知らないが、この作戦はあまりにも個人の力に頼りすぎると思うんだが…… 本当にこんの面子で大丈夫と国のお偉いさんは思ってるんだか。

「父様、考え事か？」

「この面子が英雄になると考えたらな……」

ナギも当時は10代だったが、その他は大人と言える年齢だったが、今回は子供と言える年齢の奴がほとんどだ。子供に世界の命運を託す奴等の世界なんて、滅びるべきかもな……

「誰が英雄になるかとかはこの際おいておこう。……そろそろ時間になるな」

「派手に行こうか、折角の祭りで私達2人の共同作業だしな」

互いに笑いながら甲板へと続く扉をくぐる。

「アローニークさんとエヴァンジェリンさんはいったい何を？」

Side out

Side 第三者

混合艦隊と大虚が入り混じって整然と並んでいるその光景が出来る上がるのは、今回で2回目だった。前回は無論20年前の最終決戦である。さながら、前回の繰り返しである。作戦も同じようなものだと言うので、まさに繰り返しだ。違う点を上げるとすれば、どちらも参加しているメンバーが変わっている、ぐらいであろう。

「繰り返しだな。歴史なんてそんなモンだが、目の前で起きると多少は思う所があるな」

「父様なら、これを止める事も出来ただろうに……ここまで規模がでかくても、暇つぶしなのか？」

「まあ、すぐに終わってしまう暇つぶしだな」

緊迫している状況だというのに、アローニークとエヴァンジェリンの間には普段と変わらない雰囲気の流れている。魔法世界の危機だろうが、2人にとっては面白半分に参加している戦いにすぎない。2人とも流石に知っている人間が死ねば多少は思う所があるが、死というモノはとっくに見慣れている自然現象だ。

「正義や善でない私達が、魔法世界を滅びないようにする戦いに2度目にも参加するなんて、考えもしなかったな……」

「考えもしない事が起きる。そうでなくては、生きてても楽しめない。だから、今回は流れに任せて楽しもうじゃないか」

エヴァンジェリンは過去に思いをさせているが、隣に立つアローニークはただ目の前だけに思いをさせている。考えの差であろう。

作戦開始の合図と共にアローニー口達を乗せた船が前進を開始し、近くの戦艦や大虚はその進路上の障害物になるモノを優先的に砲撃や虚閃を撃つ。しかし、いくら攻撃を集中させようとも敵の撃ち洩らしは必ず出てくるし、敵本拠地に近付けば近付くほどに敵の数は増すが、戦艦と大虚の掩護射撃は逆に届きにくくなって減ったも同然になる。

「卍解 神殺鎗」

「霜天に座せ、氷輪丸」

なんとか船のすぐ近くにまで来ていた魔物の一団が一瞬で頭を貫かれ、それと別の一団は氷の竜に喰われる。影響を最小限に抑える為に、アローニー口とエヴァンジェリンは甲板に出ているのだ。

「エヴァ、お前は下の防御だけに集中してて構わないか？どうする？」

「こんな船の下を守るだけでは能が無い。寄って来るのは片っ端から始末を付けるさ」

アローニー口は氷輪丸を指先で撫で上げながら静かに言ったその一言に満足そうに頷くと、船で一番高い場所に移動する。理由なんて簡単なものだ。間違って自分の乗っている船を間違って斬らない為だ。

神殺鎗を使っているアローニー口にとっては、見える範囲全てが自分の居合いの中になる。ただ横に振るだけでかなりの敵を斬る事が可能だが、相手が高低差のある場所にいると思うように倒せない。だから、頭を貫いて一体ずつ確実に倒していく。効率が悪く感じるが、神殺鎗は音速の500倍なので、セ氏零度で毎秒約165.7

5 km伸縮が可能で、例え最長である13 km伸ばしても6往復可能である。それと、音速は1度温度が上昇すると毎秒0.6 mずつ増すので、音速の500倍の神殺鎗だと1度ごとに毎秒300 m増加する計算になる。

氷の竜と、目で追えないような速度の神殺鎗の突きで落とされて、船に近づける魔物などはおらず、比較的安全に着地する。

「他愛もないな」

「まったくもって、父様の言う通りだな。数は揃えているようだが、私達の敵になれるような奴が配置されてないとは……おそらく、ここからが本番だな」

数の不利などなんでもなかったと、言わんばかりの涼しい顔でアローニーロとエヴァンジェリンは船から降りて付近を警戒する。それに続いてネギ・パーティーも下りる。

「では皆さん、決めていた役割分担で別れて頑張りましょう!!」

ネギの言葉で、あらかじめ決めていた役割を果たそうと別れようとしたところで、すぐ近くに人が着地する。それは、見覚えのある人物だった。

「ザジ……さん？」

「ッ！そいつは別人だ！ネギ、下がれ！」

魔力で別人と気付いたアローニーロが行動をしたが、遅かった。

「幻灯のサーカス」

S
i
d
e

o
u
t

魔法世界 決戦開始（後書き）

無駄に神殺鎗の凄さを計算。と、言っても、計算は秒速だけだから
実際だったら空気抵抗とかはまったく考えてない。実際にこんな速
度で伸縮したらソニックブームや摩擦熱で凄い事になるんだろうな
……かすっただけで吹き飛ぶとか、熱で焼け焦げるとか……エセ
炎熱系になるな。

完全なる世界（前書き）

第85話

感想 がつ様、春夏様
ありがとうございます！

完全なる世界

Side アーロニーロ

………なんか、夢を見ていた気がする。寝起きのイマイチハッキリしない頭を振ってハッキリさせようとするが、どうも霞がかかったようにハッキリしない。……まあ、そんな日もあるか。

一緒に寝ていたエヴァを起こさないようにベットから抜け出し、いつも通りの白い服を着る。幻影魔法がしっかり発動してるのを確認して、2階にある自分の部屋から1階にあるキッチンに移動し、朝食の準備をする。本日は……白いご飯、ベーコンエッグ、ジャガイモとワカメ入り味噌汁、牛乳で良いだろう。少々緑が足りない気がするが、栄養が偏ってはいないはずだから問題無しのはずだ。

まあ、例え偏っていたとしても、それだけで体調を崩すような奴はいないし、崩しても特性の栄養剤でも飲ませればすぐに本調子に戻るだろう。

「アーロニーロさん、おはようございます」

「アーロニーロ様、おはようございます」

「父様、おはよう……」

キッチンに下りてきた3人の中でエヴァだけが、未だに眠そうにあくび混じりで目をこすりながらおはようの挨拶する。さよも茶々丸もすっかりしているというのに……

「目が覚めてないなら顔を洗ってこい」

「わかった……」

眠そうな割には足取りはしっかりとしたもので、危なげなく洗面台に向かつて行く。エヴァが顔を洗っている間に配膳を終わらせて席に着く。

「……いただきます」「」

3人で朝食を取り、4人で他愛の無い会話をする。今日は晴れそうだから、テレビでやっている占いで何位だとか、ラッキーカラー、ラッキーアイテムだとか。今日は何の授業があるとかは、俺では会話に入れない……

「……行つてきます」「」

「授業頑張れよ」

元気に出て行くエヴァ達を見送り、今できる家事を消化する。まず、パジャマを洗濯機にかけて、洗濯が終わるまでに家の中を掃除機をかける。別に毎日する必要はある訳ではないが、40分ほどの時間を潰すのにはコレが丁度良いのだ。あと、エヴァ、さよ、茶々丸の部屋は入って掃除はしない。プライベートを守る為だ。千雨の部屋だけは、長期の休みでない限りは別である。パソコンとそれを置く机にベットにタンスだけで、今は千雨の私物は置かれてない。理由としては、寮に入っているからだ。

掃除も洗濯も終わったので、洗濯機から取り出してすぐに干す。今日は天気が良いからすぐに乾くだろう。すぐに乾いてもすぐにたたむ訳ではないから、すぐに乾かなくても良いんだが。

洗濯した物を干すなんてすぐに終わる。だからすぐに次の用事をこなす。メノスの森の奥にある研究室にだ。今は特に何かを開発したりしてないので、開発したモノとか、義骸だとかの物置き状態でさらにチャチャゼロの寝床状態だ。理由としては学園結界で動けないから、それなら動けて斬る相手（虚）がいるここが良いということ、そうなっているからなんだが。

「オ、来タカ旦那、早速斬り合おうぜ。虚ガ弱クテツマンナイカラナ」

「まあ、仕方がないだろ。戦闘用に作った奴等ではないからな」

無駄に再現する事に集中したからな。中には凶悪に思える能力を持っているのもいるが、大虚がギリアンしか居ない時点だな……

「刈レ、風死！」

「水天逆巻け、掬花」

まあ、付き合っがな。

放たれるのは命を刈り取る鎌のようなモノ。ありえないくらいに回転しながら飛んでくるが、避けるにしても、迎えに撃つにしても問題は無い。掬花で地面に叩き付けるように振り下ろして、風死の片方の動きを止める。次に距離を詰めて突きでチャチャゼロを狙うが、避けられる。攻撃をした直後の僅かな硬直を狙ってチャチャゼロが左手に持った風死で斬りかかり、同時に右手に握っている鎖を引く。それによって俺が先程叩き付けた風死とチャチャゼロが握っている風死で挟み打ちになる。

だが、それだけだ。挟み打ちなんてとっくの昔にやられ慣れた戦

法だ。石突き（刃が付いているのは逆の先端部分）で後ろから来ている風死を突きで進路を変え、挨拶から離れた左手でチャチャゼ口の握っている風死を掴んで止める。

「オイオイ、ソナ簡単二止めチマウノカヨ」

「当たり前だ。誰が作ったと思っているんだ？このくらいなら簡単に思い付く」

実際は贋作だが、それでも作って能力を決めたのは俺だ。どんな事ができるかはだいたいは解っている。鎖の伸びる距離、回転速度、切れ味などその他もろもろ……

「まあ、限界値が決まっているからお前は俺に勝てないんだがな……」

能力の成長の余地は、チャチャゼロにも風死にも無い。元々成長なんて概念が存在しないしな……

「能力ダケガ全テジャネエダロ。マツ、コノ戦イハ経験ト暇ツブシダロ？」

「確かにそうだが、気軽に手合わせ出来るのがお前とワカメ大使くらいだしな……」

学園の魔法使いでは弱すぎて手合わせにならない。タカミチなら、制限付きで多少は楽しめるだろうが、よく出張でないしな……

「出ルマデ楽シンデ行ケヨ」

「そつだな」

斬り合いと言っても、俺は中てるつもりも中るつもりも無いんだけどな。チャチャゼロはエヴァの従者だし、傷がついたら修復が必要だからな。

メノスの森で2日、外で2時間過ごして外に出る。一応は広域指導員なんてやっているの、昼食を食べてから家を出て見回りをする。ハッキリ言うともやる必要を感じないが、仕事の内だから真面目に取り組む。昼過ぎでは、学校をさぼっている不良への制裁が主にやる事なんだろうが、早々見つかるもんじゃないからか、今日は特に問題無く夕方になる。

家に帰って夕飯になるわけだが、今日はエヴァが作る。普段は茶々丸か俺なんだが、時折エヴァが作る事もある。偶々、今日がそれというわけだ。

「ふふ、どうだ？おいしそうだろ、父様」

子供用のエプロンを身に付けて胸を張っている姿を見ると母親のお手伝いをした子供にしか見えないが、実際には料理を1人で作ったから胸を張っているのだ。

「ああ、おしそうだ」

誇らしげなエヴァを頭を撫でながら褒める。

それだけでエヴァは満面の笑みを浮かべて抱きついてくる。

「父様、早く食べようか」

さして離れてもいないのに、エヴァに手を引かれてテーブルまで引つ張られる。かわいいモノだな……

「さて、そろそろ行くか」

食事を終え、夜の警備に出る時間になったので、戦闘服になっているアール・ニーロ・アルエリの服に着替えて家を出る。昼間と比べればいくらか静かになっているが、完全には人が絶えるわけではないので、認識障害を自分にかけて万が一見られて大丈夫にしてから自分の分担の区域に移動する。

「静かなもんだな……」

目を閉じて探査神経で周りを探っているが、敵は見つからない。警備と言っても、なにも来なければ暇なもんだ。尤も、完全にさぼれる程に敵が来ないという訳でも、ずっと気を張って居なければならぬ程に多くの敵が来るといふ訳でも無い。探知したら、影のゲートで敵のすぐ傍に転移して速攻で気絶させる。もはや作業と変わりが無いが、遊べる程の実力を持った奴なんてそうそう来ないかなら、仕方が無いだろう……

欠けている月を見つめ、呟く……

「全部予想の範囲内。んでもって、気持ち悪いくらいに俺のイメージのまま連中。短絡的な考えだが、これは幻想的なもんだな。まったく、もしかして、これが完全なる世界か？だとしたら、冗談じゃねえ」

思い返すと記憶が途中から不自然にあやふやになっていたり、思った通りで気持ちが悪い。確かに、繰り返してれば幸せだろう、きっと時折強い奴が来て戦えるだろう。もしかしたら永遠に楽しめるかもしれない。だが、

「思った通りの世界なんて気味が悪い。それに、さよ、茶々丸、千雨が帰りを待ってるだろうから、こんな幻想を抱き続けるつもりは無い!!」

単純に、破壊してやるか

S i d e o u t

完全なる世界（後書き）

日常の繰り返しだが、存外幸せに感じるモノである。

魔法世界 作戦（前書き）

第86話

今回まず考えたのが、ポヨ・レイニーデイ（仮）を地の文でなんと呼称するかだった……

ポヨは語尾からネギが付けた名前だから不採用。魔族でも行けるかもと思ったけど、あんまり居ないだろうけど原作知らない人だとオリキャラと勘違いされるかもしれないので不採用。で、レイニーデイにしました。ザジの姉だから姓で呼称してもいいよね？実は結婚していて姓が違ふとかいう事が無い事を祈る。

魔法世界 作戦

Side フェイト

「簡単なモノだね……」

少し、残念な気もする。幻灯のサーカスで侵入してきた敵の精神を完全なる世界に閉じ込めて動きを止め、その間に僕が石化させる。それが作戦。万全を期すなら殺すべきなんだろうが、彼らだって救われるべきだろう。

「いくら正体不明のバケモノのアーロニーロ・アルルエリでも、これでお終いポヨ。早く石化させるポヨ」

そう、この作戦はアーロニーロ・アルルエリを確実に倒す為だけに考えた作戦だ。まともに勝負したら負ける確率の方が高い。なら、卑怯だろうがなんだろうが、確実に勝てる方法を模索した結果だ。

「ん〜残念や〜。今回は前より楽しめるはずやったのに……」

「完全なる世界に行けば、それこそ永遠にアーロニーロと戦えるよ」

「オリジナルと同等？」

「……解らない。けど、アーロニーロを取り込めば、それを元に計算されて戦えるかもね」

今は、強制的に封じ込めているに過ぎない。なにかがあれば、出てきてしまつかもしれない。

「ヴィシュ・タル リ・シユタル ヴァンゲイ 小さき王 八つ足の蜥蜴 八つ足の蜥蜴 その光 我が手に宿し 災いなる」

詠唱のほとんど完成させて、改めて倒れている人達を見る。表情は仮面で隠れているアローニーク以外は穏やかなものだ。幸福を受しているのだから当然かもしれないけど……

「けど、意外な事が起きた。」

「な、なんなんポヨ……。アローニーク・アルルエリの魔力が急激に上昇しているポヨ……。一個人が持てる魔力の量を大きく超えているポヨ」

視認さえ容易になった魔力の塊が、アローニークから陽炎の如く出ているのを、名前も知らない魔族が驚いている。本当に、なんなんだろうね……

「眼差しで射よ 石化の邪眼」

「けど、これでチェックメイトだ。」

「断空」

「いつだか、同じ技で完全に防がれたね……」

「まったくもって、不意打ちの好きな奴だな」

「それでもしないと、届きそうにないだろ？」

「いつだか交わした会話と、ほとんど同じ会話を交わす。」

Side out

Side 第三者

アローニー口が起きると、それに続いて先程まで眠っていたエヴァンジェリンやネギ・パーティーも起き出す。

フェイト達はそれをただ黙って見ていた。否、見ている事しかできなかつた。最初に起きたアローニー口が脇差しと同程度の刀

つまり神殺鎗　をすでに鞘から抜いて、油断無くフェイト達に向けており、動けば殺すと言外に行動と殺気で伝えていたからだ。しかし、全員が起きあがると殺気がまるで嘘だったように飛散したかのように消えて、神殺鎗も腰の鞘にすぐに仕舞う。向けられた3人と、エヴァンジェリン、真名、刹那、楓、小太郎以外はアローニー口に守られていた事にすら気付かない程に自然な動作だった。

「困ったね。これでは戦わなければならない……」

「うちとしては万々歳や〜。これで、アローニー口はんと斬り合えますから」

「まさか、幻灯のサーカスが崩壊するとは、完全に予想外だったポ
」

限界を迎えれば崩壊する。当然だが、悔しそうに掴んでいたカードだったものをレイニーデイは見て眩く。幻灯のサーカスでは、アローニー口を封じ込め続けるのには荷が重かった、それだけである。それでも、封じるモノは内側からの力に強くそれを内側から力強く破壊されたのは、にわかには信じがたい事なのだ。

「僕は下がるから、2人とも足止めよろしく」

「言われずとも、アールローロはんと斬り合います」

「早く行って、計画を急ぐポヨ」

フェイトは2人にその場を任せると、足早に去る。

それを合図にするかのように月詠はアールローロに斬りかかり、レイニーデイはネギ・パーティーに攻撃しようとしたが、エヴァンジェリンにそれを止められる。

「ネギ！ここは俺等に任せて先に進め！」

「は、はい！お願いします」

「行かせないポヨ！」

走り出したネギ達に魔法が襲い掛かるが、氷の竜が盾になる。

「行かせない、か。その言葉は私からも言わせて貰おうか、ザジのそっくりさん」

笑いながら、エヴァンジェリンは始解状態の氷輪丸を振る。

「私はザジの姉ポヨ。それと、それでもラスボスくらいに偉いポヨ」

「そうかい。ラスボスでも、私達なら倒せる。なあ、父様」

エヴァンジェリンの言葉と同時に、始解状態の掬花がエヴァンジェリンの後ろから突き出される。レイニーデイはそれを避け、アール

口二一口に魔法を放つが掬花で撃ち消される。

「久しぶりに2対2で戦うのも、面白いだろうな」

「尤も、お前らと私達では勝負になりさえなさそうだな」

笑いながらアール二一口とエヴァンジェリンは言い、並んで立つ。

「ん〜……あんさん、掩護できます?」

「私くらいの魔族になると、前衛と後衛どっちでもこなせるポヨ」

「なら、ええどす。とりあえず、背中を任せます」

言うが早いや、月詠はすぐにアール二一口とエヴァンジェリンとの距離を詰める。それにアール二一口は横薙ぎで迎撃する。月詠は二刀連撃斬鉄閃で掬花に追従している波濤を斬り裂き、二刀小太刀の片方を掬花にぶつけて速度を落とさせて自分はそのままアール二一口の懐に入ろうとしたが、掬花以外のものが自分に近付いて来ているのを感じ取り、斬岩剣でそれを斬る。

「氷?」

近付いて来ていたのは氷であった。それも随分と変わった形の……

「ええいつ!!何やっているポヨか!!?」

レイニーデイは攻撃魔法で氷を砕き、爪を伸ばして強化した右手で月詠に上から迫っていたエヴァンジェリンの攻撃を牽制し、月詠の服の襟首を掴んで無理やり退かせる。

「あゝもしかしくなくとも、うち詰みかけてましたか？」

「そうポヨ！不用意に距離を詰めないで欲しいポヨ！相手は真祖の吸血鬼に正体不明のバケモノポヨ！人間が真つ向勝負で勝てる相手じゃ無いポヨ！！！」

自重するという事をまったくしない困ったパートナーに怒鳴って、レイニーデイは先程の攻防を振り返る。月詠が掬花に追従していた波濤を斬り裂くまではまだ、よかった。しかし、その後が問題だった。刀を掬花にぶつけて速度を落とした時には、月詠が斬り裂いた波濤はエヴァンジェリンによって凍らされて、変わった形の氷になって月詠に襲い掛かった。それには反応していたが、上に来ていたエヴァンジェリンには気付いていなかった。それに、斬った氷により前後は氷に塞がれ、ダメージ無しでは避けられないようになっていた。もし、助けに入らなければ片腕くらいは取られていたかもしれない。

「まったく、せめて本気で挑んで欲しいポヨ……」

「本気を出してないあんさんが言います？まあ、このままでは楽しめへんから、本気でいきやけど……」

このままでは簡単に刈られると解って、月詠は笑いながら特別な刀を取り出す。ソレは黒い不気味なナニ力を放出しているが、月詠は自分からそれを身に纏う。

「さ、楽しみなはりましたよ？」

「……私も本気で行くポヨ」

ついて行けないと言いたげな少し疲れた声で言うと、力を解放して角が生える。

ソレを確認すると、アローロニーロが先行して月詠とレイニーデイに対して掬花を振るう。レイニーデイは飛んで避け、アローロニーロに追従するように突撃してきている氷の竜に攻撃魔法を叩き込んで粉砕し、続いてエヴァンジェリンに爪を向ける。エヴァンジェリンは氷輪丸で迫りくる爪を防ぎ、触れている部分を凍結させてから砕く。だが、すぐに爪は砕かれる前と同じ長さまで伸びて無意味と言わんばかりである。

「群鳥氷柱」

複数の氷柱がエヴァンジェリンの周りに出現し、打ち出される。簡単に避けられるが、1つがレイニーデイを掠めると同時に眩く。

「氷爆」

魔法で掠めたのを爆発させ、凍気、爆風、氷の破片でダメージを与える。さほどダメージを与えられた訳ではないが、最初に中てた一撃ではまあまああの出来だろう。

月詠は器用に掬花にのり、そのままアローロニーロの懐に入り、振りかぶろうとしたところでアローロニーロの影槍に気付いて一歩下がって、斬魔剣 弐の太刀で障壁を無視して影槍ごとアローロニーロを斬ろうとしたが、避けられて再び影槍で攻め立てられて懐から出ざるおえなくなる。そこを狙って掬花が振るわれるが、その程度は月詠は予測していたのですぐに掬花の範囲外ギリギリに出た。が、穂先が月詠の前に来た途端に止まり、そのまま突きが繰り出される。月

詠は反応が遅れたが、掬花を逸らして致命傷だけは避けたが、左肩を軽く挟られた。

「なんだ、前より弱くなったか？」

「今迄、うちと戦っている時は魔法なんて使わなかったへんからやる？その差とちやいます？」

「内側に入られると弱いからな。入ってくる奴が相手では使わざるおえん。尤も、使わない場合もあるがな。ッ！？エヴァ！すぐに決めるぞ！！」

「わかった！！」

エヴァンジェリンは牽制に群鳥氷柱と魔法の射手を多数レイニーデイに放ってからアローニーロのすぐ傍に下り立つ。

「それはさせないポヨ！もう少し、ここで足止めされてもらおうポヨ！！」

「ふふふ、足止めとか構いませんけど、うちはまだ満足してへませんから、もっと楽しみなはりませう？」

月詠はレイニーデイほど意識していないが、アローニーロの足止めは完全なる世界にとっては大きな意味があった。アローニーロ以外も強いが、倒せない訳ではない。だから、アローニーロと引き離せば倒せる可能性は非常に高い。そうしてアローニーロ以外を倒し、最後はアローニーロを持てる戦力全部を投入すれば、そうなる可能性は非常に低い。倒せなくとも、時間まで足止めも簡単にできるだろうという作戦があった。アローニーロを侵入した際に

石化に失敗した時の為の次善の策だったが、エヴァンジェリンがア
ーロニーロと一緒に残った以外は完全なる世界の予想通りだった。

だが、完全なる世界の予想外だったのがもう一つあった。ア
ーロニーロが探查神経で魔力の状態を感知して、敵味方関係無く大まか
なではあるが状態を把握できると言う事を。アローニーロは別れた
ネギ達の魔力は補足しており、その状態で敵に押されていると判断
し、誰かが欠ける可能性が出てきてたので、仕方なく今の戦いを切
り上げる事にしたのだ。

「ついて来いよ」

「ついて行くさ、その背中をずっと追いかけて来たんだから」

笑い、アローニーロ響転で月詠とレイニーデイの前に移動し、掬
花を振るう。波濤は氷輪丸によって一部を凍らせた殺傷力を高めた
モノ。勿論それは避けられるが、逃げた先へとエヴァンジェリンが
放った氷の竜は追いつがつて2人を襲う。氷の竜を迎撃して動きが
鈍くなり、そこに氷輪丸の柄についでる鎖をレイニーデイは足に巻
き付けられる。

「こんなモノ!!!」

レイニーデイは鎖を引き千切ろうとしたが、その前にエヴァンジ
ェリンに引き寄せられて掬花の直撃コースに移動させられる。逃げ
る事も出来ずに、掬花に続いて波濤も直撃する。なんとかレイニー
デイは耐えたが、それで終わりではなかった。直撃した瞬間に波濤
を凍らして氷漬けにされ、

「氷爆」

トドメと言わんばかりに密着した氷を爆破される。中つた事だけ確認すると、残っている月詠に狙いを定めてアローニーロは影槍、エヴァンジェリンは群鳥氷柱を撃ち出しながら自分の間合いまで距離を詰める。京都神鳴流には飛び道具は効かないと言われるが、まさにその通りと言わんばかりに、月詠は影槍と群鳥氷柱を凌いだ。

だが、続くアローニーロとエヴァンジェリンの猛攻は凌げなかった。アローニーロはさながら舞のような槍術で連続での攻撃にはならないが、アローニーロの一撃の後に続く波濤とエヴァンジェリンの攻撃で反撃の余地が無い。何の予兆も無しに、アローニーロが舞のような動きを止めて突きが放たれ、月詠は刀を交差させてそれを防ぐが、三叉に別れている穂先によって刀を絡め捕られて完全に無防備になる。

(負け、やな……)

あまり多くの事を考えるような余裕などなく、それだけ思うとエヴァンジェリンに斬られて倒れる。

S i d e o u t

魔法世界 作戦（後書き）

このまま駆け抜けろよ（笑）
感想とか待ってます。

魔法世界 人質救出(前書き)

第87話

魔法世界 人質救出

Side 第三者

人質救出チーム

犬上 小太郎

村上 夏美

朝倉 和美

綾瀬 夕映

高音・D・グッドマン

佐倉 愛衣

小太郎達は菜から提供された情報通りの道を進みながら、時折現れる魔物を倒しながらであるが順調に進んでいた。

「雑魚しかおらへんのか？そっちの方が都合が良いけど」

「油断大敵ですわよ。人質の入られている部屋の前に、戦いやす

広いスペースがあるらしいですから、番人がそこに居ないとも限りませんし……」

「お姉様の言う通りですね。戦力が分散している今の状況は、各個撃破に都合が良いですから」

「まあ、今のところ私のアーティファクトの渡鴉の人見でスパイゴレムを先行させてますけど、何の問題もな……」

言葉の途中で和美が立ち止まる。それに合わせて小太郎達も立ち止まって一斉に和美を見る。

「どうしました、朝倉さん？」

「スパイゴレムが潰された。それも、戦いやすい広いスペースのところだ」

それが意味するのはただ一つ、そこで敵が待っているという事だけだ。

「戦える人だけで先に進んだ方が良いと思いますわ。夏美さん、朝倉さん、綾瀬さんの3人はここに残ってもらっていいですね？」

高音が順番に顔を見てそれで良いかと聞く。

「私は、アリアドネーで魔法を習いましたから、大丈夫だと思いますが？」

「それでは使えるだけで、戦えません。まともな実戦経験なんてないでしょう？ですから、実戦経験のある私達3人だけで行きます」

高音は凜と言い放って続ける。

「それに、あなた達にも重要な事を頼みます。もしも、私達がピンチになったら迷わず入口に引き返して、アーロニーロさんかエヴァンジェリンさんを呼んで来て下さい。そうすれば、最悪の事態は避けられます」

最悪の事態。ここで、意識の差が出た。実践を知っている3人と、知らない3人に……

「わかりました。もしもの際にはどちらかを必ず呼んできます」

しつかり3人が頷くを見て、小太郎達は問題の場所へと足を進める。

「最悪、ねーちゃん達は人質連れ出して俺だけ置いて逃げてくれ」

「「なっ!?!?」「」

非戦闘員である3人に声が聞こえなくなる距離まで離れると小太郎が突然、高音と愛衣には承諾できない事を言いだす。

「お断りします」

それが正しい判断であつても、正義の魔法使いを志す高音と愛衣はそれはできない。共に戦う仲間を身捨てて自分だけ逃げて助かるなど、正義の魔法使いでは無くただの臆病者にしか思えないのだ。

「俺等の最終目的は魔法世界を危機から救うことや。もしも、鍵つて言われとる明日菜が居て、救い出せばそれだけでこの目的は達成できるんや。目的だけ考えればこれが最善や」

「だとしても、誰かが欠けたら意味がありませんわ」

「あゝこないこと言いたくはないやけど……ねーちゃん無理して強がっているのは解ってるんや。戦場ではそういう奴が大抵すぐに死ぬ」

「ッ!」

高音は言い返せなかった。この中で自分が一番しつかりしてるから、自分がしつかりしなければ皆が不安になるだろうからとかの理由とプライドで 手足の震えを抑えて いつも通りの自分を演じているのだ。それに、実戦経験と言っても夜の警備で安全が誰かが保障している状態での経験しかない。今のように、自分の命は自分が守る本当の実戦は初めてである。

「それに、女に戦わせる事自体あまり好かないしな」

「はあ、それで死んだら元もこつも無いわよ……」

もしかして、思い詰めたのは自分だけ？などと思って、少しだけ、心が軽くなった高音だった。

「敵がすぐそこに居ると判って居るのに会話。旧世界人って全員がそうなのかい？ああ、別に答えなくても良いよ」

知らない人の声を聞き、小太郎達は身構える。

「風のアールウェルンクスを拝命した^{クワイントゥム}5つて言っても通じないかな。まあ、とりあえず死んでくれ轟き渡る雷の神槍^{ケンケンナール}」

轟音と共に、その名に違わない雷の槍が大気を震わせながら小太郎達を目掛けて飛来する。小太郎が選択したのは避けであった。雷の槍を見た途端に防御は不可能と判断し、高音と愛衣を抱えて瞬動で避けた。

「……意外だね。危険視されているアローニーロ以外が初見でこれを避けるなんて。思ったよりは出来るようだね」

（やっぱり、アローニーロさんはかなり警戒されているようですわね）

（変な格好でも、20年前にあちらの計画を潰した英雄の1人ですしね）

（抱えといて言う事やないと思うけど、早く下りてくれへんか……）

「だから、次は確実に1人1人消していくよ」

軽く言い、軽く実行しようとした。一番弱いと判断された愛衣の心臓を狙って突き出された腕が、小太郎と高音によって止められた。

「仲間を簡単に殺されるほど、俺等は弱くはあらへんぞ」

「それには同感ですわ」

小太郎と高音は言い放つと、クウイントウムはすまし顔を思いつきり殴る。殴られたクウイントウムは吹っ飛び、壁に衝突する。

「狗音影装」

「黒衣の夜想曲」

2人とも本気で殴ったが、それだけで倒せたと思えるほど楽観的では無い。案の定、何事も無かったかのように平然と起きあがる。

「なるほど、殴る程度はできるのか。でも、多重障壁全部を突破できる程の貫通力は無いようだね」

「ハアア!!」

敵の話を聞く気など2人とも無い。それに、もしもさきほどの魔法を連続で使われたら反撃のしようが無いので、一気に決めたいのだ。

「なっ!?!」

「嘘……」

あっさりと小太郎と高音の間を通り抜け、後ろで詠唱している愛衣の前に立つ。

「遅いね」

雷系最大の突貫力を有する魔装兵具である轟き渡る雷の神槍を再び右手に作り出し、目の前の愛衣に突き立て

「アーニヤ・フレイム・バスター!!!」

「られずに、炎の魔法で強化した脚による飛び蹴りを頭にくらって吹き飛ばす。」

「罪ありし者を 死の塵に 燃える天空!!!」

更に追い打ちとして、愛衣が詠唱を完成させて広範囲焼灼殲滅魔法である燃える天空もくらわせる。

「……なあ、アーニヤは人質だったはずやろ。なんでここに来ているんや？」

助っ人は嬉しいが、それが助けるはずだった人質というのに小太郎は釈然とせず、疑問をぶつける。

「え？そりゃ、凄い音が聞こえたから助けが来たと思って、扉をぶっ壊して逃げてきたのよ」

(……助けに来た意味はあったんかな？)

「なんにしても、アーニヤさんが来てくれなかったら私は危なかったですから」

愛衣は力なく笑って、緊張の糸が切れたのか、その場に座り込んでしまう。敵は倒したと………思い込んで。その思い込みは仕方が無かっただろう。燃える天空は高位の魔法であり、ほとんどの魔法使いはくれば、まず無事でいられないから。

だから、攻撃をつけた愛衣も含めて、誰もそれが起きた瞬間を理
解出来したくなかった。

「エッ……」

「まず一人」

クウイントウムの腕が愛衣を貫き、愛衣が血を流しているという
事態に

「アア嗚呼ああアア嗚ああアア！！！！」

理解するより先に、高音は絶叫を上げながら何の策も無しにクウ
イントウムに殴りかかる。だが、そんな無鉄砲なだけの行動では事
態はむしろ悪くなるだけだった。絶対自動物理防御の黒衣の盾も、
影の鎧も命を繋ぐのには役にたったが、クウイントウムに攻撃を届
かせる助けには役に立たなかった。アーニヤに逃げるように言っ
てから小太郎も攻撃に参加したが、焼け石に水の状態だった。魔法や
気で身体強化しようと、2人掛かりだろうと、それで埋められる実
力差ではなく、勝てるはずのない戦いでしかなかった。

だが、一步も退かなかった。自分のパートナーが殺されたが悔し
かった、悲しかった、殺した奴が憎かった、仇を討ちたかった。そ
して何よりも、パートナーを守れなかった自分が惨めで、憎くて、
怨めしくて、情けなかった。なにが、「なにがあっても守ってみせ
る」だ、「誰かが欠けたら意味がありませんわ」だ、パートナーど
ころか自分の身さえ守れてないというのに……

涙で前が見えなくなるうとも、まったく中らなくとも、高音は攻
撃を止めない。それしかできないから

「イングラシルの恩寵を以って来れ貫くもの、轟き渡る雷の神槍」

高音の操影術による防御を貫通させて、確実に消す為の人など簡単に貫く魔装兵具を再び作り出して投的する。既に避けという思考を放棄している高音にとっては、それは絶対なる死神の鎌だ。

「ゴメン……ナサイ……」

誰に、何に対しての謝罪かは解らないが、それが最後。

「まったく、なにが押されているだ。どいつもこいつも瀕死の重体じゃないか」

S i d e o u t

魔法世界 人質救出（後書き）

なんか思った以上に長くなったので、ここで切ります。
感想とか待っています。

魔法世界 危機（前書き）

第88話

感想 安藤様、開け！ごまドレ様
ありがとうございます！！

魔法世界 危機

Side エヴァンジェリン

雷の槍に貫かれそうになっていた高音と、助けようとしていた小太郎を掴んで響転で倒れている愛衣の近くに移動する。

血の匂いが鼻に付く。それも、人の死を感じさせるには十分な濃さで、だ。

倒れているのは1人だけと喜ぶべきだろうか？それとも、誰もがそいつを死んだと諦めているのを怒るべきか？とりあえずは

「おい、小太郎、これを穴空きになっている愛衣に使え、脳が死んで無ければ助かる。治っても息をして無かったら人工呼吸でもして無理矢理でも息をさせる」

来る前に父様から渡されていた補肉剤の全部を小太郎に渡す。もしかしたら障害が残ったり、すでに手遅れの可能性があるが、そこまで時間は経ってないようだから助かるだろう。

「愛衣は……助かるの？」

いつもの気の強さは何処にいったのか、涙で濡らした顔で縋り付くように聞いてくる。

「きつと助かる。だから、巻き込まれない内に早く安全な場所まで運んでやれ」

聞くと、結構ポロポロなはずなのに予想以上に機敏な動きで愛衣をすぐに運び出した。怪我が治ってもすぐには起きないだろうから、

早く移動して貰わないと巻き込めかねない。助けたのに、自分の戦いで死なれては意味が無い。

「さて、すぐに始めようか、人形。卍解！！大紅蓮氷輪丸！！！」

氷で出入り口を塞ぎ、転移魔法が使えないとすぐには入れないようにする。さらに冷気を振り撒いて気温を低下させて私のフィールドとして塗り替える。

「ケングナル
轟き渡る雷の神槍」

防御なんて意味が無い、そう断じて避ける。連続で投的してくるが、避けれない程ではないし、元々連続して使う事など考えられていない魔法なのだろう、タイムラグがある。

その間をついて接近するのは、拍子抜けする程に簡単だった。冷え切った刃先で人形を斬って、それでお終いだ。

「遅いよ」

だが、捉えきる前に人形の動きが加速し、刃先から逃れるだけでなく私に一撃入れてから離れる。肋骨が数本折れたが、普通の一撃など受けたところですからすぐに再生する。不死殺しても持って来ないとこの体に傷を残す事など不可能に近い。だから、さっきの攻撃は殺す意図ではなく、挑発の類。

「安い挑発だな。その程度に追い付けないと思っているのか？」

速いが、追い付けない程ではない。父様のように他者喰らって無限の進化は出来ずとも、進歩する事は出来た。響転は進歩して手に入れたモノの1つ。それを使って距離を詰める。予想していたのだ

ろう。すぐに反応して手刀で応戦されるが、氷輪丸に触れるだけでその手は徐々に冷気によって蝕まれ、力を十全に発揮できなくなる。人形と言っても、限りなく人に近いツクリモノだ。それ故に、人もつ脆さもある程度は持っている。

数えるのが馬鹿らしくなる程に打ち合い、人形の動きが鈍る。当然の帰結だ。むしろ、いままで鈍らなかつた方がおかしいと思えた。その隙を逃さず、両断するつもりで氷輪丸を振る。

「なっ!??」

切り捨てられずに途中で刃が止まる。

「ゲンゲナール轟き渡る雷の神槍」

狙いは私、ではなくて氷輪丸。これまで刃が欠けたり、折れたことは一度も無い。だが、一点集中のできる雷の槍ならどうだ?今迄は危険な賭けはしてこなかつた。私の大切な武器だから無理なんてさせなかつた。なにより、父様が私にくれた他の物とは代えられない物だ。

「やめろおおおおおおお!!!」

引き抜けない!なら!

迷わず虚閃で槍を持っている腕ごと吹き飛ばす。周りへの被害を考えると使いたくなかつたが、そんな事を言ってられる状況では無かつた。

Side out

Side 第三者

最後の鍵奪取チーム

ネギ・スプリングフィールド

栞

桜咲 刹那

長瀬 楓

古菲

龍宮 真名

宮崎 のどか

近衛 木乃香

明石 裕奈

佐々木 まき絵

和泉 亜子

大河内 アキラ

言うなれば、ネギ達の勝率は絶望的だ。ネギ達が戦力のほとんどをこちらに割り振ったように、完全なる世界も戦力のほとんどをこ

こちらに割り振っていた。

フェイトと彼の従者達、デユナミス、火のオールウェルンクスを
拝命して稼動した4、水クワアルトゥムのオールウェルンクスを拝命して稼動した
6セクストラムの総勢8人。その内の4人はトップレベルの実力を持つ造物主の
使徒である。戦力差は歴然であつた。しかも、フェイトの従者の環
のアーティファクト、無限抱擁により、閉鎖結界空間に閉じ込めら
れて助けを呼ぶ事も、逃げる事もできない状況に陥っていた。

「ハアアアアア！！」

「ハハハ！！その程度か？ネギ・スプリングフィールド」

ネギはデユナミスと戦っているが、闇の魔法を使って、ようやく
同じ土俵に立っている。ネギはトップクラスの實力には届いている
が、造物主を倒したナギの面影を深く残すネギに恨みを抱くデユナ
ミスを倒すには至らない。

「斬鉄閃！！」

「諦めたらどうだい？君では僕を斬れない」

刹那はフェイトと戦っている。翼を出し、木乃香から魔力供給を
受けてなんとか食らい付いている。それでも、実力が及ばない。徐
々に削られ、底が見え始めている。

「くっ！体術も魔法も凄いアル！」

「2人掛かりでこれとは……世界は広いでござるな……」

「ただの人間に後れを取るほど、私は弱くありません」

古と楓はセクストウムと戦っている。古と楓は水の属性に特化し、水や氷の魔法を扱うセクストウムに良いようにあしらわれている。

「まったく、殺す気でこれとはね……」

「どうした、女！！それでは俺は殺せないぞ！！」

真名はクウアルトウムと戦っている。魔族化と群狼を使って応戦しているが、火の属性の魔法を特化しているクウアルトウムは炎の大剣を使って虚弾や虚閃を斬り裂いて優位に立っていた。

栞、のどか、裕奈、まき絵、亜子、アキラはフェイトの従者の調焰、暦、環と戦っている。栞は説得しようとしているが、誰も受けようとしなない。戦争孤児だったところを助けられた恩に報いる為に彼女たちは戦っている。それに、例え世界が崩壊しなくても、戦争が無くなる訳ではない。それでは、救われない。

こちらにも、あまり勝ち目がなかった。ネギの従者が戦いの素人だからだ。フェイトの従者は最低限は戦いの訓練はしているし、自分のアーティファクトくらいは使いこなせる。だが、ネギの従者は違う。元々は平和な日本の学生で、自分のアーティファクトをつい先日手に入れたばかりのも居る。まともに戦えないのと、覚悟が未熟だった。

S i d e o u t

魔法世界 危機（後書き）

さてはて、ラストが近くなってきました。そこで、ここら辺でハッキリ決めておきます。と言つより、書いておきます。ネギがフェイトに「友達になるう」なんて言いません。フェイトは敵で終わりにする予定。

魔法世界 逆転(前書き)

第89話

感想 A S様

ありがとうございます！

今回ちょっとグロ表現あり。想像は……しないほうが良いよ。

魔法世界 逆転

Side アーロニーロ

さてはて、どうしたものか……。ネギ達と完全なる世界の連中は結界の中で戦っているようだ。しかも、途中で誰も介入できない類いでに出入りは結界を解かないと不可能なようだ。一応は結構な知識を持ち合わせているから解るが、外部からこの結界を解くのは不可能に近いようだ。時間を掛ければ出来なくも無いだろうが、そんな悠長な事を言っていられる状況じゃ無い。

「破壊、できるか？」

ふむ、破壊自体は出来るだろうが、中に居る全員が下手したら消滅しかねない。普通の空間を区切っているだけの結界ならそんな事は起きないが、どうやら空間を拡張していると言つか、ダイオラマ魔法球のように見た目以上に内側が広がっているようだ。それに破壊したのが包んでいる部分だけなら良いが、内側まで破壊してしまったら目も当てられない。死んでなければ、大抵はいつでもなるんだが……

流石に、そんな博打は打てない。もしそれで誰かが欠けたら、エヴァのクラスメイトが欠ける事になる。エヴァが悲しむだろうから、誰も欠けさせるつもりは無い。

「仕方が無い。黒腔を使って中に侵入するか」

そこに有ると解っているなら、繋げることは可能だ。あると知っているだけでは、自分が出たい位置に出れないのが玉に傷なんだが。

S i d e o u t

S i d e 第三者

勝つ為に、手段は選んではいられない。勝つてその先にあるモノを掴みたいなら、当然だ。だと言うのに、ネギ達はそれが欠けている。尤も、元々選べる選択肢などそんなにないのだが……

だとしても、状況を打開する方法は存在したが、それを選べないでいる。閉鎖結界空間を作り出しているのは環のアーティファクトの無限抱擁なのだから、主従のどちらかを殺せばカードは死に、アーティファクトは消える。環さえを殺せば、援軍も望めるし、上手く行けば逃げる事も出来るようになるのに、それをしようともせず、出来もしない。

だが、ネギ達の中の実力者、例えば真名を自由に動けるようになれば、彼女なら簡単に環の命を刈り取れるだろう。自由に動けるようにする為に犠牲が必要だが、そうすれば勝てる可能性は出てくる。1を切り捨てて9を助ける、勝つ為に時として必要な判断。犠牲を出さずに終わらせようとしているネギ達が選ばない選択なのだが。

「存外、簡単に入れたな」

そんな甘ちゃんと言われかねないのに、運はネギ達に味方していた。

「嘘………なんで？」

環の動揺は当然だろう。彼女のアーティファクトによって、閉鎖されているはずの空間にアロー・ニーロ・アルエリが侵入してきたのだ。手出しが出来ないはずの状況だったのが崩されたのだ。

「環、アーティーフアクトを解除して。アローニーロが中に来れたなら、儀式を中断している意味が無い」

必死に食らい付いて来ていた刹那を下し、フェイトは従者に命令をする。

「はっ、はい！」

侵入を許したのなら、もう結界の中でわざわざ儀式を中断したまま戦う意味が無い。

「なんだ、解除してしまうのか？折角俺が中に入れたのに」

アローニーロはからかうように言い、一瞬で行動を起こした。響転でセクストウムの前に移動し、首を刎ね、心臓に斬魄刀を突き立てて一気に下に引いた。2つの切り傷　　と言うより、切断面

から一気に出血しながら倒れ、全身の血をすぐに噴出し、血溜まりを作って絶命する。アローニーロは返り血を受けることなく離れる。敵にだとしても、ネギ達にはアローニーロがそれをしたの信じられなかった。同時に、刺激が強すぎた。ほとんどが吐き気を催し、直視しているのはネギ達の中にはおらず、目を逸らした。

「お一人様、おー終い」

不意打ちによる瞬殺。一度だけしか成功しないが、相手に与えたダメージは十分である。主力の1人を殺したのだから。その代償が、味方のほとんどの戦闘不能と釣り合うかは甚だ疑問だが。

「戦えるのはどちらも3人。これで、丁度良いな」

その一言で一時的に中断していた戦いが面子を変えて再開される。

「セクストウムは不甲斐ないな、あんなにあっさり殺されてしまうなんてな」

「悲しまないのかい？ 仲間の死だろう？」

「悲しむ？ そんなモノは俺達には無い」

「そうかい」

真名は魔眼によってセクストウムの最後を鮮明に見ていたが、あれは死神のように見えた。命を刈り取った瞬間は手慣れたおり、それが当然のように見え、まさに死神だった。敵でなくて、本当によかったと心底思っていた。

「まあ、状況が動いてくれたおかげで、本気で戦える」

「今まで本気じゃ無かったと？」

「銃では、本気だったさ」

真名は手など抜いていなかった。ただ、本気の出し方が変わり、射撃手でなくなるだけの事。銃では、勝ち目などほとんど無い。虚

弾だろうと、虚閃だろうと斬られて無効化されてしまっていたのだ。だったら、まだ試して無い攻撃に賭けるだけだ。

ホルスターに2丁拳銃をしまい、背中の弾倉から狼の弾頭を出現させる。

「行け」

命令を受けた狼がクウアルトウムに向かって疾走する。

「そんなモノが、届くわけないだろ！！」

「届くさ、今すぐに……ね」

今迄そうして来たように、なんの躊躇いも無く、クウアルトウムは狼を炎の大剣で斬り裂く。だが、斬った手応えは無く、まるで空振りしたかのようになって若干体勢を崩す。その隙を狙って、狼が喰らい付く。

「なっ！！」

そして、狼が爆ぜた。喰らい付いたのは5匹。両腕両足に一匹ずつと炎の大剣にも一匹、その全部が同時に大爆発する。ゼロ距離の爆発だったというのに、クウアルトウムは五体満足で立っていた。尤も、炎の大剣は消え失せ、クウアルトウムもボロボロになっている。

「契約により我に従え 炎の精霊 集い来たりて…アベスダニフェラエ紅蓮蜂！！！！」

「虚閃」

複数の蜂が真名に向かって行くが、構え無しに虚閃で簡単に消し飛ばす。それを見てクウアルトウムは顔を歪める。さっきまで自分に届きもしなかったのと同じ攻撃で、あっさり自分の攻撃を無効化されたのだから普通だったら仕方が無いだろう。

「炎帝召喚！！」

炎の上位精霊を呼び出し、一気に攻勢に戻ろうとするが、先程の大爆発でできた瓦礫の中から狼が姿を現し、クウアルトウムと炎の上位精霊に喰らい付く。炎の上位精霊には1匹だが、クウアルトウムには先程の3倍、総勢15匹の狼が喰らい付いていた。しかも、その内の1匹は喉に喰らい付いている。

「何時の間に……」

「さっき仕込んだばかりだよ。そいつらと同じのが爆発して視界が悪くなっている時にね。それじゃあ、さようなら」

肉片一つ残さずに、クウアルトウムは狼の爆発によって木端微塵に爆破された。

(いつ見ても、気持ちの良いもんじゃないね。戦いに負けて、命を散らす奴の最後の表情は……)

S i d e o u t

魔法世界 逆転2 (前書き)

第90話

感想 A S様

ありがとうございます！

魔法世界 逆転2

Side 第三者

「ハアアー!!」

デユナミスは、完全なる世界側では唯一20年前の大戦からの生き残りである。生き残れたのは、死んだフリをして紅き翼を騙し、身を隠したからだ。死んだフリは恥でも何でもなく、自分の力が及ばなかった事を恥じた。例えば臆病者と罵られようとも、それで計画が達成できるなら、喜んでそんな屈辱を受ける。デユナミスにとつての恥は、完全なる世界の構成員として、造物主の使徒として、計画を成功させられない事、ただ一つだ。それ以外の恥は、無に等しい。今、自分が憎いサウザントマスターの息子を代わりと言わんばかりに、殴ってしようとも。

「グウー!!」

ネギは歯を食いしばり、痛みに耐えながらも決して殴る力を緩めずに、むしろ殴る度に強くしている。デユナミスも、攻撃を緩めずにネギと同じように一撃ごとに速く、重くしていく。さながら、意地の張り合いのように、どちらも一歩も譲らずに殴り合う。どちらも、自分にとって譲れないモノを持っており、互いに歩み寄るうなんて考えは持っていない。

それでも、終わりは来る。どれほど張り合おうと、どれほど変わりにくく思っているようにとも、2人には差があつた。きっかけは、大爆発の爆音が2度。真名がクウォルトウムを狼の弾頭で爆破した音だ。

「まさか……クウォルトウムが？」

前情報で、アールローが爆発する攻撃をするとの情報は無かった。味方の攻撃でも同様。消去法で、一番可能性があったのがクアルトウムが相手をしてた真名だ。そして、それは間違っていない。クアルトウムは、もう居なかった。

「セクストウムに続き、クアルトウムもか……」

合流する手はずの風のアールウェルンクスのクウイントウムが来ないのと、エヴァンジェリンがこの場に居ないのを鑑みて、クウイントウムも負けたのをデュナミスは悟る。残っている造物主の使徒がまた、2人になったと……

「こっのおおおおお!!」

注意が逸れたのを好機とみたネギが、デュナミスの急所を確実に捉えて拳を叩き込む。が、受けてもデュナミスは身動き一つせずに、ただネギを見つめる。

「やはり、最大の敵はサウザントマスターに連なるお前では無く、アールロー・アルルエリだったか……。フンッ!!」

効果が無かったことの驚きで動きを止めていたネギを掴み、デュナミスはトドメの一撃をネギに打ち込む。

「命は取らん」

倒れたネギにそう言い、両腕両足の関節を砕いて、魔法発動媒体の指輪も壊す。フェイトに加勢すべく、フェイトとアールローが戦っている場所に近づく。一際、周りに被害を出してる戦いの渦中

に……

「ヴィシユ・タル　リ・シユタル　ヴァンゲイ　契約により我に従え　奈落の王！　地割り来れ　千丈舐め尽くす　灼熱の奔流！　滾れ！　迸れ！　赫灼たる亡びの地神！　引き裂く大地！！」

「千手の涯！　届かざる闇の御手！　映らざる天の射手！　光を落とす道　火種を煽る風　集いて惑うな我が指を見よ！　光弾・八身・九条・天経・疾宝・大輪・灰色の砲塔　弓引く彼方　皎皎として消ゆ！　破道の九十一　千手せんじゅこうてんたいほう皎天汰炮！！」

走りながらの詠唱などという、下手したら舌を噛み切りかねない危険行為によつて紡がれたフェイトの魔法により、大地の一部分は溶岩化してアローニーロに向かつて放たれ、アローニーロの破道は長細めの三角形の光の矢を背後に無数に作り出し、対象に向けて放たれる。溶岩と光の矢が2人の間でぶつかり、炸裂する。その拍子にまだ高温の溶岩が飛び散ったが、その程度はどちらも気にしない。

「万象貫く黒杭の円環」

「縛道の六十二　百歩欄干」

今度は無数の石化の針を飛ばすが、後出しの百歩欄干は針と同じ数に分裂して全てと中り、石化する。ただ一つも、突破出来ずに撃ち落とされる。

「千刃黒耀剣」

「破道の八十八 飛竜撃賊震天雷砲」
ひりゅうげきぞくしんてんらいほう

無数の石の剣を飛ばすが、今度は後出しの破道による巨大な光線によって蒸発する。

「つまらん」

走りながら撃ち合いはアローニーロは普段はやらないが、フェイトに合わせてやってみると最初は楽しめたが、フェイトがアローニーロに勝つ気がないのでアローニーロはすぐに飽きてしまった。勝つ気の無い相手との戦いは、アローニーロは長く楽しめなかった。実力差を知ってなお、全力で挑んでくるのならまだ楽しめただろうが、フェイトの戦い方は完全な逃げであり、時間稼ぎでしかない。アローニーロは的確な状況判断と思う一方で、つまらないの事をしてくれると思った。

「そんなんじゃない、つい、こうしてまうな」

左手を黄昏の姫御子たるアスナを祭壇に設置してなにかしらしているフェイトの従者達に向ける。左手に灰色の光の玉が発生し、それが膨れだす。虚閃を撃つ溜めの段階だ。

撃ち合いのために距離を開けていた為にフェイトはアローニーロの行動を阻止できない。一応攻撃魔法を放つが、それでは虚閃をどうにもできない。灰色の虚閃が放たれる。

だが、目標に届く前なにかに中って爆発する。

「やらせはせんぞ！アールロー・アルルエリ！！」

爆煙の中から姿を現したのはネギを倒したデュナミス。

「ネギと戦っていた奴か」

「敵はデュナミスだけじゃないよ」

さっきまでは魔法だけで攻撃してきたフェイトが、今度は逆に距離を詰めて格闘に切り替えてアールローを襲う。

「時間稼ぎ、てつきり発動するまでのモノと思っていたが……違ってたか」

フェイトとデュナミスに挟み討ちにされそうになっているというのに、アールローからはなおも余裕そうな雰囲気漂っている。

「届き、鋼皮を貫いて、命を刈れるか？そのような体で」

可笑しそうに言う。フェイトとデュナミスは戦いで消耗していた。フェイトは怪我こそ無いものの、魔力の消耗は些細な消耗とは言えず、デュナミスはネギと殴り合いで消耗が激しい。アールローも消耗しているが、フェイトとデュナミスと比べれば些細な消耗だ。

「このような体でも、必要な時間は稼げる」

「意気込みは良いが、体が持たんぞ」

「1人なら、そうだっただろうね」

入れ替わり、立ち替わりをしながらアローニー口を休ませないように絶え間なく攻め立てる。拳、石の剣、影槍、石化の針。どれも中ればただで済まないようなモノばかりだったが、どれも避けられたり撃ち落とされたりしてアローニー口の命には届かない。

「強いが、お前らだけでは届かない」

擦花と波濤によつて、フェイトとデユナメスは吹き飛ばされ、地面に衝突する際に盛大に土煙を巻き上げて視界を奪う。

「特に見るモノもないから、トドメといこうか」

吹き飛ばした2人に歩いて近づく。

「ククク、時間を掛け過ぎたな、アローニー口」

土煙の中から、先程は違つて満身創痍のデユナミスとは思えない力強い声が聞こえる。

「なにがだ？まだ魔法は発動してないぞ」

「ああ、お前等が止めようとしている魔法は発動していない。だが、

土煙が不意に吹いた風によつて吹き散らされる事で、視界が良好なつてアローニー口の目に信じられないモノを写す。

「お前等が封印した造物主^{かみ}が魔法世界に帰つてきた」

「何……だと……?」

S i d e o u t

魔法世界 逆転2 (後書き)

感想とか待ってます。

魔法世界 造物主と使徒（前書き）

第91話

感想 A S様、安藤様、KAIN様
ありがとうございます！

魔法世界 造物主と使徒

Side アーロニーロ

これは、今迄で最悪の状況かもな……

「どうして、殺した奴まで居るんだか……」

似ているとかならまだ解るが、完全に同じというのは有り得ない。死んだ人間は生き返る事は出来ない。それはこの世の理ことわりと思っただが、どうやら魔法世界では違っていたようだ。

「それは、ここなら造物主は全知全能に近い力を振るえるからだ！
」

造った世界なら思うがままって事か……流石に、魔法世界出身では無い奴は思うがままに出来ないようだがな。だとしても、これは十分に最悪な状況だろう。

「トップクラスの实力者にこつも囲まれる日が来るとは、幾らなんでも予想なんて出来なかつたな……」

数は軍と比べればマシだろうが、全員がトップクラスの实力をもつ人形レスレクションだとは……

刀剣解放をするか？対軍に使える大きさがあるが、囲まれているこの状況ではただの的にされてしまう。こいつ等の攻撃が魔法だけなら、あまり使いたくはない方法だが圧倒する事なんて簡単だが……

「それをやるには、勿体無さすぎる」

今迄で最悪の状況。つまり、ここまでの状況は下手をすればもう二度と体験のできない可能性が非常に高い。なら、簡単に終わらすのには勿体無い。だから、

「全力で楽しもうか」

「契約により 我に従え 高殿の王 来れ 巨神を滅ぼす 燃ゆる立つ雷霆 百重千重と 重なりて 走れよ稲妻 千の雷!!!」

包囲状態からの千の雷は避けれる場所は一か所しかない。上だ。

「まっ、こんだけ数が居るんだから役割分担さえしっかりしてれば、逃げ場なんて無いようなもんだな」

逃げた先には既に詠唱を完成させた人形共が待っている。

「燃える天空!!!」

「千の雷!!!」

「引き裂く大地!!!」

確実に殺したいのだろう。1人に対してやる魔法の量じゃない。だとしても、この程度に中って負けるのは願い下げだ。響転で離れた位置に移動する。掬花の始解を解いて腰の鞘に納めて、代わりに神鎗と詫助を抜く。1対多の場合は、掬花よりこの2つの方が戦いやすい。

「愚かな……造物主かみと造物主わたしたちの使徒全員を相手にたった1人で挑む

とは」

デユナミスと呼ばれていたのが哀れそうに俺を見ながら言う。解ってない。たった1人の今だから、あえて挑むというのに。傍からみたら無謀や愚行に見えるとしてもだ。

Side out

Side 第三者

アークニーロは咸卦法を使って身体能力を強化して、一息でクウアルトウムを自分の間合いに入れる。クウアルトウムを選んだ理由は、ただ単に丁度良い位置に居たからだ。アークニーロが狙うのは混戦になる事での広範囲の攻撃魔法を封じる事だ。広範囲の攻撃魔法でも避けられるが、その度に響転で消耗する事になる。相手の実力と数を考えれば、できるだけ消耗は減らしたいのだ。そして、その目論見は成功する。造物主の使徒達は、1人以外は造物主への忠誠と目的意識がある為に結束は強い方だ。志を共にする同志を巻き込んでまで敵を殺そうとは命令されたり、余裕が無くなるまではまですしない。

「卍解 神殺鎗」

連携のせいでも、最初以降は自分の間合いに捉えられなくなったアークニーロは瞬間的に間合いを伸ばす為に卍解をする。それに真つ先に反応したのは3番目テルティウム(フェイト)以降のアークウェルンクスシリーズだ。フェイト以外は直接見ていなくても、それが複数の魔物の頭を一瞬で貫く程の速さを持つているのを知っている。フェイトは無数の石の剣を飛ばし、クウアルトウムは炎の大剣を投げ、クウイントウムは雷化して右手に轟き渡る雷の神槍を作り出してアークニ

アーロに突撃し、セクストウムは氷の矢を放ち、デュナミスはクウイントウムに続いて突撃する。だが、アーロニーロからすればどれも遅い。正確には神殺鎗にとっては、だが……音の500倍はそこまですべて圧倒的な速さなのだ。

「神殺鎗 舞踏連刃」

一瞬。それだけでアーウェルンクスシリーズが放った攻撃全てを斬り落とし、突撃してきたクウイントウムとデュナミスの首を刎ねる。死体には目もくれずに、すぐに移動しようとしたが、アーロニーロは何か足首のあたりを掴まれる。

「なに？」

有り得ないはずだったが、確かに首を刎ねたはずの2人にはその辺に転がっているはずの首から上が付いており、それぞれ片手でアーロニーロの足首を掴んでいたのだ。少し考えれば解るはずだったのに、アーロニーロは見落としていた。殺した奴が生き返っているのなら、再び殺した所ですぐに生き返るかもしれないという事を……

致命的な失敗だった、最悪な事にクウイントウムが使う轟き渡るゲング雷の神槍はアーロニーロの障壁も鋼皮も突破できるだけの貫通力を持っている。それを足首を掴まれている状態から避けるのは不可能だから、右腕を犠牲にして致命傷だけは避ける。握っていた神殺鎗ゲングナルの自分の影に落ちるように手放して、素手で轟き渡る雷の神槍を掴む。

「クソっ！があああああああああああ！……」

直接ふれている手から腕が焼け焦げていき、電撃が体の中を駆け

巡る。貫通力も十分恐ろしいが、電撃としての特性も十分に恐ろしい。遮ることは出来ずに、直接は触れていない部分にも深刻なダメージを刻み込む。

アローロニーロの動きが鈍り、そこに集中して魔法が放たれる。アローロニーロはまず、左手の詫助で足首を掴んでいたクウイントウムの手を斬り落とす。デュナミスの手も斬り落そうとしたが、既に離しており少しでもアローロニーロの動きを阻害する為にそのまま近接戦闘を仕掛ける。だが、アローロニーロはそのまま下がる。超速再生でも持つていればすぐにでも焼け焦げた腕など斬り落としても再生させるのだが、生憎アローロニーロは補肉剤を使うか、刀剣解放しなければ回復できない重症だ。

(これは、やばいかもな……………)

アローロニーロはすぐにするべく答えを導き出す。圧倒してしまっ
てはつまらなくなる、とか言える状況ではすでに無くなった。

「喰い尽せ！喰虚！」
グロトネリア

最終手段を使って、相手を喰い尽すだけだ。

S i d e o u t

魔法世界 造物主と使徒（後書き）

なんか思ったより時間が掛かった……
どうせだから、双児響転ヘメロス・ソニードを使わせようとか、王虚グラン・レイ・ゼロの閃光を使わせよ
うとかしたのが失敗だった……その後が思い付かなかったから消し
ただけ。
エヴァ達を次辺りで合流させないと、エヴァ達の行動が遅すぎると
かになるな……
感想とか待ってます。

魔法世界 喰虚(前書き)

第92話

魔法世界 喰虚

Side 第三者

「これが、英雄の姿とは……間違いようのないバケモノではないか……」

デユナミスが喰虚を見ての感想がそれだった。

その姿は醜悪にして強大。アールロー口の下半身は蛸のような足を束ねた巨大な塊になる。人など簡単に飲み込める程の大きさは空想上の海の怪物であるクラークンを連想させる。だが、臼歯が並んだ巨大な口を複数持つており、アールロー口の上半身が出ている下の方には今迄喰われた犠牲者と思しき人間、亜人、魔獣、ドラゴンの顔が浮かんで泡のように破裂していく、その様を見ればクラークンよりもっとおぞましい怪物だというのが一目了然だ。

「でかくなつては、ただの的だな！」

大きくなれば動きは緩慢になる。基本的には生物はそれが常識であり、それに当て嵌まればアールロー口の巨体は恐れるに足らなかつた。今迄は高速移動のせいで中てられずにいたが、巨体になれば人型と時と同じ速さを出せたとしても、逃げ切る事は不可能だ。それに、その巨体を活かした体当たりの攻撃力は普通であつたら恐ろしいが、死んでもすぐに復活できる状況ではほんのちよつとの時間稼ぎにしかならない。そのため、恐れる理由など何処にも無い造物主の使徒達は躊躇い無くアールロー口に再び攻撃魔法の雨を降らせる。だが、

「それがどうした!!」

それは全員を戦慄させた。敵にも味方もアークニーロが何をしたのか正確には解らなかったが、そうなるようにアークニーロがナニカをしたとだけは判った。

「あ、アークニーロを殺せ!!!」

誰が言ったかは定かではないが、狙われている誰かだろう。その声は怒りではなく、恐怖に染まっていた。この場では生き返られるからこそ、永遠と痛みと恐怖を味わう事になるのだ。恐怖に駆られた使徒達は元凶であるアークニーロを殺すべく、一斉に己が使える最高威力の攻撃魔法を放つ。

「卍解 千本桜景厳」

「光の雨」

「私は、拒絶する」

「オオオオオオオ!!!」

「ファイヤ発射」

「千年氷牢」

桜色の濁流が、雨のように降り注ぐ矢が、逆三角形の盾が、閃光が、特殊弾が、氷の巨大な柱が、アークニーロに向かっていた攻撃魔法をこのごとく飲み込み、弱め、防ぎ、吹き飛ばし、消失させ、封じ込めた。

Side out

「エヴァは解るとして、なんでお前達まで居るんだ？」

わざわざ麻帆良まで送ったというのに、なんでこっちに帰ってきているんだか……

「えっと……見てるのだけに耐えきれずに来ちゃいました……」

申し訳なさそうにさよは笑っている。まあ、余計なお世話だが、嬉しくない訳ではないが……。もう少し自分の身を考えて行動して欲しいものだ。

「見てるだけって……わざわざ父様はお前たちを危険な目に遭わせない為に、麻帆良に送ったというのに……」

「あまりさよを責めるでない、エヴァンジェリンよ。兄は知らぬだろうが、麻帆良にこちらの魔物が流れて来ているのと、戦っているのが麻帆良から見えたから私達は応援に来たのだ」

繋がっているのは解っていたが、まさか戦いが写っていたとは……魔法の秘匿は大丈夫なのか？

「そこで、全員で行く事にしたのです」

「まあ、私は師匠は助けなんて要らなさそうとは思っただけだな………なんつつか、今の師匠凄い格好だな」

「来チマツタモンハ、シヨウガナイ無イダロ？旦那」

お前等全員なんで俺の上に着地する。全員空中に留まる事ぐらいできるだろうに……

「……仕方が無いな。エヴァ、さよ、ワカメ大使はこっちを手伝え。茶々丸、チャチャゼロ、千雨、アヨンは明日菜を助けようとしているネギ達を手伝え」

なんとかフェイトの従者を倒したようだが、肝心の明日菜を助けられずに困っているようだ。なぜか、学園長とクウネルその出現して手伝っているようだ。手こずっているようだ。何かに包まれているから、特殊な魔法で破壊するなり解除しないと助け出せないのだろう。

「千雨、これを持って行け」

ピンポン玉くらいの大きさで黒くて幾つもの線が入っている玉、つまりは崩玉を渡す。崩玉の能力は、崩玉の周囲にいる者の心を崩玉の意思によって具現化する力だ。崩玉が決め、なお且つ対象に望んだ事を達成できる実力がなければ能力が発揮できないが、多分足りるだろう。

「わかった。で、使い方は？」

「望め、そうすれば勝手にやってくれるはずだ」

「……大丈夫、なんだよな？」

「崩玉次第だ」

これは仕方が無い、崩玉の意思とかはよく解らない代物だからだ。賭けみたいな方法だが、失敗しても構わない。最悪の場合は包んでいる物ごと移動させて、どこかで研究すればいい。

アヨンの肩に乗せてもらい、すぐに千雨達はネギ達に協力しに行く。

「さて、こっちはすぐにでも全員を封印処理でもしてやるか」

詫助で動きを完全に封じるのは封印の為の前準備にすぎない。その後は九十六京^{きゅうじゅうろくけい}火架封滅^{かかふうめつ}を別の鬼道に乗せて撃ち込めば良いだけだ。

「破道の四 白雷」^{ちやへんらい}

倒れ伏しているデユナミスに試しに撃ち込んで効果があるか見てみたが、特に問題点なく封印架に封じ込められる。効果が確かなら、後は全員を封印するだけだ。

「認識同期で情報を送ったが、口でも言っておくぞ。殺してもすぐに生き返るから意味は無い。だから、死なない程度に痛めつける、その後の封印は俺がやる」

「……わかった（りました）」「」

解放前の俺の右腕を傷付けた雷の槍が飛来してくるが、回避不能の近距離だったから中つたのだ。ただ投的しただけでは中るようなへまはしない。巨体だから移動できる場所に制限があるが、響転や影のゲートのような転移魔法で回避は十分に可能だ。雷の槍を避け、投げた奴に神殺鎗を影の倉庫から取り出して切先を向ける。

「舞踏」

単純な一刺したが、これで終わりではない。

「破道の十一 綴雷電つづらいでん」

神殺鎗を通じて綴雷電が届き、体の内外に電撃が行きわたる。流石に麻痺はしなかったのか、神殺鎗を左手で掴んで雷の槍を作り出して俺に向けて投擲する。だが、それは悪手だったな。

普通だったら手から抜けるだろうが、余程しっかりと握っていたのだろう。神殺鎗を縮めても、そいつの手が離れず、投げた雷の槍が丁度中る位置に移動させることができた。

ただ、1人貫いてもまだ威力が十分残っていたようなので避けて、封印を撃ちこむ。

S i d e o u t

魔法世界 喰虚（後書き）

後2話で終わりかな？原作はまだ続くようですけど、『強欲な力+
を持っていく』は魔法世界編までです。

魔法世界 終幕（前書き）

第93話

感想 アツラー様

ありがとうございます！

魔法世界 終幕

Side フェイト

圧倒的だね……。アローニーロが全力を出した時点で勝ち目がなかったのに、アローニーロの応援が来てからさらにそれに拍車がかかって、1人、また1人と僕達はどんどん封印されている。封印事態はアローニーロだけしかできないようだけど、そのアローニーロに攻撃すら届かないのだから全員が封印されるのも時間の問題なんだろうね。

「クソツ！なんでこんな事になってんだ！俺はあんなバケモノを知らんぞ！」

セクンドウム
2が僕の近くで悪態をついている。セクンドウムは丁度アローロ一ロがまったく活動していない時に起動し、そして消された。だから、アローニーロの恐ろしさをしつかりと知らない。まあ、僕が12年前に消したんだけどね。ブリームム1は戦った事は無くとも、大戦時のアローニーロを知っているから、セクンドウムが一番アローニーロを解っていないんだろ。そもそも、不意打ち以外が効いた試しなんてないから、クウイントウムが失敗した時点で負けだったんだろう。

儀式の完成までまだ時間はあるし、もう僕とセクンドウムしか残っていない。

「造作も無いな。不意打ちをくらった時は焦ったが、ただ生き返るだけで俺を倒そうなど見通しが甘かったな」

もう必要無いと思ったのか、人型に戻ったアローニーロが僕に向

けて言う。後ろには、エヴァンジェリン、相沢さよ、あと変なのが待機している。だけど、この状況自体は僕は想定していなかった。今までの造物主の使徒達が蘇り、死んでもすぐに蘇られる状況を造物主が作り出せるなんてデユナミスから聞いていなかった。いまさら、そんな事はどうでもいいんだけど……

「話し合おうじゃないか、アールニーロ。目指す場所は一緒なんだから……」

必死にセクンドウムはアールニーロを説得しようとしているが、本当に解っていない。僕等が目指す完全なる世界は、アールニーロが目指す場所では無い。アールニーロは魔法世界がどうなるのが究極的にはどうでも良いと考えている。誰も救う気なんて無いのに、魔法世界を救うと言う名目での戦いに参加している。

「勘違いも甚だしいな。目指す場所など特に無い」

僕もセクンドウムもアールニーロの後ろで待機していた3人の攻撃を避けずに、動きを止められる。青白い光の矢、桜の花びら、氷、どれも殺すつもりでは無く、動きを阻害する為に間接とかを狙って放たれたそれらは寸分違わずに射抜き、切り刻み、凍り付かせた。

「白雷」

セクンドウムが封印され、残るは僕1人か……

「アールニーロ、もし良かったら僕の従者の面倒を見てくれないかい？このままだと、彼女達も処刑されそうだからね」

「断る」

そう言うと思ったよ。だけど、

「報酬は造物主グランドマスターキーの掟だ。尤も、造物主を殺した後も効果を発揮するかは不明だけどね」

「ふむ……良いだろう。なに、殺さずにまた封印すれば前と変わらんから使えるだろう」

「利益さえあれば、平気で敵との取引を受ける。多分、君が一番の俗物なんだろうね」

「違ういな」

仮面グランドマスターキーで顔は見えないけど、きっと悪人面で笑っているんだろうね。造物主の掟を置いてある場所教える。

「白雷」

アローニーロの魔法に貫かれ、白いモノが自分の足元から包み込むように伸びる。時間と共に包まれている範囲が広がり、最後には白だけに支配された。

Side out

Side アローニーロ

「終わらせるから、後ろに下がっている」

造物主の使徒達を封印し、残るのは造物主だけだ。俺だけで十分だ。

「しかし、父様……」

「下がっていると云ったが？エヴァ」

「…わかった」

渋々といった様子でエヴァがさよとワカメ大使と下がる。

「虚閃」

宣言と共に虚閃を撃つ。造物主はそれに合わせて、ナニカを撃つて迎撃する。自分の使徒が行動しているのに、まったく行動していなかったからってつきり維持の為にただ立っているだけで限界にかと思っただが、違うようだな。まあ、魔法世界の神同然の奴がそんな簡単にやられても興醒めだが。

尤も、使徒を生き返らせる必要が無くなったから戦えるようになったかもしれないが、そんな事はどうでも良い。敵がいるのだから倒すだけだが、目的は封印だ。造物主が死ぬ事でどんな影響が出るかが不明で、折角手に入れるモノが記念品程度の価値に落としかねない。

「這縄」

低級の縛道だが、時間稼ぎに程度には使える。だが、造物主は捕まってもすぐに引き千切った。

「ッ！！思ったより凄いいみたいだな。なら、縛道の九十九 禁 九

十九第二番 初曲 止繻 貳曲 百連門 終曲 卍禁太封！！」

禁により、造物主をベルトと鉄で拘束し、続けて止繻で巨大な布を巻き付けている最中に次の百連門に移り、全身をほぼ包んでいる布の上から針状の棒を布と造物主を縫い付けるかのように突き刺す。最後の卍禁太封で、卍の模様が刻まれた巨大な碑石が造物主の上に出現させて、押し潰す。

「白雷」

連続して押し潰されているはずの造物主がいるだいたいの位置に撃つ。全部九十六京火架封滅を乗せたやつだ。中っていれば、多分発動して封印されるだろう。もしかしたら、ダメージを与えるなりして力を弱めないと発動しないかもしれないから、気は抜けないのだが。

「呆気ないな……」

縛道を全部消して見たが、封印架がそこにあるだけだった。まあ、やる気がそこまであった訳ではないが、これでは拍子抜けな感じする。

「とりあえず、一段落だな」

明日菜が能力とかを全力で使って、消えた人達とかをを元に戻しているようだが俺には関係無いしな……

まあ、これで魔法世界は崩壊の危機を乗り切った、てか？

Side out

おわりとあとがき

Side 第三者

完全なる世界による魔法世界の崩壊は『仮面の英雄』アールロニー・アールエリと、『2代目サウザントマスター』ネギ・スプリングフィールドによって止められた。連合、帝国、アリアドネーの3国の協力の元での戦いで、2人の英雄は魔法世界を救うと言う偉業を成し遂げた。敵だった完全なる世界の構成員はアールロニー・アールエリの手によって全滅させられ、完全なる世界は事実上壊滅させられた。ネギ・スプリングフィールドは崩壊の危機に瀕していた魔法世界を持ち直させる方法を実行し、さらには完全なる世界が用いた存在を消す魔法によって消された人々を蘇らせた。どちらが欠けていても、今の魔法世界は無かった。

それが、一般人にとっての事実だ。だが、現実は多少違った。まず、完全なる世界の構成員は誰1人とて欠けておらず、一応は存命している。造物主は殺すと魔法世界にどの様な影響があるか不明の為に封印され、造物主の使徒はその場で殺せなかつたので造物主と同様に封印され、フェイトの従者達と生きていた月詠はアールロニーによって保護されている。ザジの姉は魔界に帰った。

コレを知っているのはほんの一握りであり、誰も軽々しく言う事は無い。フェイトの従者達は戦争の犠牲者であるという側面と、アールロニーが預かるとした為に事実上は無罪放免だった。本人達は御免だったが、フェイトの仮契約カードが死んでいないから封印されたフェイトを解放する機会を得るために、仕方なくアールロニーの保護を受けた。月詠は………保護を受けたと言うより、アールエリ家に転がり込んだ。最初は殺そうかとアールロニーは考えたが、殺すのには少し惜しい実力だったので月詠もついでに保護された。

他にも、人々を蘇らせたのは明日菜だが、黄昏の姫御子だという

のを隠蔽するためにネギが行ったとされた。ネギの英雄としての名を上げるのと、隠蔽もできるので一石二鳥と学園長は考えていた。尤も、英雄だという事実はすでにできているのだから、あまり必要は無くもないのだが……

『仮面の英雄』アーロニーロ・アルルエリ ヘラス帝国の英雄にして、2度も魔法世界を救った存在。大半の赤の他人からすれば憧れ英雄であるが、彼を知っている人からすれば紛れもないバケモノであり、越えられない壁だった。終戦20年のオスティア終戦記念祭後は一切表舞台に立たず、エヴァンジェリンが卒業した後は、ごく一部の者以外とは会う事もしなかった。ただ、エヴァンジェリンが人間の子供を拾って育てたのは、アーロニーロ以外には意外すぎる出来事だった。

END

あとがき

しまらん最後、打ち切り。まあ、読んだ人はそう思うでしょうね。自分でもそう感じます。だったらなんでそうしたか？簡単です。アーロニーロに達成したい目標なんて存在しませんから、最後なんてやろうと思えばいくらでも引き延ばせます。しかし、思いつかないから此処で終わりにします。まあ、元々魔法世界編で終わりにするつもりだったのですが……

で、なんで自分が『強欲な力+ を持つていく』を書いたかです

が、アロー二一〇っぽいのを主人公したかったです。そういうモノが見あたらなかったので、こう思いました。「無いなら、自分で書けばいい」ただやってみたかったと言うのもありますが、始まりはそこです。

まったくの素人が書いた結果がこれです。やっちゃたよ……………

後悔なんて、あるわけない(笑) 4カ月でなんか結構書いたな……………
これでも学生なのに、勉強や遊びじゃなくてコレを書くのに時間割
いてたりしてました。他にも、やりたいゲームが無かったというの
が一番大きかったでしょうが。

さて、グダグダと書くのもどうかと思うので、一応は書いておいた
方が良いと思う事を書いておきましょうか。伏線はつておいて、回
収されなかったのを……………そう、クルトです。クルトに斬魄刀を渡し
たのに、本編で出番無しになり、同時に斬魄刀の御披露目も無しに
してしまいました。理由は、下らないのがあります。アロー二一〇
を無双させるのに、居ない方が良いと思って……………同様の理由で最終
決戦で詠春、タカミチ、ラカンの出番も無しでした。意図的に張つ
たのに、気分が無意味に変えた。なにやってんだよとか言われるも
ノですね。ちなみに、出す予定だった斬魄刀は蛇尾丸でした。一番
扱いやすいかな?とか思ってたんですけど、出しませんでした。
土壇場で変えたのは斬魄刀関係だと、千雨には最初は百刺毒娼エスコロペンドラか髑
髏樹を持たせる予定だったんですよ。勢いで書いた結果ですね。
感想とか貰ってかなり嬉しくて変なテンションで書いてる時もあり
ましたし……………

それより、問題は次ですね。読み専門に戻るか、また勢いで書くか
……………まあ、考えていきましょか。

さて、最後に『強欲な力+ を持っていく』を読んで下さった皆様

に、ありがとうございます！！

他にも、感想をくれた皆様。お気に入り登録してくれた皆様。評価を入れてくれた皆様。

本当に、ありがとうございます！！

おわりとあとがき（後書き）

6日の20時 08分に投稿して、きっかし4カ月にしようとか考
えてた俺は馬鹿だと思ふ。しまらない最後でゴメン……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0573t/>

強欲な力+ を持っていく

2011年10月9日02時57分発行